

前田村遺跡

伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書6

平成24年3月

茨城県土浦土木事務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第361集

ま え た む ら
前 田 村 遺 跡

伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書6

平成 24 年 3 月

茨城県土浦土木事務所
財団法人茨城県教育財団



調査区遠景（南西から）



古墳時代前期出土土器集合

序

茨城県では、高速道路網や茨城空港など、交通インフラの整備が進められており、つくばエクスプレスとこれらを結ぶことで、沿線地域の生活スタイルやビジネス効率が飛躍的に向上しています。

つくばエクスプレス沿線地域では、「都市」「自然」「知」の魅力が調和する「つくばスタイル」を楽しむことができるまちづくりが進められており、その一環として、「伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地区画整理事業」を継続的に進めています。

しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である前田村遺跡が所在することから、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県から埋蔵文化財の発掘調査の委託を受け、平成4年4月から平成9年3月までの5年間にわたりこれを実施し、その成果については、既に『茨城県教育財団文化財調査報告』第87・116・127・146・147集として順次刊行したところです。

本書は、平成22年7月から平成23年1月までの7か月間にわたり実施した前田村遺跡（L区）の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県土浦土木事務所及び旧茨城県つくばまちづくりセンター（現茨城県土浦土木事務所つくば支所）から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくばみらい市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成24年 3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣 一

例 言

- 1 本書は、茨城県つくばまちづくりセンター（現茨城県土浦土木事務所つくば支所）の委託により、財団法人茨城県教育財団が株式会社シン技術コンサルを調査体制に組み込み、平成22年度に発掘調査を実施した茨城県つくばみらい市田村字南塚765番地ほかに所在する前田村遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査	平成22年7月1日～平成23年1月31日
整理	平成23年7月1日～平成24年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	皆川 修
主任調査員	福井 流星（株式会社シン技術コンサル）
調査員	小川 長導（株式会社シン技術コンサル）
計測員	須藤 貴子（株式会社シン技術コンサル）
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、以下の者が担当した。

主任調査員	福井 流星（株式会社シン技術コンサル）
計測員	須藤 貴子（株式会社シン技術コンサル）
	坂本 勝一（株式会社シン技術コンサル）
写真撮影技師	小池 雄利亜（株式会社シン技術コンサル）
- 5 本書の執筆は福井、編集は須藤・坂本、遺物写真撮影は小池が行った。
- 6 本書の作成にあたり、平安時代の堅穴住居跡などから出土した鉄関連遺物の分類・抽出などをたたら研究会委員の穴澤義功氏にご指導いただいた。
- 7 当遺跡から出土した人骨及び獣骨の同定については、国立歴史民俗博物館教授の西本豊弘氏に依頼し、考察は付章として巻末に掲載した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標系第Ⅸ系座標に準拠し、X軸 = + 500 m、Y軸 = + 17,480 mの交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A、B、C …、西から東へ 1、2、3 … とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに、小調査区は、北から南へ a、b、c … j、西から東へ 1、2、3 … 0 とし、名称は「A 1a1区」のように呼称した。なお、当遺跡は調査区が便宜上、A ~ L 区に分けられている。また、今回の整理作業時に『茨城県教育財団文化財調査報告』第 116・127・146・147 集で報告した調査区設定図に誤りがあることが判明したため、その位置関係を修正し、調査区設定図を作成した。

- 2 遺構番号については、各遺構毎に既調査時の最終番号の次から付した。
3 抄録の北緯及び東経の欄には、日本測地系に基づく緯度・経度を () を付して併記した。

- 4 遺構・遺物・土層の実測図、一覧表などで使用した記号は次のとおりである。

遺構 P-ピット SD-溝跡 SI-堅穴住居跡 SK-土坑 SX-不明遺構

遺物 DP-土製品及び焼成粘土塊・炉壁 M-金属製品及び鉄関連遺物 Q-石器・石製品

TP-拓本記録土器

土層 K-攪乱

- 5 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 6 遺構・遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構実測図は原則として 60 分の 1 で掲載した。ただし、その縮尺で掲載が困難なものについては、適宜縮尺を変えている。各図にはそれぞれのスケールを付した。

(2) 遺物実測図は原則として 3 分の 1 で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺を表示した。

(3) 遺構及び遺物実測図中の表示は次のとおりである。

 焼土・赤彩  炉・火床面・織維土器断面  甕部材・黒色処理

 漆・墨書  煤・油煙

● 土器・陶器 ○ 土製品及び焼成粘土塊・炉壁 □ 石器・石製品 △ 金属製品及び鉄関連遺物

----- 硬化面 ←○ ○→ 磨り範囲 ←□ □→ 敲り範囲

- 7 遺構観察表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の () 内の数値は現存値を、[] 内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m、cm、g で示した。

(2) 遺物観察表の備考欄には、土器の残存率、写真図版番号及びその他必要事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(4) 鉄関連遺物の磁着度は製鉄関連遺物分類用の「標準磁石」を用い、資料を順次接近させることにより、標準磁石が動き始める距離単位 (6mm を 1 単位とする) を評価台紙上で読取り、磁着反応を数値化し

たもので、数値が大きいほど磁着性が強いことを意味する。メタル度は特殊金属探知機で金属鉄の遺存量を判定したもので、小さな鉄から大きな鉄の順に、H (○)、M (◎)、L (●)、特L (☆) と表示する。なお、かつて金属鉄が内包されていた資料で、錆化してしまったものは、錆化 (△) と表示する。

- 8 「主軸」については、竪穴住居跡では炉・竈を通る軸線とし、その他の遺構では長軸を主軸とみなした。「主軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。
- 9 第3679号土坑から出土した人骨は調査終了後、坂東市岩井の延命寺にて供養、埋葬した。また、第3641・3653・3656号土坑から出土した獣骨は、国立歴史民俗博物館教授の西本豊弘氏に研究資料として寄贈した。

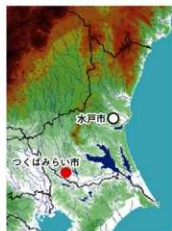
目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
前田村遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴住居跡	13
(2) 土坑	23
2 古墳時代の遺構と遺物	40
竪穴住居跡	40
3 平安時代の遺構と遺物	85
(1) 竪穴住居跡	85
(2) 土坑	134
4 近世の遺構と遺物	135
墓坑	135
5 その他の遺構と遺物	136
(1) 竪穴住居跡	136
(2) 溝跡	137
(3) 土坑	138
(4) ビット群	143
(5) 不明遺構	143
(6) 遺構外出土遺物	144
第4節 まとめ	151
付 章	181
写真図版	PL 1～32
抄 録	
付 図	

まえ だ むら 前田村遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

前田村遺跡は、つくばみらい市中央からやや北側のつくばエクスプレスみらい平駅から北西に約1.5kmの地点に位置し、小貝川左岸の筑波・稲敷台地上に立地しています。遺跡は平成4～8年度に調査が行われ、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが明らかになっています。中でも、縄文時代中期の遺構・遺物が数多く確認されており、当時の集落の様相を知る上で貴重な資料となっています。



今回の調査は遺跡の一部が、伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地区画整理事業業地内にあることから、遺跡の内容を図や写真に記録するために、茨城県教育財団が行ったものです。

調査の内容

今回の調査区（L区）は遺跡南端部の舌状台地縁辺部の台地平坦部から斜面部にかけて位置し、西から東に向かって標高が低くなっています。調査の結果、縄文時代、古墳時代、平安時代の集落跡のほか、近世（約300年前）の墓坑などを確認しました。

調査の成果

今回の調査では、縄文時代、古墳時代前期、平安時代の集落跡が確認されました。縄文時代では、堅穴住居跡を確認したことにより、遺跡南端部でも集落が形成されていたことがわかりました。古墳時代前期の集落跡は今回の調査区に隣接するJ区でも確認していることから、J・L区周辺域を中心に集落が営まれていたと考えられます。また、多くの堅穴住居跡では焼土や炭化材とともに埴・器台・高坏などが出土していることから、住居を廃絶する際に何らかの

祭祀^{さいし}が行われた可能性が考えられます。平安時代の集落跡は、堅穴住居跡から出土した土器の特徴から、9世紀後葉から10世紀中葉にかけて営まれたと考えられます。9世紀後葉の堅穴住居跡では鍛冶^{かじ}に関連する羽口^{はぐち}や鉄滓^{てつさい}、10世紀の堅穴住居跡では製鉄^{ろへき}に関連する炉壁^{ろていかい}や炉底塊^{ろていかい}が出土したことから、両時代の集落内で鍛冶作業と製鉄操業がそれぞれ行われていたと考えられます。今回の調査成果とこれまでの調査成果により、当遺跡の集落の変遷や各時代における集落での生活様相の一端が明らかになりました。



古墳時代の堅穴住居跡では、焼土や炭化材と共に祭祀に使われたと考えられる埴・器台・高環などの土器がたくさん出土しました。



平安時代の堅穴住居跡では、製鉄関連遺物や鍛冶関連遺物が出土しました。



炉壁や炉底塊、羽口や鉄滓が出土したことで、集落内で鉄や鉄製品が造られていたことがわかりました。

第1章 調 査 経 緯

第1節 調査に至る経緯

平成21年7月6日、茨城県つくばまちづくりセンター長（現茨城県土浦土木事務所長）は、茨城県教育委員会教育長に対して、伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成21年7月14日に現地踏査を、平成21年11月10日に試掘調査を実施した。平成21年12月24日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県つくばまちづくりセンター長あてに、事業地内に前田村遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。平成22年2月8日、茨城県つくばまちづくりセンター長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成22年3月5日、茨城県教育委員会教育長から茨城県つくばまちづくりセンター長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成22年3月12日、茨城県つくばまちづくりセンター長は、茨城県教育委員会教育長に対して、伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年3月26日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県つくばまちづくりセンター長あてに、前田村遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県つくばまちづくりセンター長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、茨城県教育委員会の定める「財団法人茨城県教育財団の発掘調査における民間発掘調査組織の導入に関する指針」に基づき、当財団に民間発掘調査組織を組み込んで、平成22年7月1日から平成23年1月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調 査 経 過

調査は、平成22年7月1日から平成23年1月31日までの7か月にわたって実施した。その概要を表で記載する。

工程	期 間	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月
調査準備 表土撤去 遺構確認		■						
遺構調査			■					
遺物洗浄 写真整理			■					
補足調査 撤 収								■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

前田村遺跡は、茨城県つくばみらい市田村字南塙765番地ほかに所在している。

つくばみらい市は平成18年に筑波郡伊奈町と谷和原村の合併により誕生した市で、茨城県の南西部に位置している。市の地形は中央部で鬼怒川と小貝川によって形成された沖積低地（鬼怒川-小貝川低地）が広がり、北東部は筑波・稲敷台地、南西部は北相馬台地、南東部は結城台地である。

当遺跡が立地する筑波・稲敷台地は、茨城県南部から千葉県北部に広がる常総台地の一部である。西を鬼怒川-小貝川低地、東を桜川低地に挟まれた南北約44km、東西約38kmの台地で、台地面は全体として北から南に傾斜している¹⁾。小貝川低地沿いの台地西側縁部では、西へ開口する樹枝状の小支谷が発達し、台地南部では西谷田川と東谷田川の開析谷が発達している。台地は併走する谷によって短冊状に分断され、これらを通る川は牛久沼に流入している。地層は貝化石を産する見和層（成田層）を基盤層として、その上に砂混じりのロームから、クロスミナの顕著な砂あるいは砂礫層である竜ヶ崎砂礫層へ漸移する。その上層は、地点により様々変化するが、火山灰質粘土層である常総粘土層、さらにその上部に関東ローム層が堆積し、最上層は腐食土層となっている。

当遺跡は小貝川低地沿い、筑波・稲敷台地西側縁部の舌状台地に立地し、台地平坦部の標高は20～22mである。周辺は樹枝状の小支谷が発達しており、台地と低地の比高差は約10mである。今回調査を行ったL区は遺跡南端部の南東に張出す舌状台地縁部に位置し、台地平坦部は標高20～21mである。縁部部の南側及び東側には樹枝状の小支谷が入り込んでいるため、調査区東側は西から東に向かい低くなる標高16～20mの斜面地である。遺跡の現況は、森林である。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺の遺跡分布状況を見ると、鬼怒川-小貝川低地や筑波・稲敷台地の台地面では皆無に近く、台地縁部に集中している²⁾。遺跡の多くは未調査の包蔵地であるため、その性格などが判然としにくいものが多いが、ここでは、調査事例を基に各時代ごとの周辺遺跡の様相を概観する。

旧石器時代の遺跡は、西ノ脇遺跡(21)、高野台遺跡(26)、大畑遺跡(8)などが点在している。高野台遺跡では旧石器集地点2か所が確認されており、細石刃や瑪瑙、頁岩、チャートなどを石材とする剥片が出土している³⁾。当遺跡ではB区で旧石器時代石器類集地点が1か所確認されており、瑪瑙製の石刃状剥片や硬質砂岩製のナイフ形石器が出土している⁴⁾。

縄文時代の遺跡は、田村貝塚(2)、小張貝塚(28)、包蔵地の北ノ後北遺跡(20)、舟戸遺跡(25)、東谷津遺跡(17)、飯塚遺跡(18)、柿木台遺跡(36)など数多く確認されている。高野台遺跡では遺構は確認されていないが、早期から中期の土器が出土していることから、周辺域に当該期の集落跡が存在する可能性が考えられている。当遺跡の北西部に隣接する田村貝塚は前期（関山式期）の貝塚である。当遺跡において関山式期の遺構・遺物は現在のところ確認されていないが、両遺跡の立地状況から何らかの関連性があるものと想定される。当遺跡では前期から晩期にかけて継続的に集落が営まれている。中でも中期の集落は、大規模かつ長期

に渡り存続することや、同規模の遺跡が周辺で確認されていないことから拠点集落と考えられている⁵⁾。

弥生時代の遺跡は、他の時代に比べて少なく、高野台遺跡、勸兵衛新田遺跡(38)などで弥生土器が出土している程度である。

古墳時代の遺跡は、後期集落跡の西ノ脇遺跡、包蔵地の玉金遺跡〈5〉、和台遺跡〈6〉、イカツチ遺跡〈7〉などが確認されている。当遺跡でも前期及び後期集落跡が確認されており、前者は出土遺物の特徴から2時期に細分され、後者は近接して立地する西ノ脇遺跡との関連性が想定されている。古墳は並木古墳〈3〉、東橋戸古墳群〈24〉、福岡古墳群〈14〉、宮後古墳〈32〉が確認されている。東橋戸古墳群は前方後円墳1基、円墳2基から成る古墳群である。1978年に円墳が調査され、埋葬施設が粘土塚であったことが確認されており、現在は前方後円墳の後円部のみが現存している。

奈良・平安時代になると当地域は河内郡大山郷に属すると推定される⁶⁾。当該期の遺跡は、集落跡の鎌田遺跡〈37〉、包蔵地の観音前遺跡〈9〉、上野台遺跡〈11〉、戸崎前遺跡〈16〉などが確認されている。鎌田遺跡は8世紀前葉から9世紀後葉にかけて営まれた集落跡である。大形の住居跡や「コ」の字状またはL字状に配置されていたと考えられる掘立柱建物跡が確認されたことや、一般的な集落跡では出土例の少ない二彩陶器や灰軸陶器などが出土していることから、公的な役割を担った有力首長層の集落と想定されている⁷⁾。当遺跡では台地中央部から南端部の斜面地で、9世紀前葉、9世紀後葉から10世紀中葉にかけての集落跡が確認されているほか、11世紀から12世紀と考えられる和鏡が小刀と思われる破片とともに土坑から出土している。

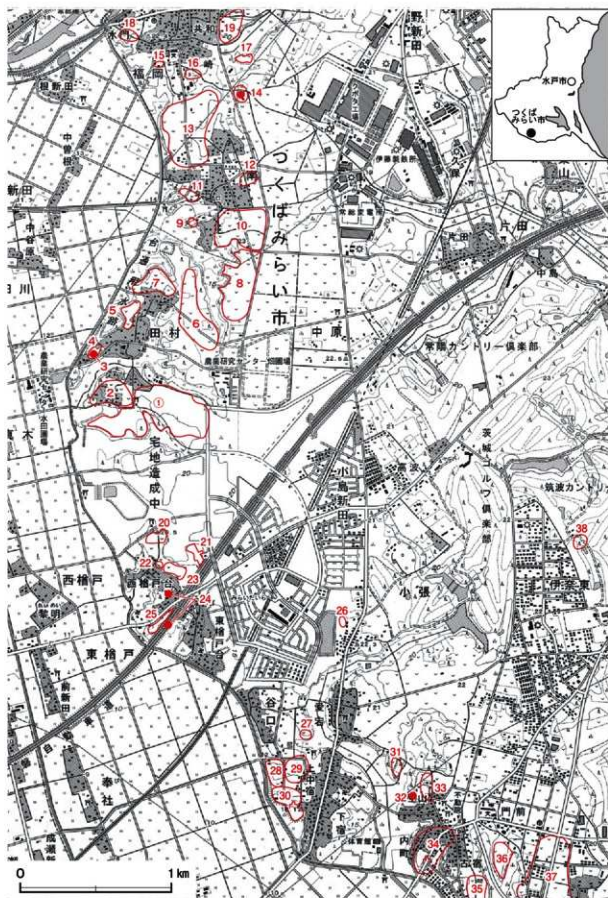
中世の遺跡は、墓地跡の西ノ脇遺跡、城館跡の小張城跡〈30〉、板橋城跡〈34〉、包蔵地の中道遺跡〈10〉、南遺跡〈13〉などがある。西ノ脇遺跡では地下式坑7基、墓坑1基、これらに関連する溝跡9条が確認されている。当遺跡では掘立柱建物跡・方形堅穴状遺構・堀跡・地下式坑などが確認されており、館の存在や墓域として土地利用されていたことが考えられている。

近世の遺跡は、包蔵地の並木遺跡〈4〉、水炊遺跡〈12〉などがある。調査事例が少なく、当遺跡において墓坑や「流し溜」と考えられる土坑が確認されている程度で不明点が多い。

※文中の〈 〉内の番号は、表1及び第1図の当該遺跡番号と同じである。

註

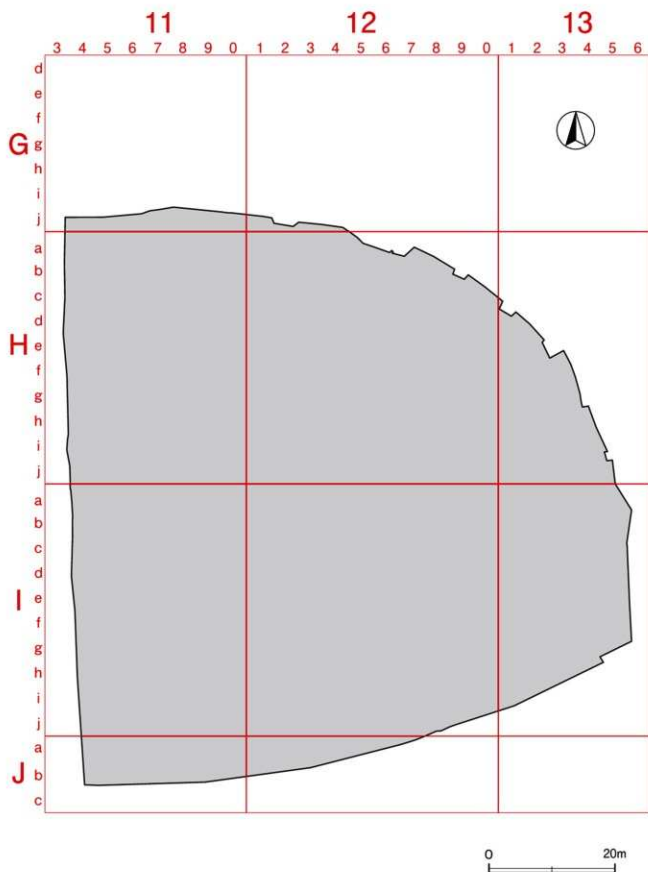
- 1) 斎藤英二・渡辺和明他「茨城県南西部における最近の測地的変動について」『地質調査月報』第39巻 第10号 1988年10月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 吉原作平他「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 高野台遺跡・前田村遺跡D・F区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第127集 1997年9月
- 4) 吉原作平「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 西ノ脇遺跡・前田村遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第87集 1994年3月
- 5) 小林孝他「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書5 前田村遺跡・K区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第147集 1999年3月
- 6) 下中弘「日本歴史地名大系第八巻 茨城県の地名」1996年9月
- 7) 川村調博「伊奈町鎌田遺跡について - 奈良・平安時代を中心にして -」『伊奈の歴史』第7号 2003年3月



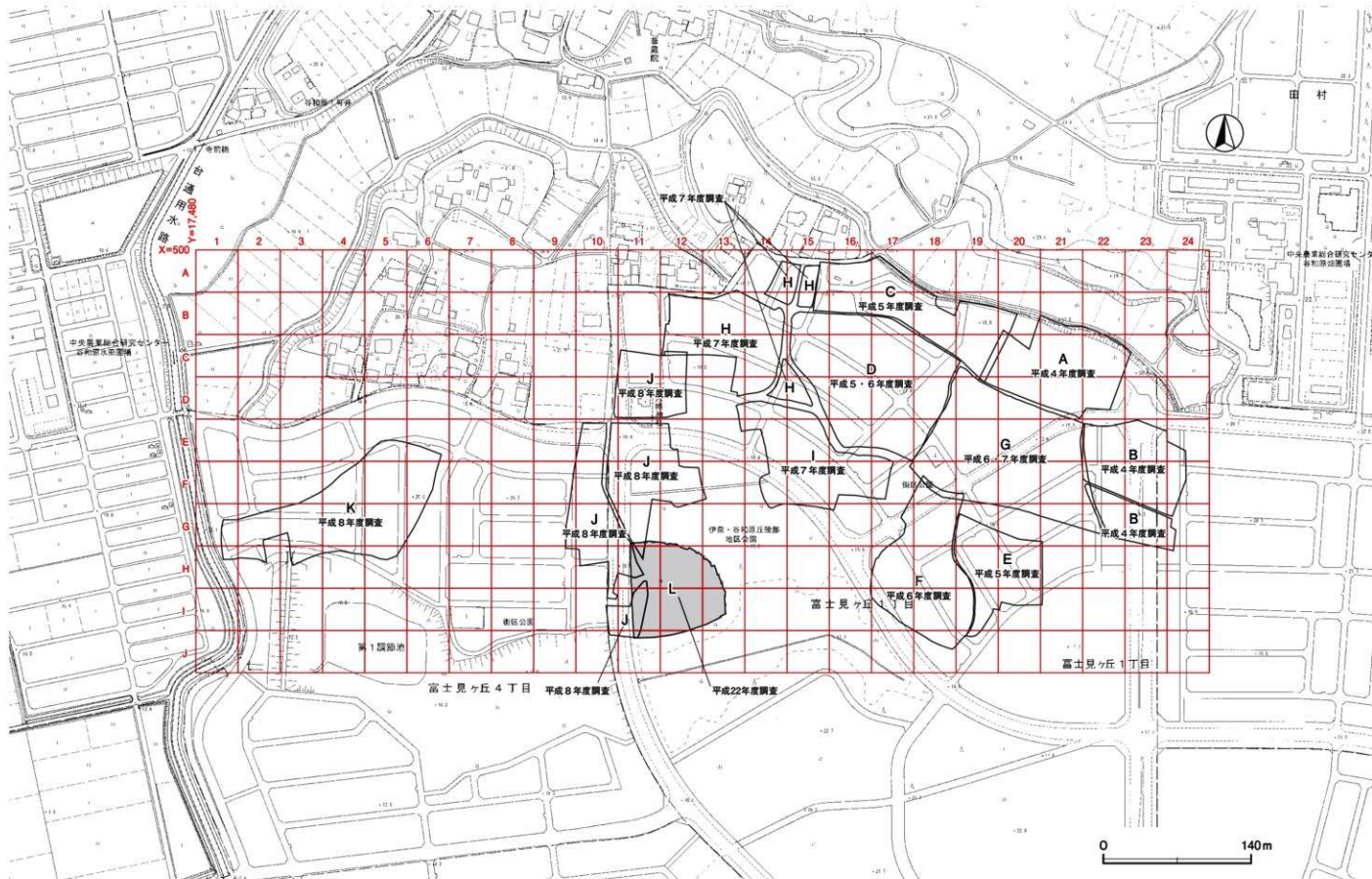
第1図 前田村遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 25,000 分の 1「谷田部」「藤代」)

表1 前田村遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	前田村遺跡	○	○		○	○	○	○	20	北ノ後北遺跡	○						
2	田村貝塚		○				○	○	21	西ノ脇遺跡		○			○		
3	並木古墳				○				22	北ノ後南遺跡		○		○			
4	並木遺跡							○	○	23	西ノ脇南遺跡	○	○			○	○
5	玉金遺跡		○		○	○	○	○	24	東榎戸古墳群				○			
6	和台遺跡		○		○	○			25	舟戸遺跡		○					
7	イカツチ遺跡		○		○	○	○	○	26	高野台遺跡	○	○	○				
8	大堀遺跡	○	○				○	○	27	山王台遺跡		○					
9	観音前遺跡		○				○		28	小張貝塚		○					
10	中道遺跡		○				○	○	29	鹿島神社遺跡		○					
11	上野台遺跡						○		30	小張城跡						○	○
12	水岫遺跡							○	○	31	東耕地遺跡		○				
13	南遺跡		○		○	○	○	○	32	宮後古墳				○			
14	福岡古墳群				○				33	上街道遺跡		○					
15	花輪前遺跡		○				○	○	○	34	板橋城跡					○	
16	戸崎前遺跡						○	○	○	35	大房地遺跡		○				
17	東谷津遺跡		○						36	柿木台遺跡		○					
18	飯塚遺跡		○						37	鎌田遺跡		○	○	○	○		
19	前畑遺跡		○				○	○	○	38	勘兵衛新田遺跡		○	○	○		



第2図 前田村遺跡L区調査区設定図



第3図 前田村遺跡調査区設定図 (つくばみらい市都市計画図2,500分の1)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

前田村遺跡は、つくばみらい市の中央やや北側に位置し、小貝川左岸の標高20～22mの筑波・稲敷台地上に立地している。平成4～8年度にかけて調査区A～K区を対象に調査が行われ（調査面積約140,000㎡）、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかになっている。遺構は縄文時代の竪穴住居跡410軒、古墳時代の竪穴住居跡43軒、平安時代の竪穴住居跡26軒、土坑3,500基、地下式坑47基、井戸37基、溝跡198条が確認され、遺物は収納コンテナ（60×40×20cm）で2,000箱分以上が出土している。

今回調査したL区は、平成8年度に調査を行ったJ区の東に隣接している。遺跡南端部の台地縁辺部に位置し、調査面積は7,000㎡で、現況は森林である。

調査の結果、竪穴住居跡40軒（縄文時代5・古墳時代15・平安時代19・時期不明1）、墓坑1基（近世）、溝跡9条（時期不明）、土坑233基（縄文時代15・平安時代1・時期不明217）、ピット群2か所（時期不明）、不明遺構1基（時期不明）を確認した。遺物は、収納コンテナで45箱分出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）、土師器（坏・椀・高台付椀・埴・器台・高坏・鉢・壺・甕・甗・ミニチュア土器・手捏土器）、須恵器（甕）、陶器（高台付碗・播鉢・甕）、土製品（土偶・土玉・管状土錘）、石器・石製品（剥片・石鏃・磨製石斧・石皿・磨石・石錘・管玉）、金属製品（刀子・鉄鏃・銭貨）、製鉄関連遺物（炉壁・炉底塊）、鍛冶関連遺物（羽口・鉄滓）、人骨、獣骨などが出土した。

第2節 基本層序

調査区北壁際の台地上平坦面（G 1118区）にテストピット1、斜面部（H 13d2区）にテストピット2を設定し、基本土層の観察を行った。（第4図）基本土層は10層に分層でき、第4層から第7層はテストピット1でのみ確認された。

第1層は2層に細分できる。第1a層は暗褐色を呈する表土である。粘性・締まりとも弱く、層厚は24～40cmである。第1b層は暗褐色を呈する旧耕作土で、ロームブロックを多量に含んでいる。粘性・締まりとも弱く、層厚は10～20cmである。

第2層は褐色を呈するソフトローム層で、上面が遺構確認面である。粘性・締まりとも普通で、層厚は4～26cmである。

第3層は褐色を呈するソフトローム層で、第2層より色調が明るい。粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は12～28cmである。

第4層は褐色を呈するハードローム層で、第3層より色調がやや明るい。粘性は弱く、締まりは強く、層厚は14～24cmである。

第5層は褐色を呈するハードローム層である。粘性は弱く、締まりは第4層より強く、層厚は44～50cmである。

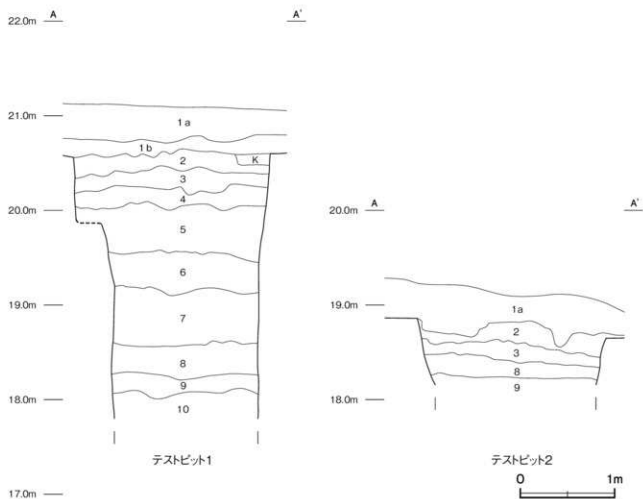
第6層は褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は32～46cmである。

第7層は褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも強く、層厚は52～64cmである。

第8層は黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも強く、層厚は14～36cmである。

第9層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層で、炭化粒子と灰白色粘土粒を中量含んでいる。粘性・締まりとも強く、層厚は14～26cmである。

第10層は灰白色を呈する粘土層で、常総粘土層にあたる。粘性・締まりとも強い。層厚は不明である。



第4図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は竪穴住居跡5軒、土坑15基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第602号住居跡（第5・6図）

位置 調査区中央部のH11i9区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第587号住居、第17・18・80号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 東部が第587号住居に掘り込まれているため、南北径は3.36mで、東西径は2.02mしか確認できなかった。形状は楕円形と推定でき、壁高は16～24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は認められない。

ピット 3か所。P1～P3の深さは12～18cmで、性格不明である。

覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

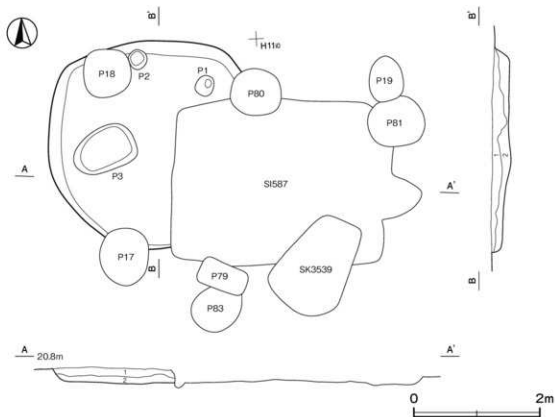
土層解説

1 濃い黄褐色 ロームブロック少量

2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片4点（深鉢）が覆土上層から出土している。TP1は埋没過程での流れ込みと考えられる。

所見 時期は、出土土器がわずかなため詳細は不明であるが、中期と考えられる。



第5図 第602号住居跡実測図



第6図 第602号住居跡出土遺物実測図

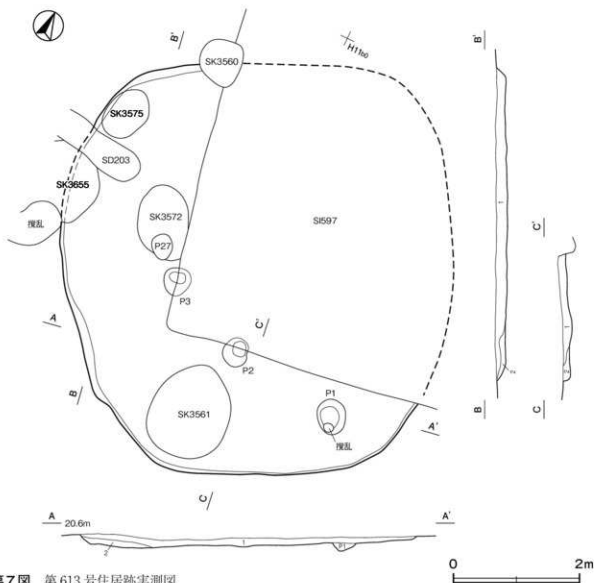
第602号住居跡出土遺物観察表 (第6図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	隆帯に沿って押引文を施文	覆土上層	5%阿玉存在式 PL20
TP 2	陶文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	無文で沈線を施文	覆土上層	5%加酸料E式

第613号住居跡 (第7・8図)

位置 調査区北部のH 11b9区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第597号住居、第3560・3561・3572・3575・3655号土坑、第203号溝溝、第27号ピットに掘り込まれている。



第7図 第613号住居跡実測図

規模と形状 北東部が第597号住居に掘り込まれているため、南北径は6.53mで、東西径は6.16mしか確認できなかった。形状は、長径方向N-29°-Wの円形と推定でき、壁高は5～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は認められない。

ピット 3か所。P1～P3の深さは20～30cmで、性格不明である。

覆土 2層に分層できる。南壁付近で第2層が三角堆積を示していることから自然堆積と考えられる。

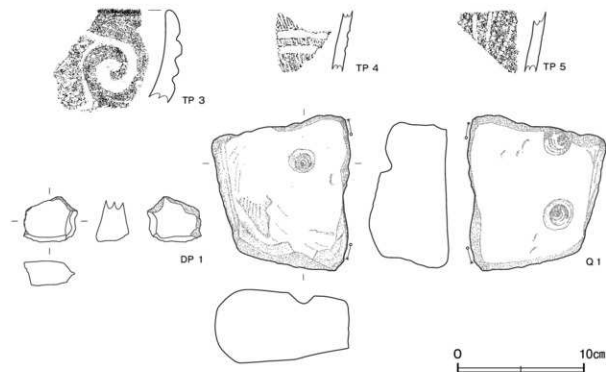
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量(締まり強い)

2 褐色 ロームブロック微量(締まり強い)

遺物出土状況 縄文土器片19点(深鉢)、土製品1点(土偶)、石器2点(磨石、石核)、礫1点が覆土上層から散在的に出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅢ式期)に比定できる。



第8図 第613号住居跡出土遺物実測図

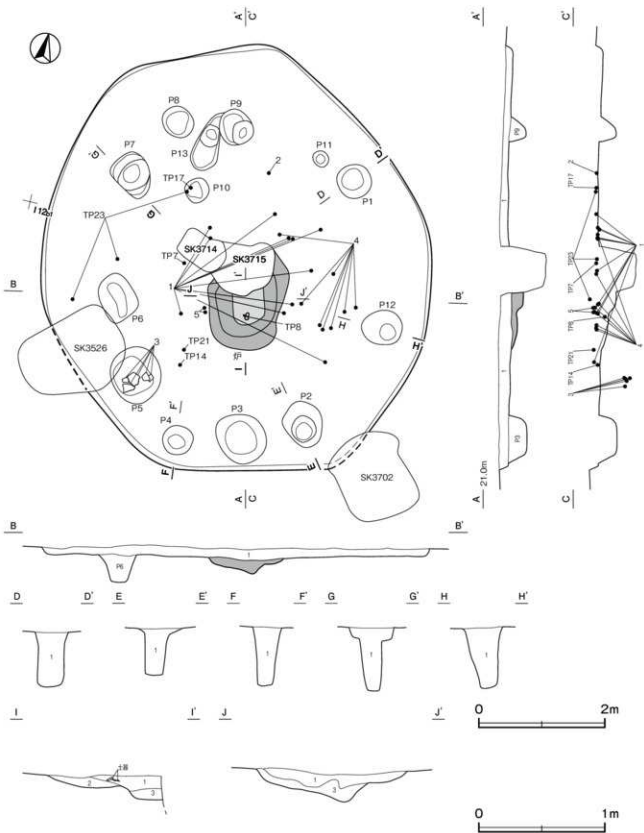
第613号住居跡出土遺物観察表(第8図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	北縁が沿う隆帯による渦巻文・区画文。区画内は早稲縄文RLを縦方向に施文	覆土上層	5%加曾利EⅢ-Ⅲ式 PL20		
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英	に.灰~褐	条線文を縦方向に施文後、2条の横走沈線	覆土中	5%加曾利EⅢ-Ⅲ式 PL21		
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	早稲縄文RLを縦方向に施文後、2条一帯の沈線による整垂文を施文	覆土上層	5%加曾利EⅢ-Ⅲ式 PL22		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	土偶	(32)	(4.1)	2.5	(31.9)	長石・石英・雲母	脚部 無文	覆土中	PL31
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	磨石・石核	(123)	100	62	(127.8)	花崗岩	使用面2面	覆土上層	

第 615 号住居跡 (第 9 ~ 11 図)

位置 調査区北部の I 12a1 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3526・3702・3714・3715 号土坑に掘り込まれている。



第 9 図 第 615 号住居跡実測図

規模と形状 長径6.78 m、短径6.22 mの円形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は9～13cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は認められない。

炉 中央部に付設されている地床炉である。北部が第3715号土坑に掘り込まれているため、確認できた長径は1.43 mで、短径は1.17 mの楕円形である。炉床は、床面を22cmほど掘りくぼめられ、被熱により赤変硬化している。覆土は3層に分層できる。

炉土層解説

- | | |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 1 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量（縞まり弱い） |
| 2 褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | |

ピット 13か所。P1・P2・P4・P7・P12は深さ74～99cmで、位置や規模から支柱穴と考えられる。P3・P5・P6・P13は深さ30～58cmで、その位置から補助支柱穴の可能性がある。P8～P11は深さ17～23cmで、性格不明である。

ピット1土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

ピット2土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量

ピット4土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量

ピット7土層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量

ピット12土層解説

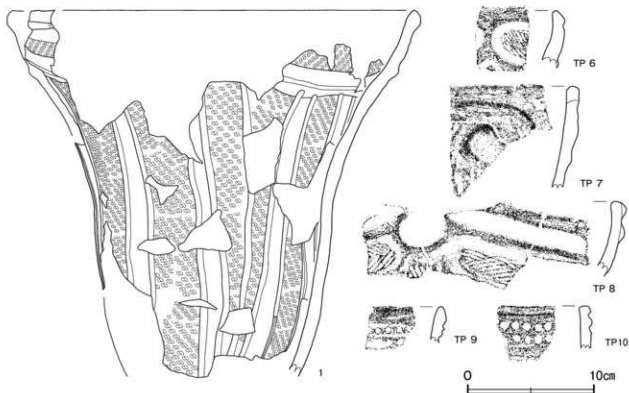
- 1 褐色 ロームブロック中量

覆土 単一層で自然堆積と考えられる。

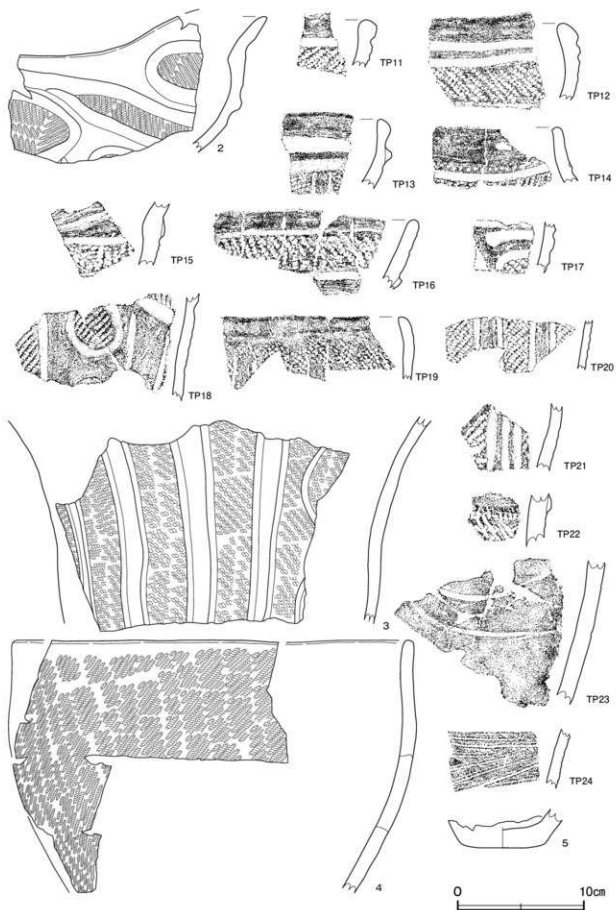
土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片327点（深鉢323、浅鉢4）、礫1点が全面から出土している。その多くは覆土上層から中層にかけて出土している。1・4は炉周辺、TP23は西部において分散した状態で、5は炉周辺にお



第10図 第615号住居跡出土遺物実測図（1）



第11图 第615号住居跡出土遺物実測図(2)

いて集中した状態で床面から出土している。3・TP8はP5覆土中と炉床面からそれぞれ出土している。2・TP17は北部、TP14は南部の覆土下層から出土している。TP21は南部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ式期）に比定できる。

第615号住居跡出土遺物観察表（第10・11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[328]	(292)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部は沈線が沿う隆帯による区画文、区画内は無筋縄文LRを縦方向に施文、体部は縦方向に施した無筋縄文LRを縦文とし、2条一組の沈線による懸垂文を施文、懸垂文間には磨り消す	床面	40%加曾利EⅢ式 P120
2	縄文土器	深鉢	-	(108)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	沈線が沿う隆帯による区画文、区画内は2条一組の縄文LRを縦	覆土下層	5%加曾利EⅢ式 P120
3	縄文土器	深鉢	-	(165)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	不良	横筋縄文LRを施文後、2条一組の沈線による懸垂文、懸垂文間には磨り消す。また、縦行沈線を縦方向に施文	P5覆土中	10%加曾利EⅢ式 P120
4	縄文土器	深鉢	[320]	(200)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	単筋縄文LRを縦方向に施文	床面	20% P120
5	縄文土器	深鉢	-	(31)	6.6	長石・石英・雲母	橙	普通	無文	床面	5%中期後葉

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈線が沿う隆帯による区画文、区画内は無筋縄文LRを縦方向に施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文	炉床面	5%加曾利EⅢ式
TP8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈線が沿う隆帯による円形文・区画文、区画内は無筋縄文LRを縦方向に施文	炉床面	5%加曾利EⅢ式 P120
TP9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	上下2列の沈線が沿う隆帯に円形刺突文を施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	上下2列の円形刺突文を施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線による区画文、区画内は無筋縄文LRを縦方向に施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式 P120
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線による区画文、区画内は無筋縄文LRを縦方向に施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式 P120
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	口縁部下に沈線が沿う隆帯を巡らす。体部は2条一組の沈線による懸垂文、懸垂文間には磨り消す。地文は無筋縄文LRを縦・斜方向に施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式 P120
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐色	口縁部と体部を沈線により区画、口縁部は内側で立ち上がる無文帯で、口縁部下に円形の連続刺突文を施文、体部は無筋縄文LRを縦方向に施文	覆土下層	5%加曾利EⅢ式 P120
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	沈線が沿う隆帯による文様を施文、単筋縄文LRを縦方向に施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式 P120
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈線が沿う隆帯による区画文、区画内は無筋縄文LRを斜方向に施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式 P120
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐色	沈線が沿う隆帯による区画文、区画内は無筋縄文LRを縦方向に施文	覆土下層	5%加曾利EⅢ式
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	単筋縄文LRを縦方向に施文後、沈線及び磨り消し縄文で文様を描出	覆土中	5% P120
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	単筋縄文LRを縦方向に施文後、2条一組の沈線による懸垂文を施文、懸垂文間には磨り消す	覆土中	5%加曾利EⅢ式 P120
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	2条一組の沈線による懸垂文を施文後、単筋縄文LRを縦方向に施文	覆土中	5%加曾利EⅢ式 P120
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	単筋縄文LRを縦方向に施文、3条一組の沈線による懸垂文懸垂文間には磨り消す	覆土上層	5%加曾利EⅢ式 P120
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	キザミを有する隆帯施文後、斜方向の沈線文を施文	覆土中	5%阿玉式
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線文を施文	床面	5% P120
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	手絞竹管による条線文を施文	覆土中	5%後期前葉 P120

第616号住居跡（第12図）

位置 調査区南部のI12h8区、標高20mほどの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 南部が削平され失われているため、南北径は3.6mで、東西径は4.11mしか確認できなかった。形状は径5.6mほどの円形と推定でき、壁高は7～16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は認められない。

炉 北壁寄りに付設されている地床炉である。長径83cm、短径76cmの楕円形である。炉床は、床面を40cmほど掘りくぼめられており、被熱により赤変硬化している。覆土は4層に分層できる。

炉土層解説

- | | | | | | |
|---|----|----------------------|---|----|------------------|
| 1 | 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化物少量 | 3 | 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | 4 | 褐色 | ロームブロック中量 |

ピット 深さ29cmで、性格不明である。

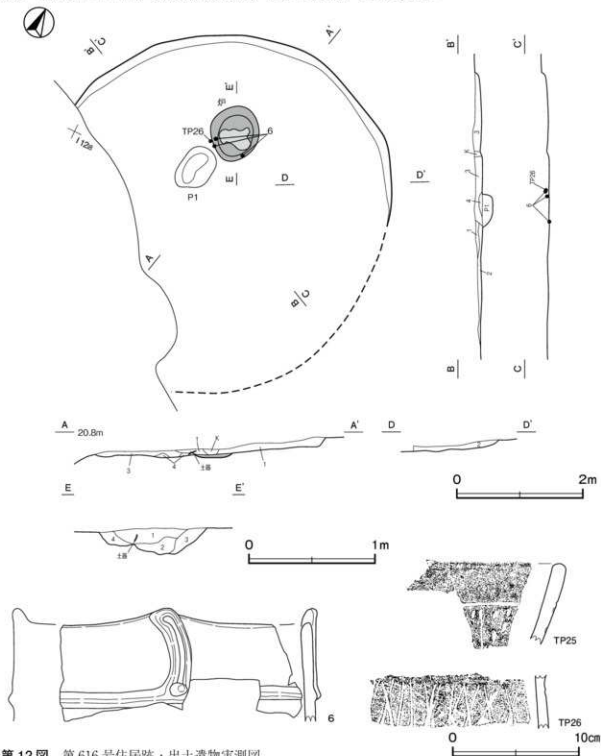
覆土 4層に分層できる。堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量(締まり弱い) | 3 暗褐色 | 焼土粒子中量(締まり強い) |
| 2 褐色 | ローム粒子中量(締まり強い) | 4 赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子中量(締まり強い) |

遺物出土状況 縄文土器片14点(深鉢13、浅鉢1)が覆土上層から床面にかけて、散在的に出土している。6・TP26は、炉付近の床面直上から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉(堀之内1式期)に比定できる。



第12図 第616号住居跡・出土遺物実測図

第 616 号住居跡出土遺物観察表 (第 12 図)

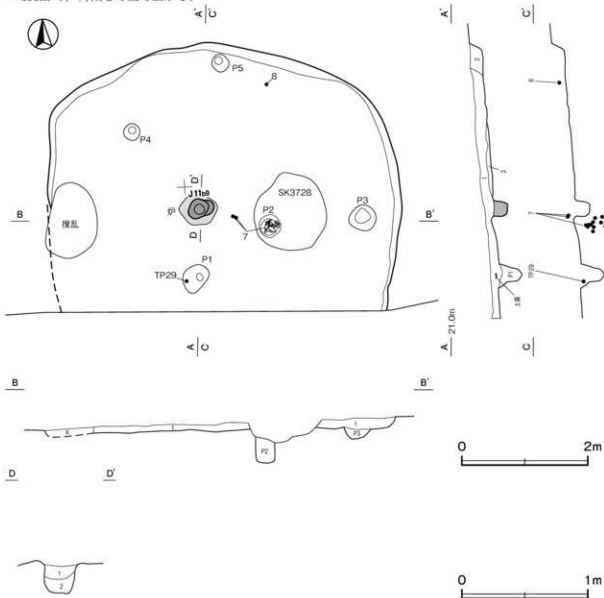
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
6	陶文土器	深鉢	[242]	(8)9	-	長石・石英・雲母	橙	普通	底径口径 無文 底縁部から中央に沈澱を施した「C」字状の隆帯を施文	床面直上	5%埋蔵品 第1式 PL20
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考				
TP25	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈澱による区画文 区画内には点文を施文	覆土中	5%埋蔵品 第1式 PL20				
TP26	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	条線による斜格子状の文様を施文	床面直上	5%埋蔵品 第1式 PL20				

第 619 号住居跡 (第 13 ~ 15 図)

位置 調査区南端部の J 11b9 区、標高 20m ほどの台地平坦部に位置しており、南部は調査区域外に延びている。

重複関係 第 3728 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西径 5.64m で、南北径は 4.36m しか確認できなかった。形状は楕円形と推定でき、壁高は 13 ~ 19cm で、外傾して立ち上がる。



第 13 図 第 619 号住居跡実測図

床 北部から南部にやや傾斜している。硬化面は認められない。

炉 中央部に付設されている埋燬炉である。形状は、長径61cm、短径50cmの楕円形で、床面を22cmほど掘りくぼめられている。壁面は被熱を受け赤変硬化している。覆土は2層に分層でき、埋燬を抜き取った後に堆積したものと考えられる。

伊土層解説

1 明赤褐色 暗褐色ローム粒子少量

2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子少量

ピット 5か所。P1～P5の深さは15～43cmで、性格不明である。

覆土 3層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

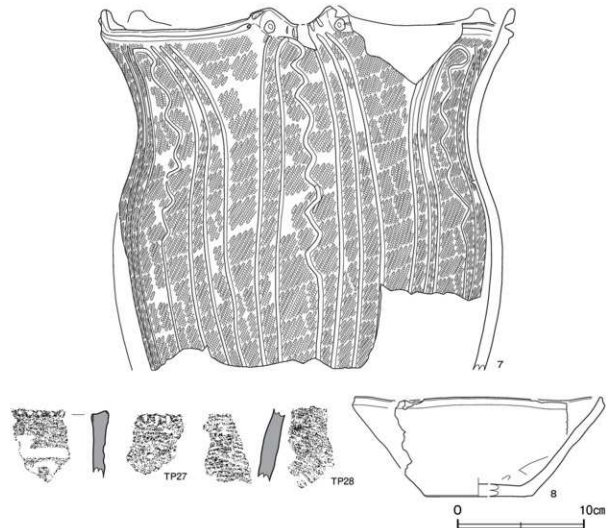
1 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量（糊まり弱い）

3 褐色 ロームアロック微量

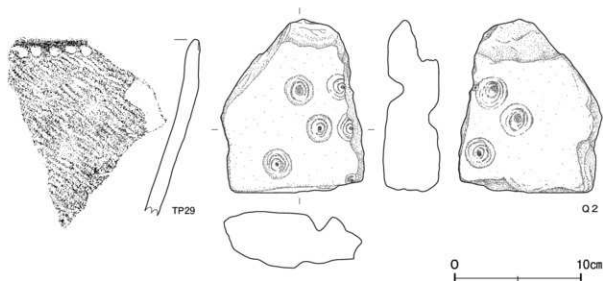
2 褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片40点（深鉢39、浅鉢1）、石器1点（凹石）が全面から散在的に出土している。その多くは覆土上層から中層にかけて出土している。7は中央部の覆土上層とP2覆土中層から下層にかけて分散した状態で、TP29はP1覆土上層から出土している。8は北部壁際の覆土中層から出土している。TP28は炉覆土中から出土しており、埋没過程での流れ込みと考えられる。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉（堀之内1式期）と考えられる。



第14図 第619号住居跡出土遺物実測図（1）



第15図 第619号住居跡出土遺物実測図(2)

第619号住居跡出土遺物観察表(第14・15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
7	縄文土器	深鉢	330	(285)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	良好	3単位の成状口縁・2条一組の沈線文と3条一組の沈線文による早垂文を施文・器唇側は蛇行沈線を施文・単面縄文LRを横方向に施文	覆土上層・P2 覆土中層・下層	50%堀之内 1式 PL21
8	縄文土器	浅鉢	[198]	79	[85]	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	無文・口唇部に沈線を施らす	覆土中層	25%後期前葉 PL21

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴はか	出土位置	備考
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	口唇部の内外面にキザミを有する 体部は沈線による文様を施文	覆土中	5%中期ホ
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	内・外面に条痕文	伊覆土中	5%前期
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	口縁部に棒状工具による押圧文を施文・口唇部条痕文LRを横方向に施文	P1覆土上層	5%後期前葉 PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	凹石	136	(107)	4.5	909.0	結晶片岩	使用面2面	覆土中	

表2 縄文時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模		床面	壁溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考	
				長径×短径 (m)	高さ (cm)			柱穴	出入口(ピ)	扉					窓
602	H1109 [南円形]	-	-	3.36 × (2.02)	16~24	地山	-	-	3	-	-	自然	縄文土器	縄文時代 中期	本跡 → SK587, P17・18・80
613	H1109 [円形]	N-29°-W	6.53 × (6.16)	5~15	地山	-	-	3	-	-	自然	縄文土器 土器片 石器	縄文時代 中期後葉	本跡 → SK587, SK588, 360・363・372・375, SK593, P27	
615	I12a1 [円形]	N-20°-W	6.78 × 6.22	9~13	地山	-	5	-	8	1	-	自然	縄文土器	縄文時代 中期後葉	本跡 → SK3526・ 3702・3714・3715
616	I12b8 [円形]	-	- × -	7~16	地山	-	-	-	1	1	-	自然	縄文土器	縄文時代 後期前葉	
619	J1109 [南円形]	-	-	5.64 × (4.26)	13~19	地山	-	-	5	1	-	自然	縄文土器 石器	縄文時代 後期前葉	本跡 → SK3728

(2) 土坑

第3522号土坑(第16図)

位置 調査区中央西部のH116区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.11m、短径1.72mの楕円形で、主軸方向はN-84°-Wである。深さは20cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

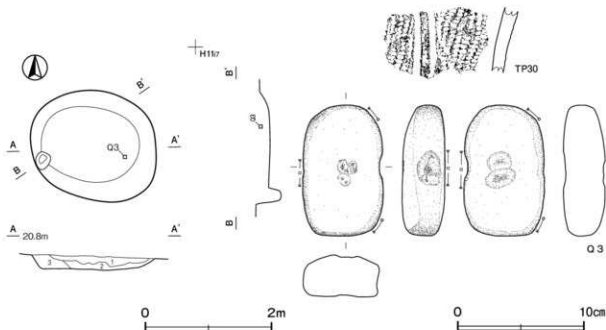
覆土 3層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 黒褐色土ブロック微量 3 褐色 ロームブロック多量
 2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片1点（深鉢）、石器1点（磨石）が覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器がわずかなため詳細は不明であるが、中期後葉（加曾利E I～III式期）に比定できる。



第16図 第3522号土坑・出土遺物実測図

第3522号土坑出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	早期縄文ⅢLを斜方向に施文後、2条一組の沈線による惣垂文を施文	覆土上層	5%加曾利E I～III式		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	磨石・敲石	104	64	33	376.1	安山岩	使用面3面	覆土上層	

第3529号土坑（第17図）

位置 調査区中央西部のI 11d8区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.61m、短径0.48mの楕円形で、主軸方向はN-14°-Eである。深さは16cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

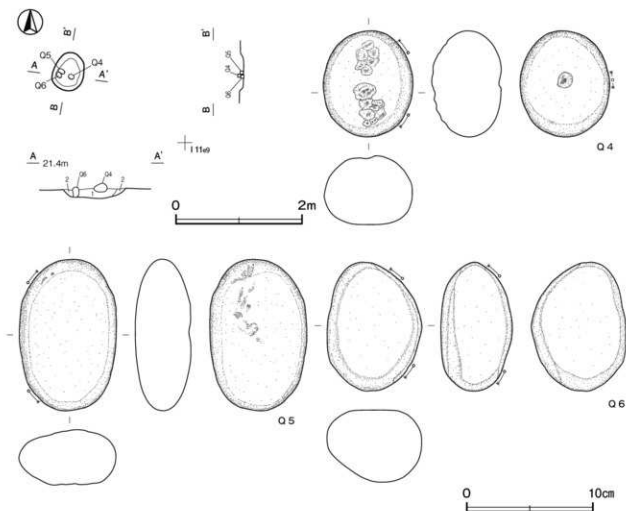
覆土 2層に分層できる。遺物出土状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒中量 2 褐色 ローム粒中量（1層より明るい）

遺物出土状況 石器3点（磨石2、敲石1）が1層から出土している。

所見 Q6が直立した状態で出土していることから、埋納遺構と考えられる。時期は、明確な時期を判断する遺物が出土していないため詳細は不明であるが、出土遺物と周辺遺構の状況から縄文時代と考えられる。



第17図 第3529号土坑・出土遺物実測図

第3529号土坑出土遺物観察表(第17図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	礫石	84	7.1	5.4	425.6	安山岩	使用面2面	覆土中	PL31
Q5	礫石	120	8.6	4.4	548.1	安山岩	使用面1面	覆土中	
Q6	礫石	102	7.5	5.7	591.0	安山岩	使用面1面	覆土中	

第3548号土坑(第18図)

位置 調査区中央西部H 11d7区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.46m、短径1.21mの楕円形で、主軸方向はN-3°-Eである。深さは30cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

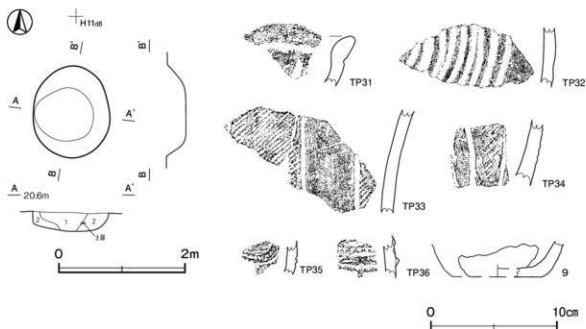
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック中量(締まり強い)

遺物出土状況 縄文土器片30点(深鉢)が覆土上層から散在的に出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ~Ⅲ式期)に比定できる。



第18図 第3548号土坑・出土遺物実測図

第3548号土坑出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	縄文土器	深鉢	-	(28)	[7.0]	長石・石英	橙	普通	沈澱による懸垂文を施文 半斜縄文瓦を縦方向に施文	覆土上層	5%中期+
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考				
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	沈澱を縦方向に施文	覆土上層	5%中期+				
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	沈澱が沿う隆帯による渦巻文	覆土上層	5%中期後葉 P121				
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	半斜縄文瓦を縦方向に施文 2条-1組の沈澱による懸垂文を施文 懸垂間は摺り滑り	覆土上層	5%加曾利 E II-Ⅲ式				
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	2条-1組の沈澱による懸垂文を施文 懸垂間は摺り滑り 半斜縄文瓦を縦方向に施文	覆土上層	5%加曾利 E II-Ⅲ式				
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	2条-1組の押引文による文様を施文	覆土上層	5%中期前葉 中群式が実在式				
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	2条の隆帯間に押引文を施文	覆土上層	5%中期前葉 阿玉台式				

第3554号土坑(第19図)

位置 調査区中央西部H 11h9区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複 第3553号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が第3553号土坑に掘り込まれているため、長径は255mで、短径は1.82mしか確認できなかった。形状は楕円形と推定でき、主軸方向はN-66°-Eである。深さは10cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

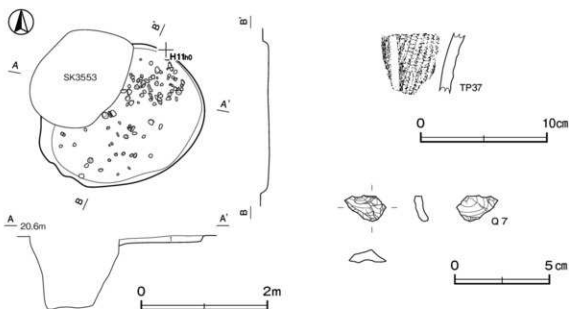
覆土 単一層で、遺物出土状況から埋戻されている。

土層解説

1 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片12点(深鉢)、石器129点(焼石片121、剥片8)が遺構全面の覆土上層から中層にかけて出土している。焼石の石材は、安山岩・砂岩・チャートなどがある。

所見 焼石片は覆土上層から下層にかけて出土していることや底面で被熱痕跡がみられないことから、焼石を破棄した廃棄土坑と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E II-Ⅲ式期)に比定できる。



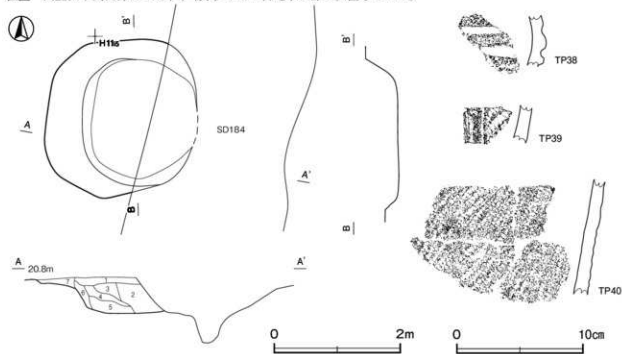
第19図 第3554号土坑・出土遺物実測図

第3554号土坑出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	器種	粘土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	波線による器底文を施す 器底期は磨り滑す 草履織文冠(全額・前方向)に施す	覆土中	5%加骨料反Ⅱ-Ⅱ式		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	瀬片	1.4	2.2	0.6	1.7	チャート	石核の打面の再生面が残る	覆土中	

第3581号土坑(第20図)

位置 調査区中央西部H 11i5区。標高20mの台地平坦部に位置している。



第20図 第3581号土坑・出土遺物実測図

重複 第184号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部が第184号溝に掘り込まれているため、南北径は2.70mで、東西径は2.52mしか確認できなかった。形状は円形と推定でき、深さは56cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量 | 5 褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量 | 6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量 | 7 褐色 ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 縄文土器片7点（深鉢）が覆土上層から中層にかけて散在的に出土している。

所見 規模と形状から貯蔵穴の可能性はある。時期は、出土土器から中期後葉（加曾利E I～Ⅲ式期）に比定できる。

第3581号土坑出土遺物観察表（第20図）

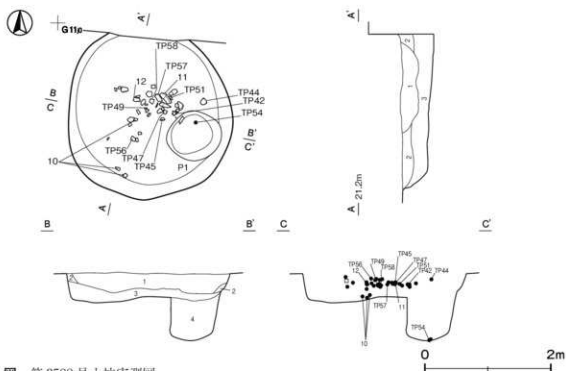
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP38	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈線が沿う発帯を高める 単胎縄文RLを横方向に施文	覆土中	5%加曾利E式
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	2条一帯の沈線による懸垂文を施文 懸垂部は折文 単胎縄文RLを縦方向に施文	覆土中	5%加曾利E I～Ⅲ式
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	単胎縄文RLを縦方向に施文	覆土中	5%

第3588号土坑（第21～23図）

位置 調査区北部のG110区 標高20mほどの台地平坦部に位置しており、北部は調査区域外に延びている。

規模と形状 径2.52mの円形と推定でき、主軸方向はN-0°である。深さは51cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 東壁際に位置している。形状は、長径85cm、短径77cmの楕円形で、底面からの深さは68cmである。



第21図 第3588号土坑実測図

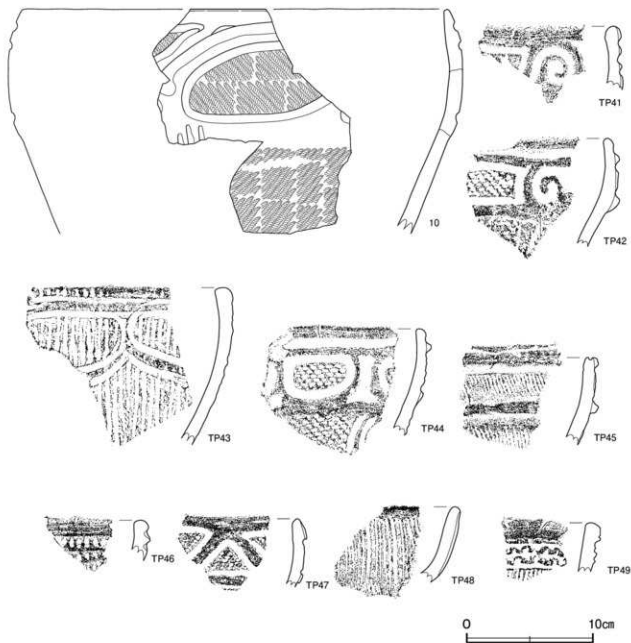
覆土 4層に分層できる。遺物出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

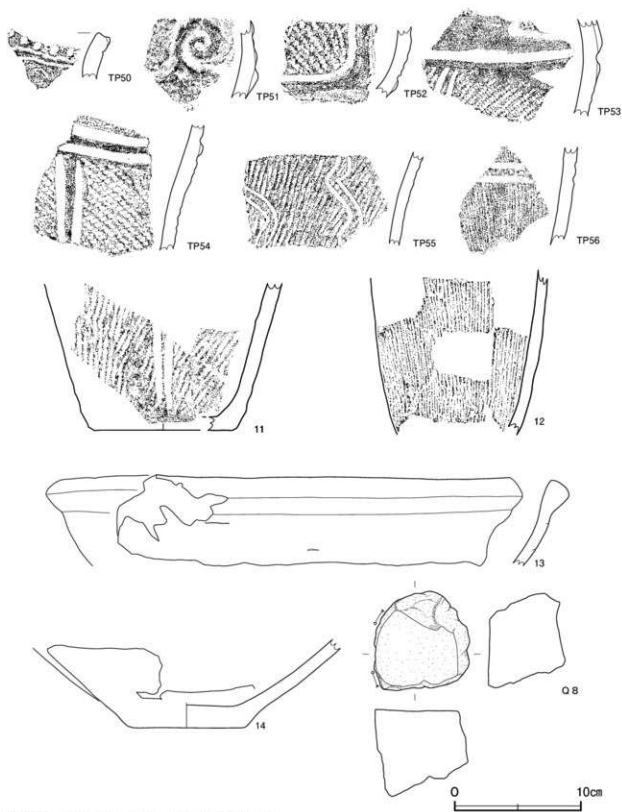
- | | | | |
|-------|------------------|------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量(締まり強い) | 4 褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 縄文土器片253点(深鉢249, 浅鉢4), 石器2点(剥片, 石皿)が出土している。その多くは中央部の覆土中層から集中して出土している。TP54はP1底面から出土している。10は中央部から南部の底面直上から分散した状態で出土している。11は第3612号土坑から出土したものと遺構間で接合したものである。

所見 性格は不明であるが, 近接する第3621土坑と規模や形状が類似することから, 何らかの関連性が想定される。時期は, 出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ~Ⅲ式期)に比定できる。



第22図 第3588号土坑出土遺物実測図(1)



第23図 第3588号土坑出土遺物実測図(2)

第3588号土坑出土遺物観察表(第22・23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	縄文土器	深鉢	[34.0]	(12.7)	-	灰石・石英・雲母	橙	普通	区画が約4段階による区画文、区画内は白粉多量網文以 全方向に施文、底部は白粉多量網文以全方向に施文	底面直土	10%加糖利E.正 一室火 PL.21

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	陶文土器	深鉢	-	(11.6)	[11.0]	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	2条一組の沈線による惣赤文を施文。単筋縄文RLを縦・斜方向に施文	覆土中	10%加勢利E1-Ⅱ式、PL21
12	陶文土器	深鉢	-	(13.1)	-	長石・石英	橙	普通	赤線文を縦方向に施文	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式、PL21
13	陶文土器	浅鉢	(41.6)	(6.8)	-	長石・石英・雲母	橙	不良	無文	覆土中	10% PL21
14	陶文土器	浅鉢	-	(7.0)	[9.0]	長石・石英・雲母	橙	不良	無文	覆土中	10% PL21

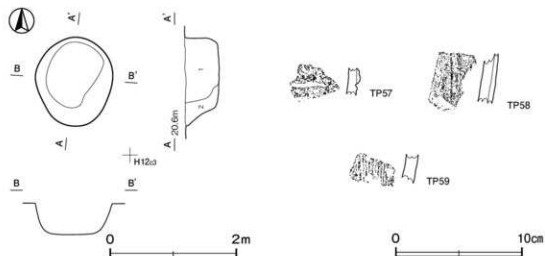
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP41	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文	覆土上層	5%加勢利E1-Ⅱ式
TP42	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文 区画内は複筋縄文LRLを縦方向に施文	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式、PL21
TP43	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	無筋縄文Rの惣赤文を縦方向に施文後、沈線による楕円区画文を施文	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式、PL21
TP44	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文 区画内は単筋LRLを縦方向に施文	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式
TP45	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	口唇部に沈線を施文 口縁部は沈線が沿う隆帯による区画文 区画内は無筋縄文Rの惣赤文を縦方向に施文	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式、PL21
TP46	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈線が沿う隆帯の北側に縦文を施文 その直下に無筋縄文Lの惣赤文を縦方向に施文	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式、PL21
TP47	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線が沿う隆帯による区画文 区画内は単筋縄文LRLを縦方向に施文	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式、PL21
TP48	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	赤線文を縦方向に施文	検出面	3%加勢利E1式
TP49	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	隆帯に交互縦横文 その直下に無筋縄文Rの惣赤文を縦方向に施文	覆土中	5%中野式、PL21
TP50	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	赤筋L線 口唇部は埴土工法による押文 その直下に2条一組の押文を施文	覆土中	5%阿玉台式、PL21
TP51	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文 区画内は単筋縄文RLを施文	覆土中	5%加勢利E1式
TP52	陶文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	沈線が沿う隆帯による区画文 区画内は複筋縄文RLを横方向に施文	覆土中	5%加勢利E1式
TP53	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線による区画文 区画内は縄文を施文 単筋縄文RLを縦方向に施文後、2条一組の沈線による惣赤文を施文	覆土上層	5%加勢利E1-Ⅱ式
TP54	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	口縁部は沈線が沿う隆帯による区画文 全体は複筋縄文LRLを縦方向に施文後、2条一組の沈線による惣赤文を施文 惣赤間は磨り消す	P1底面	5%加勢利E1式
TP55	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒	0段多条縄文RLを斜方向に施文後、2条一組の縦行沈線を施文	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式、PL21
TP56	陶文土器	深鉢	長石・石英	橙	赤線文を縦方向に施文後、2条一組の沈線を施す	覆土中	5%加勢利E1-Ⅱ式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q8	石皿	(7.5)	(7.5)	(6.8)	447.8	花崗岩	使用面1面	覆土中	

第 3594 号土坑 (第 24 図)

位置 調査区北部の H 12b2 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 1.41 m、短径 1.23 m の楕円形で、主軸方向は N-1°-E である。深さは 54 cm で、底面は



第 24 図 第 3594 号土坑・出土遺物実測図

平坦である。壁は北壁で直立し、南壁で外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。第2層は壁崩落土で三角堆積を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色 ロームブロック少量

2 褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片4点（深鉢）が覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器がわずかなため詳細な時期は不明であるが、中期と考えられる。

第3594号土坑出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP57	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	隆帯に沿って結節状線と爪形文を施文	覆土中	5%阿玉台式
TP58	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	隆帯を施文	覆土上層	5%中期
TP59	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	条線文を縦方向に施文	覆土中	5%中期

第3596号土坑（第25・26図）

位置 調査区北部のG12j1区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東壁の上部は攪乱を受けているため、確認できた長径は1.16mで、短径は1.07mの円形で、深さは20cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

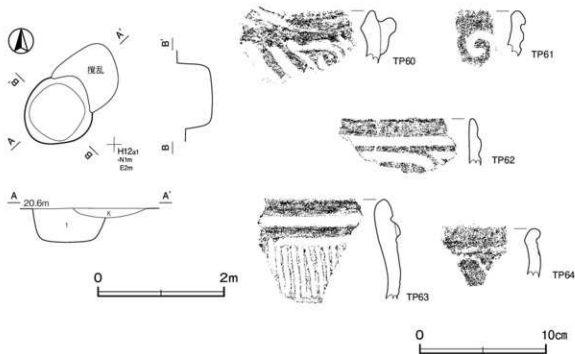
覆土 単一層で自然堆積と考えられる。

土層解説

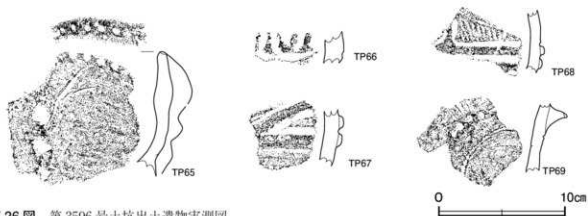
1 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片75点（深鉢）、礫2点が覆土上層から中層にかけて出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利EⅠ～Ⅱ式期）に比定できる。



第25図 第3596号土坑・出土遺物実測図



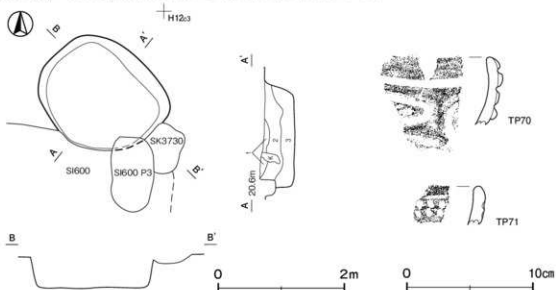
第26図 第3596号土坑出土遺物実測図

第3596号土坑出土遺物観察表(第25・26図)

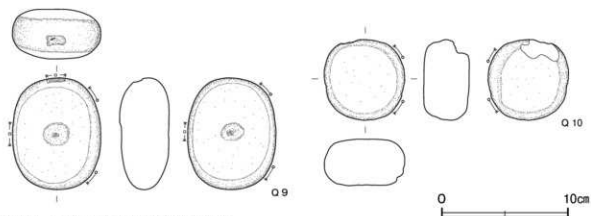
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP60	陶文土器	深鉢	長石・石英	橙	沈線が沿う隆帯による渦巻文	覆土中	5%加費利E1-II式
TP61	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	沈線が沿う隆帯による渦巻文	覆土中	5%加費利E1-II式
TP62	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	沈線が沿う隆帯による区画文	覆土中	5%加費利E1-II式
TP63	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	沈線が沿う隆帯による区画文 区画内は縦方向に沈線を施文	覆土中	5%加費利E1-II式
TP64	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	口縁直下に流状沈線を施文 押印文で文様を施文	覆土中	5%阿玉台式
TP65	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	口唇部は棒状工具による押圧文 キザミを有する隆帯で把手を施文	覆土中	5%阿玉台式
TP66	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	沈線が沿う隆帯による区画文 区画内は縦方向に沈線を施文	覆土中	5%加費利E1-II式
TP67	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	沈線が沿う隆帯による区画文	覆土中	5%加費利E1-II式
TP68	陶文土器	深鉢	長石・石英	橙	沈線が沿う隆帯による渦巻文 区画文区画内は縦横文を縦方向に施文	覆土中	5%加費利E1-II式
TP69	陶文土器	深鉢	長石・雲母	橙	棒状工具による押圧文を有する隆帯に沿って押印文を施文	覆土中	5%阿玉台式 別記

第3612号土坑(第27・28図)

位置 調査区北部のH12c2区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。



第27図 第3612号土坑・出土遺物実測図



第28図 第3612号土坑出土遺物実測図

重複 第600号住居、第3730号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が第600号住居及び第3730号土坑に掘り込まれているため、確認できた長軸は1.94mで、短軸は1.70mである。形状は隅丸長方形で、主軸方向はN-45°-Wである。深さは56cmで、底面は平坦である。壁は北壁で外傾して立ち上がり、他の壁では直立している。

覆土 3層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|--------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック少量(絡まり弱い) | 2 暗褐色 | ローム粒微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量(絡まり弱い) | | |

遺物出土状況 縄文土器片24点(深鉢23、浅鉢1)、石器2点(磨石)が散在的に出土している。その多くは覆土上層から中層にかけて出土している。第3588号土坑のものと同構間で接合した浅鉢・TP70・Q9・Q10は底面から出土している。

所見 規模と形状から貯蔵穴の可能性がある。時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ～Ⅲ式期)に比定できる。

第3612号土坑出土遺物観察表(第27・28図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP70	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	北壁が沿う段帯による渦巻文・区画文 区画内は華形陶文LRを横方向に施文	底面	5%加曾利EⅡ～Ⅲ式 P122
TP71	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	棒状工具による円形刺突文を施文	覆土中	5%加曾利EⅡ～Ⅲ式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	磨石・砥石	89	7.0	3.8	373.4	砂岩	使用面3面	底面	
Q10	磨石	64	6.3	3.6	242.6	玄武岩	使用面2面	底面	

第3621号土坑(第29図)

位置 調査区北部のH12a1区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複 第597号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.60m、短径2.42mの円形で、主軸方向はN-0°である。深さは44cmで、底面は平坦である。壁は直立している。

ピット 北東壁際に位置している。形状は、長径84cm、短径74cm楕円形で、深さは77cmである。覆土は、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

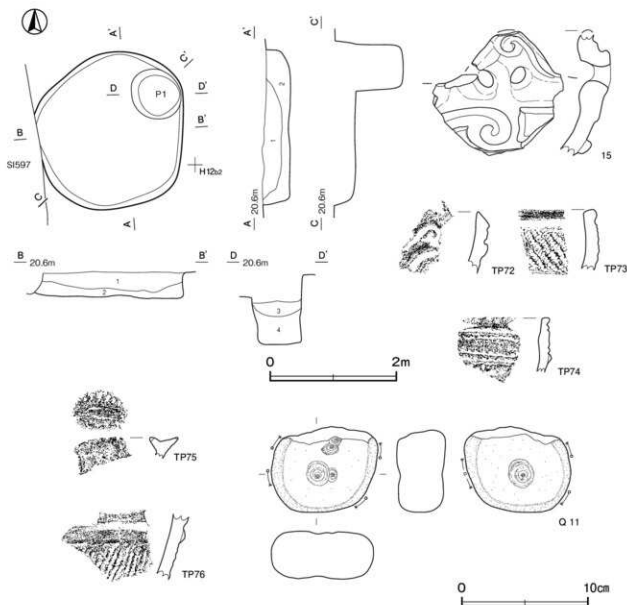
覆土 4層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ローム粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片132点(深鉢)、石器2点(剥片、磨石)、礫4点が覆土上層から下層にかけて出土している。その他、混入したと考えられる土師器1点(甕)が出土している。

所見 性格は不明であるが、近接する第3588号土坑と規模や形状が類似することから、何らかの関連性が想定される。時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ～Ⅲ式期)に比定できる。



第29図 第3621号土坑・出土遺物実測図

第3621号土坑出土遺物観察表(第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
15	縄文土器	深鉢	-	(95)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	底径口径 変形部に沈澱による褐色文 その直下に2箇一箇の穿孔 口径部は沈澱が原因と思われる褐色文・沈澱文	覆土中	5%加曾利EⅡ～Ⅲ式 P.22

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP72	縄文土器	深鉢	長石	靑	波状口縁 沈線が沿う隆帯による渦巻文	覆土中	5%加曽利EⅡ式
TP73	縄文土器	深鉢	長石・石英	靑	沈線が沿う隆帯による区画文 区画内は単筋縄文を横方向に施文	覆土中	5%加曽利EⅡ一貫式
TP74	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	隆帯間に2条一組の押引文を施文	覆土中	5%阿玉台式
TP75	縄文土器	深鉢	長石・石英	靑	キザミを有する突起部	覆土中	5%阿玉台式
TP76	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	靑	沈線が沿う隆帯 単筋縄文LRを横方向に施文	覆土中	5%加曽利EⅠ一貫式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 11	磨石・砥石	(65)	85	3.8	378.0	安山岩	使用面2面	覆土中	

第 3622 土坑 (第 30 図)

位置 調査区北西部 H 11a 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複 第 597 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径 2.28 m、短径 1.43 m の楕円形で、主軸方向は N - 37° - E である。深さは 30 cm で、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

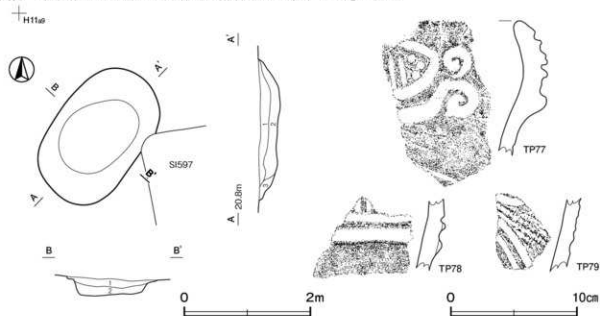
覆土 3 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 層 褐色 ロームブロック少量 (締まり強い)
- 2 層 褐色 ローム粒子少量 (締まり強い)
- 3 層 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片 38 点 (深鉢)、礫 1 点が覆土上層から中層にかけて散在的に出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉 (加曽利 E Ⅱ 式期) に比定できる。

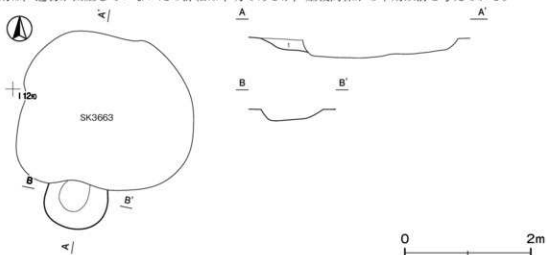


第 30 図 第 3622 号土坑・出土遺物実測図

第 3622 号土坑出土遺物観察表 (第 30 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP77	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	靑	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文 区画内は縦方向の沈線と押引文を施文	覆土上層	5%加曽利EⅡ式 TP22
TP78	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線が沿う隆帯による区画文 区画内は沈線を縦方向に施文	覆土上層	5%加曽利EⅡ式
TP79	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	単筋縄文 LR を縦方向に施文後、2条一組の沈線で文様を描出	覆土中	5%加曽利EⅡ式

所見 時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、重複関係から中期以前と考えられる。



第32図 第3666号土坑実測図

第3712号土坑 (第33図)

位置 調査区北東部のH127区、標高20mほどの台地斜面部に位置している。

重複 第3711号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.66m、短軸2.29mの長方形で、主軸方向はN-16°-Eである。深さは15cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

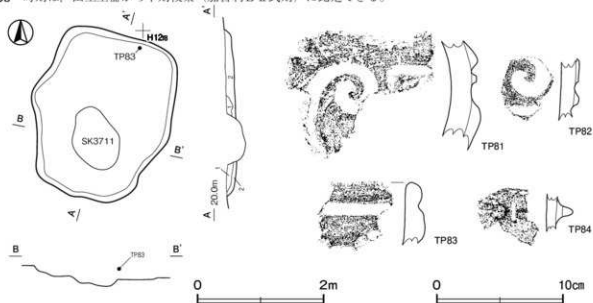
土層解説

1 期 褐色 ロームブロック少量

2 期 灰褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片23点(深鉢)、石器2点(磨石、凹石)が出土している。その多くは、第2層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E II式期)に比定できる。



第33図 第3712号土坑・出土遺物実測図

第3712号土坑出土遺物観察表(第33図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP81	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文 区画内は車路縄文RLを施文	覆土中	5%加曽利EⅡ式、IV式
TP82	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	沈線が沿う隆帯による渦巻文	覆土中	5%加曽利EⅡ式
TP83	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文	覆土中	5%加曽利EⅡ式
TP84	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい黄褐色	キザミを有する隆帯に沿って刺突文を施文	覆土中	5%阿玉台式

第3721号土坑(第34図)

位置 調査区北東部のH12e6区、標高20mほどの台地斜面部に位置している。

重複 第3717号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.89m、短軸1.88mの方形で、主軸方向はN-22°-Wである。深さは19cmで、底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっている。

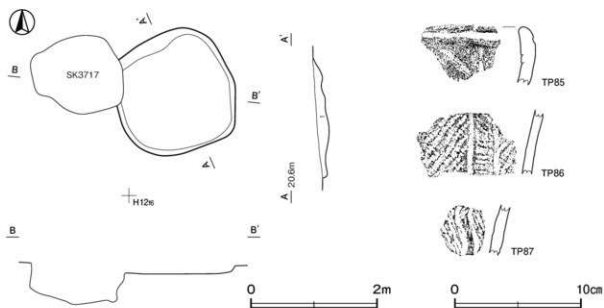
覆土 単一層で自然堆積と考えられる。

土層解説

1 層 色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片30点(深鉢29、浅鉢1)が出土している。その他、混入したと考えられる土師器片4点(坏1、甕3)が出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曽利EⅠ~Ⅲ式期)に比定できる。



第34図 第3721号土坑・出土遺物実測図

第3721号土坑出土遺物観察表(第34図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP85	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	無文 口縁直下に沈線を1条施らす	覆土中	5%中期後葉
TP86	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	2条一組の沈線による渦巻文を施文 壁基部は磨り消す 深鉢縄文RLを縦方向に施文	覆土中	5%加曽利EⅠ~Ⅲ式
TP87	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	2条一組の沈線による渦巻文を施文 壁基部は磨り消す 深鉢縄文Lを縦方向に施文	覆土中	5%加曽利EⅠ~Ⅲ式

表3 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長軸(四方)	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3322	H 116	N-81°-W	楕円形	2.11×1.72	20	平坦	外傾	自然	縄文土器、石器	
3329	I 1148	N-14°-E	楕円形	0.61×0.48	16	平坦	外傾	人為	石器	
3548	H 1147	N-3°-E	楕円形	1.46×1.21	30	平坦	外傾	自然	縄文土器	
3554	H 1149	N-66°-E	楕円形	2.55×(1.82)	10	平坦	外傾	人為	縄文土器、湖片、焼石	本跡→SK3553
3581	H 1115	-	円形	2.70×(2.52)	56	平坦	外傾	自然	縄文土器	本跡→SD184
3588	G 110	-	円形	(2.52)×2.52	51	平坦	外傾	人為	縄文土器、石器	
3594	H 1262	N-1°-E	楕円形	1.41×1.23	54	平坦	外傾	自然	縄文土器	
3596	G 121	-	円形	(1.16)×1.07	20	平坦	外傾	自然	縄文土器	
3612	H 12-2	N-45°-W	楕円長方形	(1.94)×(1.70)	56	平坦	直立	自然	縄文土器、石器	本跡→S100, SK370
3621	H 1261	-	円形	2.60×2.42	44	平坦	直立	自然	縄文土器、石器	本跡→SE597
3622	H 1149	N-37°-E	楕円形	2.28×1.43	30	平坦	外傾	自然	縄文土器	本跡→SE597
3663	I 128	N-75°-W	楕円形	2.75×2.40	27	平坦	外傾	自然	縄文土器	SK3666→本跡
3666	I 126	-	楕円形	0.99×(0.76)	16	平坦	外傾	自然	-	本跡→SK3663
3712	H 127	N-16°-E	長方形	2.66×2.29	15	平坦	外傾	自然	縄文土器、石器	本跡→SK3711
3721	H 1266	N-22°-W	方形	1.89×1.88	19	凸凸	外傾	自然	縄文土器	本跡→SK3717

2 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は竪穴住居跡 15軒を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴住居跡

第 564 号住居跡 (第 35・36 図)

位置 調査区西部の H 11b4 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3679 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部は攪乱を受けているが、平成 8 年度の調査成果と合わせた規模は、長軸 4.05 m、短軸 3.98 m の方で、主軸方向は N-29°-W である。壁高は 6～18 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 東から西に向かってやや傾斜した貼床で、中央部は踏み固められている。確認できた壁下には幅 12～24 cm の壁溝が巡っている。貼床は確認面から 12～20 cm 掘り込み、ロームを主体とするふい黄褐色土を 4～16 cm 埋土して構築されている。

炉 中央部に付設されている地床炉である。北部が攪乱を受けているため、南北径は 65 cm しか確認できず、東西径は 52 cm の不整楕円形と推定される。炉床は、被熱により赤変硬化している。

ピット 深さ 42 cm で、位置や硬化面の広がりから出入口施設に伴うピットと考えられる。

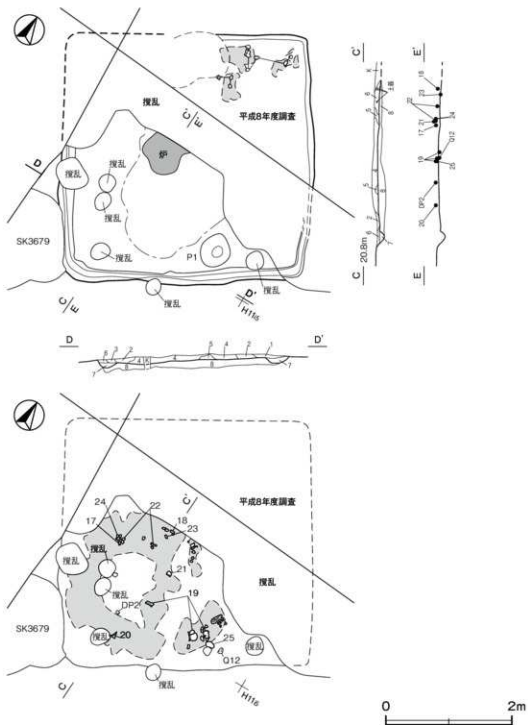
覆土 7層に分層できる。第 1～5層に焼土が多量に含まれていること、堆積状況が不規則なことから埋め戻されている。第 8層は貼床の構築土である。

土層解説

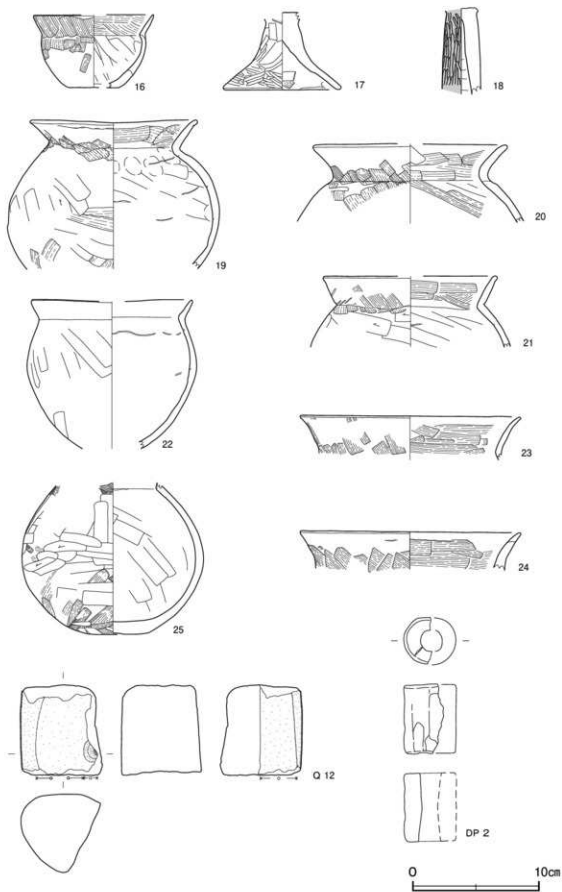
1 暗 褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	4 暗 褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 明 赤褐色	焼土ブロック多量、暗褐色ブロック少量(絡まり強い)	5 明 赤褐色	焼土ブロック多量、暗褐色ブロック中量(絡まり強い)
3 暗 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	6 暗 褐色	ローム粒子中量(絡まり弱い)
		7 暗 褐色	ロームブロック中量
		8 におい黄褐色	ロームブロック多量、黒褐色ブロック中量

遺物出土状況 土師器片 109 点 (埴 1, 高坏 8, 壺 1, 甕 99), 土製品 1 点 (管状土錘), 石器 1 点 (磨石) が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。23 は中央部の床面から出土している。19 は南部, 25・Q12 は南部壁際の覆土下層から出土している。17・24 は西部, 18・21 は中央部, 22 は中央部から西部, 20・DP2 は南西部の覆土上層から出土している。その他, 流れ込んだと考えられる縄文土器片 8 点 (深鉢) が出土している。

所見 時期は, 出土土器から 4 世紀後葉に比定できる。床面及び覆土から多量の焼土が検出されたことから焼失住居と考えられる。



第35図 第564号住居跡実測図



第36图 第564号住居跡出土遺物実測図

第564号住居跡出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	数	備考	出土位置	備考
16	土師器	埴	[96]	5.7	[40]	長石・石英		普通	口縁部外・内面ハケ目	1		覆土上層	40%
17	土師器	高坏	-	(6.1)	[9.4]	長石・石英		良好	杯部内面へう磨き	1		覆土上層	30%
18	土師器	高坏	-	(6.6)	-	長石・石英		赤褐	脚部外面へう磨き・赤彩	1		覆土上層	20%
19	土師器	甕	13.3	(11.8)	-	長石・石英・雲母		明黄褐	口縁部外・内面横ナデ	1		覆土下層	80% PL24
20	土師器	甕	[15.4]	(6.3)	-	長石・石英・雲母		にふい黄褐	口縁部外・内面横ナデ	1		覆土上層	5%
21	土師器	甕	[13.8]	(5.6)	-	長石・石英・雲母		にふい黄褐	口縁部外・内面横ナデ	1		覆土上層	5%
22	土師器	甕	[12.8]	(11.8)	-	長石・石英		赤褐	口縁部外・内面横ナデ	1		覆土上層	40% PL24
23	土師器	甕	17.4	(3.4)	-	長石・石英		橙	口縁部外・内面ハケ目	1		床面	5%
24	土師器	甕	17.4	(3.3)	-	長石・石英		橙	口縁部外・内面横ナデ	1		覆土上層	5%
25	土師器	甕	-	(12.0)	4.8	長石・石英・雲母		にふい黄褐	口縁部外・内面横ナデ	1		覆土下層	70%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 2	管状土師	5.5	[4.1]	[1.7]	(43.3)	長石・石英	ヘラナデ	二方向からの穿孔	覆土上層

第584号住居跡(第37・38図)

位置 調査区西部のI 11d8区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第33号ピットを掘り込み、第562号住居、第350号土坑、第24号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.31m、短軸3.89mの長方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は17~21cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。東西壁及び南北壁下の一部には、幅22~34cmの壁溝が走っている。貼床は確認面から24~47cm掘り込み、ロームを主体とするにふい黄褐色土を5~24cm埋土して構築されている。北東部は一段深く掘り込まれている。

炉 北部に付設されている地床炉である。長径57cm、短径48cmの楕円形である。炉床は、被熱により赤変硬化している。

ピット 11か所。P2は深さ19cmで、位置や硬化面の広がりから出入口施設に伴うピットと考えられる。他は深さ14~78cmで、性格不明である。

ピット2土層解説

1 にふい黄褐色 ローム粒子少量

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径56cm、短径48cmの楕円形で、深さは37cmである。壁は底面から直立し、壁中位付近で外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

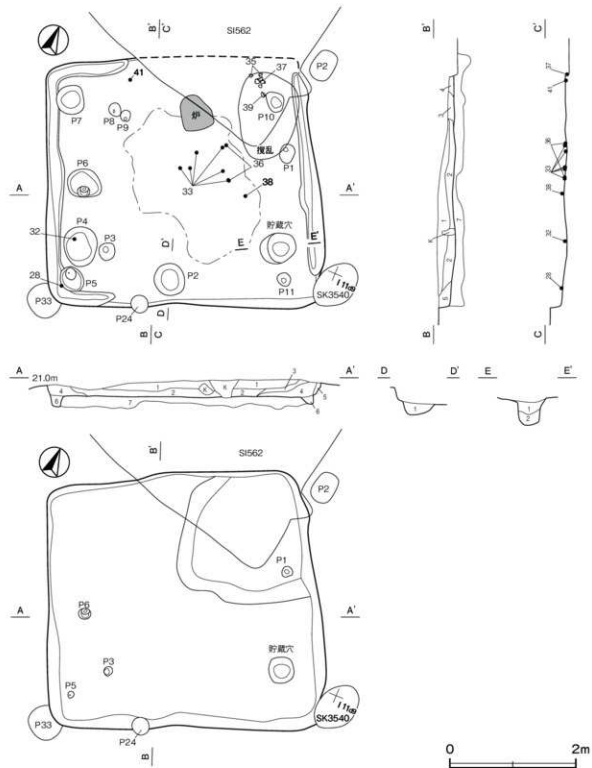
1 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量(締まり弱い) 2 暗褐色 焼土ブロック中量、(締まり弱い)

覆土 6層に分層できる。第1~5層がレンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第7層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|----------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量 (締まり弱い) | 5 褐色 | 黒褐色粒子少量 (締まり弱い) |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・黒褐色ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 に近い黄褐色 | ロームブロック・黒褐色ブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック微量 (締まり弱い) | | |

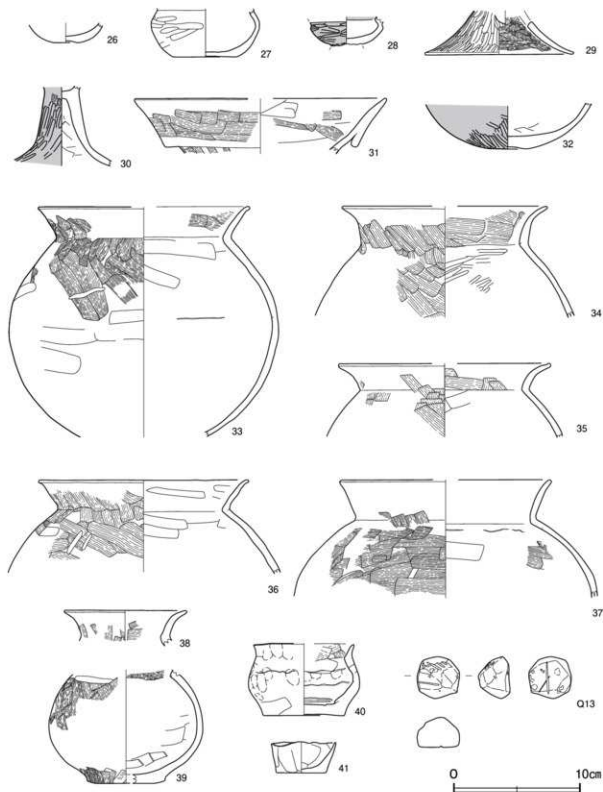
遺物出土状況 土器器片 270 点 (埴 6, 高坏 34, 壺 70, 甕 159, 手捏土器 1), 石器 1 点 (浮石), 礫 2 点が
 全面の覆土土層から床面にかけて出土している。28・32 は南西コーナー部, 33・36 は中央部において分散し



第 37 図 第 584 号住居跡実測図

た状態で、37・39は北東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。41は北部壁際の床面から完形の状態
 で出土している。30・35は北東コーナー部の床面直上から出土している。その他、流れ込んだと考えられる
 縄文土器片9点（深鉢）、混入したと考えられる平安時代の土師器片1点（坏）が出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉に比定できる。



第38図 第584号住居跡出土遺物実測図

第584号住居跡出土遺物観察表 (第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
26	土師器	埴	-	(1.6)	1.8	長石・石英	明黄褐色	普通	体部外・内面摩滅 底部ヘラナデ		覆土中	10%
27	土師器	埴	-	(3.8)	5.0	長石・石英・雲母	にぶ黄褐色	普通	体部外面ヘラ磨き 内面摩滅 底部ヘラ削り		覆土下層	40%
28	土師器	器台	-	(2.3)	-	長石・石英	赤褐色	普通	受部外面ヘラ磨き・赤彩 内面摩滅 唇部外面ハケ目		床面	30% PL23
29	土師器	器台	-	(3.4)	11.8	長石	にぶ黄褐色	良好	脚部外面磨き 内面ハケ目横ナデ 脚部3孔		覆土中	10%
30	土師器	高杯	-	(6.4)	-	長石・石英	赤褐色	良好	脚部外面ハケ目横 ナデ・ヘラ磨き・赤彩 内面ヘラナデ		床面直上	40%
31	土師器	壺	[20.0]	(4.4)	-	長石・石英	にぶ黄褐色	普通	作り直し口縁 口縁部外面横ナデ後、ハケ目 内面横ナデ後、ハケ目・ヘラナデ		貯蔵穴覆土中	5% PL24
32	土師器	壺	-	(3.6)	3.0	長石・石英	赤	普通	体部外面ヘラ磨き・赤彩 内面ヘラナデ後、部分的にヘラ磨き 二次焼成によるハジケ 底部ヘラ磨き		床面	10%
33	土師器	甕	[16.8]	(18.2)	-	長石・石英	にぶ黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ後、ハケ目 体部外面上半ハケ目横ナデ後、ハケ目・ヘラナデ 裏付磨き 内面ヘラナデ 二次焼成によるハジケ		床面	40% PL24
34	土師器	甕	[16.2]	(8.9)	-	長石・石英	にぶ黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ後、ハケ目 体部外面ハケ目 裏付磨き 内面ヘラ磨き		覆土下層	10% PL24
35	土師器	甕	[16.8]	(5.8)	-	長石・石英	橙	良好	口縁部外面ハケ目横 ナデ、横ナデ 内面横ナデ後、ハケ目 体部外面ハケ目 内面ヘラナデ		床面直上	10%
36	土師器	甕	16.4	(7.3)	-	長石・石英	明黄褐色	普通	口縁部外面横ナデ後、ハケ目 内面横ナデ後、ヘラナデ 体部外面ハケ目部分的にハケ目横 ナデ、ヘラナデ・ヘラ磨き 裏付磨き 内面ヘラナデ 二次焼成によるハジケ		床面	20%
37	土師器	甕	[16.8]	(9.3)	-	長石・石英	にぶ黄褐色	普通	口縁部外面横ナデ後、ハケ目 内面横ナデ 体部ハケ目 内面ヘラナデ、ハケ目 横磨き		床面	20%
38	土師器	甕	9.6	(2.8)	-	長石・石英	明黄褐色	良好	口縁部外・内面横ナデ後、ハケ目		床面	10%
39	土師器	甕	-	(9.0)	[6.2]	長石・石英	橙	良好	口縁部内面ハケ目 体部外面上半ハケ目横 ナデ、ヘラナデ 下半ハケ目 内面ヘラナデ		床面	40%
40	土師器	甕	[8.0]	5.6	6.4	長石・石英・雲母	にぶ黄褐色	普通	口縁部外面指線痕 内面ハケ目 体部外・内面指線痕・ヘラナデ 横磨き 底部ヘラナデ		覆土下層	50%
41	土師器	手取土器	5.1	2.4	3.9	長石・石英	にぶ黄褐色	良好	体部外・内面ヘラナデ		床面	100% PL27

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	頁	特徴	出土位置	備考
Q 13	浮石	3.3	3.3	2.4	5.4	軽石		表・裏面に擦痕	貯蔵穴覆土中	

第586号住居跡 (第39～42図)

位置 調査区西部のI 1160区、標高21 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第598号住居跡を掘り込み、第3527号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.69 m、短軸4.58 mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は13～22cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、中央部は踏み固められている。壁下には幅11～24cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から21～33cm掘り込み、ロームを主体とする褐色土、黄褐色土を6～12cm埋土して構築されている。

ピット 3か所。P1～P3は深さ15～30cmで、性格不明である。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長軸89cm、短軸77cmの隅丸方形で、深さは36cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

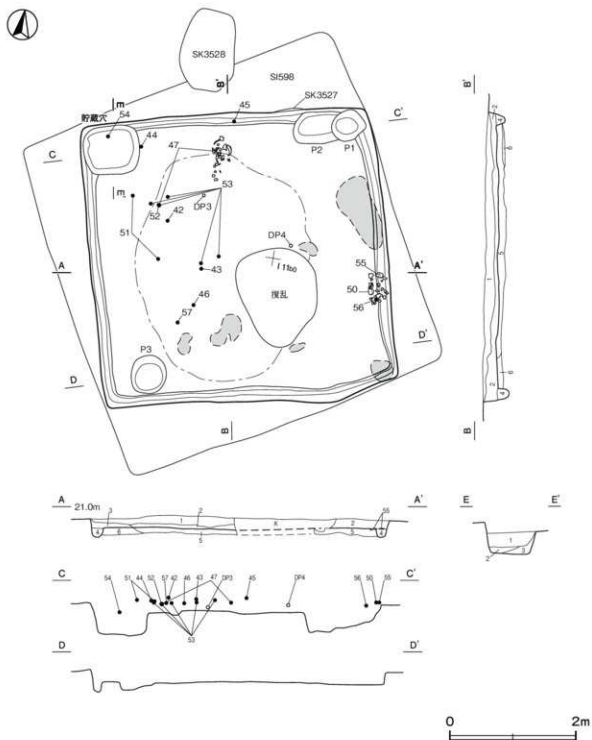
- 1 暗褐色 ローム粒子少量 3 褐色 ロームブロック多量
2 暗褐色 ローム粒子多量

覆土 4層に分層できる。第1・2層に焼土が含まれていることから埋め戻されている。第5・6層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・黒褐色粒子少量 4 褐色 黒褐色粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 5 褐色 ロームブロック多量、黒褐色粒子少量
3 褐色 黒褐色粒子微量 6 黄褐色 ロームブロック多量、黒褐色粒子微量

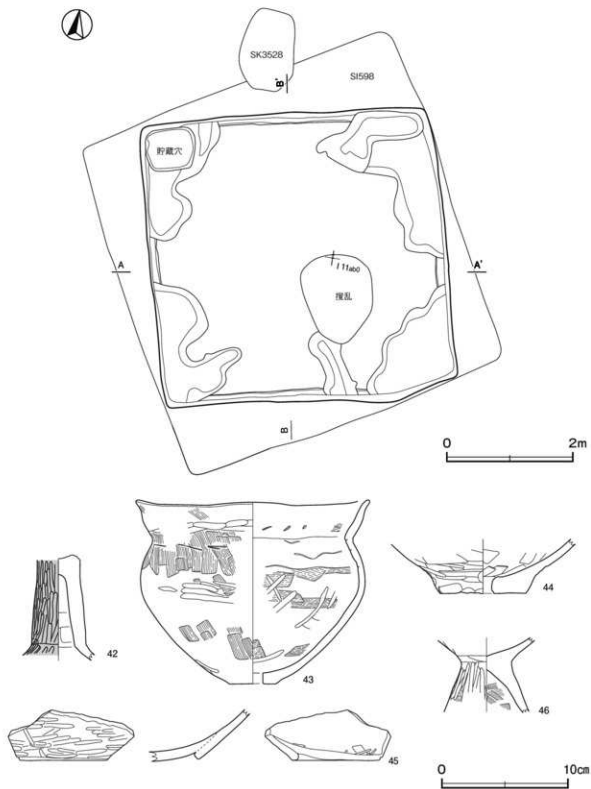
遺物出土状況 土師器片493点(埴18, 器台1, 高坏4, 有孔鉢1, 壺2, 台付甕1, 甕464, ミニチュア土器1, 手捏土器1), 土製品2点(土玉, 管状土錘), 礫1点が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また, 貼床の構築土中から土師器片128点(埴18, 高坏1, 有孔鉢1, 甕105, 壺3)が出土している。46・57は南西部, 47は北部から西部, 53は中央部から西部にかけて分散した状態で, 56は東壁際, DP4は中央部東寄りの床面から出土している。42は中央部北西寄り, 44は北西部, 45は北壁際, 50・55は東壁際, 51



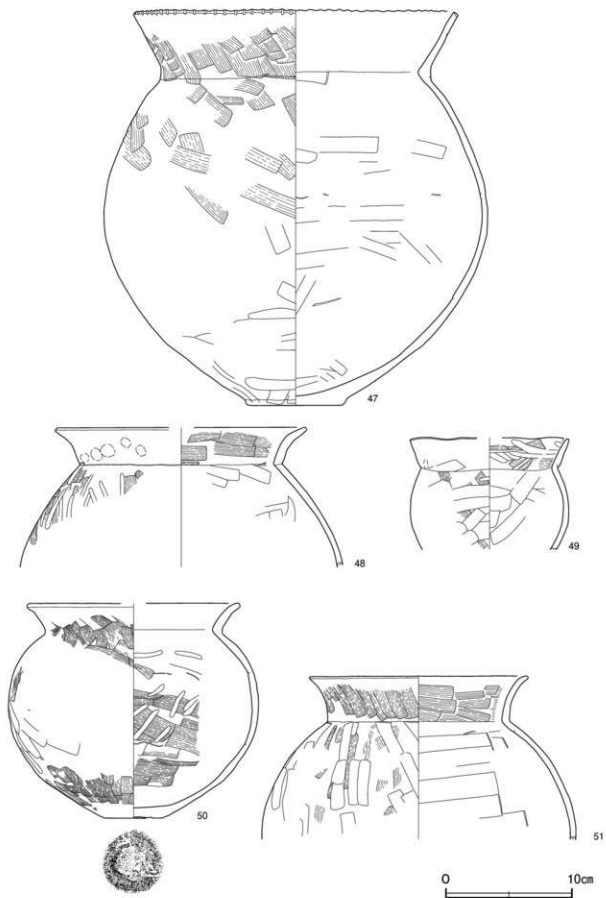
第39図 第586号住居跡実測図

は西部の床面直上から出土している。54は北西部の床面直上及び貯蔵穴の覆土中から分散した状態で出土している。43は全面の覆土上層から貼床の構築土中にかけて分散した状態で、DP3は中央部北西寄りの掘方の埋土中から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片26点(深鉢)が出土している。

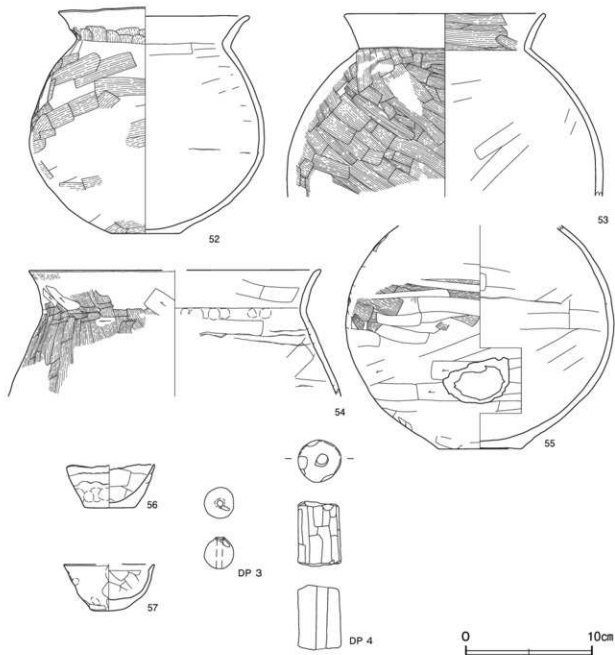
所見 時期は、出土土器から4世紀後葉に比定できる。覆土から焼土が検出されたことから焼失住居と考えられる。



第40図 第586号住居跡・出土遺物実測図



第41图 第586号住居跡出土物実測図(1)



第42図 第586号住居跡出土遺物実測図(2)

第586号住居跡出土遺物観察表(第40~42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
42	土師器	高坏	-	(84)	-	長石・石英	赤	良好	脚部外面へラ磨き・赤彩 内面へラナデ	床面直上	20%
43	土師器	有孔鉢	18.4	14.6	[38]	長石・石英	橙	良好	口縁部外面ハナ目後、唇ナデ 内面ハナナデ 唇ナデ 唇部内、内面ハナ目後、へラ磨き 輪縁部 底部へラ磨き 赤孔	覆土上層・腰方	40% PL24
44	土師器	有孔鉢	-	(43)	[68]	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	良好	体部外面へラナデ・へラ磨き 内面へラナデ 底部へラ磨き 赤孔	床面直上	10%
45	土師器	壺	-	(41)	-	長石・石英	黄緑	普通	体部外面へラナデ・へラ磨き 内面へラナデ後、へラ磨き	床面直上	5%未満
46	土師器	古付壺	-	(59)	-	長石・石英	黄緑	普通	体部内面へラナデ・ナデ 内面ナデ 台部外面ハナ目後、へラ磨き 内面ハナ目	床面	20%
47	土師器	壺	25.8	31.5	7.5	長石・石英	浅黄緑	良好	口縁部縁状工具によるナデミ 口縁部外面唇ナデ後、ハナ目 輪縁部 内面唇ナデ 体部外面上平ハナ目 下半へラナデ 内面へラナデ 輪縁部 底部へラナデ	床面	90% PL25
48	土師器	壺	[198]	(111)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	口縁部外面唇ナデ後、唇部内、内面ハナ目 輪縁部 体部外面ハナ目後、へラ磨き・へラナデ 内面へラナデ	覆土上層	10%
49	土師器	壺	[126]	(89)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	口縁部外面へラナデ・唇部内、内面ハナ目後、へラ磨き 体部外面ハナ目後、へラナデ 内面へラナデ	床面	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
50	土師器	甕	[169]	17.0	4.6	長石・石英	橙	普通	口縁部外面ナデ後、ハケ目、内面ナデ、各部外面ハケ目後、ヘラナデ、煤付着、内面ハケ目後、ヘラナデ、輪襷、底面ヘラナデ	床面直上	50% PL25
51	土師器	甕	17.4	(13.0)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ハケ目後、横ナデ、内面ハケ目、体部外面ハケ目後、ヘラナデ、煤付着、内面ヘラナデ、輪襷	床面直上	40% PL25
52	土師器	甕	15.2	17.9	5.4	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部ナデ後、ハケ目、内面横ナデ、体部外面ヘラナデ後、ハケ目、煤付着、内面ヘラナデ、輪襷	側方	80% PL25
53	土師器	甕	16.0	(14.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面横ナデ、内面横ナデ後、ハケ目、輪襷、体部外面ハケ目、煤付着、内面ヘラナデ	床面	30% PL25
54	土師器	甕	[232]	(10.1)	-	長石・石英	黒褐	普通	口縁部外面ハケ目後、横ナデ後、ハケ目後、ヘラナデ、内面横ナデ後、ヘラナデ、体部外面ハケ目、輪襷、内面横ナデ、ヘラナデ、輪襷	床面直上・貯蔵土上	5%
55	土師器	甕	-	(17.7)	6.6	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面ハケ目後、ヘラナデ、二次焼成によるハジケ、体部外面ヘラナデ、輪襷、二次焼成によるハジケ、底面ヘラナデ	床面直上	40% PL25
56	土師器	ミニチュア土器	6.9	3.4	4.0	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	良好	体部外面横ナデ、輪襷、内面ヘラナデ	床面	90% PL27
57	土師器	子粒土器	[72]	3.7	2.7	長石・石英・雲母	浅黄褐色	良好	体部外面横ナデ、ヘラナデ、内面ヘラナデ	床面	70%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 3	土玉	2.5	2.3	0.5	12.9	長石・石英	ヘラナデ 一方からの穿孔	側方	
DP 4	管状土器	5.1	3.4	0.8	74.5	長石・石英	ヘラナデ 一方からの穿孔	床面	PL31

第 590 号住居跡 (第 43 図)

位置 調査区西部の H 11j4 区、標高 21 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 184 号溝、第 3549 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 残存状況が悪く、北壁・南壁東側及び東壁壁面は遺存していなかった。西部が削平されているため、規模は、南北軸が 5.52 m で、東西軸は 2.18 m しか確認できなかった。形状は、方形もしくは長方形と推定される。主軸方向は N - 15° - W である。壁高は 3 ~ 5 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部は踏み固められている。貼床は確認面から 15 ~ 32 cm 掘り込み、ロームを主体とするにぶい黄褐色土を 10 ~ 26 cm 埋土して構築されている。

炉 北部に付設されている地床炉である。長径 139 cm、短径 59 cm の不整楕円形である。炉床は、被熱により赤変硬化している。

ピット 7 か所。P 4 は深さ 11 cm で、位置や硬化面の広がりから出入口施設に伴うピットと考えられる。その他は深さ 13 ~ 20 cm で、性格不明である。

ピット 4 土層解説

1 褐色 ローム粒中量

ピット 5 土層解説

1 褐色 ロームブロック中量、黒色ブロック少量

覆土 3 層に分層できる。第 1・2 層がレンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第 4 層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量

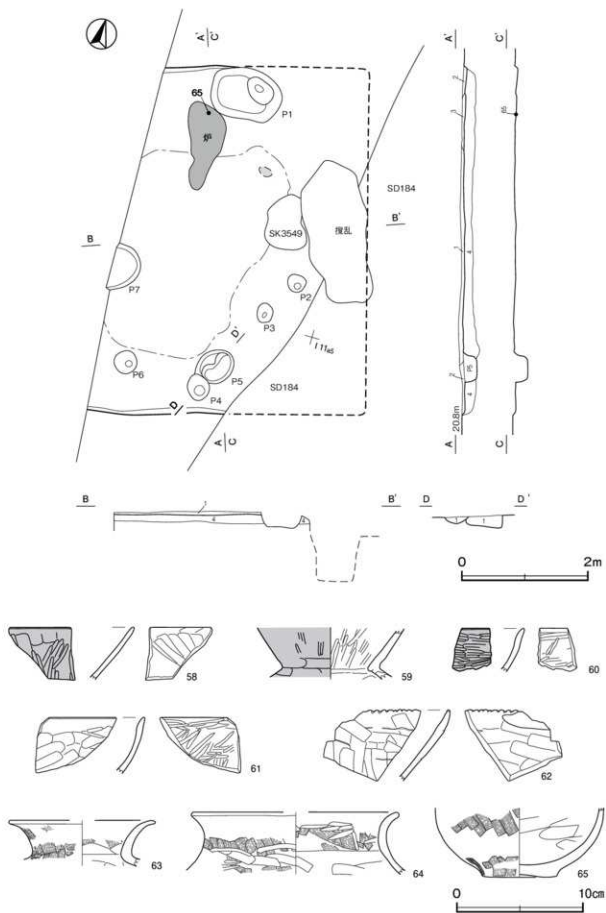
2 暗褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック少量

4 にぶい黄褐色 ロームブロック・暗褐色ブロック中量

遺物出土状況 土師器片 75 点 (埴 4、器台 3、高坏 9、壺 1、甕 58) が全面から出土しており、それらの多くは覆土上層から出土している。また、貼床の構築土中から土師器片 8 点 (器台 1、高坏 2、甕 5) が出土している。59 は P 1 覆土中から出土している。65 は炉床直上から出土している。58・62 ~ 64 は覆土中から出土している。60・61 は北東部、南西部の貼床の構築土中からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 32 点 (深鉢) が出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀後半に比定できる。



第43图 第590号住居跡・出土遺物実測図

第590号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
58	土師器	埴	-	(42)	-	長石・石英	黄褐色	良好	口縁部外面ヘラナゲ後、ヘラ磨き・赤彩 内面ヘラナゲ	覆土中	5%
59	土師器	埴	-	(41)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外面ヘラ磨き・ヘラナゲ・赤彩 内面ヘラ磨き 体部外面ヘラナゲ 内面ヘラナゲ 輪縁部	P1覆土中	5%
60	土師器	器台	-	(33)	-	長石・石英	赤	普通	口縁・体部外面ヘラ磨き・赤彩 内面ヘラ磨き	掘方	5%
61	土師器	鉢	-	(45)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁・体部外面ヘラナゲ後、部治のヘラ磨き 内面ヘラ磨き	掘方	5%
62	土師器	甕	-	(56)	-	長石・石英	黄褐色	普通	口唇部キザリ 口縁部外・内面ヘラナゲ 輪縁部	覆土中	5%
63	土師器	甕	[116]	(36)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ハケ目 内面ハケ目後、ヘラナゲ	覆土中	5%
64	土師器	甕	[164]	(49)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部外面横ナゲ 内面ハケ目後、ヘラ磨き 体部外面ハケ目後、ヘラ磨き 内面ヘラナゲ	覆土中	5%
65	土師器	甕	-	(55)	6.0	長石・石英	橙	普通	体部外面ハケ目 内面ヘラナゲ 二次焼成によるハダケ	和味直上	10%

第592号住居跡（第44・45図）

位置 調査区北西部のH11e0区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3558号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.93m、短軸4.06mの長方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は6～12cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、中央部は踏み固められている。貼床は確認面から12～29cm掘り込み、ロームを主体とするにぶい黄褐色土を4～20cm埋土して構築されている。掘方は、西壁を除く壁際が一段深く掘り込まれている。

炉 北部に付設されている地床炉である。長径66cm、短径48cmの不整形円形である。炉床は、被熱により赤変硬化している。

ピット 6か所。P3・P4は深さ30cm・35cmで、柱痕跡がみられることから主柱穴と考えられる。P2は深さ45cmで、規模や位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P1・P5・P6は深さ12cm・13cm・17cmで、性格不明である。

ピット2土層解説

1 暗褐色 ローム粒子多量

2 暗褐色 ロームブロック中量

ピット3土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量

2 暗褐色 ロームブロック多量

ピット4土層解説

1 暗褐色 ロームブロック多量

2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長径74cm、短径60cmの楕円形で、深さは13cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック中量

覆土 5層に分層できる。不規則に堆積し、焼土ブロック、炭化物が含まれていることから埋め戻されている。第6層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗褐色 黒褐色ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量（締まり弱い）

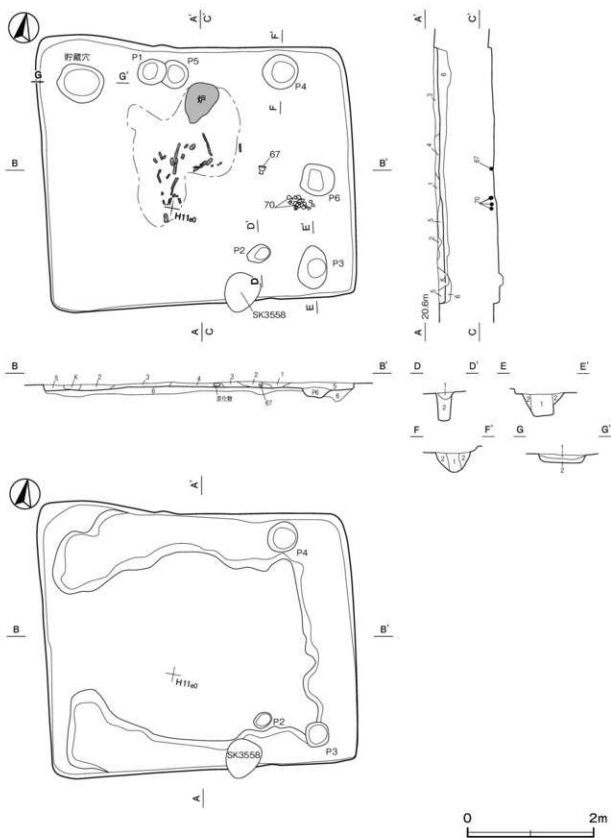
4 暗褐色 炭化物多量、黒褐色ブロック中量、ローム粒・焼土粒少量（締まり弱い）

2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子中量

5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量

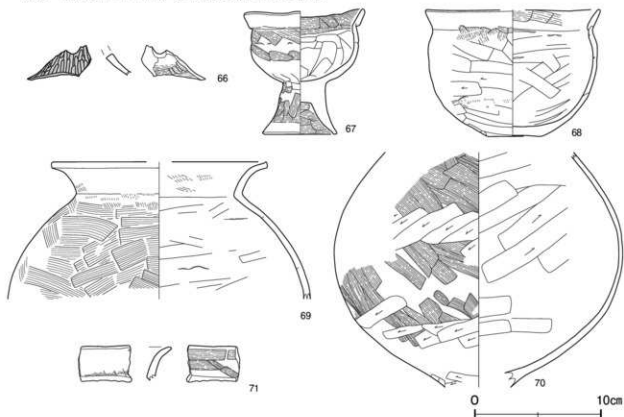
6 にぶい黄褐色 ロームブロック・黒褐色ブロック中量



第44图 第592号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 69 点 (埴 1, 器台 1, 高坏 11, 台付甕 1, 甕 55) 炭化種子 1 点, 礫 2 点が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また, 貼床の構築土中から土師器片 13 点 (高坏 1, 甕 12) が出土している。67 は中央部や東寄りの床面から完形の状態出土している。69 は北西部及び P1 の覆土中から分散した状態で出土している。70 は東部, 71 は北西部の覆土上層から出土している。68 は北西部の覆土中から出土している。その他, 流れ込んだと考えられる縄文土器片 31 点 (深鉢), 石器 2 点 (石鏝, 石皿) が出土している。

所見 時期は, 出土土器から 4 世紀後葉に比定できる。



第 45 図 第 592 号住居跡出土遺物実測図

第 592 号住居跡出土遺物観察表 (第 45 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
66	土師器	器台	-	(21)	-	長石・石英・雲母	にぶ・赤黒	良好	脚部外面へう磨き・赤彩 内面ハケ目 孔有り	覆土中	5%
67	土師器	台付甕	96	99	59	長石・石英	浅黄橙	良好	口縁部外面磨ナゲ 内面ハケ目 底部外上ハケ目 下手ヘラナゲ 縁部 二次焼成 内面ヘラナゲ 器底・内面ハケ目	床面	100%
68	土師器	甕	[138]	101	[43]	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口縁部外・内面磨ナゲ後, ハケ目 体部外面上手ハケ目後, ヘウ崩り, 下手ハケ目後, ヘラナゲ 内面ヘラナゲ 縁部底 底部ヘラナゲ	覆土中	30%
69	土師器	甕	[170]	(109)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面ハケ目後, 磨ナゲ 体部外面ハケ目 二次焼成によるハジケ 器底 内面ヘラナゲ 縁部底	覆土中・P1 覆土中	20%
70	土師器	甕	-	(186)	-	長石・石英・雲母	にぶ・黄緑	普通	体部外面ハケ目後, ヘウ崩り 内面ヘウ崩り 二次焼成によるハジケ	覆土上層	30%
71	土師器	甕	-	(28)	-	長石・石英	にぶ・黄緑	普通	口縁部外・内面磨ナゲ後, ハケ目	覆土上層	5%未満

第 593 号住居跡 (第 46 図)

位置 調査区北西部の H 11c5 区, 標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東部から中央部にかけて攪乱を受けているため, 規模は南北軸が 3.49 m で, 東西軸は 1.27 m し

か確認できなかった。形状は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-34°-Wである。壁高は6~8cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。貼床は確認面から8~18cm掘り込み、ロームを主体とする黄褐色土を3~9cm埋土して構築されている。

ピット 4か所。P1~P4は深さ7~48cmで、性格不明である。

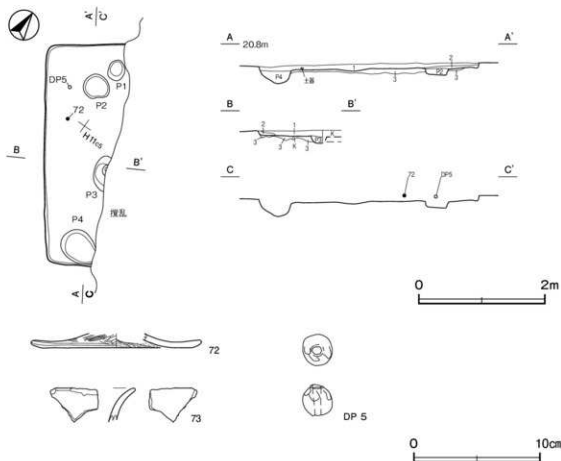
覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第3層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量(締まり弱い) 3 黄褐色 暗褐色ブロック多量(締まり弱い)
 2 褐色 ロームブロック多量(締まり強い)

遺物出土状況 土師器片13点(高坏1, 甕12), 土製品1点(土玉)が全面から散在的に出土している。72, DP5は北西部の覆土上層から出土している。その他, 流れ込んだと考えられる縄文土器片8点(深鉢)が出土している。

所見 時期は, 出土土器から4世紀後葉に比定できる。



第46図 第593号住居跡・出土遺物実測図

第593号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
72	土師器	高坏	-	(1.1)	[13.6]	長石・石英	赤褐色	普通	脚部外面へう磨き 内面ハケ目	覆土上層	5%
73	土師器	甕	-	(2.7)	-	長石・石英	橙	不良	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5%未満

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP5	土玉	24	24	06	125	長石・石英	ヘラナデ 一方からの穿孔	覆土上層	

第 595 号住居跡 (第 47・48 図)

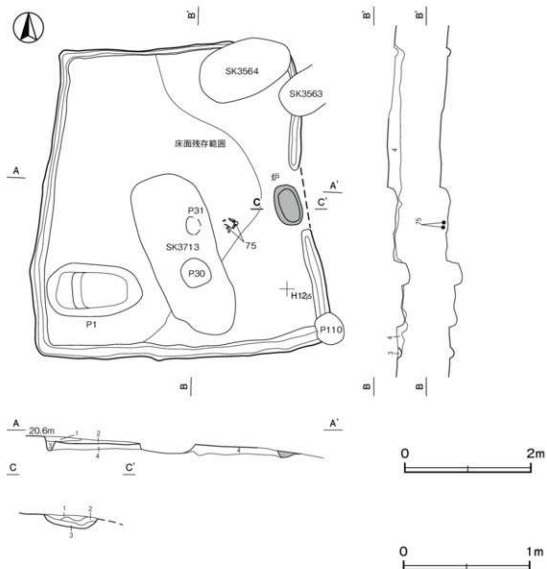
位置 調査区中央部の H 124 区、標高 20 m ほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第 108 号ピットを掘り込み、第 3563・3564・3713 号土坑、第 30・31・110 号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 東壁及び中央部から東部の床面まで削平されている。確認できた規模は、長軸が 4.94 m で、短軸は 4.70 m の方形で、主軸方向は N - 87° - E である。壁高は 8 cm で、直立している。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。壁下には幅 6 ~ 29 cm の壁溝が巡っている。貼床は確認面から 10 ~ 22 cm 掘り込み、ロームを主体とするにぶい黄褐色土を 6 ~ 22 cm 埋土して構築されている。

炉 東壁際に付設されている地床炉である。長径 65 cm、短径 40 cm の楕円形である。炉床は、床面を 22 cm ほど掘りくぼめられている。第 2 層が焼土層であることから上面が炉床面と考えられる。



第 47 図 第 595 号住居跡実測図

炉土層解説

- 1 濃い黄褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 3 濃い黄褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量
 2 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量

ピット 深さ68cmで、性格不明である。

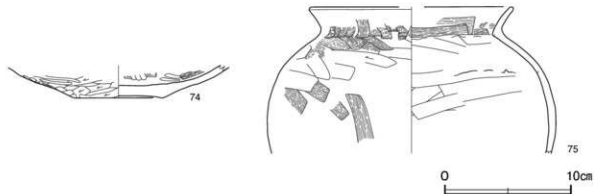
覆土 3層に分層できる。混入物が無く、均一な土質であることから自然堆積と考えられる。第4層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 褐色 濃い黄褐色ブロック少量 3 褐色 濃い黄褐色ブロック中量
 2 褐色 ローム粒子少量 4 濃い黄褐色 ロームブロック・黒褐色ブロック中量

遺物出土状況 土師器片32点(壺1、甕31)が全面から散在的に出土している。75は中央部の床面、74はP1覆土中からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土師器片3点(深鉢)、混入したと考えられる平安時代の土師器片1点(高台付椀)が出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉に比定できる。



第48図 第595号住居跡出土遺物実測図

第595号住居跡出土遺物観察表(第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
74	土師器	甕	-	(26)	(70)	長石・石英・雲母	濃い褐	普通	体部外面へう張り肌 一部へう張り 内面へう張り 一部へう張り	P1覆土中	10%
75	土師器	甕	[162]	(116)	-	長石・石英	濃い黄褐	普通	口縁部外・内面へう張り 体部外面へう張り 一部へう張り 口縁部内・内面へう張り 一部へう張り 口縁部外へう張り 一部へう張り 二次焼成によるガラス	床面	20%

第596号住居跡(第49～53図)

位置 調査区北西部のH11d5区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第184・200号溝に掘り込まれている。

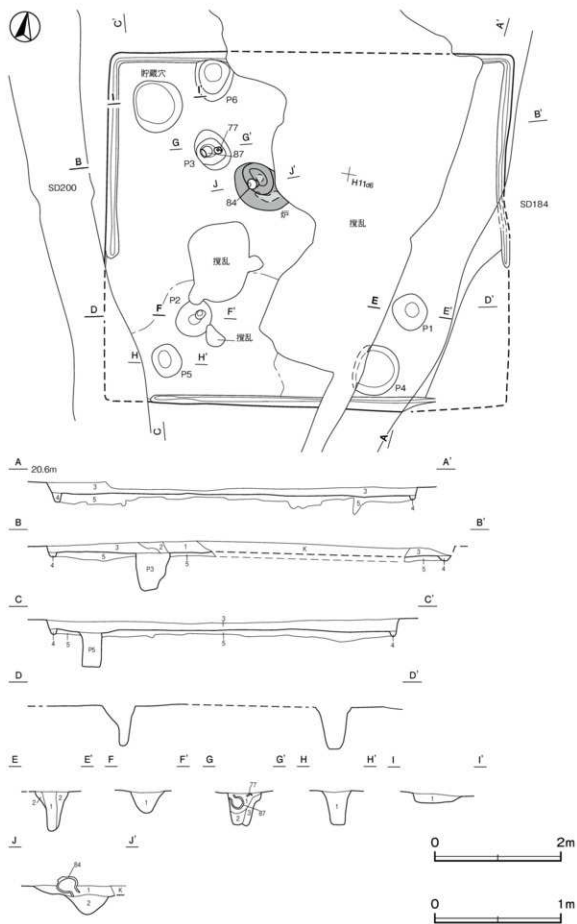
規模と形状 長軸6.35m、短軸5.58mの長方形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は8～17cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、南西部は踏み固められている。確認できた壁下には幅14～21cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から10～42cm掘り込み、ロームを主体とする褐色土を4～29cm埋土して構築されている。

炉 中央部やや北西寄りに付設されている地床炉である。長径96cm、短径67cmの楕円形である。炉床は、床面を46cmほど掘りくぼめられ、第1層から埋設土器が出土している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微 2 濃い黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量



第49图 第596号住居跡実測图(1)

ピット 6か所。P 1～P 3は深さ33～62cmで、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 4～P 6は深さ14～52cmで、性格不明である。

ピット1土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

ピット2土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

ピット3土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

3 褐色 ロームブロック微量（締まり強い）

2 暗褐色 ローム粒子微量

ピット5土層解説

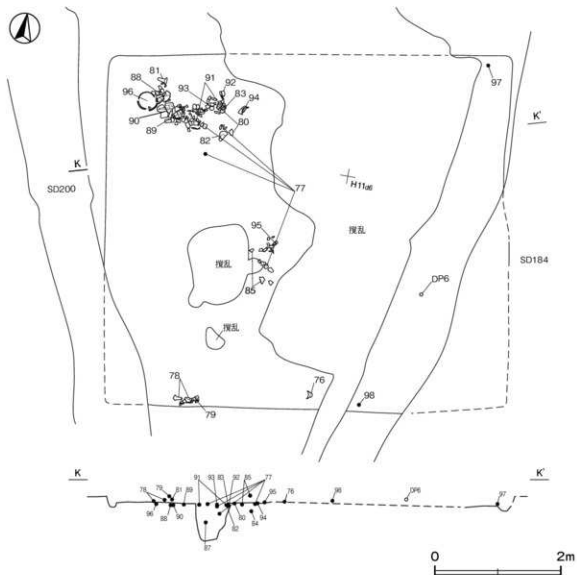
1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長径82cm、短径76cmの円形で、深さは14cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

覆土 4層に分層できる。竈や主柱穴から埋設土器が出土していることから埋め戻されていると考えられる。第5層は貼床の構築土である。



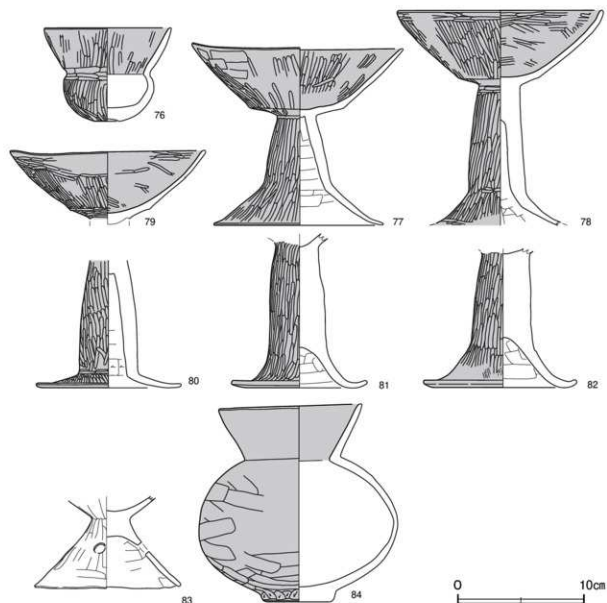
第50図 第596号住居跡実測図（2）

土層解説

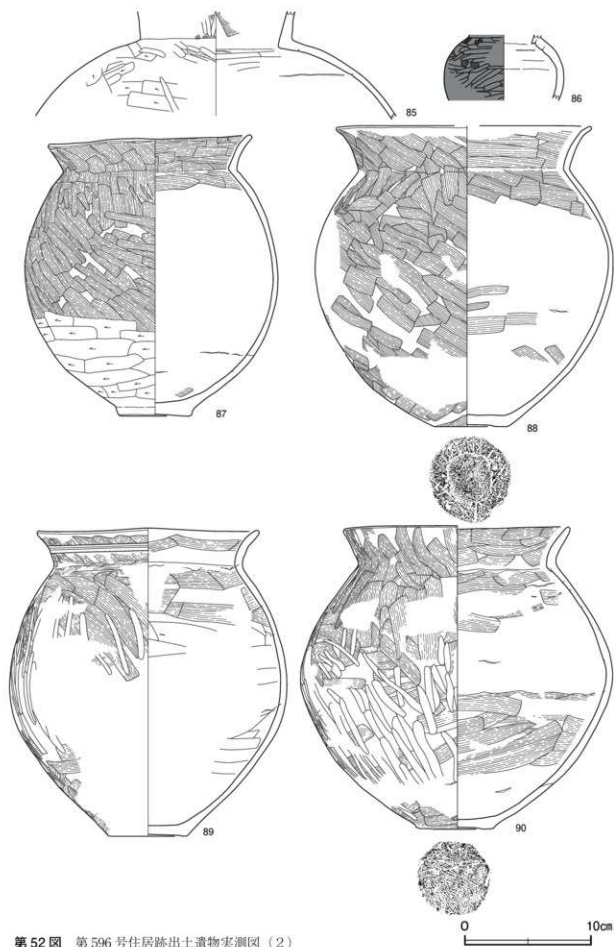
- | | | | |
|-------|-------------------|------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | 黒褐色ブロック中量、ローム粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック・黒褐色ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 249 点 (埴 5, 器台 1, 高坏 45, 壺 4, 甕 193, ミニチュア土器 1), 土製品 1 点 (管状土錘), 石器 1 点 (砥石), 礫 1 点が全面の覆土上層から床面にかけて出土し, その中でも北西部の床面から集中して出土している。また, 貼床の構築土中から土師器片 10 点 (甕) が出土している。78 は南壁際, 80・82・83・88～94・96 は北西コーナー部, 85・95 は中央部の床面から出土している。77 は中央部から北西部の床面及び P 3 覆土から分散した状態で出土している。84・87 は炉覆土中, P 3 の覆土中から逆位の状態でそれぞれ出土している。76 は南壁際, 97 は北東コーナー部の床面直上から出土している。81 は北西コーナー部, 98 は南壁際の覆土下層から出土している。79 は南壁際, DP 6 は東部の覆土上層から出土している。その他, 流れ込んだと考えられる縄文土器片 72 点 (深鉢), 石器 1 点 (剥片) が出土している。

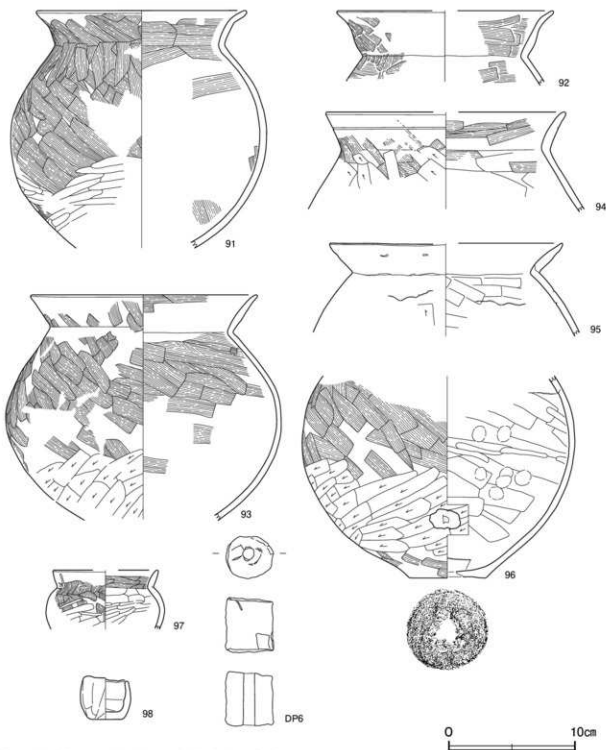
所見 時期は, 出土土器から 4 世紀後葉に比定できる。



第 51 図 第 596 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第52图 第596号住居跡出土遺物実測図(2)



第53図 第596号住居跡出土遺物実測図(3)

第596号住居跡出土遺物観察表(第51~53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
76	土師器	埴	10.1	7.4	2.1	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁部外・内面へう磨き・赤彩 二次焼結によるハシナ 胴部外面へうナデ 体部・底部外面へう磨き	床面直上	80% PL22
77	土師器	高坏	16.8	14.5	13.5	長石・石英・雲母	赤	普通	体部外面へうナデ後、へう磨き・赤彩 内面へう磨き・赤彩 二次焼結によるハシナ 胴部外面へう磨き 内面へうナデ・後ナデ	床面・P3 覆土上層	90% PL23
78	土師器	高坏	16.4	(17.3)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	体部外・内面へう磨き・赤彩 胴部外面へう磨き 内面へうナデ	床面	80% PL23

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
79	土師器	高坏	15.4	(5.7)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部・内面ヘラ磨き・赤彩 編織 二次焼成によるハジケ	覆土上層	40% PL23
80	土師器	高坏	-	(10.2)	11.6	長石・石英	赤	良好	脚部外面ヘラ磨き・赤彩 内面ヘラ割り・横ナデ	床面	30%
81	土師器	高坏	-	(12.2)	10.8	長石・石英・雲母	赤	普通	脚部外面ヘラ磨き・横ナデ・赤彩 内面ヘラ割り・横ナデ	覆土下層	50% PL23
82	土師器	高坏	-	(11.0)	12.2	長石・石英・雲母	赤	良好	脚部外面上ヘラ磨き 下手ハケ目後、ヘラ磨き・赤彩	床面	50%
83	土師器	高坏	-	(7.3)	11.6	長石・石英・雲母	赤	普通	坏部外面ヘラナデ 内面ナデ 脚部外面上ヘラ磨き 下手ヘラナデ 内面ヘラナデ 3孔	床面	60% PL23
84	土師器	壺	11.4	15.7	5.5	長石・石英	赤	普通	口縁部・内面赤彩 二次焼成によるハジケ 脚部外面ヘラナデ	炉覆土上層	100% PL24
85	土師器	壺	-	(8.4)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	口縁部ハケ目後、磨き 内面ハケ目 体部ハケ目後、ヘラ割り後、ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面	5%
86	土師器	壺	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母	黒	普通	体部外面ヘラ目後、ヘラ磨き 黒色地 内面ハケ目 編織	覆土中	30% PL24
87	土師器	壺	16.7	22.2	5.8	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	口縁部外・内面ハケ目 体部外面上ヘラナデ 下手ヘラ割り 保存着 内面ハケ目 保存着 編織 底部ヘラ割り	P3覆土上層	100% PL25
88	土師器	壺	[20.2]	23.8	5.8	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ後、ハケ目 体部外面ハケ内面ハケ目 編織 二次焼成によるハジケ	床面	60% PL25
89	土師器	壺	17.6	24.4	6.0	長石・石英	暗緑	普通	口縁部外・内面ハケ目後、磨き 体部外面ハケ目後、ヘラ磨き 保存着 内面ハケ目ヘラナデ 編織 赤彩	床面	50% PL26
90	土師器	壺	18.0	24.0	6.2	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ後、ハケ目 体部外面上ヘラナデ 下手ハケ目後、ヘラ磨き 保存着 内面ハケ目 磨き 編織	床面	80% PL26
91	土師器	壺	16.7	(18.8)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ後、ハケ目 体部外面上ヘラナデ 下手ハケ目後、ヘラ磨き 保存着 内面ハケ目 二次焼成によるハジケ	床面	80% PL26
92	土師器	壺	[17.0]	(5.9)	-	長石・石英	暗緑	普通	口縁部外面横ナデ後、ハケ目 内面ハケ目 赤彩・内面ハケ目	床面	5%未漢
93	土師器	壺	18.0	(17.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ後、ハケ目 体部外面上ヘラナデ 下手ハケ目後、ヘラ割り 内面ハケ目 二次焼成によるハジケ	床面	50%
94	土師器	壺	[19.0]	(7.7)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	口縁部外面ヘラ目後、磨き 内面横ナデ後、ハケ目 体部外面ハケ目後、ヘラ割り 内面ハケ目ヘラ割り	床面	5%
95	土師器	壺	[18.4]	(7.4)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ割り 編織 内面ヘラナデ	床面	5%
96	土師器	壺	-	(16.0)	6.2	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	体部外面上ヘラナデ 下手ハケ目後、ヘラ磨き 内面ハケ目後、ヘラナデ後、磨き 編織 底部地 赤彩	床面	40%
97	土師器	壺	[8.4]	(4.7)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	口縁部外面横ナデ後、ハケ目 編織 内面ハケ目後、横ナデ 体部外面ハケ目後、ヘラナデ 内面ヘラナデ	床面直上	20%
98	土師器	<small>(二子ノアノ土層)</small>	3.6	3.4	2.7	長石・石英	黄緑	良好	体部外・内面ナデ 底部ナデ	覆土下層	100%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP-6	管状土師	4.3	3.8	0.9	71.4	長石・石英	ヘラナデ・ナデ 一方向による穿孔	覆土上層	PL31

第 597 号住居跡 (第 54～57 図)

位置 調査区北部の H 11b0 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 613 号住居跡、第 3572・3621・3622 号土坑を掘り込み、第 3560 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 7.68 m、短軸 7.12 m の方で、主軸方向は N - 10° - W である。壁高は 13～20 cm で、直立している。

床 平坦な貼床で、中央部から南東部にかけて踏み固められている。西部では被熱により赤変硬化している部分がある。壁下には幅 12～25 cm の壁溝が巡っている。貼床は確認面から 11～33 cm 掘り込み、ロームを含む褐色土、暗褐色土を 2～15 cm 埋土して構築されている。掘方は、中央部で浅く、北西・北東コーナー部及び南部が一段深く掘り込まれている。

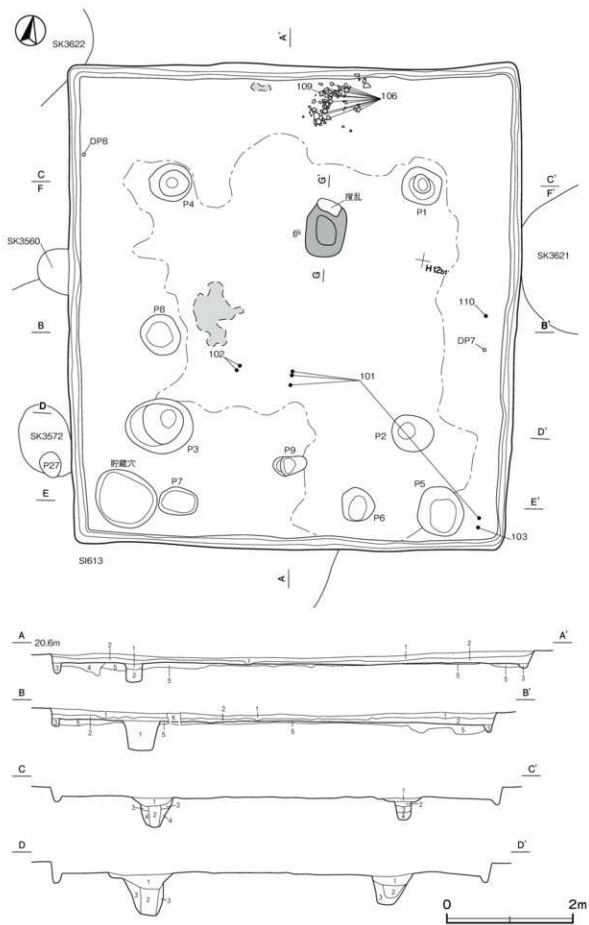
炉 中央部やや北寄りにつ設されている地床炉である。長径 91 cm、短径 62 cm の楕円形である。炉床は、床面を 9 cm ほど掘りくぼめられ、覆土は 2 層に分層できる。

炉土層解説

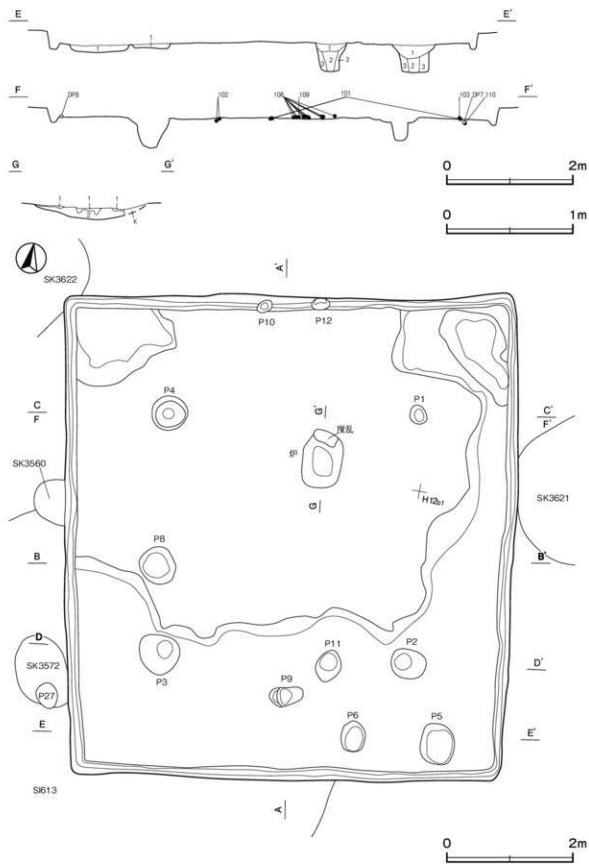
1 褐色 ロームブロック中量

2 明赤褐色 焼土ブロック多量、黒褐色粒子少量(餅まり強い)

ピット 12 か所。P 1～P 4 は深さ 37～65 cm で、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 5・P 8 は深さ 43・46 cm で、位置や規模から補助柱穴の可能性がある。P 6 は深さ 45 cm で、位置や硬化面の広がりから出入口施設に伴うピットと考えられる。P 7・P 9 は深さ 8 cm・29 cm で、性格不明である。P 10～P 12 は床



第54图 第597号住居跡实测图(1)



第55图 第597号住居跡実測图(2)

下で確認したもので、深さは20～38cmである。

ピット1土層解説

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 3 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子微量(締まり強い) | 4 暗褐色 ローム粒子微量(3層より暗い) |

ピット2土層解説

- | | |
|------------------------|---------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 3 黄褐色 黒褐色粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | |

ピット3土層解説

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 褐色 ローム粒子微量 | |

ピット4土層解説

- | | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量(締まり強い) | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック少量 |

ピット5土層解説

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量 | |

ピット6土層解説

- | | |
|---------------|--------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 3 褐色 ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | |

ピット7土層解説

- | | |
|---------------|--|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量 | |
|---------------|--|

ピット8土層解説

- | | |
|------------------------|--|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量(締まり強い) | |
|------------------------|--|

ピット9土層解説

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 2 暗褐色 ローム粒子多量 |
|---------------|---------------|

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長径102cm、短径85cmの楕円形で、深さは12cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------|--|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量 | |
|---------------|--|

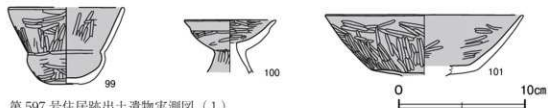
覆土 3層に分層できる。第2層にロームブロックや焼土が含まれていることから埋め戻されている。第4・5層は貼床の構築土である。

土層解説

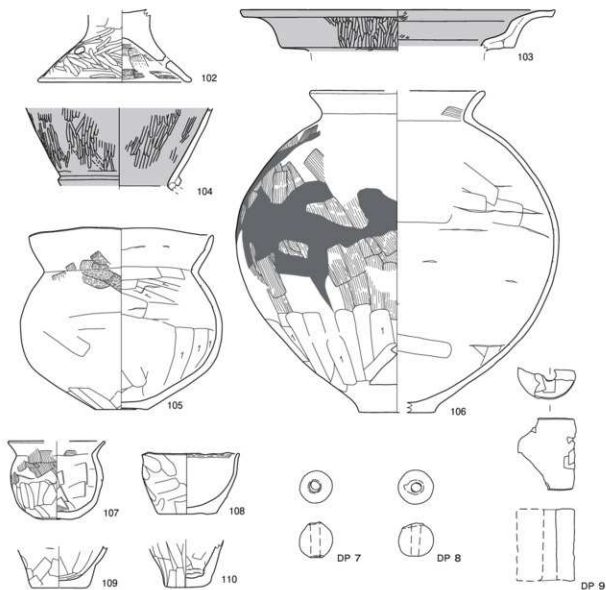
- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック多量、暗褐色ブロック中量(締まり強い) |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | |
| 3 褐色 ロームブロック少量(締まり弱い) | 5 暗褐色 ロームブロック少量(締まり強い) |

遺物出土状況 土師器片611点(器台20、埴39、高坏20、壺81、甕448、ミニチュア土器3)、土製品3点(土玉2、管状土錘1)、礫1点が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また、貼床の構築土中から土師器片22点(埴2、壺9、甕11)が出土している。101は中央部及び南東コーナー部にかけて分散した状態で、102は中央部、103は南東コーナー部、106・109は北部壁際、DP8は北西部壁際、110・DP7は東部壁際の床面から出土している。105は北東部、108は北西部の覆土上層から出土している。99は北西部、DP9は南東部の覆土中から出土している。100は貯蔵穴覆土中及び北西部の貼床の構築土中から分散した状態で出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片292点(深鉢)、石器3点(剥片)が出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉に比定できる。覆土から焼土が検出されたこと、床面に被熱痕跡がみられることから焼失住居と考えられる。



第56図 第597号住居跡出土遺物実測図(1)



第57図 第597号住居跡出土遺物実測図(2)



第597号住居跡出土遺物観察表(第56・57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
99	土師器	埴	[92]	61	22	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁・体部外・内面ヘラ磨き・赤彩 二次被熱によるハジケ 底部ヘラ磨き	覆土中	50% PL22
100	土師器	器台	72	(41)	-	長石・石英	赤	普通	交差外面磨ナゲ・ヘラ磨き・赤彩 二次被熱によるハジケ 内面ヘラ磨き・赤彩 二次被熱によるハジケ	台座穴土・壁土	40% PL23
101	土師器	高坏	156	(49)	-	長石・石英	赤	普通	坏底外・内面ヘラ磨き・赤彩 二次被熱によるハジケ	床面	30%
102	土師器	高坏	-	(55)	122	長石・石英	明黄褐	良好	胴部外面ヘラナゲ後、ヘラ磨き 内面ハケ目 3孔	床面	40% PL23
103	土師器	壺	[25.0]	(3.3)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面ヘラ磨き・赤彩 二次被熱によるハジケ 胴部外面ヘラナゲ・赤彩	床面	5%未満 PL21
104	土師器	壺	-	(65)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外面ハケ目後、ヘラ磨き・赤彩 内面ヘラ磨き・赤彩 胴部外面に変色	覆土中	20%
105	土師器	甕	146	14.3	4.2	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ハケ目後、磨ナゲ 内面磨ナゲ 輪轆痕 体部外面上半ハケ目 下半ヘラ磨り 内面ヘラ磨り 輪轆痕	覆土上層	50% PL26
106	土師器	甕	[14.0]	25.6	[6.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外面磨ナゲ後、ハケ目 内面磨ナゲ後、ハケ目 体部外面上半ハケ目 下半ヘラ磨り 内面磨ナゲ 胴部内面ヘラナゲ 輪轆痕 底部ヘラナゲ	床面	50% PL26
107	土師器	甕	[7.2]	6.2	2.5	長石・石英	明黄褐	普通	口縁部外・内面磨ナゲ後、ハケ目 体部外面上半ハケ目 輪轆痕 下半ヘラナゲ 内面ヘラナゲ・ハケ目	床面	40%
108	土師器	ミニチュア土器	7.7	4.9	4.6	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラナゲ 内面ハケ目 二次被熱によるハジケ 底部ヘラナゲ	覆土上層	70% PL27

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
109	土師器	ミニチュア土器	-	(3.3)	4.4	長石・石英	にぶ・濃橙	普通	体部外・内面ヘラナデ 底部ナデ	床面	60%
110	土師器	ミニチュア土器	-	(3.8)	3.4	長石・石英・雲母	にぶ・濃橙	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ 輪巻痕 底部ナデ	床面	90%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 7	土玉	28	26	07	146	長石・石英	ナデ 一方両からの穿孔	床面	PL31
DP 8	土玉	26	28	08	188	長石・石英	ナデ 一方両からの穿孔	床面	
DP 9	管状土器	57	[46]	[09]	[47.3]	長石・石英	ナデ 二次焼熟によるハジケ	覆土中	

第 598 号住居跡 (第 58・59 図)

位置 調査区中央西部の I 11a9 区、標高 21 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 586 号住居、第 3527・3528 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第 586 号住居と入り状に重複しており、床面まで掘り込まれている。長軸 5.63 m、短軸 5.40 m の方形で、主軸方向は N-28°-W である。壁高は 19~31 cm で、直立している。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。南部は被熱により赤変硬化している部分がある。壁下には幅 12~27 cm の壁溝が巡っている。貼床は確認面から 22~36 cm 掘り込み、ロームを主体とする褐色土を 4~7 cm 埋土して構築されている。

炉 中央部やや北寄りに付設されている地床炉である。長径 77 cm、短径 72 cm の円形である。炉床は床面を 7 cm ほど掘りくぼめられ、覆土は単一層である。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量 (締まり強い)

ピット 5 か所。P 1~P 5 は深さ 9~53 cm で、性格不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径 85 cm、短径 79 cm の楕円形で、深さは 60 cm である。底面は平坦で、壁は底面から中位にかけて直立し、中位からは外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 (締まり弱い) 2 褐色 ローム粒子微量 (締まり強い)

3 暗褐色 ローム粒子微量 (締まり弱い)

覆土 3 層に分層できる。第 1 層に焼土が含まれていることから埋め戻されている。第 4 層は貼床の構築土である。

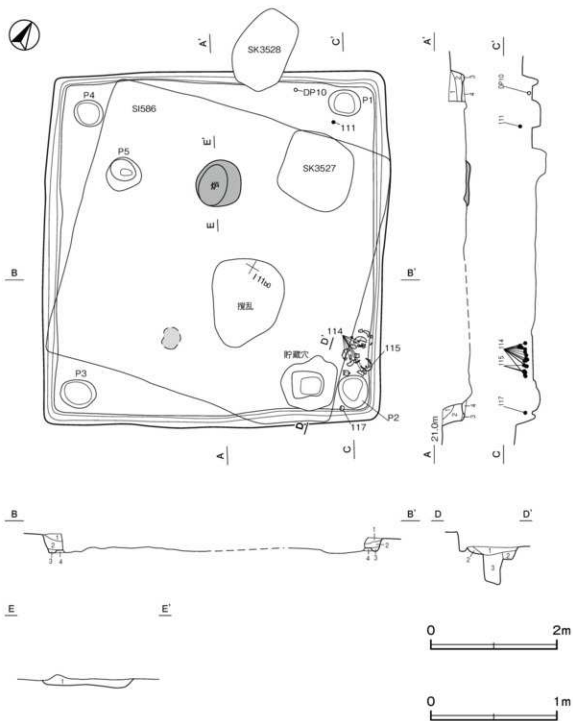
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・黒褐色粒子微量 (締まり弱い) 3 褐色 暗褐色ブロック微量

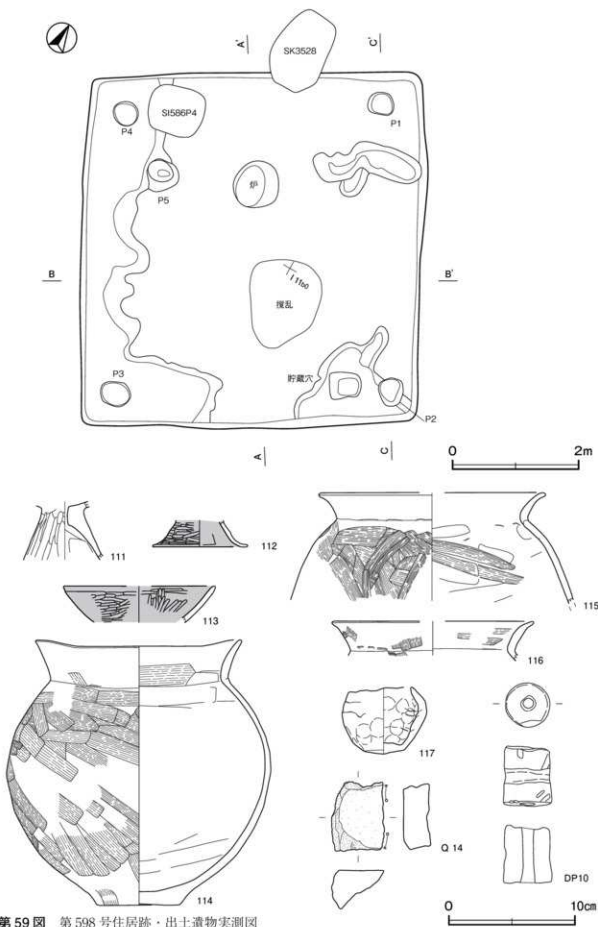
2 褐色 ローム粒子微量 4 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片 132 点 (器台 1、高坏 19、甕 111、ミニチュア土器 1)、土製品 1 点 (管状土錘)、石器 2 点 (磨石、砥石) が出土しており、その多くは南東部で出土している。DP10 は北東部の覆土下層から出土している。114・115・117 は南東コーナー部の覆土中層からそれぞれ出土している。111・113 は北東部の覆土上層、116 は南東部の覆土中層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 9 点 (深鉢) が出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀後半に比定できる。覆土から焼土が検出されたことや床面に被熱痕跡がみられることから焼失住居と考えられる。



第58图 第598号住居跡実測図



第59图 第598号住居跡・出土遺物実測図

第598号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考	
111	土師器	器台	-	(48)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	会館内面へラナギ	黒色処理 器部外・内面へラナゲ	覆土上層	30%	
112	土師器	器台	-	(21)	[76]	長石・石英・雲母	赤	普通	脚部外面へラナギ	赤彩 内面へラナゲ	覆土上層	10%	
113	土師器	高坏	120	(29)	-	長石・石英	赤	良好	耳部外面横ナゲ	へラナギ	赤彩 内面へラナギ	覆土上層	5%
114	土師器	甕	163	205	[66]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナゲ	日乾 横ナゲ	内面ハケ目 裏ナゲ	覆土中層	70% PL26
115	土師器	甕	[180]	(85)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナゲ	日乾 横ナゲ	内面ハケ目 裏ナゲ	覆土中層	20% PL26
116	土師器	甕	[160]	(27)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	不良	口縁部外・内面ハケ目	横ナゲ		覆土中	5%
117	土師器	ミニチュア土器	5.2	5.3	3.2	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面上横ナゲ	下半部横ナゲ	内面横ナゲ	覆土中層	100% PL27

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考	
DP10	管状土師	48	3.8	0.8	76.4	長石・石英・雲母	へラナゲ・ナゲ	側面に窪み	覆土下層	PL31

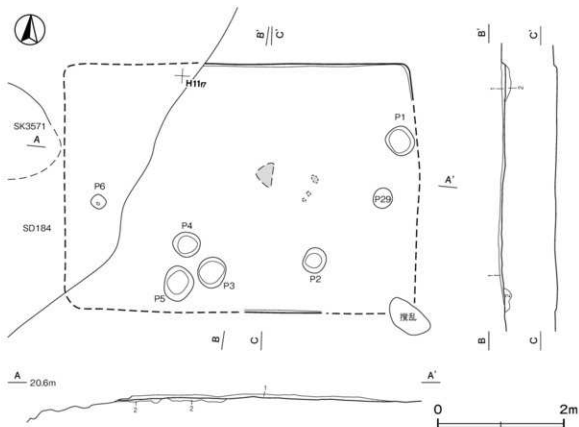
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
Q 14	磁石	(52)	(41)	(20)	94.8	花崗岩	使用面1面		覆土中	

第599号住居跡（第60・61図）

位置 調査区北西部のH 117区。標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第184号溝、第29号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 残存状況が悪く、壁は北壁、南壁の一部が遺存するのみである。掘方から推定される規模は、長



第60図 第599号住居跡実測図

軸 554 mm, 短軸 391 mm の長方形である。壁高は 6 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。中央部では被熱により赤変硬化している部分がある。貼床は確認面から 9 ~ 16 cm 掘り込み、ロームを主体とする褐色土を 2 ~ 12 cm 埋土して構築されている。

ピット 6 か所。P 1 ~ P 6 は深さ 12 ~ 24 cm で、性格不明である。

覆土 単一層である。残存状況が不良のため判断としないが、ローム粒子・焼土が含まれていることから埋め戻された可能性がある。第 2 層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量（締まり強い） 2 黒褐色 ロームブロック・黒色粒子少量（締まり強い）

遺物出土状況 土師器片 22 点（埴 2、甕 20）が全面から散在的に出土している。118・119 は南東部の床面、南西部の覆土中からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 7 点（深鉢、混入したと考えられる須恵器片 1 点（甕））が出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀後葉に比定できる。覆土から焼土が検出されたことや床面に被熱痕跡がみられることから焼失住居の可能性がある。



第 61 図 第 599 号住居跡出土遺物実測図

第 599 号住居跡出土遺物観察表（第 61 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
118	土師器	器台	-	(22)	-	長石・石英	にふい黄褐色	普通	唇部外縁ハケ目後、ヘウ磨き	内面ハケ目後、ヘナナデ	床面	5%未満
119	土師器	甕	-	(24)	-	長石・石英	にふい黄褐色	普通	口縁部外面横ナデ	内面横ナデ後、ハケ目	覆土中	5%未満

第 605 号住居跡（第 62 ~ 64 図）

位置 調査区中央北部の H 124 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 48 号ピットを掘り込み、第 202 号溝、第 3597・3610・3611 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.28 m, 短軸 4.32 m の長方形で、主軸方向は N - 9° - W である。壁高は 12 ~ 22 cm で、直立している。

床 平坦な貼床で、南東部は踏み固められている。壁下には幅 12 ~ 20 cm の壁溝が巡っている。貼床は確認面から 25 ~ 44 cm 掘り込み、ロームを主体とする褐色土を 6 ~ 18 cm 埋土して構築されている。

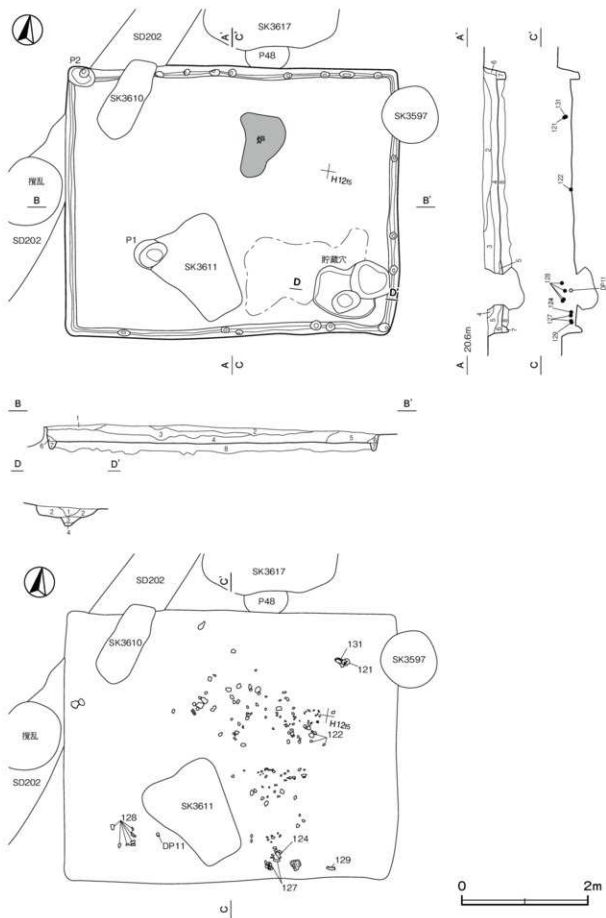
炉 北部に付設されている地床炉である。長径 100 cm, 短径 59 cm の不整楕円形である。炉床は、被熱により赤変硬化している。

ピット 2 か所。P 1・P 2 は深さ 15 cm・35 cm で、性格不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長軸 115 cm, 短軸 85 cm の隅丸長方形で、深さは 31 cm である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化粒子少量 3 黒褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック中量 4 褐色 にふい黄褐色粒少量



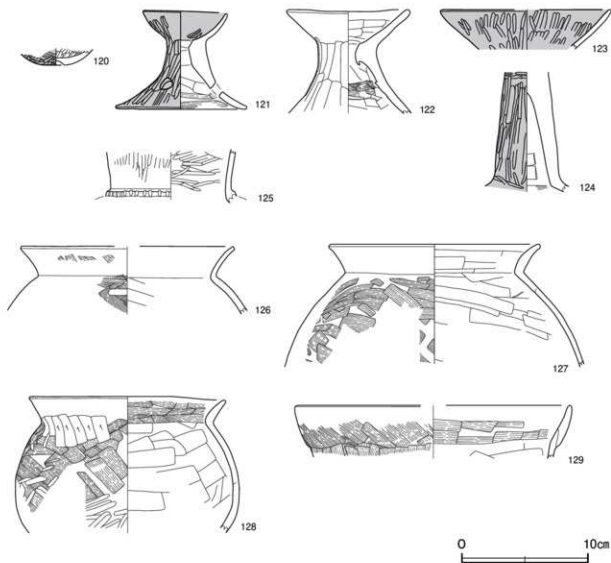
第62図 第605号住居跡実測図

覆土 7層に分層できる。第1～6層にロームブロック、第4層で焼土、炭化物が含まれていることから理め戻されている。第8層は貼床の構築土である。

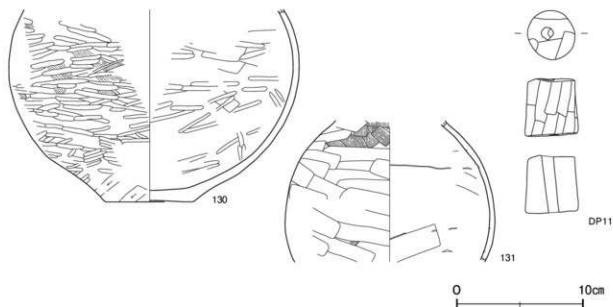
土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|---------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 6 濃い青褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 濃い青褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量 | 8 褐色 | ロームブロック・黒褐色ブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片1769点（埴13、器台2、高坏14、壺19、甕1721）、土製品1点（管状土錘）、礎3点が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また、貼床の構築土中から土師器片3点（甕）が出土している。土師器片の出土数が他の住居跡に比べ多いが、これは細片が多いためで個体数はほぼ同数と考えられる。122は東部の床面から出土している。124・127・129は南東部壁際の床面直上から出土している。121・131は北東部、DP11は南西部の覆土下層から出土している。128は南西部の覆土上層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片149点（深鉢）、石器1点（石鏃）、金属製品1点（鉄滓）が出土している。
所見 時期は、出土土器から4世紀後葉に比定できる。覆土から焼土や炭化物が検出されたことから焼失住居と考えられる。



第63図 第605号住居跡出土遺物実測図（1）



第64図 第605号住居跡出土遺物実測図(2)

第605号住居跡出土遺物観察表(第63・64図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
120	土師器	埴	-	(13)	2.0	長石・石英・雲母	赤	普通	体部外面へう磨き・赤彩 内面へう磨き 底部へう磨き	床面	5%
121	土師器	器台	6.7	7.8	10.4	長石・石英・雲母	明黄褐色	普通	口縁外・内面へう磨き・赤彩 腹部内面へう磨き・赤彩 乳孔 内面土手へうナデ 下半へうナデ 口ナデ 口ナデ・縁ナデ	覆土下層	90% PL23
122	土師器	器台	9.8	(8.2)	-	長石・石英・雲母	明黄褐色	良好	受器外面横ナデ 内面横ナデ後 へうナデ 腹部外面へうナデ 内面土手へうナデ 下半へうナデ へうナデ	床面	80% PL23
123	土師器	高坏	[13.6]	(3.2)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面へう磨き・赤彩	床面直上	20%
124	土師器	高坏	-	(9.5)	-	長石・石英	赤	普通	脚部外面へう磨き・赤彩 内面へうナデ・ハケ目	床面直上	40%
125	土師器	甕	-	(4.2)	-	長石・石英	黄褐色	普通	腹部外面へう磨き キザミを有する発帯 内面へう磨き	床面	5% PL24
126	土師器	甕	[16.8]	(5.4)	-	長石・石英	灰黄褐色	普通	口縁部外面ハケ目後・ヨコナデ 僅有帯 内面ヨコナデ 体部外面へう目後 へうナデ 内面へうナデ	床面	5%
127	土師器	甕	16.8	(9.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	良好	口縁部外面横ナデ 内面横ナデ後 へうナデ 体部外面ハケ目 内面へうナデ 輪横痕	床面直上	30%
128	土師器	甕	15.6	(10.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面横ナデ後 ハケ目 体部土手へう目後 へうナデ 下半へう目後 へう磨き 内面へうナデ 輪横痕	覆土上層	30% PL26
129	土師器	甕	[22.0]	(4.2)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 口ナデ 体部外面ハケ目 内面へうナデ	床面直上	5%
130	土師器	甕	-	(15.2)	7.0	長石・石英	明黄褐色	良好	体部外面ハケ目後 へう磨き 内面へうナデ後 へう磨き	床面	30%
131	土師器	甕	-	(11.1)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面ハケ目後 へうナデ 内面へうナデ 輪横痕	覆土下層	30%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP11	管状土師	4.6	4.2	0.9	103.9	長石・石英	へうナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	PL31

第608号住居跡(第65～67図)

位置 調査区北東部のH12e8区、標高20mほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第3630・3704・3705号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.63m、短軸3.38mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は18～35cmで、直立している。

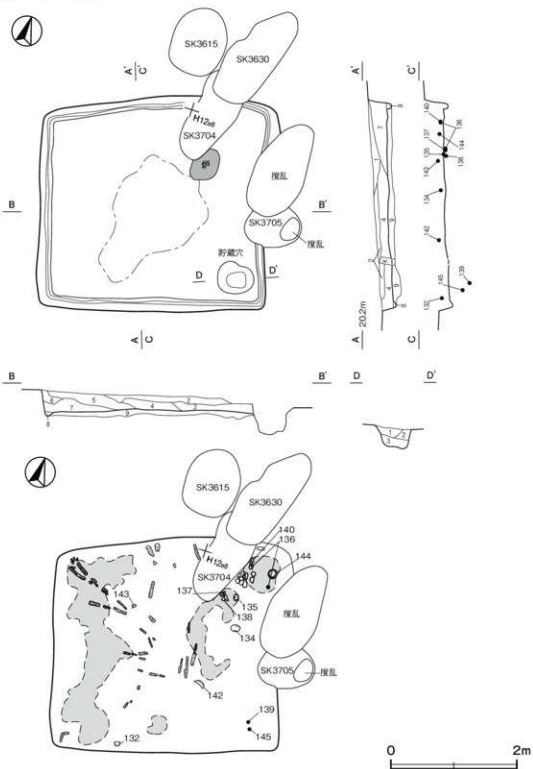
床 平坦な貼床で、中央部は踏み固められている。壁下には幅13～23cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から21～37cm掘り込み、ロームを主体とするにぶい黄褐色土を5～13cm埋土して構築されている。

炉 北東部に付設されている地床炉である。長径58cm、短径42cmの楕円形である。炉床は、被熱により赤変硬化している。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径57cm、短径50cmの楕円形で、深さは30cmである。底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量 3 暗褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック少量



第65図 第608号住居跡実測図

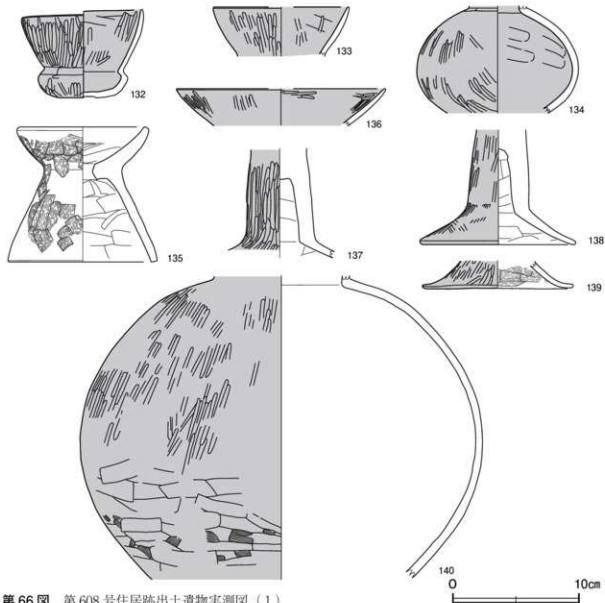
覆土 8層に分層できる。焼土、炭化物が含まれていることから埋め戻されている。第9層は貼床の構築土である。

土層解説

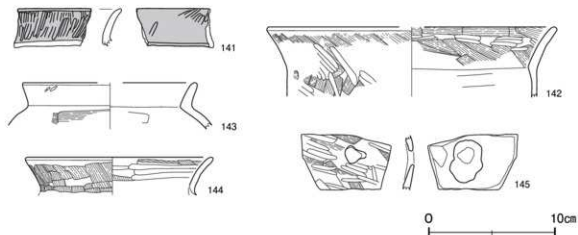
- | | | | |
|-------|------------------------|---------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量 | 9 近い黄褐色 | ロームブロック・黒褐色ブロック中量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物多量、ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片281点（埴5、器台6、高坏39、甕181、壺50）、碟1点が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また、貼床の構築土中から土師器片3点（甕）が出土している。135～138は北東部の床面から出土している。139・145は貯蔵穴の覆土中から出土している。134・140・144は北東部、142・143は中央部の覆土下層から出土している。132は南西部壁際の覆土上層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片25点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉に比定できる。覆土から焼土や炭化物が検出されたことから焼失住居と考えられる。



第66図 第608号住居跡出土遺物実測図(1)



第67図 第608号住居跡出土遺物実測図(2)

第608号住居跡出土遺物観察表(第66・67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
132	土師器	埴	9.6	6.9	4.0	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁部外縁へう磨き・赤彩 内面ヘラナゲ後、へう磨き 器部外縁ナゲ・赤彩 器部外縁へう磨き・赤彩	覆土上層	100% PL22
133	土師器	埴	[10.8]	(3.9)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外縁へう磨き・赤彩 内面ヘラナゲ後、へう磨き・赤彩	覆土中	5%
134	土師器	埴	-	(8.5)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	体部外縁横ナゲ・ヘラ磨き・赤彩 内面ヘラナゲ ナゲ・赤彩 二次焼成によるハジケ	覆土下層	30% PL22
135	土師器	器台	10.4	10.6	[11.8]	長石・石英	にふい黄緑	普通	切割台・念部外面ハケ目 縦付着 内面ヘラナゲ 脚部外面ハケ目 縦付着 内面ヘラナゲ	床面	60% PL23
136	土師器	高坏	[16.6]	(2.9)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	坏部外・内面へう磨き・赤彩 二次焼成によるハジケ	床面	5%
137	土師器	高坏	-	(8.7)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	脚部外縁へう磨き・赤彩 二次焼成によるハジケ 内面ヘラナゲ	床面	40%
138	土師器	高坏	-	(9.1)	[12.3]	長石・石英・雲母	赤	普通	脚部外縁へう磨き・赤彩 二次焼成によるハジケ 内面ヘラナゲ	床面	40%
139	土師器	高坏	-	(2.2)	[12.0]	長石・石英・雲母	赤	普通	脚部外縁へう磨き・赤彩 内面ハケ目・横ナゲ	貯蔵穴覆土中	5%
140	土師器	壺	-	(24.2)	-	長石・石英	赤	普通	体部外面上半へう磨き・赤彩 下半ハケ目後、 ヘラナゲ 内面二次焼成によるハジケ	覆土下層	30%
141	土師器	壺	-	(3.0)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面へう磨き・赤彩	覆土中	5%未満
142	土師器	甕	[23.0]	(5.5)	-	長石・石英・雲母	にふい黄緑	普通	口縁部外・内面ハケ目後、へう磨き 体部外面 ハケ目後、へう磨き 内面ヘラナゲ	覆土下層	5%未満
143	土師器	甕	[13.6]	(3.7)	-	長石・石英	明黄緑	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面ハケ目 内面ヘラナゲ	覆土下層	5%未満
144	土師器	甕	14.9	(3.0)	-	長石・石英・雲母	にふい黄緑	普通	口縁部外縁横ナゲ後、ハケ目 内面横ナゲ後、ハケ目後、ヘラナゲ	覆土下層	5%
145	土師器	甕	-	(4.3)	-	長石・石英	にふい黄緑	普通	体部外縁ハケ目後、へう磨き 内面ヘラナゲ 底縁、穿孔	貯蔵穴覆土中	5%未満

第610号住居跡(第68・69図)

位置 調査区北部のH126区、標高21mほどの台地平坦部に位置しており、北東部は調査区域外に延びている。

重複関係 第46号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.21m、短軸5.27mの長方形で、主軸方向はN-24°-Wである。壁高は18~28cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、中央部から北部にかけて踏み固められている。壁下には幅15~35cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から26~44cm掘り込み、ロームを主体とする褐色土を3~25cm埋土して構築されている。

炉 中央部に付設されている地床炉である。長径130cm、短径105cmの不整楕円形である。炉床は、被熱により赤変硬化している。

ピット 8か所。P6は深さ27cmで、位置や硬化面の広がりから出入口施設に伴うピットと考えられる。P

1～P5・P7・P8は深さ6～40cmで、性格不明である。

ビット6土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量

覆土 6層に分層できる。第2～4層に焼土、炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。第7～9層は貼床の構築土である。

土層解説

1 褐 色 黒色粒子少量

2 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

3 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量(轉まり弱い)

4 暗 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量

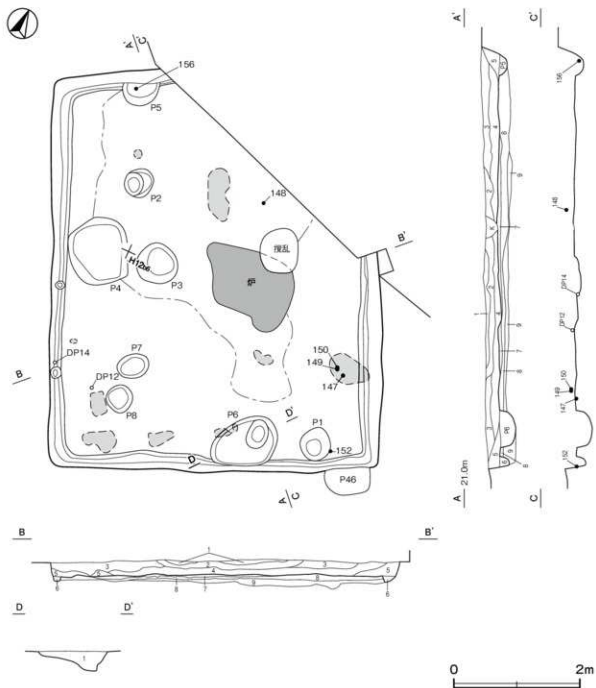
5 褐 色 ローム粒子少量

6 褐 色 ローム粒子中量

7 暗 褐 色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量、ロームブロック少量

8 褐 色 暗褐色ブロック中量、ロームブロック少量

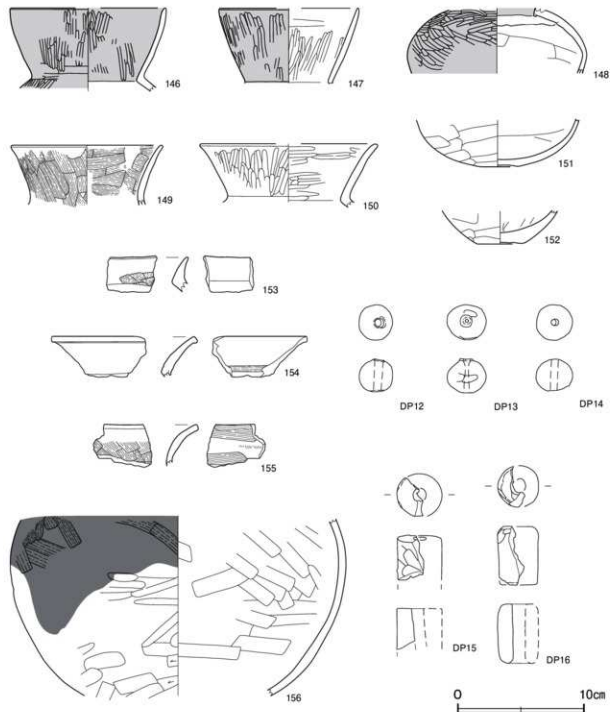
9 褐 色 ロームブロック中量、暗褐色ブロック少量



第68図 第610号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 211 点 (埴 11, 器台 3, 高坏 42, 甕 149, 壺 6), 土製品 5 点 (土玉 3, 管状土錘 2) が全面の覆土上層から床面ににかけて出土している。また、貼床の構築土中から土師器片 22 点 (埴 2, 壺 9, 甕 11) が出土している。147・152 は南東部, DP12・DP14 は南西部の床面から出土している。156 は P 5 の覆土中から出土している。148 は中央部北寄り, 149・150 は南東部の覆土下層から出土している。その他, 流れ込んだと考えられる縄文土器片 66 点 (深鉢), 石器 2 点 (剥片) が出土している。

所見 時期は, 出土土器から 4 世紀後葉に比定できる。覆土から焼土や炭化粒子が検出されたことから焼失住居と考えられる。



第 69 図 第 610 号住居跡出土遺物実測図

第610号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
146	土師器	埴	[124]	(66)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面へう磨き・赤彩 体部外面へう磨き・赤彩 内面ヘラナゲ 二次被熱によるハジケ	覆土中	5%
147	土師器	埴	[110]	(60)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外面へう磨き・赤彩 内面ヘラナゲ へう磨き	床面	20% PL22
148	土師器	埴	-	(52)	-	長石・石英	赤	普通	体部外面へう磨き・赤彩 内面ヘラナゲ 編織器 器部内面赤彩	覆土下層	10%
149	土師器	壺	120	(47)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ後、ハケ目	覆土下層	5%
150	土師器	壺	[138]	(51)	-	長石・石英	明黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ後、へう磨き	覆土下層	5%
151	土師器	壺	-	(38)	3.2	長石・石英	暗褐色	普通	体部外・内面ヘラナゲ 二次被熱によるハジケ	P1 覆土中	10%
152	土師器	壺	-	(26)	3.6	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外・内面ヘラナゲ	床面	5%
153	土師器	甕	-	(28)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面横ナゲ後、ハケ目 探行着 内面横ナゲ	覆土中	5%未満
154	土師器	甕	-	(31)	-	長石・石英	橙	良好	口縁部外面横ナゲ 内面横ナゲ後、ハケ目	覆土中	5%未満
155	土師器	甕	-	(33)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ハケ目後、横ナゲ 内面ハケ目	覆土上層	5%未満
156	土師器	甕	-	(143)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面上半ハケ目後、へう磨き 探行着 下半へう磨り 内面ヘラナゲ	P5 覆土中	30%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP12	土玉	26	28	0.6	191	長石・石英	ナゲ 一方両からの穿孔	床面	PL31
DP13	土玉	27	31	0.6	229	長石・石英	ナゲ 二方向からの穿孔	覆土中	
DP14	土玉	25	29	0.6	195	長石・石英	ナゲ 一方両からの穿孔	床面	PL31
DP15	管状土罎	[36]	[36]	[1.0]	[195]	長石・石英	ナゲ 右側面欠損	覆土中	
DP16	管状土罎	47	[34]	[1.0]	[207]	長石・石英	ナゲ 右側面欠損	覆土中	

第612号住居跡 (第70・71図)

位置 調査区北部のG122区、標高20mほどの台地平坦部に位置しており、北部は調査区域外に延びている。

重複関係 第606号住居、第40・47号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 床面が削平されているため、壁溝と掘方が遺存するのみである。北部が調査区域外に延びているため、規模は、東西軸が7.11mで、南北軸は4.59mしか確認できなかった。形状は、方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN-12°-Wである。

床 確認できた壁下に幅10～20cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から3～36cm掘り込み、ロームを主体とする褐色土を埋土して構築されている。掘方は、西壁、南壁際が一段深く掘り込まれている。

ピット 5か所。P1・P2は深さ50cm・60cmで、位置や規模から主柱穴と考えられる。P3～P5は深さ15～63cmで、性格不明である。

ピット1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 (締まり強い)
- 2 褐色 ロームブロック少量 (締まり強い)

ピット2土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・黒褐色粒子少量 (粘性強い)
- 3 黄褐色 ロームブロック中量

ピット5土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 (締まり強い)
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径88cm、短径75cmの楕円形で、深さは47cmである。底面は平坦で、壁は直立している。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量 (締まり強い)
- 4 褐色 暗褐色粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック中量、暗褐色粒子少量 (締まり強い)

覆土 第1層は壁溝の覆土、第2層は貼床の構築土である。

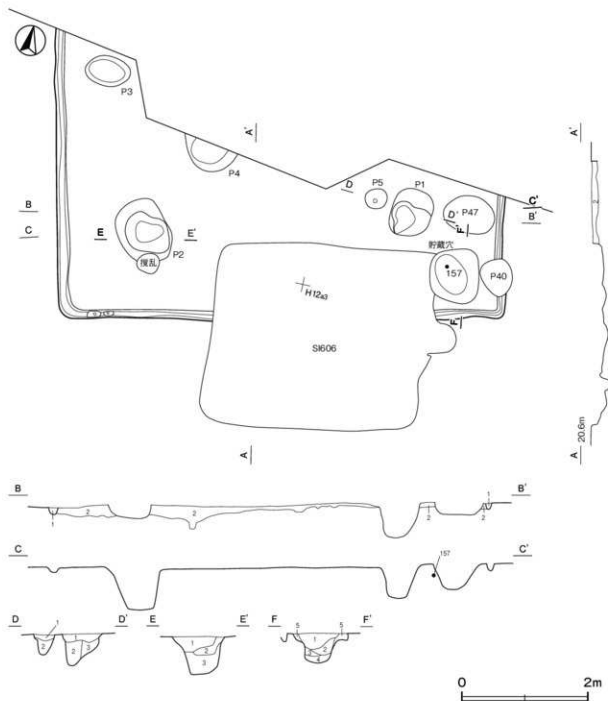
土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子中量

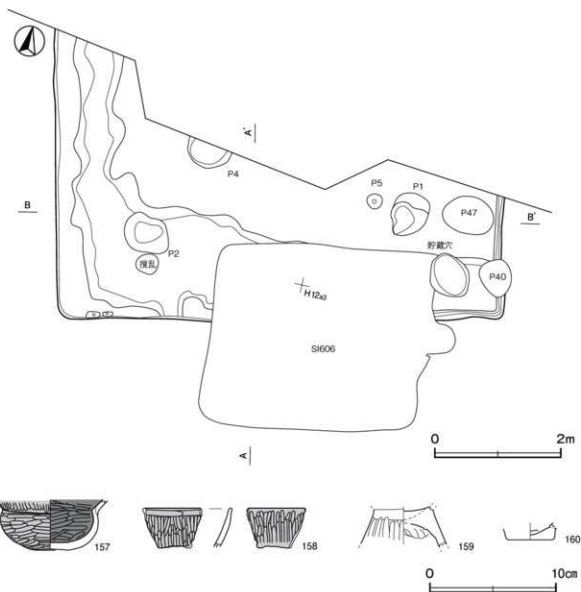
2 褐 色 ロームブロック多量、炭化粒子微量（粘まり強い）

遺物出土状況 土師器片 11 点(埴 2, 甕 8, ミニチュア土器 1)がピット及び貯蔵穴の覆土中から出土している。また、貼床の構築土中から土師器片 12 点(埴 5, 高坏 1, 甕 6)が出土している。157・160 は貯蔵穴覆土中から出土している。159 は北東部の貼床の構築土中から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 14 点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀後葉に比定できる。



第 70 図 第 612 号住居跡実測図



第71図 第612号住居跡・出土遺物実測図

第612号住居跡出土遺物観察表(第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
157	土師器	埴	-	(40)	3.0	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁・体部外面へラ磨き・赤彩 輪摩痕 二次焼成によるハジケ 内面へラ磨き・黒色処理 二次焼成によるハジケ	貯蔵穴覆土中	60% PL22
158	土師器	埴	-	(32)	-	長石・石英	赤褐	普通	口縁部外・内面へラ磨き・赤彩	検出面	5%未測
159	土師器	付付埴	-	(33)	-	長石・石英	橙	普通	脚部外面微ナラ後、ヘラナゲ 内面ヘラナゲ	掘方	5%
160	土師器	〔ニチユツ〕 テ土器	-	(13)	3.6	長石・石英	明黄褐	普通	体部外面ナゲ 内面ヘラナゲ 輪摩痕	貯蔵穴覆土中	30%

表4 古墳時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模		床面	構造	内部施設				土質	主な出土遺物	時期	備考	
				長径×短径 (m)	幅高 (cm)			土柱	長入口	ピット	竈					貯蔵穴
564	H11a	方形	N-29°-W	[405] × [398]	6~18	貼床	全周	-	1	-	1	-	人為	土師器 土製品	4 C 後葉	本跡→SK3679
584	I11a8	〔長方形〕	N-22°-W	4.31 × 3.89	17~21	貼床	一部	-	1	10	1	1	自然	土師器	4 C 後葉	F33→本跡→SE62 SK3540, P21

番号	位置	平面形	主軸方向	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁端	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(内→外)
								土壇	土口	ピット	伊	石	石				
586	H1150	方形	N-15°-W	4.69×4.58	13~22	貼床	全周	-	-	3	-	1	人為	土師器、土製品	4C後葉	S338→*組→SK25	
590	H114	[方形、 長方形]	N-15°-W	5.52×(2.18)	3~5	貼床	-	-	1	6	1	-	自然	土師器	4C後葉	*組→SD184、SK359	
592	H1160	長方形	N-12°-W	4.93×4.06	6~12	貼床	-	2	1	3	1	1	人為	土師器	4C後葉	本跡→SK2506	
593	H1155	[方形、 長方形]	N-34°-W	3.49×(1.27)	6~8	貼床	-	-	-	4	-	-	自然	土師器、土製品	4C後葉		
595	H124	方形	N-87°-E	4.94×4.70	8	貼床	全周	-	-	1	1	-	自然	土師器	4C後葉	P38→*組→SK300、 S54、S711、P30・S1・ S19	
596	H1165	[長方形]	N-8°-W	6.35×5.58	8~17	貼床	[全周]	3	-	3	1	1	人為	土師器、土製品	4C後葉	本跡→SD184・200	
597	H1150	方形	N-10°-W	7.68×7.12	13~20	貼床	全周	4	1	7	1	1	人為	土師器、土製品	4C後葉	S502、S512、S521、 S522→*組→SK350	
598	H1149	方形	N-28°-W	5.63×5.40	19~31	貼床	全周	-	-	5	1	1	人為	土師器、土製品	4C後葉	本跡→S2586、 SK3527・3528	
599	H1117	[長方形]	-	[5.54]×3.91	6	貼床	-	-	-	6	-	-	人為	土師器	4C後葉	本跡→SD184、P29	
605	H1291	長方形	N-9°-W	5.28×4.32	12~22	貼床	全周	-	-	2	1	1	人為	土師器、土製品	4C後葉	P38→*組→SD184、 SK3507・3510・S511	
608	H1268	方形	N-17°-W	3.63×3.38	18~35	貼床	全周	-	-	-	1	1	人為	土師器	4C後葉	本跡→SK3630・ S704・S705	
610	H1266	[長方形]	N-24°-W	6.21×5.27	18~28	貼床	[全周]	-	1	7	1	-	人為	土師器、土製品	4C後葉	本跡→P46	
612	G132	[方形、 長方形]	N-12°-W	7.11×(4.59)	-	貼床	[全周]	2	-	3	-	1	-	土師器	4C後葉	*組→S568、P40・G	

3 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は竪穴住居跡 19 軒、土坑 1 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第 557 号住居跡 (第 72 図)

位置 調査区南西部の J 11a6 区、標高 20 m ほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第 3725 号土坑、第 111 号ピットを掘り込んでいる。

規模と形状 平成 8 年度の調査と合わせた規模は、長軸 3.69 m、短軸 2.88 m の長方形と推定される。主軸方向は N-112°-E である。壁高は 30cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、北部は踏み固められている。

竪 東壁の中央部に付設されている。規模は火床面から煙道まで 120cm で、燃焼部幅は 33cm である。袖部は、左袖部で床面を深さ 20cm ほど掘りくぼめた部分に第 7 層を埋土して、両袖部ともロームを主体とする第 4~6 層を積み上げて構築されている。火床面は被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に 105cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竪土層解説

1	褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物粒子微量	5	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化物粒子微量
2	褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子微量	6	褐色	ロームブロック多量、炭化物中量、焼土粒子少量
3	明赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子微量 (締まり強い)	7	褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量
4	明赤褐色	焼土ブロック・ロームブロック多量 (締まり強い)			

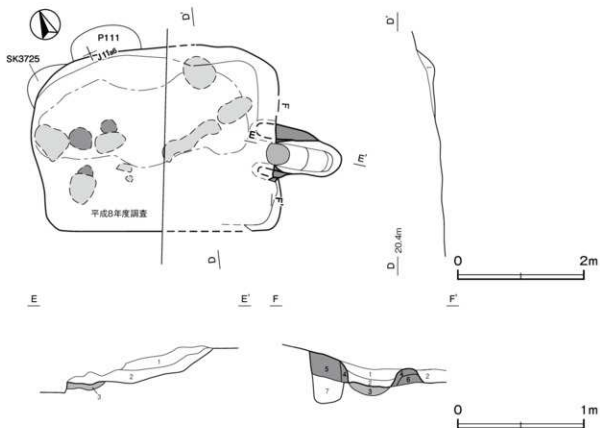
覆土 2層に分層できる。第 2 層に焼土と炭化物が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子微量	2	濃い青褐色	炭化物中量
---	-----	---------	---	-------	-------

遺物出土状況 土師器片 9 点 (坏 2、寛 7)、炉壁 2 点が全面から散在的に出土しており、いずれも、細片のため図示できない。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 12 点 (深鉢) が出土している。

所見 時期は、出土土器がわずかながら詳細は不明であるが、住居の形状などから平安時代と考えられる。



第72図 第557号住居跡実測図

第562号住居跡 (第73～75図)

位置 調査区西部のI 11c8区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第584号住居跡を掘り込み、第3538号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.64m、短軸3.49mの方形で、主軸方向はN-102°-Eである。壁高は17～20cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、中央部は踏み固められている。貼床は確認面から20～30cm掘り込み、ロームを主体とするにぶい黄褐色土を4～8cm埋土して構築されている。

竈 東壁の南部に付設されている。右袖は、攪乱を受け、遺存していなかった。規模は焚口部から煙道まで113cmである。袖部は、ロームを主体とする構築土を積み上げて構築されている。火床部は12～17cm掘りくぼめて第4・5層を埋土している。火床面は被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に28cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 にぶい黄褐色	ローム粒子・焼土粒子多量 (締まり強い)	4 褐色	焼土ブロック多量
2 褐色	ローム粒子中量 (締まり弱い)	5 褐色	ロームブロック多量
3 暗褐色	ローム粒子中量		

ピット 6か所。P2～P5は深さ14～29cmで、位置や規模から支柱穴と考えられる。P1・P6は深さ10cm・14cmで、位置から補助柱穴の可能性はある。

ピット1土層解説

1 褐色 ローム粒子多量

ピット2土層解説

1 褐色 ローム粒子微量

ピット3土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

ピット4土層解説

1 褐色 ローム粒子少量

ピット5土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量

ピット6土層解説

1 褐色 ロームブロック中量, にぶい黄褐色ブロック少量

2 黄褐色 にぶい黄褐色ブロック少量

2 にぶい黄褐色 ローム粒子中量

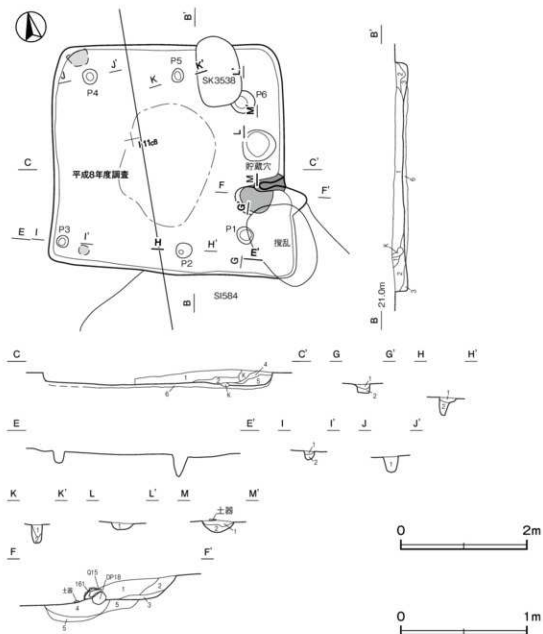
2 褐色 ローム粒子多量

2 褐色 ロームブロック多量

貯蔵穴 竈の北部に位置している。長径52cm, 短径49cmの円形で、深さは19cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 にぶい黄褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 2 褐色 暗褐色粒子微量(締まり弱い)



第73図 第562号住居跡実測図

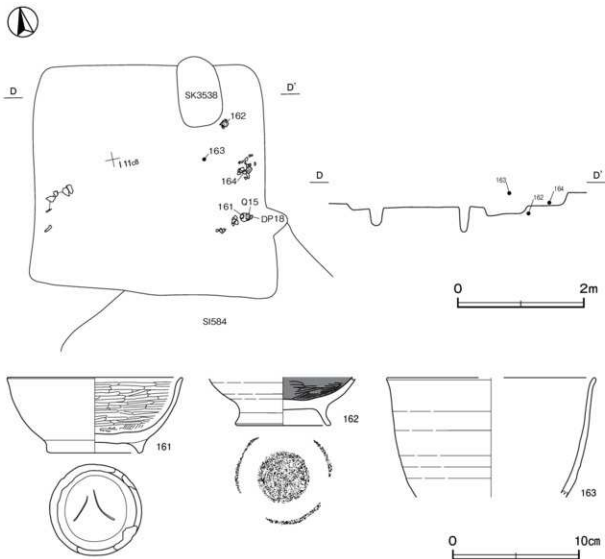
覆土 5層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第6層は貼床の構築土である。

土層解説

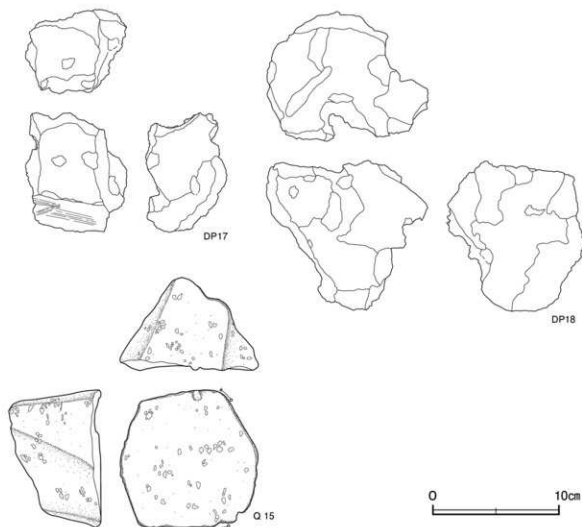
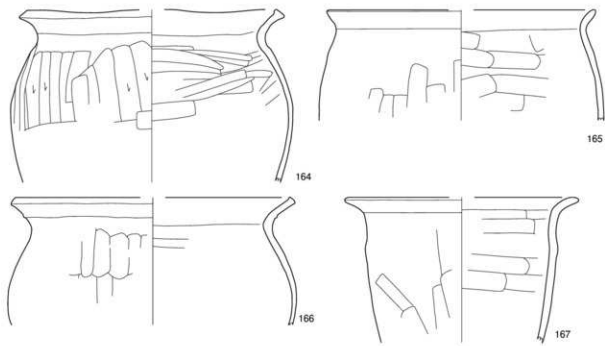
- | | | | |
|-------|-------------------------|---------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量（締まり弱い） | 5 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量（締まり弱い） |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量（締まり弱い） | 6 濃い黄褐色 | ロームブロック・暗褐色ブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量（締まり弱い） | | |
| 4 褐色 | 暗褐色粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 209 点（坏5、高台付椀3、鉢1、壺200）、石器 1 点（石皿）、炉壁 2 点、鉄滓 1 点（71.8 g）が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。161・Q15・DP18 は竈の火床面で重なった状態で出土しており、支脚として転用されたと考えられる。DP17 は貯蔵穴の覆土上層、164 は東部の床面及び貯蔵穴の覆土上層から分散した状態で出土している。162・163 は P 6、東部の覆土上層からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 12 点（深鉢）、古墳時代の土師器片 8 点（埴1、高坏6、壺1）が出土している。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第74図 第562号住居跡・出土遺物実測図



第75图 第562号住居迹出土遗物实测图

第562号住居跡出土遺物観察表 (第74・75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
161	土師器	高台付瓶	13.8	5.8	-	長石・石英	明焼	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 二次焼熱によるハジケ 底部回転ヘラ切り 高台磨り付け		竈火床面	90% 転用支脚 PL28
162	土師器	高台付瓶	-	(3.9)	[7.6]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理 底辺回転ヘラ切り 高台磨り付け		P6 覆土上層	30%
163	土師器	鉢	[16.6]	(9.5)	-	長石・石英・雲母	明黄陶	普通	体部外面ロクロナデ 内面二次焼熱によるハジケ		覆土上層	5% PL29
164	土師器	甕	[21.0]	(13.7)	-	長石・石英	黒焼	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ		床面・貯蔵火覆土上層	30%
165	土師器	甕	[21.0]	(8.8)	-	長石・石英	にひ・黄橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ		覆土上層	5%
166	土師器	甕	[22.6]	(10.1)	-	長石・石英	にひ・黄橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ 二次焼熱によるハジケ		覆土上層	10%
167	土師器	甕	[18.6]	(11.5)	-	長石・石英	にひ・黄橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ		竈覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 15	石皿	10.9	10.9	7.3	365.7	軽石	磨り使用面1面	竈火床面	転用支脚

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	粘着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ						
DP17	伊瑯 (製鏡伊)	9.5	8.0	6.5	324.7	1	なし	内面上下及び上面が黒色ガラス質に浮化 胎部は全面が破面で外面は剥離面となる 胎土は砂質でスチの混入が認められる	貯蔵穴 覆土上層	
DP18	伊瑯 (製鏡伊)	11.9	12.8	10.3	882.8	1	なし	転用支脚 内面が黒色ガラス質に浮化 胎部は4面が破面で外面は剥離面となる 胎土は砂質でスチの混入が認められる	竈火床面	

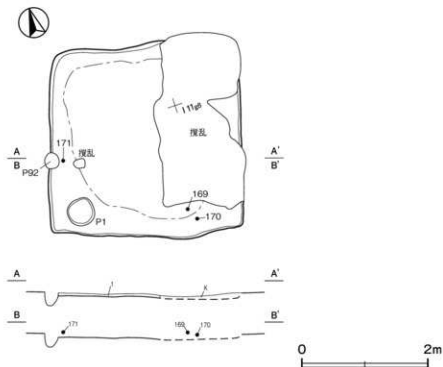
第581号住居跡 (第76・77図)

位置 調査区南西部のI 11g7区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第92号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 東半部は掘乱を受けているが、遺存している部分からみて、長軸3.09m、短軸3.04mの方形で、主軸方向はN-19°-Eである。壁高は2~4cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。



第76図 第581号住居跡実測図

ピット 深さ6cmで、性格不明である。

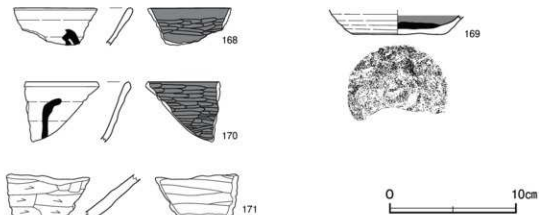
覆土 単一層である。混入物が無く、均一な土質であることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 灰黄褐色 ロームブロック・炭化粒子微量（細まり弱い）

遺物出土状況 土師器片24点（坏11、高台付椀1、甕11、ミニチュア土器1）、鉄滓5点（19.7g）が全面の覆土上層から床面直上にかけて散在的に出土している。170は南東部壁際の床面直上から出土している。169は南東部壁際、171は西部壁際の覆土上層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片4点（深鉢）、土師器片1点（埴）が出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第77図 第581号住居跡出土遺物実測図

第581号住居跡出土遺物観察表（第77図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
168	土師器	坏	-	(2.9)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 体部外面に黒書「□」	覆土上層	5% PL27
169	土師器	坏	-	(3.9)	7.0	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	良好	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 体部外面に黒書「□」	覆土上層	10% PL27
170	土師器	高台付椀	-	(4.7)	-	長石・石英・雲母	明黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 体部外面に黒書「□」	床面直上	5%未満 PL28
171	土師器	甕	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	覆土上層	5%

第582号住居跡（第78～80図）

位置 調査区南西部のI119区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3698号土坑を掘り込み、第99～103号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.05m、短軸3.68mの長方形で、主軸方向はN-91°-Eである。壁高は19～24cmで、直立している。

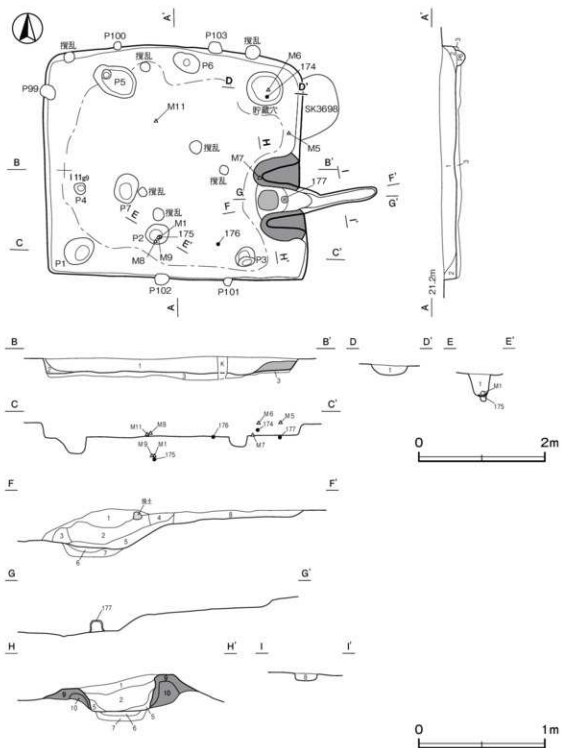
床 平坦な貼床で、壁際を除いて踏み固められている。貼床は確認面から24～37cm掘り込み、ロームを主体とする褐色土を4～12cm埋土して構築されている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道まで193cmで、燃焼部幅は44cmである。袖部は、ロームを主体とする第9・10層を積み上げて構築されている。火床部は10cmほど掘りく

ほめて第6・7層を埋土している。火床面は被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に120cm掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

埋土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量（締まり弱い） |
| 2 明褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量（締まり弱い） | 7 褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量（締まり弱い） |
| 3 褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量（締まり弱い） | 8 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量（締まり弱い） |
| 4 に深い黄褐色 | ローム粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 5 に深い黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量（締まり弱い） | 10 に深い黄褐色 | ロームブロック多量、白色砂粒中量、焼土ブロック微量（締まり強い） |



第78図 第582号住居跡実測図

ピット 7か所。P1～P7は深さ12～52cmで、性格不明である。

ピット2土層解説

1 灰黄褐色 ローム粒子少量

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径56cm、短径52cmの円形で、深さは15cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 に灰黄褐色 ローム粒子少量

覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第3層は貼床の構築土である。

土層解説

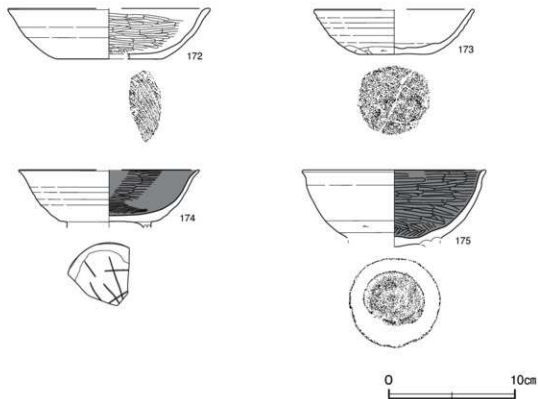
1 黒褐色 ロームブロック中量

3 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

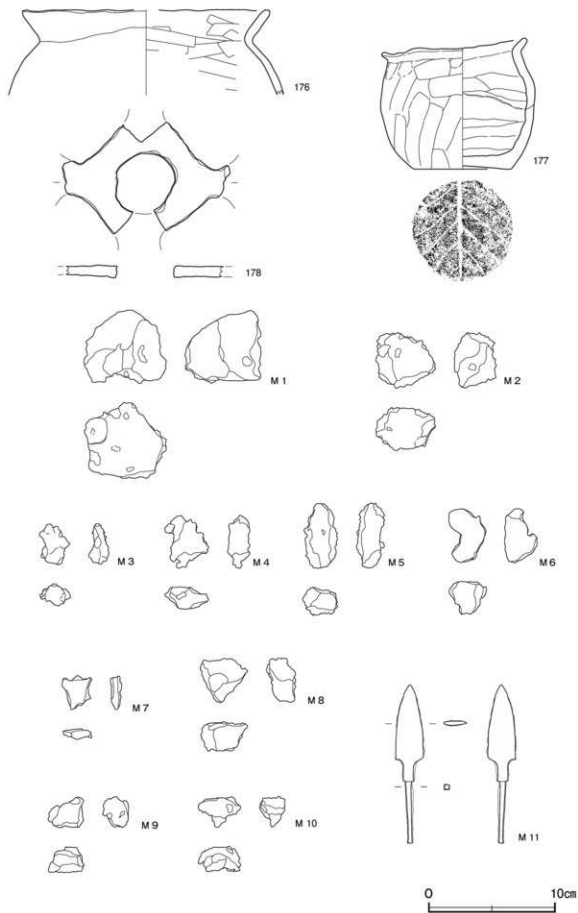
2 に灰黄褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片189点（坏29、高台付碗8、壺1、甕150、甗1）、金属製品1点（鉄鎌）、炉底塊1点（257.5g）、炉内滓1点（76.7g）、鉄塊系遺物4点（111.9g）、碗形鍛冶滓4点（58.9g）、鉄滓1点（4.2g）が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また、貼床の構築土中から土師器片1点（甕）が出土している。177は竈の火床面から逆位で出土しており、支脚として転用されたと考えられる。M7は竈左袖部、172は竈の覆土上層から出土している。176は南部、M11は中央部北寄りの床面から出土している。175・M1はP2の底面から出土している。173は南西部の覆土下層から出土している。178は南東部から南西部にかけて分散した状態で、174は北東部、M5は東部、M6は北東部の覆土上層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片14点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第79図 第582号住居跡出土遺物実測図（1）



第80图 第582号住居跡出土遺物実測図(2)

第582号住居跡出土物観察表 (第79・80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
172	土師器	埴	[160]	40	[84]	長石・石英	橙	良好	体部外面ロクロナデ 内面ヘラナデ 底部回転ヘラ切り	覆土上層	20% PL27
173	土師器	埴	[127]	35	54	長石・石英	にぶい黄橙	良好	体部外面ロクロナデ 下縁手持ヘラ削り 内面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り	覆土下層	40% PL27
174	土師器	高台付埴	[144]	(46)	[66]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラナデ 黒色処理 底部ヘラナデ 高台削り付け 底部外面に磨き下口	覆土上層	30%
175	土師器	高台付埴	144	(61)	-	長石・石英	黄橙	普通	体部外面ロクロナデ 下縁回転ヘラ削り 内面ヘラナデ 黒色処理 底部回転ヘラ切り	P 2底面	80% PL28
176	土師器	甕	[196]	(67)	-	長石・石英・雲母	明赤黄	普通	口首部沈没 口縁部外面磨きナデ 内面磨きナデ	床面	5%
177	土師器	甕	116	104	78	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ 輪痕 底部木炭痕	燻火床面	100%乾用支脚 PL29
178	土師器	甕	-	(09)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	多孔式	覆土上層	5%未測

番号	遺物名	計測値 (cm)		重量 (g)	細骨度	メタル炭	特徴	出土位置	備考	
		長さ	幅							厚さ
M1	伊吹埴	5.8	6.5	6.0	257.5	2	なし	上下面が破面 表面は暗赤褐色を呈し、木炭灰による塵みが生じている 表面には砂粒が付着	P 2底面	PL32
M2	伊内埴	4.4	4.7	3.4	76.7	1	なし	全体に酸化色が強い 表面は流動性が無く、発泡気味 表面に木炭痕	覆土上層	PL32
M3	鉄塊系遺物 (含鉄)	3.2	2.4	1.6	9.8	2	H (○)	小ぶりの不整形形 表面は錆跡が目立ち上下面が破面となる	P 2覆土中	
M4	鉄塊系遺物 (含鉄)	4.2	3.5	1.8	25.0	3	L (●)	不整形 厚さ1.8mm程で表面は酸化土砂と錆跡に覆われており、明瞭な破面は認められない	覆土中	
M5	鉄塊系遺物 (含鉄)	5.1	2.6	2.2	35.3	4	L (●)	不整形円形 表面は酸化土砂と錆跡に覆われており、左下手側部及び下面が破面となる	覆土上層	
M6	鉄塊系遺物 (含鉄)	4.3	2.9	2.6	41.8	4	特L (☆)	不整形円形 表面は酸化土砂と錆跡に覆われている 明瞭な破面は認められない	覆土上層	
M7	椀形銅治洋 (工具残片)	2.7	2.3	0.9	8.1	3	なし	不整形形 側部は全面が破面となる 表面には幅6mm程の工具痕、裏面には木炭痕が認められる	燻土下層	
M8	椀形銅治洋 (小)	3.5	3.7	2.3	24.8	1	なし	小ぶりの三角形 側部は全面が破面となる 表面は比較的平坦である	覆土下層	PL32
M9	椀形銅治洋 (小含鉄)	2.4	2.8	2.0	12.7	1	錆化 (△)	小ぶりの三角形 側部は全面が破面となる 含鉄は右側部に含まれる	P 2底面	
M10	椀形銅治洋 (細小・工具残片付・含鉄)	2.4	3.4	2.0	13.3	1	錆化 (△)	不整形 上面が破面となる表面には幅6mmほどの工具痕、表面には木炭痕が認められる	覆土上層	
M11	鉄製品 (銅治品) 鉄塊	1.26	2.4	0.5	17.4	1	錆化 (△)	側部が欠損 表面は錆跡が発達している 断面形状は先端部が変型、基部は方形である	床面	PL32

第587号住居跡 (第81図)

位置 調査区中央部のH110区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第602号住居跡を掘り込み、第3539号土坑、第79～81号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.46m、短軸2.63mの長方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は14～22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。北壁の一部を除いて、壁下には幅12～28cmの壁溝が巡っている。

貼床は確認面から20～28cm掘り込み、ロームを主体とするにぶい黄褐色土を4～15cm埋土して構築されている。

竈 東壁中央部に付設されている。袖部・火床面は確認できなかった。規模は焚口から煙道まで90cmである。煙道部は壁外に52cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

電土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・にぶい黄褐色ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 褐色 焼土ブロック・黒褐色ブロック少量、ローム粒子微量 (掃まり弱い)

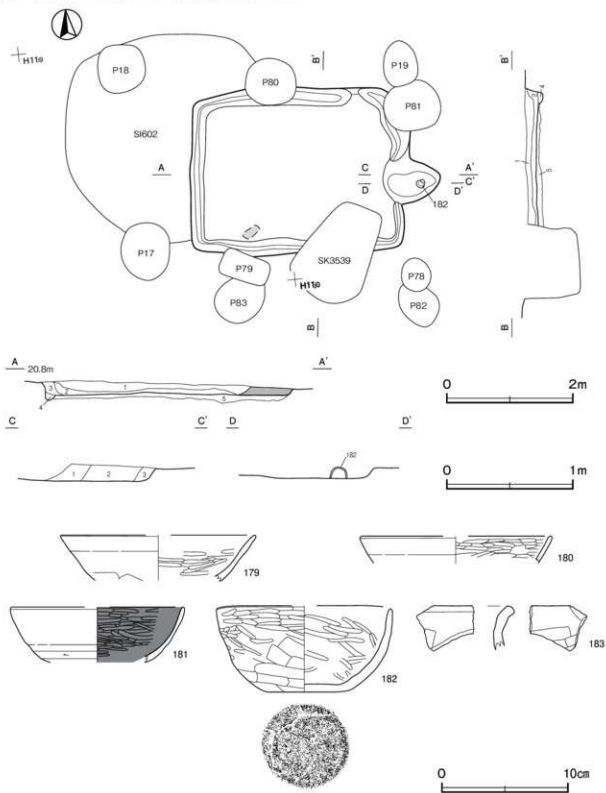
覆土 4層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第5層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 にぶい黄褐色 ロームブロック・暗褐色ブロック中量

遺物出土状況 土師器片37点(坏2, 高台付碗3, 碗1, 甕31)が全面から散在的に出土している。182は竈の火床部から逆位で出土しており、支脚として転用されたと考えられる。179・180は南東部及び竈から散在した状態で、181は北西部、183は南西部の覆土上層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片9点(深鉢), 古墳時代の土師器片5点(高坏)が出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉に比定できる。



第81図 第587号住居跡・出土遺物実測図

第587号住居跡出土遺物観察表 (第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考		
179	土師器	高台付瓶	[15.6]	(3.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部外面クロコナデ	下腕手持ちヘウ張り	内面ヘウ張り	覆土上層・覆瓦土	10%	
180	土師器	高台付瓶	[15.2]	(2.2)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面クロコナデ	内面ヘウ張り		覆土上層・覆瓦土	5%未満	
181	土師器	高台付瓶	[13.8]	(4.4)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面クロコナデ	下腕手持ちヘウ張り	内面ヘウ張り	茶色処理	覆土上層	5%
182	土師器	瓶	[14.0]	6.8	5.7	長石・石英	赤褐色	普通	口縁・体部外面上平ヘウ張り	内面ヘウ張り	下平ヘウ張り	燧火床部	80% 取用支脚 P1.28	
183	土師器	甕	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面ヘウナデ			覆土上層	5%未満	

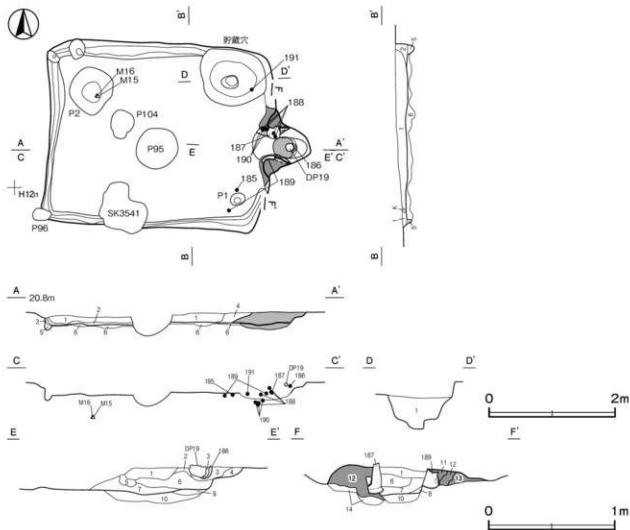
第588号住居跡 (第82～86図)

位置 調査区中央部のH12h1区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3541号土坑、第95・96・104号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.52m、短軸2.91mの長方形で、主軸方向はN-93°-Eである。壁高は6～18cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。壁下には幅7～27cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から12～29cm掘り込み、ロームを主体とする褐色土を2～15cm埋土して構築されている。



第82図 第588号住居跡実測図

竈 東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道まで92cmで、燃焼部幅は30cmである。袖部は左袖部で床面を8cmほど掘りくぼめた部分に第14層を埋土し、両袖部ともロームを主体とする第11～13層を積み上げて構築されている。火床部は10cmほど掘りくぼめて第9・10層を埋土している。火床面は被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に60cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗 褐 色 焼土ブロック・にぶい黄褐色ブロック少量 | 9 明赤 褐色 ローム粒子微量 (締まり強い) |
| 2 暗 褐 色 にぶい黄褐色ブロック・焼土粒子少量 | 10 褐 色 暗褐色ブロック中量、ローム粒子少量 (締まり強い) |
| 3 褐 色 焼土ブロック中量 | 11 にぶい黄褐色 白色砂質土多量 |
| 4 褐 色 焼土ブロック中量、黄褐色ブロック少量 (締まり強い) | 12 にぶい黄褐色 白色砂質土中量 |
| 5 にぶい黄褐色 焼土粒子少量 (締まり強い) | 13 暗 褐色 焼土ブロック・白色砂質土少量 |
| 6 褐 色 焼土ブロック少量 | 14 褐 色 黒褐色ブロック中量 |
| 7 暗 褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 (締まり強い) | |
| 8 暗 褐色 焼土ブロック・にぶい黄褐色ブロック中量 (締まり強い) | |

ピット 2か所。P1・P2は深さ44cm・75cmで、性格不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径100cm、短径88cmの楕円形で、深さは49cmである。底面は漏斗状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

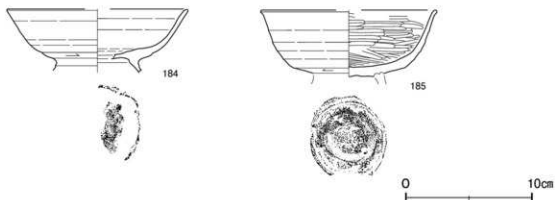
覆土 5層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第6層は貼床の構築土である。

土層解説

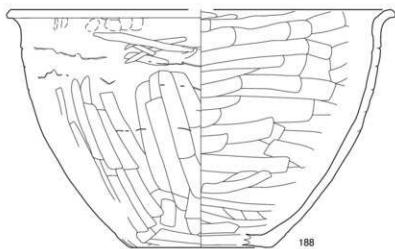
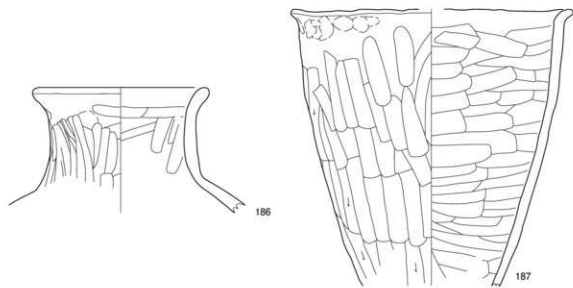
- | | |
|--------------------|--------------------------------|
| 1 黒 褐 色 ロームブロック少量 | 4 褐 灰 色 白色砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒 褐 色 ロームブロック中量 | 5 にぶい黄褐色 ローム粒子少量 |
| 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 | 6 褐 色 ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片121点(坏11,高台付碗7,高坏13,壺1,甕88,手捏土器1),土製品1点(羽口カ),焼成粘土塊1点,金属製品3点(銅カ3),鉄滓3点(58.6g),鉄塊系遺物1点(434.0g),礫2点が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また、貼床の構築土中から土師器片4点(甕)が出土している。187-188-190は竈の左袖部,189は竈の右袖部から出土しており,袖部の補強材として用いられたと考えられる。184-186-DP19は竈の覆土中層・上層からそれぞれ出土している。185は南東部の床面,191は貯蔵穴の覆土中,MI5・16はP2の覆土下層から出土している。その他,流れ込んだと考えられる縄文土器片18点(深鉢)が出土している。

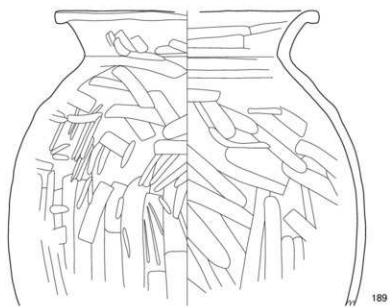
所見 時期は,出土土器から10世紀中葉に比定できる。



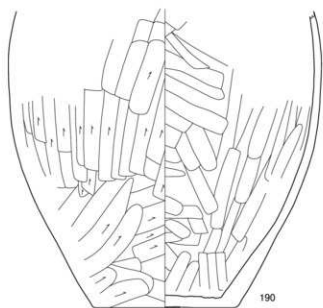
第83図 第588号住居跡出土遺物実測図(1)



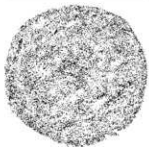
第84图 第588号住居迹出土物实测图(2)



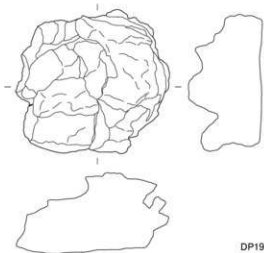
189



190



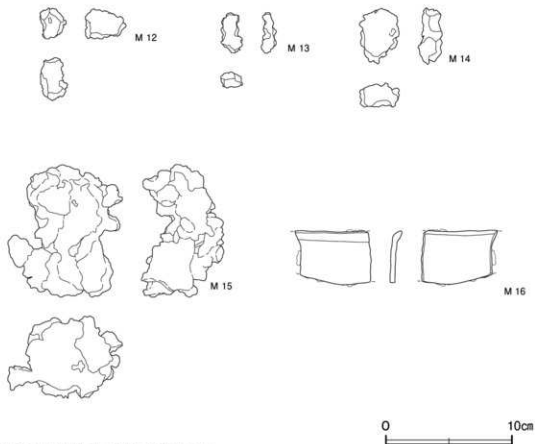
191



DP19



第85图 第588号住居跡出土遺物実測図(3)



第86図 第588号住居跡出土遺物実測図(4)

第588号住居跡出土遺物観察表(第83~86図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
184	土師器	高台付椀	[14.4]	(5.1)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	体部外面ロクロナデ 下縁回転ヘラ削り 内面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り 高台縁り付付	甕覆土中層	40% PL28
185	土師器	高台付椀	[14.0]	(5.3)	-	長石・石英	橙	良好	体部外面ロクロナデ 下縁回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り	床面	60%
186	土師器	壺	14.0	(10.2)	-	長石・石英	明赤褐	良好	胴部外面指頭痕、ヘラナデ 内面ヘラナデ	甕覆土上層	20% PL29
187	土師器	壺	[22.4]	(21.9)	-	長石・石英	橙	良好	口縁部外面指痕 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	甕輪部	40% PL29
188	土師器	壺	[30.9]	18.9	[11.2]	長石・石英	明褐	普通	口縁部外面指頭痕 体部外面上半ヘラナデ 下半ヘラ削り 輪縁痕 内面ヘラナデ	甕輪部	50% PL29
189	土師器	壺	[21.0]	(23.4)	-	長石・石英	橙	普通	口縁・体部外・内面ヘラナデ	甕輪部	30% PL30
190	土師器	壺	-	(23.7)	11.4	長石・石英	橙	良好	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部ヘラ削り	甕輪部	30% PL30
191	土師器	手拭土器	6.6	5.5	3.9	長石・石英	にぶ黄褐色	普通	体部外面指頭痕 内面ヘラナデ	貯蔵穴覆土中	100%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP19	甕底土層	10.7	12.1	5.8	639.5	長石・石英	底面ナデ	甕覆土上層	PL31

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	縮着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ						
M 12	合鉄鉄片	2.4	2.1	3.2	15.6	1	錆化(△)	不整形四角形 左側部が破面となる 全体的に気孔が目立つ	甕土上層	
M 13	合鉄鉄片	3.2	1.7	1.2	8.7	3	L ●	不整形 表面は酸化土砂と錆跡に覆われており、上面が破面となる	フ2遺土中層	
M 14	合鉄鉄片	4.4	3.2	1.9	34.3	4	特L (☆)	不整形 表面は酸化土砂と錆跡に覆われており、明確な破面は認められない 見かけより比重が高く、上手側の縮着が強い	フ2遺土中層	
M 15	鉄塊系遺物(合鉄)	10.5	9.1	6.5	430.0	5	L ●	不整形 表面は酸化土砂と錆跡に覆われており、明確な破面は認められない	フ2遺土中層	
M 16	鉄製品(鍛造品) 鋼片	5.6	5.9	0.5	55.2	3	L ●	表面が錆跡、側部3面は破面で、本体部分は厚さ5mm程度 形状から鋼の可能性が高い	フ2遺土中層	PL32

第 589 号住居跡 (第 87・88 図)

位置 調査区中央部の H 123 区、標高 20 m ほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第 88～90 号ピットを掘り込み、第 3545 号土坑、第 87 号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.36 m、短軸 2.84 m の長方形で、主軸方向は N-95°-E である。壁高は 4～6 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。壁下には幅 7～24 cm の壁溝が巡っている。貼床は確認面から 9～21 cm 掘り込み、ロームを主体とする褐色土を 3～15 cm 埋土して構築されている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに付設されている。袖部は確認できなかった。規模は焚口部から煙道まで 76 cm である。火床部は 12 cm ほど掘りくぼめて第 2・3 層を埋土している。火床面は被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に 55 cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

埋土層解説

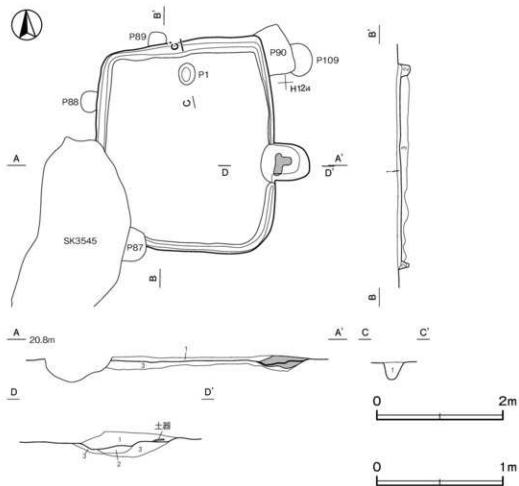
- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 明赤褐色 ローム粒子微量 (粘性弱い)
- 3 灰黄褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

ピット 深さ 28 cm で、位置から出入口施設に伴うピットの可能性がある。

ピット 1 土層解説

- 1 灰黄褐色、黒色ブロック少量

覆土 2層に分層できる。混入物が無く、均一な土質であることから自然堆積と考えられる。第 3 層は貼床の構築土である。



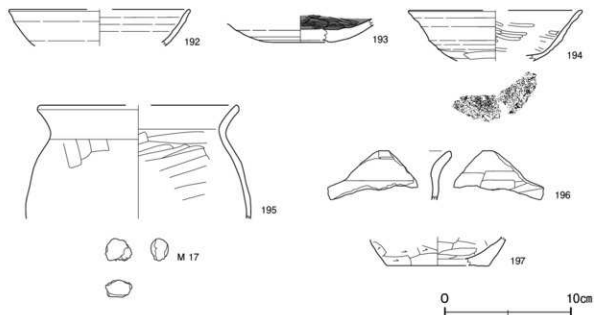
第 87 図 第 589 号住居跡実測図

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
2 にいり黄褐色 焼土ブロック少量

- 3 褐 色 ロームブロック多量、黒褐色土中層

遺物出土状況 土師器片 13 点 (杯 3、高台付椀 3、甕 7)、鉄滓 1 点 (4.9 g) が全面から散在的に出土している。また、貼床の構築土中から土師器片 2 点 (甕) が出土している。M 17 は南西部の覆土下層、192・194～197 は竈の覆土中から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 1 点 (深鉢) が出土している。所見 時期は、出土土器から 10 世紀中葉に比定できる。



第 88 図 第 589 号住居跡出土遺物実測図

第 589 号住居跡出土遺物観察表 (第 88 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
192	土師器	高台付椀	[144]	(29)	-	長石・石英・雲母	明黄褐	普通	体部外・内面ロクロナデ	甕覆土中	5%
193	土師器	高台付椀	-	(22)	[4.6]	長石・石英	にいり黄褐	普通	体部外面ロクロナデ、下縁回転へう割り、内面へう割り、黒色処理、底部回転へう切り	甕土上層	10%
194	土師器	高台付椀	[136]	(40)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ロクロナデ、下縁半回転へう割り、二次焼成によるハジケ、内面へう割り	甕覆土中	30%
195	土師器	甕	[160]	(90)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部外・内面横ナデ、体部外面へう割り、内面へうナデ	甕覆土中	5%
196	土師器	甕	-	(39)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部外・内面横ナデ、体部外・内面へうナデ	甕覆土中	5%未満
197	土師器	甕	-	(23)	[8.0]	長石・石英・雲母	にいり黄褐	良好	体部外面へう割り、内面へうナデ	甕覆土中	5%

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	総着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ						
M 17	含鉄鉄滓	1.7	2.1	1.4	4.9	2	鈍化 (△)	不整形円形、表面は酸化土に覆われており、底面は認められない。	甕土下層	

第 591 号住居跡 (第 89・90 図)

位置 調査区西部の I 11b4 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 184 号溝、第 3546 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 中央部から西部の大半が、調査区域外へ延びているため、東壁及び竈の一部を確認した。規模は、南北軸が 1.99 m で、東西軸は 0.48 m しか確認できなかった。壁高は 4 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は認められない。東壁北部の壁下には幅 15～25cm の壁溝が巡っている。

竈 東壁中央部に付設されている。袖部は確認できなかった。第 184 号溝に掘り込まれているため規模は、火床面から煙道まで 50cm しか確認できなかった。火床面は被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に 60cm 以上掘り込まれている。

覆土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量 2 暗褐色 焼土粒子多量

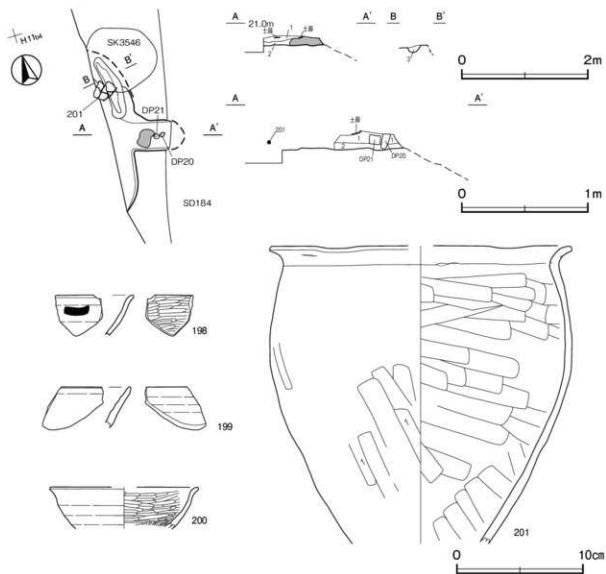
覆土 3層に分層できる。残存状況が不良のため判然としないが、ローム粒子・炭化粒子が含まれていることから埋め戻された可能性がある。

土層解説

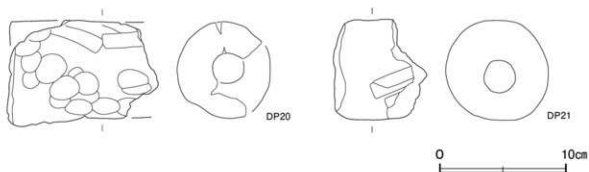
- 1 に灰・黄褐色 ローム粒子・炭化粒子中量 3 に灰・黄褐色 ロームブロック中量
2 黒色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片 12 点 (坏 3、高台付碗 1、甕 8)、土製品 3 点 (羽口カ) が北部及び竈から散在的に出土している。DP20・DP21 は竈の火床面直上から出土しており、支脚として転用されたと考えられる。198～200 は竈の覆土中から出土している。201 は北東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀中葉に比定できる。



第 89 図 第 591 号住居跡・出土遺物実測図



第90図 第591号住居跡出土遺物実測図

第591号住居跡出土遺物観察表 (第89・90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
198	土師器	坏	-	(3.2)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 体部外面に磨き「-」		甕塚土中	5%未満
199	土師器	坏	-	(3.2)	-	長石・石英	におい黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ		甕塚土中	5%
200	土師器	高台付椀	[11.8]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	におい黄橙	良好	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き		甕塚土中	10%
201	土師器	壺	[24.0]	(23.6)	-	長石・石英・チャート	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 輪帯部 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ		甕塚土下層	30% PL30

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	細骨度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	孔径						
DP20	器口α	(11.9)	8.1	[2.4]	321.5	1	なし	基部から体部にかけての破片 外面は指頭痕及びヘラ磨り 調整が施される 形状や出土状況から支脚の可能性有り		甕塚土中
DP21	器口α	(7.4)	8.1	2.5	339.8	1	なし	基部から体部にかけての破片 外面はヘラ磨りで整形されている 形状や出土状況から支脚の可能性有り		甕塚土中

第594号住居跡 (第91図)

位置 調査区中央部のH 12h3区、標高20mほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第3727・3729号土坑を掘り込み、第201号溝、第89号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 北壁は削平されているため、壁溝のみを確認した。長軸3.63m、短軸3.32mの方形で、主軸方向はN-89°-Eである。壁高は12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。南部の一部を除いて、壁下には幅10~20cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から12~26cm掘り込み、ロームを主体とするにおい黄褐色土を2~18cm埋土して構築されている。

ピット 2か所。P1・P2は深さ10cm・14cmで、性格不明である。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長径63cm、短径59cmの円形で、深さは30cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量 | 3 におい黄褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | |

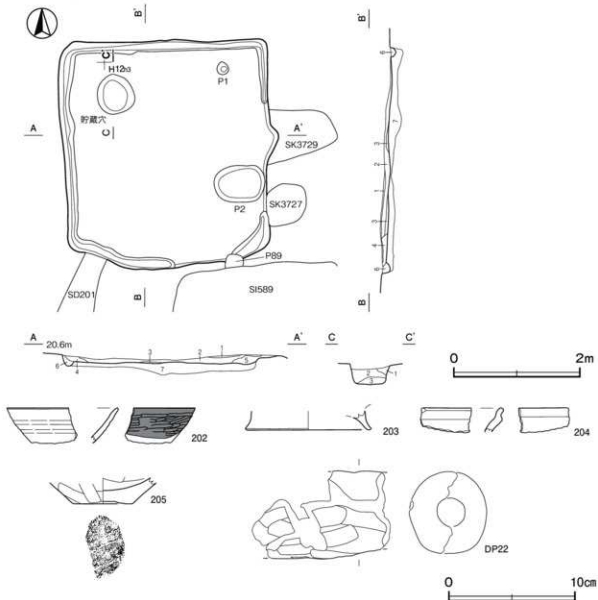
覆土 6層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第7層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|--------------------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 におい黄褐色 白色砂質土中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | |
| 3 におい黄褐色 ロームブロック中量 | 6 褐色 ローム粒子微量 (線り弱い) |
| 4 褐色 におい黄褐色ブロック少量 | 7 におい黄褐色 ロームブロック・黒褐色ブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 20 点（坏 1，高台付碗 1，甕 18），土製品 1 点（羽口カ）が全面から散在的に出土している。また，貼床の構築土中から土師器片 3 点（甕）が出土している。DP22 は竈周辺の覆土下層，202・203・205 は南東部，204 は東部の覆土上層から出土している。

所見 時期は，出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 91 図 第 594 号住居跡・出土遺物実測図

第 594 号住居跡出土遺物観察表（第 91 図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
202	土師器	坏	-	(28)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理	覆土上層	5%
203	土師器	高台付碗	-	(15)	[100]	長石・石英	浅黄橙	普通	高台部外・内面横ナデ	覆土上層	5%
204	土師器	甕	-	(19)	-	長石・石英	明赤褐	良好	口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	5%未満
205	土師器	甕	-	(21)	[48]	長石・石英・雲母	明黄褐	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ 底部ヘラ磨り	覆土上層	5%

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	縮着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	孔径						
DP22	羽口カ	(11.0)	(69)	(2.2)	(145.1)	1	なし	体部破片 外面はヘラ磨りで整形されている 形状や出土状況から支那の可能性有り	覆土下層	

第 600 号住居跡 (第 92・93 図)

位置 調査区北部の H 12d 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3612・3730 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 東壁の一部は床面まで削平されている。長軸 5.39 m、短軸 3.86 m で、形状は長方形である。主軸方向は N - 84° - W である。壁高は 17 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、硬化面は認められない。東壁の一部を除いて、壁下には幅 12 ~ 28 cm の壁溝が巡っている。貼床は確認面から 24 ~ 40 cm 掘り込み、ロームを主体とするにぶい黄褐色土を 4 ~ 29 cm 埋土して構築されている。

ピット 5 か所。P 1 ~ P 5 は深さ 10 ~ 52 cm で、性格不明である。

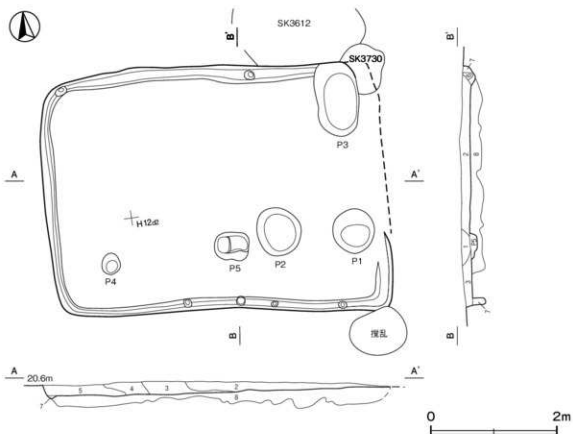
覆土 7 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第 8 層は貼床の構築土である。

土層解説

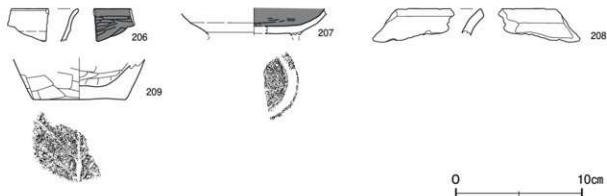
- | | |
|-------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 5 褐色 にぶい黄褐色ブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量 | 6 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量 | 7 にぶい黄褐色 ロームブロック少量 |
| 4 褐色 にぶい黄褐色ブロック中量 | 8 にぶい黄褐色 黒褐色ブロック中量、ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 62 点 (坏 6、高台付碗 1、甕 55) が全面から散在的に出土している。206 は南東部、207・208 は南西部、209 は北西部の覆土上層からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 32 点 (深鉢)、古墳時代の土師器片 7 点 (高坏) が出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から 10 世紀中葉に比定できる。



第 92 図 第 600 号住居跡実測図



第93図 第600号住居跡出土遺物実測図

第600号住居跡出土遺物観察表 (第93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
206	土師器	高台付瓶	-	(2)6	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理	覆土上層	5%未満
207	土師器	高台付瓶	-	(2)2	[6.2]	長石・石英	灰黄橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理 二次焼成によるハジケ 底部凹縁ヘラ磨き 高台縁目付け	覆土上層	5%
208	土師器	甕	-	(2)1	-	長石・石英	浅黄橙	普通	口縁部外面横ナゲ 内面ヘラナゲ	覆土上層	5%未満
209	土師器	甕	-	(3)4	[7.4]	長石・石英・雲母	灰黄橙	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナゲ 底部本葉帆	覆土上層	5%

第601号住居跡 (第94～97図)

位置 調査区北西部のH 11b8区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第184号溝、第3559号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.29m、短軸3.40mの長方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は16～23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部と北東コーナー部は踏み固められている。貼床は確認面から23～29cm掘り込み、ロームを主体とする黄褐色土を4～9cm埋土して構築されている。

竈 東壁中央に付設されている。袖部・火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に26cm掘り込まれ、床面から急に外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子・焼土粒子・白色砂質土微量 2 褐色 ローム粒子微量

ピット 2か所。P1・P2は深さ16cm・22cmで、性格不明である。

覆土 3層に分層できる。第1層に焼土が含まれていることや遺物出土状況から埋め戻されている。第4層は貼床の構築土である。

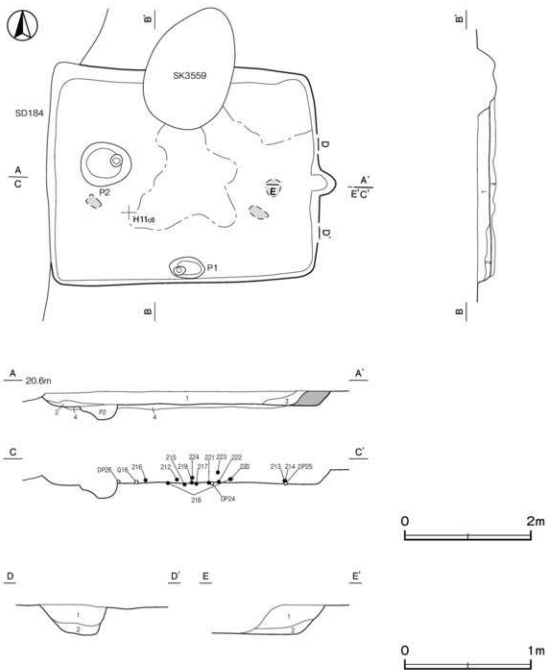
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 黄褐色 黒褐色ブロック中量、ロームブロック・白色砂質土中量
 2 暗褐色 ローム粒子多量
 3 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量(綿まり強い)

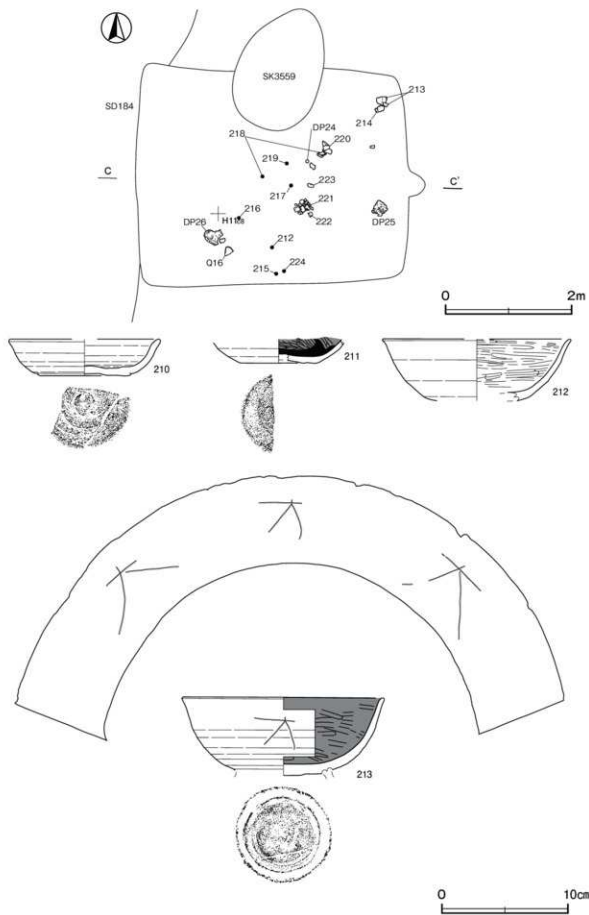
遺物出土状況 土師器片154点(坏12、高台付瓶10、甕130、ミニチュア土器1、手捏土器1)、須恵器片1点(甕)、陶器片1点(高台付瓶)、土製品2点(土玉)、石器2点(敲石、台石)、金属製品1点(不明)、炉壁14点(5704.4g)、鉄塊系遺物1点(15.8g)が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。215は南

壁際、217・219・221・DP24は中央部の床面から出土している。218は中央部の床面及び覆土下層から分散した状態で出土している。216-222は中央部、DP26・Q16は南西部、DP25は東部の床面直上から出土している。212は南部、213・214は北東コーナー部、220は中央部の覆土下層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片23点(深鉢)、古墳時代の土師器片4点(埴2、壺1、台付壺1)が出土している。

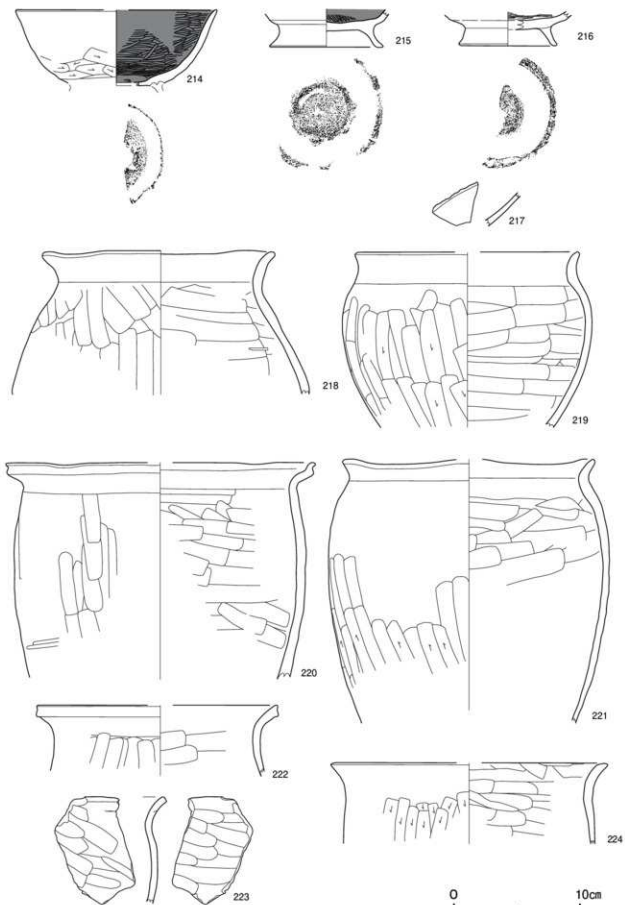
所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。



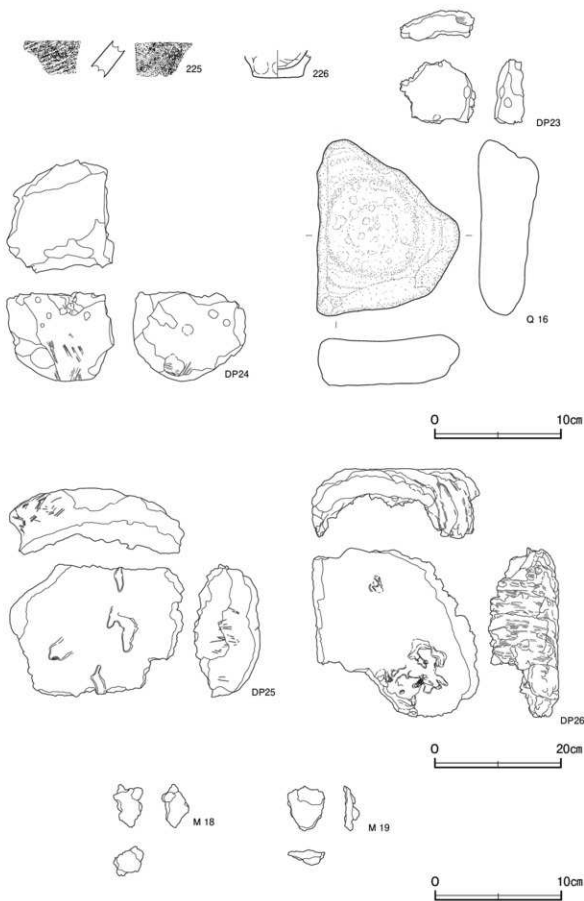
第94図 第601号住居跡実測図



第95图 第601号住居跡・出土遺物実測図



第96图 第601号住居跡出土遺物実測図(1)



第97图 第601号住居跡出土遺物実測図(2)

第601号住居跡出土遺物観察表 (第95～97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
210	土師器	坏	[120]	29	[70]	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土上層	30% PL27
211	土師器	坏	-	(19)	[60]	長石・石英・雲母	灰黄橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理 底部回転ヘラ切り後、縁部面ヘラ磨き	覆土上層	10%
212	土師器	高台付瓶	[150]	(49)	-	長石・石英・雲母	灰黄橙	良好	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 二重旋回によるシワ	覆土下層	40%
213	土師器	高台付瓶	16.1	(62)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ 下層面ヘラ磨き 内面ヘラ磨き 黒色処理 縁部回転ヘラ切り 体部外面ヘラ磨き	覆土下層	90% PL28
214	土師器	高台付瓶	[160]	(60)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	体部外面ロクロナデ 下層面ヘラ磨き 内面ヘラ磨き 黒色処理 縁部回転ヘラ切り 高台磨き付け	覆土下層	30%
215	土師器	高台付瓶	-	(30)	[90]	長石・石英・雲母	灰黄橙	普通	体部外面回転ヘラ磨き 内面ヘラ磨き 黒色処理 底部回転ヘラ切り後、高台磨き付け	床面	20%
216	土師器	高台付瓶	-	(27)	[78]	長石・石英	灰黄橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 二次加熱によるシワ 底部回転ヘラ切り 高台磨き付け	床面直上	10%
217	緑釉土器	高台付瓶	-	(26)	-	緻密	オリーブ灰	良好	体部外・内面ロクロナデ	床面	5%
218	土師器	甕	18.5	(114)	-	長石・石英・雲母	灰黄橙	良好	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面・覆土下層	30% PL30
219	土師器	甕	[178]	(139)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面	40%
220	土師器	甕	[246]	(170)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	良好	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	覆土下層	30% PL30
221	土師器	甕	[200]	(209)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面	30%
222	土師器	甕	[186]	(56)	-	長石・石英	灰黄橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面直上	5%
223	土師器	甕	-	(85)	-	長石・石英・雲母	灰黄橙	良好	体部外・内面ヘラナデ 輪轆直	覆土上層	5%
224	土師器	甕	[220]	(64)	-	長石・石英	灰黄橙	普通	口縁部外面磨ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	覆土上層	10%
225	須恵器	甕	-	(29)	-	長石・石英	褐色	良好	体部外面平行叩き	覆土上層	5%未満
226	土師器	手拭土器	-	(22)	4.0	長石・石英	橙	良好	体部外面磨頭直 内面ヘラナデ	覆土上層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	台石	14.0	11.3	4.8	962.4	結晶片岩	磨り使用面1面	床面直上	

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ						
DP23	伊瑯 (製練砂)	5.1	5.9	2.4	407	2	なし	内面が比較的平坦で暗灰色。頸部は全周が破面となる。胎土は砂質でスチの混入が認められる	覆土上層	
DP24	伊瑯 (製練砂)	7.0	8.5	9.0	339.4	1	なし	内面平。右側面及び内面一部が滑らかな裏面。裏面4目が破面で外面が割離した。胎土は砂質でスチの混入が認められる	床面	
DP25	伊瑯 (製練砂)	20.9	27.7	8.1	2762.2	1	なし	内面が灰色ガラス面に滑らかな長さ20cmを越える大型の割離砂の伊瑯片。裏面は全周が破面で外面は割離した。内面は滑らかで、角々に破面が認められる。胎土は砂質でスチの混入が認められる	床面直上	PL32
DP26	伊瑯 (製練砂)	25.8	26.5	3.4	2447.2	1	なし	内面が滑らかな長さ20cmを越える大型の割離砂の伊瑯片。裏面は全周が破面で外面は割離した。内面は滑らかで、角々に破面が認められる。胎土は砂質でスチの混入が認められる	床面直上	PL32

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ						
M 18	鉄塊系遺物 (含鉄)	3.4	2.2	2.1	158	3	L ●	不整形円形 表面は酸化土砂と錆跡に覆われており、明確な破面は認められない	覆土上層	
M 19	鉄製品 (鍛造品*)	3.5	2.9	1.2	77	4	なし	表面が錆跡 頸部4面は破面、表面は平坦である 体部分は厚さ3mm程度で薄板状の鉄製品と考えられる	覆土上層	

第603号住居跡 (第98・99図)

位置 調査区北部のH 12d5区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第202号溝、第3587・3598・3624・3625号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.35m、短軸2.16mの方形で、主軸方向はN-86°-Eである。壁高は24～36cmで、直立している。

床 平坦な粘床で、硬化面は認められない。粘床は確認面から42～52cm掘り込み、ロームを主体とするに、灰黄褐色土を2～7cm埋土して構築されている。

竈 東壁中央部に付設されている。火床面は確認できなかった。規模は焚口部から煙道まで55cmで、燃焼部

幅は44cmである。袖部は地山を掘り残して構築されている。煙道部は壁外に22cm掘り込まれ、火床部から直立気味に立ち上がっている。

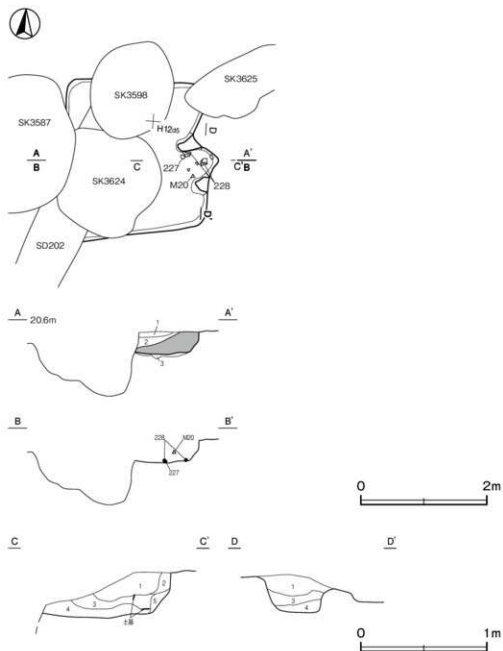
覆土層解説

- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 白色砂質土多量、ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化物微量 | 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック微量 | 4 濃い黄褐色 白色砂質土多量、焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| | 5 褐色 白色砂質土少量 |

覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第3層は貼床の構築土である。

土層解説

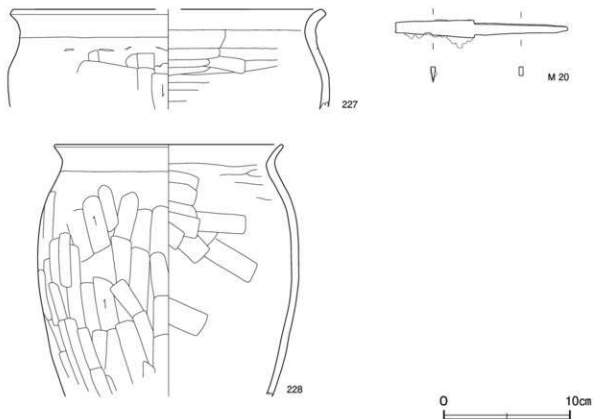
- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 3 濃い黄褐色 ロームブロック・黒褐色ブロック中量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量 | |



第98図 第603号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 144 点 (坏6, 高台付椀1, 甕 137), 須恵器片 1 点 (甕), 金属製品 1 点 (刀子) が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また, 貼床の構築土中から土師器片 5 点 (高台付椀1, 甕4) が出土している。227 は甕の床面から出土している。228 は甕の左袖部及び床面から出土しており, 袖部の補強材として用いられたと考えられる。M 20 は甕の覆土中層から出土している。その他, 流れ込んだと考えられる縄文土器片 14 点 (深鉢), 古墳時代の土師器片 5 点 (埴) が出土している。

所見 時期は, 出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 99 図 第 603 号住居跡出土遺物実測図

第 603 号住居跡出土遺物観察表 (第 99 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	動土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
227	土師器	甕	[24.6]	(7.9)	-	長石・石英	橙	良好	口縁部外・内面磨ナテ 胴部高部へラ磨リ 輪郭部 内面へラナテ	甕床面	10%
228	土師器	甕	[18.0]	(20.0)	-	長石・石英・チャート	にふい黄橙	普通	口縁部外・内面磨ナテ 胴部高部へラ磨リ 内面へラナテ	甕袖部・床面	30%

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	組織度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ						
M 20	金属品 (鍛造品) 刀子	(13.9)	2.3	0.4	15.2	1	錆化 (△)	先端部が欠損 表面は酸化土砂と錆跡れに覆われている	覆土中層	PL32

第 604 号住居跡 (第 100 ~ 102 図)

位置 調査区北部の H 12e5 区, 標高 20 m ほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第 3608 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.89 m, 短軸 2.70 m の長方形で, 主軸方向は N - 2° - W である。壁高は 16 ~ 26 cm で,

直立している。

床 平坦な貼床で、壁際を除いて踏み固められている。北壁から西壁にかけての壁下には幅10～25cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から26～46cm掘り込み、ロームを主体とするにぶい黄褐色土を7～25cm埋土して構築されている。

竈 2か所。竈1は東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道まで100cmで、燃焼部幅は33cmである。袖部は左袖部で地山を掘り残し、その上にロームを主体とする第9・10層、暗褐色土を主体とする第11層を積み上げて、右袖部は床面から第9・11層を積み上げて構築されている。火床部は23cmほど掘りくぼめて第12～16層を埋土している。火床面は被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に46cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。竈2は北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道まで74cmで、燃焼部幅は42cmである。袖部は床面からロームを主体とする第9～11層を積み上げて構築されている。火床面は被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に4cm掘り込まれ、火床部から直立気味に立ち上がっている。

竈1土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・白色砂質土少量	9	にぶい黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック・白色砂質土多量
2	黒褐色	炭化粒子中量	10	にぶい黄褐色	ロームブロック・白色砂質土多量
3	暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量	11	暗褐色	白色砂質土中量
4	黒褐色	ローム粒子・白色砂質土中量、焼土ブロック少量	12	赤褐色	ローム粒子微量（粘性弱い）
5	明赤褐色	焼土ブロック多量（締まり強い）	13	暗褐色	ロームブロック中量
6	暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量	14	にぶい黄褐色	ロームブロック中量、黒褐色ブロック少量
7	赤褐色	焼土ブロック多量	15	暗褐色	ローム粒子中量
8	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	16	褐色	ローム粒子微量

竈2土層解説

1	暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量	7	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子多量	8	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量
3	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子多量	9	暗褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック中量（粘性弱い）
4	暗褐色	ローム粒子中量	10	にぶい黄褐色	ロームブロック多量、白色砂質土中量
5	褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	11	にぶい黄褐色	ロームブロック・白色砂質土多量（粘性弱い）
6	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量			

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径75cm、短径72cmの円形で、深さは4cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ローム粒子多量、炭化物・白色砂質土少量、焼土粒子微量
---	-----	----------------------------

覆土 6層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第7層は貼床の構築土である。

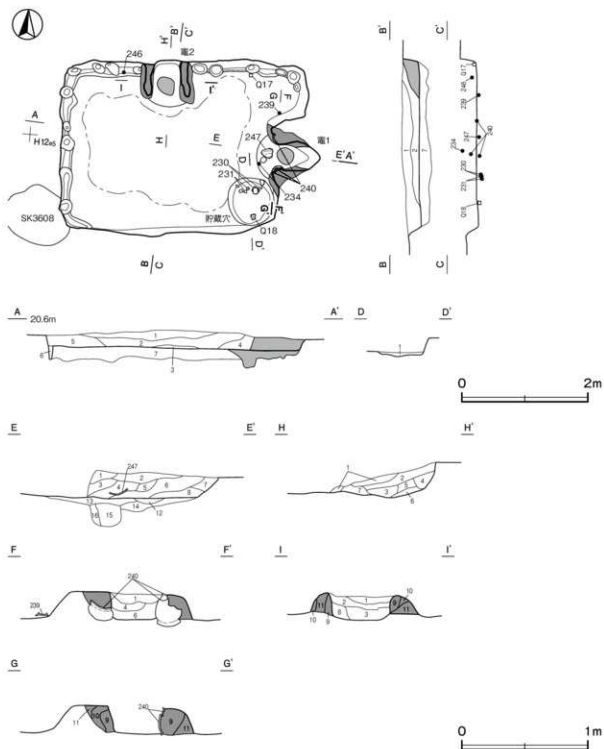
土層解説

1	暗褐色	黒褐色ブロック中量、ロームブロック微量	5	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2	暗褐色	黒褐色ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量	6	にぶい黄褐色	ローム粒子中量
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量	7	にぶい黄褐色	ロームブロック中量、黒褐色ブロック少量
4	暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物・白色砂質土少量			

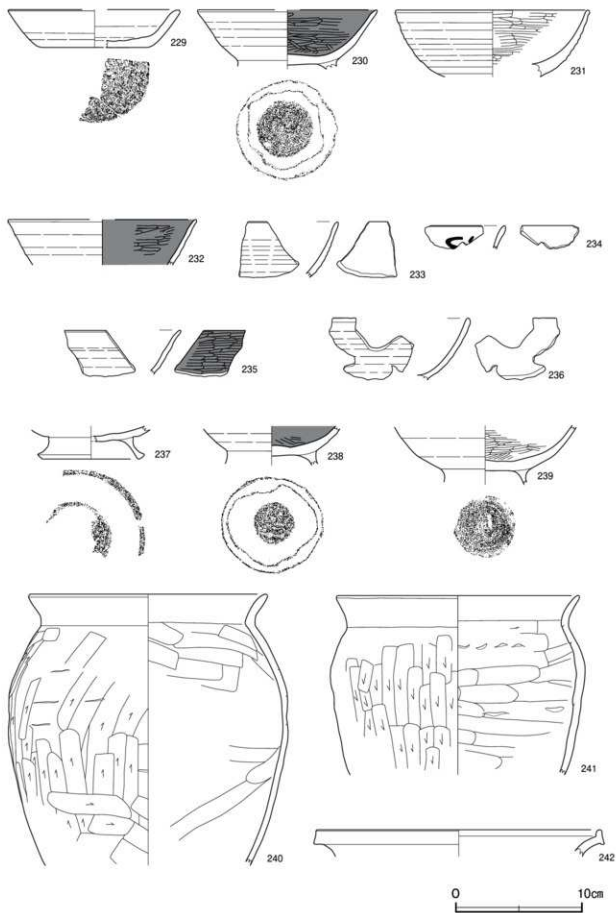
遺物出土状況 土師器片289点（坏29、高台付碗10、甕250）、須恵器片3点（壺1、甕2）、土製品4点（不明）、石器2点（台石）が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また、貼床の構築土中から土師器片4点（坏2、高台付碗1、甕1）が出土している。247は竈1の火床部から出土し、第2号不明遺構から出土したものと遺構間で接合したものである。240は竈の両袖部から出土しており、袖部の補強材として用いられたと考えられる。229・234・241・243は竈1の覆土中から出土している。239は床面及び竈1の覆土中から出土している。230・231・Q18は貯蔵穴の覆土上層から出土している。246は北西部壁際の覆土中層、Q17は北東部の

床面からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 43 点（深鉢）、古墳時代の土師器片 22 点（埴 20、器台 1、壺 1）が出土している。

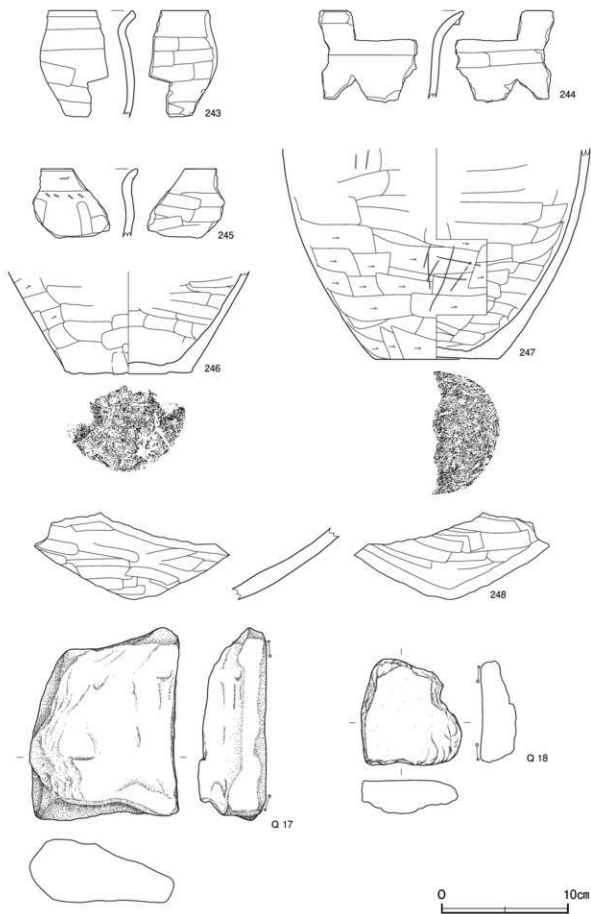
所見 壺 1・2 は遺物出土状況や袖部遺存状況から同時期に使用されたものと考えられる。時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 100 図 第 604 号住居跡実測図



第101图 第604号住居跡出土遺物実測図(1)



第102图 第604号住居跡出土遺物実測図(2)

第604号住居跡出土遺物観察表 (第101・102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
229	土師器	埴	[130]	30	[84]	長石・石英	橙	良好	体部外・内面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り	Ⅷ1覆土中	20% PL27
230	土師器	高台付埴	[17.2]	(47)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理 底部ナデ 高台削り付け	貯蔵穴覆土上層	90%
231	土師器	高台付埴	[15.2]	53	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き	貯蔵穴覆土上層	20%
232	土師器	高台付埴	[15.0]	(36)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理	覆土上層	5%
233	土師器	高台付埴	-	(44)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面二次焼成によるハジケ	覆土上層	10%
234	土師器	高台付埴	-	(18)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	体部外・内面ロクロナデ 体部外面に黒書「□」	Ⅷ1覆土中	5% 黒書 PL28
235	土師器	高台付埴	-	(34)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理	Ⅷ1覆土中・貯蔵穴覆土上層	5%
236	土師器	高台付埴	-	(49)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面二次焼成によるハジケ	覆土上層	10%
237	土師器	高台付埴	-	(26)	[7.6]	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面回転ヘラ削り 内面ナデ 底部回転ヘラ削り 高台削り付け	覆土上層	10%
238	土師器	高台付埴	-	(31)	-	長石・石英・雲母	明黄褐色	良好	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理 二次焼成によるハジケ 底部回転ヘラ削り 高台削り付け	覆土上層	20%
239	土師器	高台付埴	-	(47)	-	長石・石英・チナート	明黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き	Ⅷ1覆土中	40%
240	土師器	甕	190	(21.5)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ削り 輪縁部 内面ヘラナデ	Ⅷ1袖部	40% PL30
241	土師器	甕	[19.2]	(14.2)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 帯付着 内面ヘラナデ 輪縁部	Ⅷ1覆土中	20%
242	土師器	甕	[15.5]	(21)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	不良	口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	5%未満
243	土師器	甕	-	(84)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	Ⅷ1覆土中	5%
244	土師器	甕	-	(69)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土下層	10%
245	土師器	甕	-	(54)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪縁部 体部内面ヘラナデ 帯付着	覆土上層	5%
246	土師器	甕	-	(81)	100	長石・石英	にぶい黄褐色	良好	体部外面ヘラ削り 下端回転部 内面ヘラナデ	覆土中層	20%
247	土師器	甕	-	(16.7)	[9.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り 帯付着 内面ヘラナデ 体部外面に黒書2か所「□」「□」	Ⅷ1火床部	30% PL30
248	須恵器	甕	-	(56)	-	長石・石英	灰	良好	体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	5%未満

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	質	特徴	出土位置	備考
Q 17	台石	15.3	11.8	49	12548	結晶片岩	磨り使用面2面	床面	
Q 18	台石	84	79	26	2321	結晶片岩	磨り使用面1面	貯蔵穴覆土上層	

第606号住居跡 (第103・104図)

位置 調査区北部のH 12a3区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第612号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.48m、短軸2.93mの長方形で、主軸方向はN-81°-Eである。壁高は9~14cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、中央部は踏み固められている。貼床は確認面から14~24cm掘り込み、ロームを主体とする黄褐色土を3~12cm埋土して構築されている。

竈 東壁中央部に付設されている。火床部は確認できなかった。規模は焚口部から煙道まで69cmで、燃焼部幅は38cmである。袖部は左袖部で地山を掘り残して基部とし、その上に第5・6層を積み上げて、右袖部は地山を掘り残して構築されている。火床部は10cmほど掘りくぼめて第4層を埋土している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 褐色 焼土粒子中量 | 5 明赤褐色 焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土ブロック多量(締まり強い) | 6 褐色 焼土粒子中量 |

ピット 2か所。P 1・P 2は深さ19cm・14cmで、性格不明である。

貯藏穴 南西コーナー部に位置している。長軸 43cm, 短軸 40cm の円形で、深さは 48cm である。底面は平坦で、壁は直立している。

貯藏穴土層解説

- | | | | |
|------|---------|-------|---------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量 | 2 暗褐色 | ローム粒子微量 |
|------|---------|-------|---------|

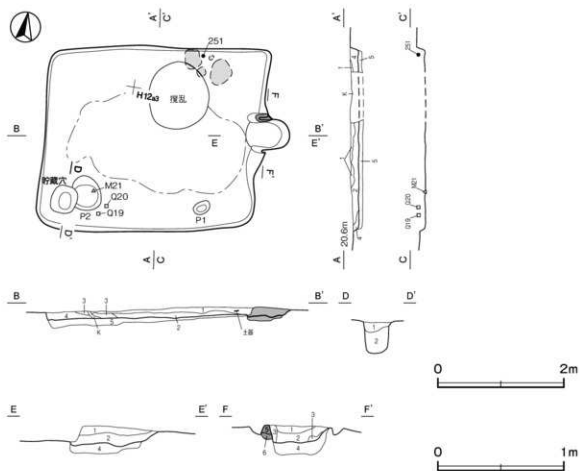
覆土 4層に分層できる。第1層に焼土が含まれていることから埋め戻されている。第5層は貼床の構築土である。

土層解説

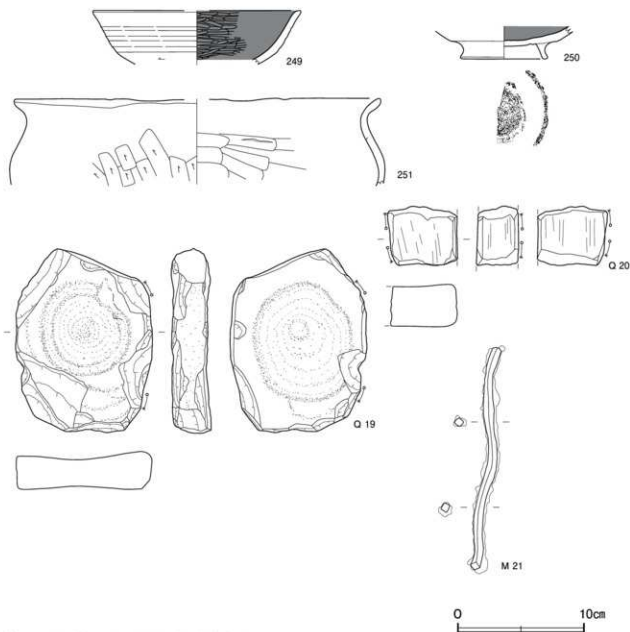
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 5 黄褐色 | ロームブロック多量、黒褐色ブロック中量、炭化粒子微量（縛まり強い） |
| 3 褐色 | ロームブロック多量（縛まり強い） | | |

遺物出土状況 土師器片 88 点（坏 6、高台付碗 2、甕 80）、土製品 2 点（管状土錘、羽口カ）、石器 2 点（台石、砥石）金属製品 1 点（棒状鉄製品）が全面の覆土上層から床面直上にかけて散在的に出土している。M21 は南西部の床面直上から出土している。250・251 は北部、Q19・20 は南西部の覆土上層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 8 点（深鉢）、古墳時代の土師器片 10 点（埴 1、高坏 6、壺 3）が出土している。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 103 図 第 606 号住居跡実測図



第104図 第606号住居跡出土遺物実測図

第606号住居跡出土遺物観察表(第104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
249	土師器	高台付鍋	[16.4]	(4.3)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理	覆土上層	5%
250	土師器	高台付鍋	-	(2.6)	[7.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面 黒色処理 一気焚焼によるハジケ 裏面回転ヘラ切り 高台付口付	覆土上層	20%
251	土師器	甕	[29.0]	(6.9)	-	長石・石英	明黄褐色	普通	口縁部外・内面ニテ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 黒塗	覆土上層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 19	台石	14.6	10.8	3.0	702.7	結晶片岩	磨り使用面2面	覆土上層	
Q 20	砥石	(4.7)	(5.3)	3.4	161.6	安山岩	磨り使用面3面 擦痕有り	覆土上層	

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ						
M 21	不明鉄製品(鍛造品)	(18.1)	0.6	0.7	46.5	3	なし	両端部が破面 前面形は方形で、S字状に曲れている形状から金著または引鉄の可能性もある	床面直上	

第 607 号住居跡 (第 105・106)

位置 調査区北部のH 12a4 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3629・3632 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.32 m、短軸 2.75 m の長方形で、主軸方向は N - 81° - E である。壁高は 8 ~ 20cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部は踏み固められている。貼床は確認面から 16 ~ 33cm 掘り込み、ロームを主体とする黄褐色土を 4 ~ 12cm 埋土して構築されている。

竈 東壁中央部に付設されている。袖部・火床面は確認できなかった。規模は焚口部から煙道まで 113cm である。火床部は 12cm ほど掘りくぼめて第 7 層を埋土している。煙道部は壁外に 93cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子・白色砂質土微量 | 5 暗褐色 焼土ブロック・白色砂質土少量 |
| 2 暗褐色 白色砂質土中量 | 6 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 白色砂質土多量 | 7 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 4 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | |

ピット 8 か所。P 1 ~ P 6 は深さ 42 ~ 72cm で、位置や規模から主柱穴と考えられる。P 7 は深さ 44cm で、位置や規模から作業用ピットの可能性がある。P 8 は深さ 10cm で、性格不明である。

ピット 1 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量

ピット 2 土層解説

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黄褐色 ロームブロック多量 (締まり強い) | |

ピット 3 土層解説

- | | |
|---------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黄褐色 ローム粒子微量 | |

ピット 4 土層解説

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子微量 | 4 暗褐色 炭化粒子微量 |

ピット 5 土層解説

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 |

ピット 6 土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 2 暗褐色 ロームブロック中量 |
|-----------------|-----------------|

ピット 7 土層解説

- | | |
|---------------------------|--------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | |

ピット 8 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

覆土 3層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第 4 層は貼床の構築土である。

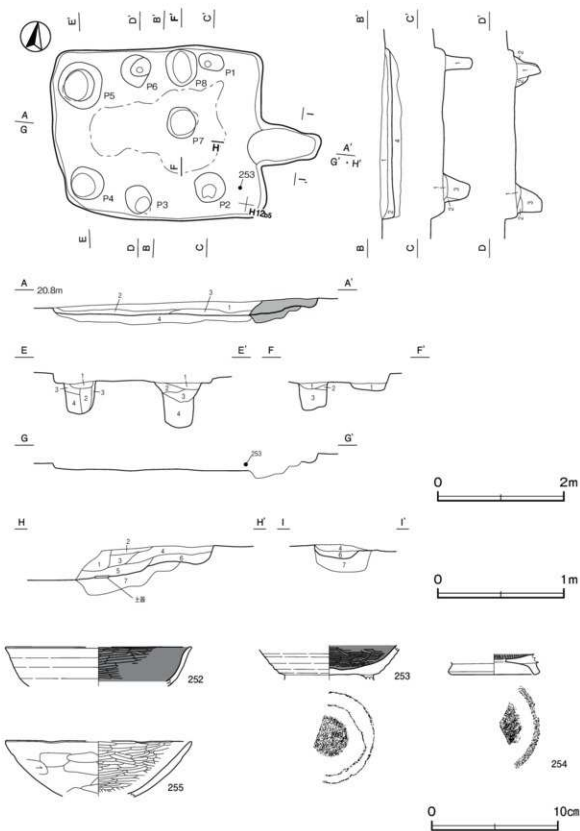
土層解説

- | | |
|------------------------|--|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 黄褐色 ロームブロック多量、暗褐色ブロック中量、暗褐色砂質土微量 (締まり強い) |
| 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | |

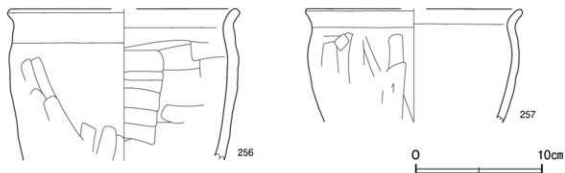
遺物出土状況 土師器片 152 点 (坏 10、高台付椀 3、椀 1、甕 138)、土製品 3 点 (羽口カ)、鉄滓 2 点 (67 g) が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。また、貼床の構築土中から土師器片 1 点 (坏) が出土している。252 は竈覆土中から出土している。256 は北東部の床面及び P 7 の覆土中から分散した状態で出土して

いる。254・255・257はそれぞれP7・P2・P4の覆土中からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片8点(深鉢), 古墳時代の土師器片4点(器台2, 高坏2)が出土している。

所見 時期は, 出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第105図 第607号住居跡・出土遺物実測図



第106図 第607号住居跡出土遺物実測図

第607号住居跡出土遺物観察表 (第105・106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
252	土師器	高台付瓶	〔148〕	(31)	-	長石・石英・雲母	にふい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面へう磨き	黒色処理	覆土中	5%
253	土師器	高台付瓶	-	(24)	-	長石・石英	にふい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面へう磨き 底部捻転へう切り 高台貼り付け	黒色処理	覆土上層	20%
254	土師器	高台付瓶	-	(16)	(66)	長石・石英	橙	良好	体部内面へう磨き 黒色処理 底部へうナデ		P7覆土中	5%
255	土師器	甗	〔148〕	(44)	-	長石・石英	橙	良好	体部外面へう磨り 煤付着 内面へう磨き		P2覆土中	20%
256	土師器	甗	〔18.4〕	(120)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面へう磨り 内面へう磨り		6層・P7覆土中	10%
257	土師器	甗	〔16.8〕	(90)	-	長石・石英	赤褐色	良好	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面へう磨り 内面磨		P4覆土中	10%

第609号住居跡 (第107図)

位置 調査区東部のH12g9区、標高19mほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第51号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 南部が削平されているため、規模は東西軸が3.20mで、南北軸は2.41mしか確認できなかった。形状は長方形と推定され、主軸方向はN-77°-Eである。壁高は8cmで、外傾して立ち上がっている。

床 西部から東部にかけてやや傾斜する貼床で、西部は踏み固められている。貼床は確認面から10~30cm掘り込み、ロームを主体とする褐色土、にふい黄褐色土を3~20cm埋土して構築されている。

竈 東壁に付設されている。火床面は確認できなかった。規模は焚口部から煙道まで37cmで、燃焼部幅は23cmである。袖部は床面から第3層を積み上げて構築されている。煙道部は壁外に2cm掘り込まれ、火床部から直立気味に立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 にふい黄褐色 ロームブロック多量 3 暗褐色 白色砂質土多量、焼土粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子微量

ピット 8か所。P1~P8は深さ16~32cmで、性格不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径91cm、短径67cmの楕円形で、深さは30cmである。底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 4 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック中量 5 暗褐色 ロームブロック中量
3 黒褐色 ローム粒子少量

覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第3・4層は貼床の構築土である。

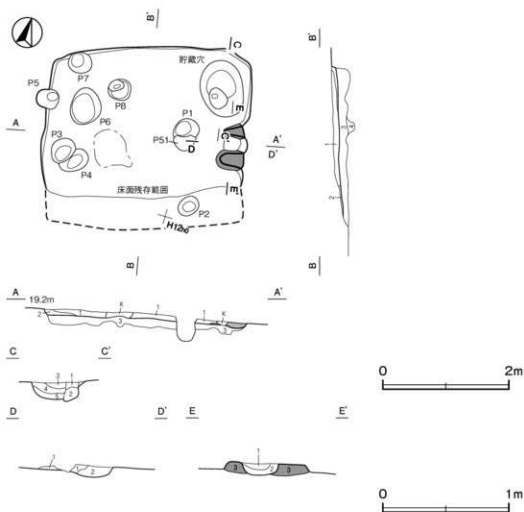
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ローム粒子少量

- 3 暗褐色 ロームブロック・黒褐色ブロック中量
4 にいり褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 26 点（高台付椀 1、甕 25）、鉄滓 1 点（24.7 g）が全面の覆土上層から床面にかけて散在的に出土している。また、貼床の構築土中から土師器片 2 点（甕）が出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片 7 点（深鉢）、石器 1 点（剥片）が出土している。

所見 時期は、出土土器がわずかなため詳細は不明であるが、出土遺物や遺構形状から平安時代と考えられる。



第 107 図 第 609 号住居跡実測図

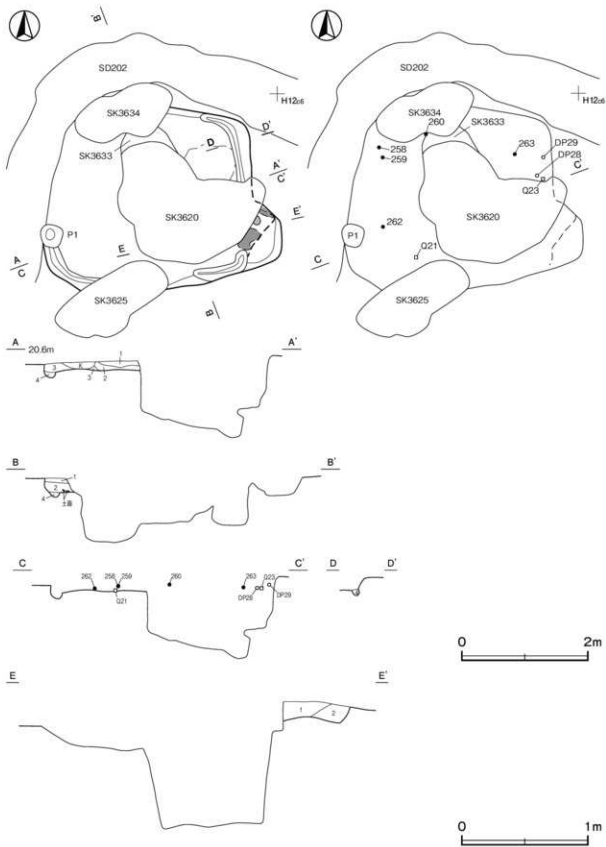
第 611 号住居跡（第 108～110 図）

位置 調査区北部の H 12c5 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 202 号溝、第 3620・3625・3633・3634 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部は第 202 号溝に掘り込まれているため、規模は長軸が 3.14 m で、短軸は 2.82 m しか確認できなかった。形状は、長方形と推定され、南東部の張り出しは竈を壊す際に、壁も掘り込まれたものと考えられる。主軸方向は N - 95° - E である。壁高は 22cm で、直立している。

床 平坦で、東部は踏み固められている。確認できた壁下には幅 12～27cm の壁溝が巡っている。



第108图 第611号住居迹实测图

竈 東壁南部に付設されている。人為的に壊されているため、袖部は基底部の白色砂質土がわずかに認められる程度である。推定される規模は火床面から煙道まで45cmである。

覆土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・白色粘土ブロック・焼土粒子微量
 2 黒褐色 白色粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック微量

ピット 深さ19cmで、性格不明である。

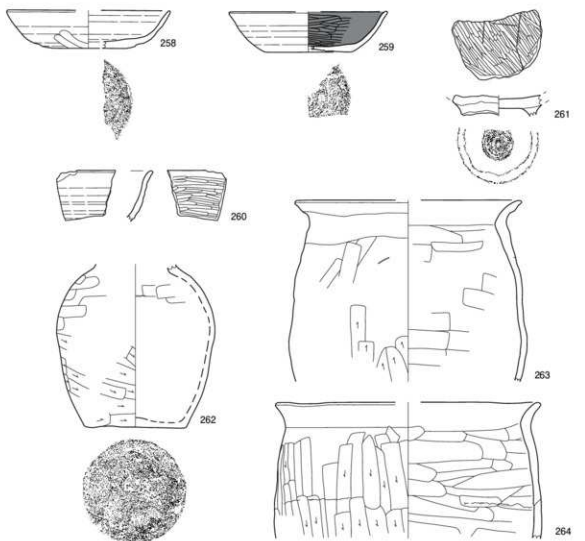
覆土 4層に分層できる。レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。

土層解説

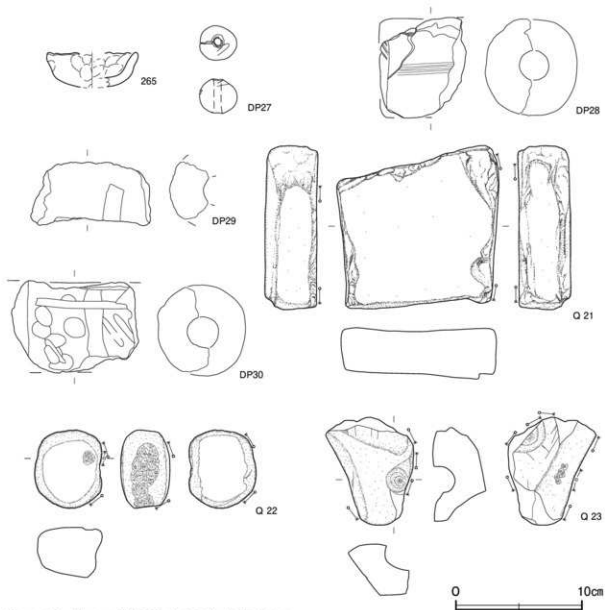
- 1 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量
 3 暗褐色 ロームブロック中量
 4 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片216点（坏18、高台付碗3、壺9、甕185、手捏土器1）、土製品11点（土玉1、羽口カ10）、石器4点（台石1、磨石1、砥石2）、鉄滓1点（1.7g）が全面の覆土上層から床面にかけて出土している。258・259・260は北西部、262・Q21は南西部、263・DP28・DP29・Q23は北東部の覆土下層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片9点（深鉢）、古墳時代の土師器片9点（壺）が出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉に比定できる。



第109図 第611号住居跡出土遺物実測図(1)



第110図 第611号住居跡出土遺物実測図(2)

第611号住居跡出土遺物観察表(第109・110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
258	土師器	坏	[130]	30	[60]	長石・石英・雲母	明黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 下縁ナデ 内面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	20% PL27
259	土師器	坏	[126]	[32]	[68]	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	覆土下層	20%
260	土師器	高台付瓶	-	(40)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	良好	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	5%
261	土師器	高台付瓶	-	(17)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 高台陥り付け 底部内面に刺書「□」	覆土上層	20% PL28
262	土師器	壺	-	(130)	80	長石・石英	明褐色	良好	体部外面上キヘラナデ 下キヘラ磨り 内面ヘラ磨り 輪磨痕	覆土下層	70% PL29
263	土師器	甕	[180]	(144)	-	長石・石英	灰黄褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ磨り 輪磨痕 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
264	土師器	甕	[210]	(108)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ 輪磨痕	覆土上層	20%
265	土師器	手捏土器	[70]	(27)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	体部外・内面指頭痕	覆土上層	30%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP27	土玉	27	30	07	22.6	長石・石英	ナデ 二方向からの穿孔	覆土上層	

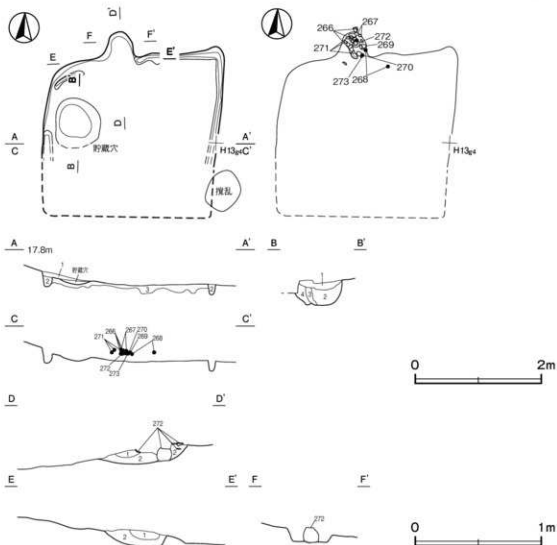
番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	緻着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	孔径						
DP28	羽口 (鋳造) *	(6.9)	[8.0]	[2.4]	(155.8)	1	なし	基部から体部にかけての破片 外面はへつ削りで整形されている 形状から支脚の可能性有り	覆土下層	
DP29	羽口 (鋳造) *	(9.5)	(5.0)	-	(109.2)	1	なし	体部破片 外面はへつ削りで整形されている 形状から支脚の可能性有り	覆土下層	
DP30	羽口 (鋳造) *	(10.1)	[7.0]	[2.5]	(194.9)	1	なし	基部から体部にかけての破片 外面は折衝痕及びへつ削り調整が施される 形状から支脚の可能性有り	礫軸部	

番号	部 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 21	扉后-台石	12.5	12.8	4.0	1157.2	結晶片岩	磨り使用面3面	覆土下層	
Q 22	扉后-扉石	6.2	5.2	3.9	216.5	安山岩	磨り使用面2面 敲き使用面2面	覆土上層	
Q 23	扉后-扉石	(8.6)	(7.0)	4.0	193.7	凝灰質砂岩	磨り使用面3面 凹み1か所	覆土下層	

第 614 号住居跡 (第 111 ~ 113 図)

位置 調査区東部の H 13f3 区、標高 17 m ほどの台地斜面部に位置している。

規模と形状 中央部から南部は削平されているため、規模は東西軸が 2.80 m で、南北軸は 1.44 m しか確認できなかった。形状は方形もしくは長方形と推定される。主軸方向は N - 1° - W である。壁高は 7 cm で、外



第 111 図 第 614 号住居跡実測図

傾して立ち上がっている。

床 西部から東部にかけてやや傾斜する貼床で、硬化面は認められない。確認できた壁下には幅6～17cmの壁溝が巡っている。貼床は確認面から5～14cm掘り込み、黒褐色土ブロックを含む暗褐色土を3～13cm埋土して構築されている。

竈 北壁中央部やや西寄りに付設されている。袖部・火床面は確認できなかった。規模は火床部から煙道まで47cmである。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、床面から外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 黒褐色 色 ローム粒子・焼土粒子中量 2 暗褐色 色 焼土ブロック少量

貯蔵穴 西部に位置している。長径80cm、短径70cmの楕円形で、深さは36cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 色 ロームブロック微量 3 暗褐色 色 ローム粒子少量
2 黒褐色 色 ロームブロック少量 4 暗褐色 色 ロームブロック中量

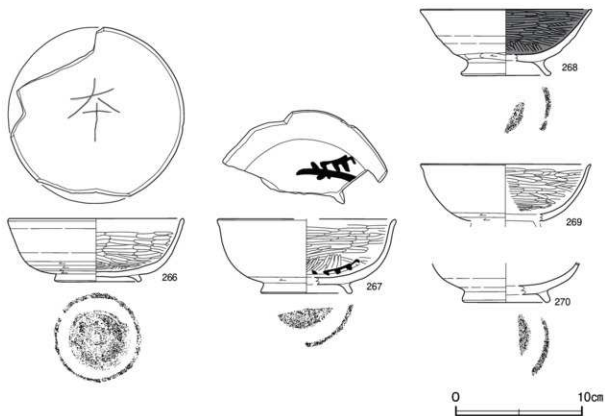
覆土 2層に分層できる。均一な土質であることから自然堆積と考えられる。第3層は貼床の構築土である。

土層解説

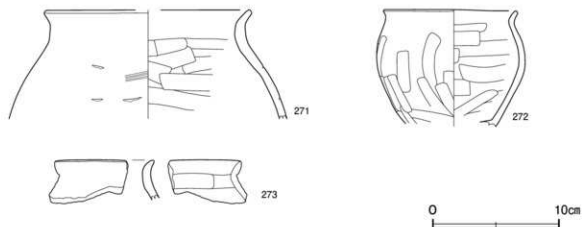
- 1 黒褐色 色 ローム粒子中量 3 暗褐色 色 ロームブロック中量、黒褐色ブロック少量
2 暗褐色 色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片48点（坏5、高台付碗7、埴1、甕35）が全面の覆土層から床面直上にかけて出土しており、中でも竈周辺から集中して出土している。272は竈の火床部から逆位の状態で出土しており、支脚として転用されたと考えられる。266・267・269～271・273は竈の覆土中から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片12点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉に比定できる。



第112図 第614号住居跡出土遺物実測図(1)



第113図 第614号住居跡出土遺物実測図(2)

第614号住居跡出土遺物観察表(第112・113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
266	土師器	高台付鍋	140	50	69	長石・石英・雲母	橙	良好	体部外面ロクロナデ 下層回転ヘラ張り 内面焼き 底部回転ヘラ張り 高台貼り付け 底部内面に刺書(本)	竈覆土中	80% PL28
267	土師器	高台付鍋	[140]	59	[70]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ロクロナデ 下層回転ヘラ張り 内面ヘラ焼き 底部回転ヘラ張り ナデ 高台貼り付け 底部内面に刺書(上)	竈覆土中	40% PL29
268	土師器	高台付鍋	136	52	68	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内面ロクロナデ 下層回転ヘラ張り 内面ヘラ焼き 底部回転ヘラ張り ナデ 高台貼り付け	覆土下層	50%
269	土師器	高台付鍋	[136]	(45)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ロクロナデ 下層回転ヘラ張り 内面ヘラ焼き	竈覆土中	20%
270	土師器	高台付鍋	-	(31)	[70]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ焼き 二次焼成によるハジケ 高台貼り付け	竈覆土中	5%
271	土師器	甕	[160]	(86)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部ナデ 輪轆内面ヘラナデ	竈覆土中・床面直上	5%
272	土師器	甕	104	(93)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部ヘラナデ・ヘラ張り 内面ヘラナデ	竈大床部	90%転用文脚 PL30
273	土師器	甕	-	(30)	-	長石・石英・ナット	橙	不良	口縁部外面横ナデ 内面横ナデ後、ヘラナデ	竈覆土中	5%未測

第617号住居跡(第114図)

位置 調査区南部のI 127区、標高20mほどの台地斜面部に位置しており、南部は調査区域外に延びている。

規模と形状 東西軸は5.50mで、南北軸は3.20mしか確認できなかった。形状は、隅丸長方形と推定される。

壁高は4～49cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は認められない。

ピット 5か所。P1～P5は深さ18～50cmで、性格不明である。

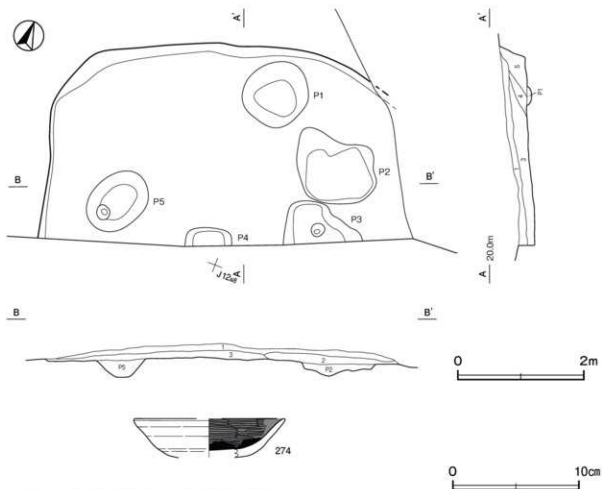
覆土 5層に分層できる。北壁付近で第3～5層が三角堆積を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	4 褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	5 褐色	黒褐色ブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック微量		

遺物出土状況 土師器片23点(坏3、甕20)、礫2点が全面の覆土上層から散在的に出土している。274は南東部の覆土上層から出土している。その他、流れ込んだと考えられる縄文土器片39点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、出土土器がわずかながら詳細な時期は不明だが、平安時代と考えられる。



第114図 第617号住居跡・出土遺物実測図

第617号住居跡出土遺物観察表(第114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
274	土製器	環	[120]	(3.1)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体底外縁ロケロナデ 内面へラ着き 黒色地層 塗白着	覆土上層	20%

表5 平安時代整々住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模	壁高	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考	
								柱穴	出入口	灶	石礎					
557	J 11a6	[長方形]	N-112°-E	3.69×2.88	30	地山	-	-	-	1	-	人為	土師器、金属製品	平安時代	SK3725、P111→*藤	
562	I 11a8	方形	N-102°-E	3.64×3.49	17~20	船床	-	4	-	2	1	1	自然	土師器、金属製品	10 C 前葉	S314→*藤+SK3E3
581	I 11a7	方形	N-19°-E	3.09×3.04	2~4	地山	-	-	-	1	-	-	自然	土師器、金属製品	9 C 後葉	本跡→P92
582	I 11a9	長方形	N-91°-E	4.05×3.68	19~24	船床	-	-	-	7	1	1	自然	土師器、金属製品	10 C 前葉	SK2698→本跡→P99~103
587	H 11a	長方形	N-90°-E	3.46×2.63	14~22	船床	1117 全周	-	-	-	1	-	自然	土師器	10 C 中葉	S182→*藤+SK3E3 [79]-81
588	H 12a1	長方形	N-93°-E	3.52×2.91	6~18	船床	全周	-	-	2	1	1	自然	土師器、土製品、金属製品	10 C 中葉	本跡→SK2541、 P95→*藤、104 →SK2545、P87
589	H 12a3	長方形	N-95°-E	3.36×2.84	4~6	船床	全周	-	1	-	1	-	自然	土師器、金属製品	10 C 中葉	P88→*藤→本跡 →SK2545、P87
591	I 11b4	-	-	(1.90)×(0.48)	4	地山	一部	-	-	-	1	-	人為	土師器、土製品	10 C 中葉	*藤→SD184、SK366
594	H 12a3	方形	N-89°-E	3.63×3.32	12	船床	1117 全周	-	-	2	-	1	自然	土師器、土製品	9 C 後葉	SK3727-3729→本跡 →SD201、P89

番号	位置	平面形	主軸方向	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁端	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)	
								土壇	土壇	土壇	土壇					
600	H 12d2	[長方形]	N-84°-W	5.39 × 3.86	17	貼床	(117) 全周	-	-	5	-	-	自然	土師器	10 C 中葉	SK3612・3700 → 本跡
601	H 1198	長方形	N-90°-E	4.29 × 3.40	16~23	貼床	-	-	-	2	1	-	自然	土師器、瓦器、陶器、石器、土製品、金属製品	10 C 前葉	本跡 → SK3612、SK3619
603	H 12d5	[方形]	N-86°-E	2.35 × 2.16	24~36	貼床	-	-	-	-	1	-	自然	土師器、瓦器、土製品	10 C 前葉	本跡 → SK3612、SK3619、SK3621・3625
604	H 12d5	長方形	N-2°-W	3.89 × 2.70	16~26	貼床	一部	-	-	-	2	1	自然	土師器、瓦器、石器	10 C 前葉	SK3608 → 本跡
606	H 12d3	長方形	N-81°-E	3.48 × 2.93	9~14	貼床	-	-	-	2	1	1	人工	土師器、土製品、石器、金属製品	10 C 前葉	SK612 → 本跡
607	H 12d4	長方形	N-81°-E	3.32 × 2.75	8~20	貼床	-	6	-	2	1	-	自然	土師器、土製品、金属製品	10 C 前葉	SK3629・3632 → 本跡
609	H 12d9	[長方形]	N-77°-E	3.20 × (2.41)	8	貼床	-	-	-	8	1	1	自然	土師器、金属製品	平安時代	本跡 → 1P51
611	H 12d5	[長方形]	N-95°-E	(3.14) × 2.82	22	地山	一部	-	-	1	1	-	自然	土師器、土製品、石器、金属製品	10 C 中葉	本跡 → SK3612、SK3620・3625・3631・3634
614	H 1303	[方形・ 長方形]	N-1°-W	2.80 × (1.44)	7	貼床	(117) 全周	-	-	-	1	1	自然	土師器	10 C 中葉	
617	I 127	[隅欠長 方形]	-	(5.50) × (3.20)	4~9	地山	-	-	-	5	-	-	自然	土師器	平安時代	

(2) 土坑

第 3730 号土坑 (第 115 図)

位置 調査区北部の H 12c2 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3612 号土坑を掘り込み、第 600 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 径 75cm ほどの不整形円と推定され、主軸方向は N-27°-E である。底面は平坦で、確認面からの深さは 20cm である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2 層に分層できる。第 1 層に多量の焼土が含まれていることから埋め戻されている。

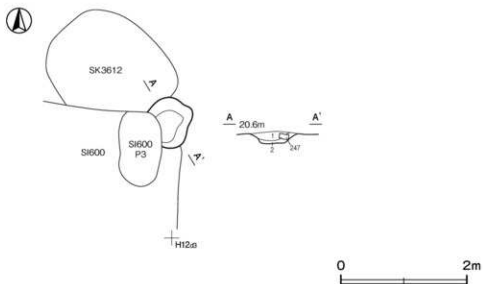
土層解説

1 層 褐色 焼土ブロック多量、炭化物粒微量

2 層 灰色 灰白色粘土ブロック中量、焼土粒中量

遺物出土状況 土師器片 5 点 (高台付椀 1、甕 4) が南部の覆土中層から出土している。第 604 号住居跡の甕と遺構間で接合したものは南部の覆土中層から集中して出土している。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 115 図 第 3730 号土坑実測図

4 近世の遺構と遺物

当時代の遺構は墓坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

墓坑

第3679号土坑（第116・117図）

位置 調査区西部のH114区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第564号住居跡を掘り込んでいる。

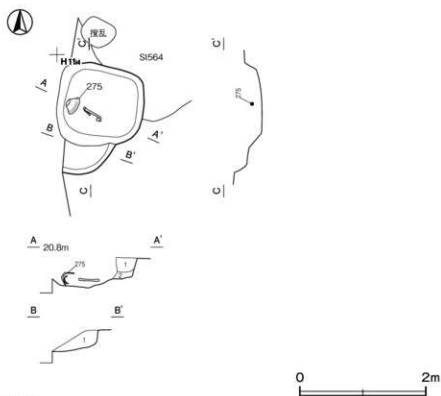
規模と形状 西部が削平されているため、規模は南北軸が1.8mで、東西軸は1.3mしか確認できなかった。形状は、不整長方形と推定され、中央部から北部は一段深く掘り込まれている。深さは10～30cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。遺物出土状況から埋め戻されている。

土層解説

1 濃い黄褐色 ロームブロック中量

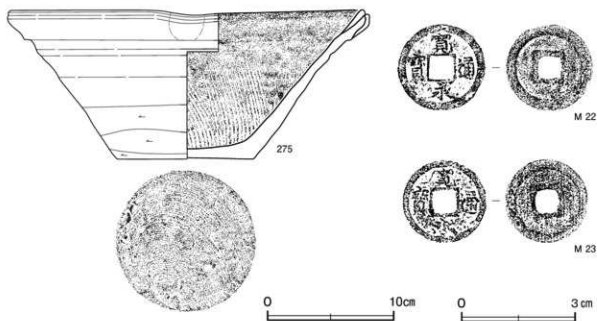
2 暗褐色 ロームブロック中量



第116図 第3679号土坑実測図

遺物出土状況 陶器1点（播鉢）、金属製品2点（銭貨）、人骨が底面直上から出土している。人骨は、中央部から頭蓋骨、左側上顎骨、第1頸椎、大腿骨、尺骨などが少量出土している。頭部は西部に置かれ、顔を南に向けた状態で埋葬されている。275は頭部に被せた状態で出土している。M22・23は重なった状態で人骨の南部から出土している。その他、混入したと考えられる縄文土器片2点（深鉢）、土師器片2点（甕）が出土している。

所見 時期は、出土遺物から近世に比定できる。遺物出土状況から墓坑と考えられ、本遺構周辺において当該期の墓坑が確認されていないことから、単独埋葬の可能性が高い。



第117図 第3679号土坑出土遺物実測図

第3679号土坑出土遺物観察表 (第117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
275	陶器	椀鉢	28.4	118	109	長石・石英	褐	良好	片口 鉄輪 体部上半ロクロナデ 下半ヘリ削り 内面ロクロナデ後、カキ目 底部(粘土未切り)	床面直上	PL31
番号	種別	銭名	径	孔距	重量	材質	初铸年	特徴		出土位置	備考
M22	銭貨	寛永通宝	2.3	0.7	3.2	銅	1636年	新寛永通宝	無背	床面直上	PL32
M23	銭貨	寛永通宝	2.2	0.6	2.2	銅	1636年	新寛永通宝	無背	床面直上	PL32

5 その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから時期を決定できない遺構として、竪穴住居跡1軒、溝跡9条、土坑217基、ピット群2か所、不明遺構1基を確認した。ここでは、竪穴住居跡のみ遺構の特徴などを記述し、他は実測図と一覧表を掲載する。

(1) 竪穴住居跡

第618号住居跡 (第118図)

位置 調査区北部のG124区、標高21mほどの台地平坦部に位置しており、北部は調査区域外に延びている。

規模と形状 床面まで削平されているため、壁溝が遺存するのみである。北部が調査区域外に延びているため、規模は、東西軸が2.72mで、南北軸は1.84mしか確認できなかった。形状は、方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN-14°-Wである。

床 幅17～25cmの壁溝が巡っている。調査区北壁の土層観察から、貼床は確認面から2～10cm掘り込み、ロームブロックを含む暗褐色土を埋土して構築されている。

覆土 第1層は壁溝覆土、第2層は貼床の構築土である。

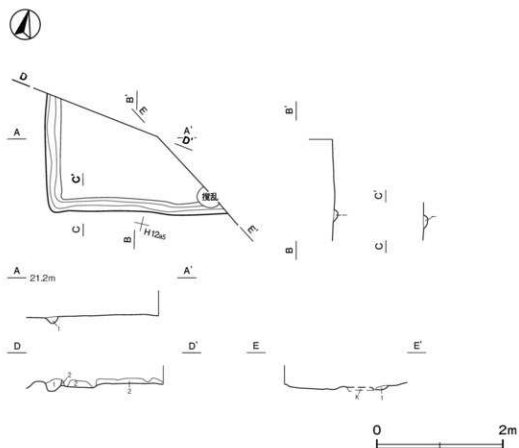
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量

2 暗褐色 ローム粒子少量(締まり弱い)

遺物出土状況 縄文土器片1点が確認面から出土している。

所見 時期は、出土遺物がわずかなため不明であるが、平面形状から古墳時代の可能性が考えられる。



第118図 第618号住居跡実測図

(2) 溝跡

時期・性格とも不明な溝跡について、一覧表を掲載する。実測図は遺構全体図で紹介する。

表6 時期不明溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
184	G 11j7 - I 11e4	N - 13° - E	直線状	63.20	204 - 462	0.13 - 0.42	97	右段	外積	自然	縄文土器、土師器、陶器、石器、金属製品	S330・361・56・289・611・SK358→4層→SK392・351・307・257・278・P4・5・79・72・21
200	H 11b4 - H 11e5	N - 17° - W	直線状	17.20	0.56 - 1.24	0.18 - 0.58	28	凹状	外積	自然	縄文土器、土師器	S336・344→SK350
201	H 12d2 - H 12j4	N - 73° - W N - 18° - E	L字状	13.21	0.35 - 0.85	0.16 - 0.36	14	凹状	外積	自然	-	SE294→本跡
202	H 12b5 - H 12g8	N - 82° - W N - 20° - E	L字状	64.86	0.46 - 1.56	0.12 - 0.60	52	右段	外積	自然	縄文土器、土師器、金属製品	S3603・605・611、SK3610・3623・3626・3631→4層→SK3598・3613・3619・3624

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	土幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
203	H 1108 ~ H 1109	N - 79° - W	直線状	(2.97)	0.40 - 0.51	0.32 - 0.46	8	平阻	外傾	自然	縄文土器、土師器	S813、SK3655 → 本跡 → S810
204	H 1209 ~ H 1210	N - 23° - W N - 46° - W	弧状	(2.51)	0.46 - 0.71	0.37 - 0.57	11	平阻	外傾	自然	縄文土器、土師器	
205	H 1167	N - 70° - W	直線状	2.57	0.40 - 0.52	0.35 - 0.46	6	平阻	外傾	自然	縄文土器、土師器	SK3616 → 本跡
206	I 126 - I 125	N - 8° - W N - 20° - E	弧状	(1.80)	0.28 - 0.68	0.11 - 0.68	13	平阻	外傾	自然	縄文土器	S120 → 本跡 → SK366
207	I 124 ~ I 122	N - 78° - W N - 12° - E	L字状	(3.90)	0.40 - 1.52	0.15 - 0.29	35	凹凸	外傾	自然	-	本跡 → SK3634、3636、3640、S1206

(3) 土坑

時期・性格とも不明な土坑について、一覧表を掲載する。実測図は遺構全体図で紹介する。

表7 時期不明土坑一覧表

番号	位置	長軸(短軸)方向	平面形状	規模		断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3494	I 1117	N - 75° - W	溝状	2.93 × 0.71	10	平阻	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3495	I 1118	-	円形	1.16 × 1.14	34	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器、石器	
3496	I 1119	N - 74° - W	楕円形	1.47 × 1.12	36	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3497	I 1140	N - 60° - W	楕円形	1.28 × 1.09	30	弧状	外傾	自然	土師器	
3498	I 124	-	楕円形	0.49 × 0.43	17	弧状	外傾	自然	-	
3499	I 124	-	楕円形	0.81 × 0.57	14	弧状	外傾	自然	-	
3500	I 12b3	-	円形	0.72 × 0.72	18	弧状	外傾	自然	-	
3501	I 12a3	-	楕円形	0.70 × 0.59	53	有段	外傾	自然	-	
3502	I 1119	N - 25° - W	楕円形	0.94 × 0.66	58	有段	外傾	自然	-	
3503	I 124	-	円形	0.75 × 0.70	46	有段	外傾	人為	-	
3504	I 124	-	円形	0.82 × 0.80	38	弧状	外傾	自然	-	
3505	I 12b3	N - 74° - W	楕円形	0.66 × 0.56	26	弧状	外傾	自然	-	
3506	I 12b3	-	楕円形	0.77 × 0.65	64	有段	外傾	自然	縄文土器	
3507	I 12e2	N - 69° - W	楕円形	1.36 × 0.96	52	有段	外傾	自然	-	
3508	I 12a2	N - 5° - W	楕円形	1.99 × 1.02	20	弧状	外傾	自然	土師器	
3509	I 11e0	-	円形	0.66 × 0.64	65	有段	外傾	自然	-	
3510	I 12f1	N - 20° - W	不整形	0.91 × 0.74	65	有段	外傾	自然	-	
3511	I 11b7	N - 2° - W	隅丸長方形	0.74 × 0.71	82	有段	外傾	人為	-	
3512	I 11b0	N - 47° - W	楕円形	0.64 × 0.57	34	有段	外傾	人為	縄文土器	
3513	I 11b8	-	円形	0.77 × 0.76	62	有段	外傾	自然	-	
3514	I 1119	N - 34° - W	楕円形	1.12 × 0.93	36	平阻	外傾	人為	縄文土器	
3515	I 11b9	-	円形	0.58 × 0.54	65	有段	外傾	自然	-	
3516	I 12c3	-	円形	1.06 × 0.97	77	凹凸	外傾	自然	縄文土器	
3517	I 11b8	N - 56° - W	楕円形	0.86 × 0.64	23	平阻	直立	自然	土師器	
3518	H 11b8	N - 18° - W	楕円形	1.34 × 1.03	78	平阻	外傾	自然	土師器	
3519	H 11b8	N - 22° - E	不整形	1.56 × 1.16	34	弧状	外傾	自然	-	
3520	I 11b0	N - 46° - W	楕円形	1.22 × 1.02	104	有段	外傾	人為	土師器	
3521	I 12b1	N - 37° - E	隅丸長方形	1.74 × 0.72	64	凹凸	外傾	人為	-	
3523	I 11b0	N - 59° - W	隅丸長方形	1.16 × 0.96	74	凹凸	直立	人為	土師器	
3524	J 12a3	N - 74° - E	楕円形	1.20 × 0.86	98	有段	外傾	自然	-	SK3625 → 本跡
3525	J 12a3	-	[隅丸長方形]	1.08 × 0.98)	50	平阻	外傾	自然	-	本跡 → SK3624

番号	位置	長軸(方向)	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複円柱(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
3526	I 12b1	N-35'-E	隅丸長方形	1.69×1.36	14	平坦	外傾	自然	縄文土器、土師器	S815→本跡
3527	I 11a0	N-9'-W	隅丸方形	1.13×1.13	20	平坦	直立	自然	縄文土器、土師器、金属製品	SE96、S88→本跡
3528	I 11a9	N-2'-W	隅丸長方形	1.27×0.92	24	皿状	外傾	自然	土師器	SE98→本跡
3530	H 118	N-67'-W	楕円形	1.08×0.70	47	凹凸	外傾	自然	土師器	
3531	H 118	N-12'-W	楕円形	1.64×0.90	34	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3532	I 12a3	N-62'-E	楕円形	1.41×0.82	88	平坦	外傾	自然	-	
3533	I 11f9	N-55'-E	長方形	2.59×1.03	123	凹凸	直立	人為	縄文土器、土師器、金属製品	SE95→本跡
3534	I 12a3	-	円形	0.99×0.94	25	皿状	外傾	自然	-	
3535	H 11f9	-	円形	0.89×0.85	30	皿状	外傾	自然	土師器	
3536	I 12a4	N-89'-E	隅丸長方形	0.87×0.62	24	皿状	外傾	自然	-	
3537	I 11a0	N-35'-E	隅丸長方形	1.60×0.95	37	平坦	外傾	自然	-	
3538	I 118	N-3'-E	楕円形	1.11×0.68	36	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	SE62→本跡
3539	H 110	N-36'-E	隅丸長方形	1.62×1.17	88	平坦	直立	人為	縄文土器、土師器、須恵器	SE87→本跡
3540	I 11a9	N-24'-E	楕円形	0.82×0.59	57	有段	外傾	自然	-	SE84→本跡
3541	H 120	N-63'-W	不整形	0.86×0.69	54	有段	外傾	自然	-	SE88→本跡
3542	I 12a4	N-47'-E	長方形	1.76×1.16	100	凹凸	外傾	人為	-	
3543	H 11a4	N-8'-E	楕円形	1.27×0.85	18	平坦	外傾	自然	-	SD200→本跡
3544	I 11a0	N-27'-E	楕円形	1.30×0.87	24	平坦	外傾	自然	土師器	
3545	H 123	N-30'-E	不整形	3.68×1.39	91	凹凸	外傾	人為	-	SE89、P87→本跡
3546	I 11b4	-	円形	1.08×1.06	23	凹凸	外傾	自然	土師器	SE91→本跡
3547	I 11c6	N-64'-E	楕円形	2.22×1.42	40	皿状	外傾	人為	縄文土器、土師器	
3549	H 1114	N-10'-W	楕円形	0.86×0.67	25	平坦	外傾	自然	縄文土器、土師器	SE90→本跡
3550	H 11a0	-	円形	1.12×1.04	72	有段	直立	自然	縄文土器、土師器	
3551	H 11a0	N-36'-W	楕円形	0.89×0.73	45	凹凸	外傾	自然	-	
3552	H 11a0	N-31'-W	楕円形	2.16×1.48	97	凹凸	外傾	自然	縄文土器	
3553	H 11a9	N-42'-W	楕円形	1.72×1.29	114	平坦	外傾	人為	-	SK3554→本跡
3555	H 11a9	-	円形	0.88×0.88	45	有段	外傾	自然	縄文土器	
3556	H 11c6	N-25'-W	楕円形	1.23×0.97	58	凹凸	直立	自然	縄文土器、土師器	
3557	H 1117	N-26'-W	隅丸長方形	1.92×0.98	79	平坦	外傾	人為	縄文土器、土師器	
3558	H 11c0	N-21'-E	楕円形	0.62×0.54	40	平坦	外傾	自然	土師器、石器	SE92→本跡
3559	H 11a8	N-25'-E	楕円形	1.99×1.35	78	凹凸	外傾	自然	土師器、土製品	S801→本跡
3560	H 11a9	-	楕円形	0.75×0.68	11	平坦	外傾	自然	縄文土器、土師器	SE97-613→本跡
3561	H 11c0	N-2'-W	楕円形	1.52×1.26	18	平坦	外傾	自然	縄文土器、土師器	S813→本跡
3562	H 11a6	N-13'-W	楕円形	1.49×(0.72)	42	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	SD184→本跡
3563	H 125	N-54'-E	長方形	1.58×0.63	84	平坦	直立	人為	土師器	SE95→本跡
3564	H 124	N-65'-E	楕円形	1.51×0.88	44	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	SE95→本跡
3565	H 11a9	N-87'-W	楕円形	0.97×0.64	21	平坦	外傾	自然	-	
3566	H 12a2	N-24'-W	楕円形	1.37×1.20	88	有段	直立	人為	縄文土器、土師器、土製品	
3567	H 11a9	N-30'-E	楕円形	1.32×1.00	50	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3568	H 11a0	-	円形	0.72×0.66	22	皿状	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3569	H 12a1	N-82'-E	楕円形	1.02×0.80	78	有段	外傾	人為	縄文土器、土師器	
3570	H 12a1	N-70'-W	楕円形	1.74×1.36	22	平坦	外傾	自然	-	
3571	H 11a6	-	楕円形	[1.60]×[1.40]	90	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	SD184→本跡
3572	H 11a9	N-34'-W	楕円形	1.21×0.81	30	平坦	直立	自然	縄文土器、土師器	S813→本跡 →SE97、P27
3573	H 123	N-34'-W	不整形	2.12×1.28	68	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→P86
3574	H 12a1	N-3'-E	楕円形	1.16×0.79	16	平坦	外傾	自然	縄文土器	

番号	位置	長軸(方向)	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複円柱(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
3575	H 1169	N-30'-E	楕円形	0.86×0.60	15	平皿	外傾	自然	-	S813→本跡
3576	I 1188	-	[長方形]	1.06×(0.40)	16	平皿	外傾	自然	-	S881→本跡
3577	H 1242	-	円形	0.76×0.76	30	皿状	外傾	自然	縄文土器	
3578	H 1222	N-70'-W	楕円形	1.10×0.90	20	平皿	外傾	自然	縄文土器	
3579	H 1242	N-66'-W	楕円形	1.14×0.94	32	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3580	H 1148	N-21'-W	楕円形	0.89×0.69	25	平皿	外傾	自然	-	
3582	H 1242	-	円形	0.67×0.64	26	皿状	外傾	自然	縄文土器	
3583	H 1222	N-26'-W	楕円形	(1.31)×(0.84)	27	平皿	外傾	自然	-	
3584	H 1242	N-71'-W	楕円形	0.86×0.73	19	平皿	外傾	自然	-	
3585	H 1168	N-70'-E	楕円形	1.12×0.84	55	有段	外傾	自然	土師器	
3586	H 1244	-	円形	1.16×1.07	44	平皿	外傾	自然	縄文土器、土師器、土製品	SK3587→本跡
3587	H 1244	N-36'-W	楕円形	2.29×(2.02)	17	平皿	外傾	自然	縄文土器、土師器	S903、SK3624、SD332→本跡 →SK3586
3589	I 1146	N-58'-E	楕円形	1.16×0.97	23	平皿	外傾	人為	縄文土器、土師器	
3590	H 1245	N-52'-W	楕円形	1.29×0.94	31	皿状	外傾	人為	縄文土器、土師器	
3591	H 1245	-	円形	0.88×0.85	30	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	SK3722→本跡
3592	H 1246	N-23'-W	楕円形	1.48×1.05	37	平皿	外傾	人為	縄文土器、土師器	SK3722→本跡
3593	H 1246	-	円形	0.88×0.81	28	皿状	外傾	自然	縄文土器、土師器、石器	
3595	H 1243	N-1'-E	楕円形	0.87×0.77	24	平皿	外傾	自然	-	
3597	H 1245	-	円形	0.90×0.90	30	平皿	外傾	自然	縄文土器、土師器	S905→本跡
3598	H 1244	N-14'-E	楕円形	1.62×1.29	102	平皿	外傾	自然	縄文土器、土師器	S903、SK3019、3021、SD332→本跡
3599	H 1246	-	円形	1.37×1.37	59	凹凸	外傾	人為	縄文土器	
3600	H 1246	N-73'-E	隅丸長方形	1.34×1.13	57	皿状	外傾	自然	縄文土器	
3601	H 1245	N-45'-W	楕円形	0.66×0.59	17	凹凸	外傾	人為	-	
3602	H 1245	N-41'-E	楕円形	0.90×0.69	38	平皿	外傾	人為	縄文土器、土師器	
3603	H 1140	N-60'-W	楕円形	1.24×1.04	13	平皿	外傾	自然	-	
3604	H 1341	N-68'-W	楕円形	0.77×0.65	17	平皿	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3605	H 1246	N-62'-E	長方形	1.67×0.69	79	凹凸	直立	人為	縄文土器、土師器、礎	
3606	H 1242	N-75'-E	楕円形	1.04×0.78	18	平皿	直立	人為	縄文土器	
3607	G 1138	N-49'-E	楕円形	1.32×0.97	58	皿状	外傾	自然	-	SD184→本跡
3608	H 1245	N-30'-W	楕円形	1.00×0.87	19	平皿	外傾	自然	縄文土器、土師器	本跡→S904、SK307
3609	H 1140	N-30'-E	楕円形	0.94×0.61	26	凹凸	外傾	自然	縄文土器	
3610	H 1244	N-20'-E	長方形	1.38×0.58	45	凹凸	外傾	人為	土師器	S85→本跡→SD332
3611	H 1241	N-39'-W	不整形	1.53×1.27	32	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	S905→本跡
3613	H 1244	N-26'-E	楕円形	0.86×(0.74)	50	平皿	外傾	自然	土師器	SK3619、SD332→本跡
3614	H 1148	-	円形	0.59×0.55	36	皿状	外傾	自然	-	
3615	H 1247	N-7'-W	楕円形	1.08×0.86	25	皿状	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3616	H 1147	N-19'-W	楕円形	1.09×(0.80)	25	平皿	外傾	自然	縄文土器、土師器	本跡→SD205
3617	H 1244	N-86'-E	隅丸長方形	2.10×1.45	110	平皿	外傾	人為	縄文土器、土師器	SK3608、P48→本跡
3618	H 1240	N-71'-W	隅丸長方形	1.50×0.74	54	凹凸	外傾	人為	-	
3619	H 1244	N-25'-E	楕円形	1.43×1.21	92	平皿	直立	人為	土師器、土製品	SD202→本跡 →SK3598、3613
3620	H 1245	N-82'-W	不整形	2.13×(1.18)	128	凹凸	直立	人為	縄文土器、土師器、土製品	S911、SK3620→本跡
3623	H 1246	-	不整形	2.02×(1.29)	70	皿状	外傾	人為	縄文土器、土師器	本跡→SD202
3624	H 1244	-	円形	(1.76)×1.68	64	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器、土製品	S903、SD332→本跡 →SD3367、3368
3625	H 1245	N-62'-E	楕円形	1.86×0.88	114	凹凸	外傾	人為	土師器	S903、611→本跡
3626	H 1249	N-56'-W	不整形	2.84×2.19	96	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	本跡→SD202

番号	位置	長軸(因方角)	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
3627	H 1260	-	円形	0.87×0.82	35	凹凸	外傾	自然	-	
3628	H 1264	N-75°-W	楕円形	1.56×1.00	24	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器、石器	
3629	H 1264	-	楕円形	1.48×(0.37)	11	凹凸	直立	自然	-	本跡→SI607
3630	H 1268	N-19°-E	楕円形	1.74×0.76	85	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	SI608、SK3704→本跡
3631	H 1268	N-30°-W	楕円形	(1.23×(1.0))	64	皿状	外傾	人為	縄文土器、土師器	本跡→SD202
3632	H 1264	-	[楕円形]	(0.63)×0.63	15	平坦	外傾	自然	縄文土器、土師器	本跡→SI607
3633	H 1265	N-17°-W	不整形	(1.46)×1.28	73	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器、鉄製品	SI611→本跡 →SK3620、3634
3634	H 1265	N-69°-E	楕円形	1.61×0.81	72	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	本跡→SI607
3635	H 1361	N-65°-W	隅丸長方形	1.15×1.04	67	平坦	外傾	人為	縄文土器、土師器、陶器、土製品	
3636	I 1267	N-81°-W	楕円形	1.12×0.94	95	平坦	直立	人為	縄文土器、土師器	SD207→本跡
3638	I 1160	N-21°-W	楕円形	0.71×0.60	34	皿状	外傾	自然	-	
3639	H 1268	-	円形	1.17×1.09	25	平坦	外傾	自然	-	
3640	I 1266	N-16°-E	隅丸長方形	1.42×1.26	90	凹凸	直立	人為	縄文土器、土師器、陶器	SD207→本跡
3641	H 1364	N-13°-E	隅丸長方形	2.28×(1.03)	95	平坦	直立	人為	縄文土器、土師器	
3642	I 1265	N-87°-E	隅丸長方形	1.98×1.13	26	平坦	直立	自然	縄文土器、石器	SK3652→本跡
3643	I 1362	N-19°-W	楕円形	0.80×0.68	26	皿状	外傾	自然	-	
3644	I 1364	N-30°-E	楕円形	1.33×1.03	60	凹凸	外傾	自然	-	
3645	I 1264	N-65°-E	不整形	2.11×1.55	108	凹凸	外傾	人為	-	
3646	H 1263	N-33°-W	楕円形	0.86×0.72	44	皿状	外傾	人為	-	
3647	H 1264	N-53°-W	不整形	0.99×0.74	49	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3648	H 1269	N-75°-W	長方形	1.45×0.94	14	凹凸	外傾	自然	土師器	
3649	I 1363	N-49°-E	隅丸長方形	1.72×0.70	76	凹凸	直立	人為	土師器	
3650	I 1260	-	楕円形	0.86×0.70	37	平坦	外傾	自然	-	
3651	I 1363	N-30°-E	不整形	1.74×1.02	94	凹凸	直立	人為	-	
3652	I 1265	N-15°-E	隅丸長方形	1.88×1.21	86	凹凸	直立	人為	縄文土器、土製品、伊壁	本跡→SK3642
3653	H 1263	N-9°-E	隅丸長方形	1.40×1.17	52	平坦	直立	人為	縄文土器、土師器	
3654	I 1365	-	円形	0.84×0.78	52	凹凸	外傾	自然	-	
3655	H 1169	N-62°-E	隅丸長方形	(1.70)×(1.48)	123	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	SI610→本跡→SD203
3656	H 1363	N-16°-E	隅丸長方形	1.84×0.93	44	平坦	直立	人為	-	SK3718→本跡
3657	I 1303	N-10°-E	楕円形	0.92×0.79	24	平坦	直立	自然	-	
3658	I 1260	N-65°-E	楕円形	0.82×0.73	18	平坦	外傾	自然	-	
3659	I 1269	-	円形	0.98×0.94	28	皿状	外傾	自然	-	
3660	I 1362	N-6°-E	楕円形	1.93×1.43	30	平坦	外傾	自然	-	
3661	H 1363	-	楕円形	0.73×(0.65)	50	平坦	外傾	自然	縄文土器	
3662	H 1362	N-83°-W	楕円形	0.67×0.60	18	平坦	外傾	自然	縄文土器	
3664	I 1365	-	[楕円形]	1.78×(1.22)	199	平坦	外傾	自然	-	
3667	I 1267	N-57°-W	楕円形	2.03×1.70	35	平坦	外傾	自然	縄文土器	
3668	I 1288	-	円形	1.80×1.72	53	平坦	外傾	自然	縄文土器	
3669	I 1362	N-71°-E	楕円形	0.68×0.60	54	有段	外傾	人為	-	
3670	I 1266	-	円形	0.79×0.73	20	平坦	外傾	自然	縄文土器、土師器	
3671	H 1263	-	[楕円形]	2.21×(0.70)	28	平坦	外傾	自然	-	SK363、364→本跡
3672	I 1268	N-37°-E	不整形	2.38×1.60	126	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器、伊壁	
3673	I 1268	N-55°-E	不整形	1.11×1.04	80	皿状	直立	人為	土師器	
3674	I 1267	N-73°-E	楕円形	0.88×0.74	15	凹凸	外傾	自然	-	
3675	I 1268	N-74°-E	不整形	1.52×1.11	44	皿状	外傾	自然	土師器	
3676	I 1366	N-25°-W	楕円形	1.90×(1.32)	176	凹凸	外傾	自然	-	

番号	位置	長軸(団方)	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複円柱(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3677	I 127	-	円形	0.82×0.78	25	皿状	外傾	自然	-	SK3724→本跡
3678	I 126	-	円形	1.40×1.34	36	皿状	外傾	自然	-	
3680	I 129	N-62°-W	楕円形	1.16×0.98	35	平皿	外傾	自然	石器	
3681	H 12g3	-	円形	1.22×1.14	40	凹凸	外傾	自然	縄文土器	
3682	I 1246	N-49°-E	隅丸長方形	1.10×0.80	74	有段	直立	人為	縄文土器	
3683	H 133	-	[楕円形]	0.641×(0.48)	16	皿状	外傾	自然	-	本跡→SK3671
3684	H 134	-	円形	1.21×(1.18)	71	平皿	外傾	自然	-	本跡→SK3671
3685	H 133	N-85°-E	楕円形	1.35×0.65	30	平皿	外傾	人為	-	
3686	I 12c5	-	楕円形	0.883×0.79	22	平皿	外傾	自然	-	SD206→本跡
3687	I 130	N-4°-W	楕円形	1.94×1.09	67	凹凸	外傾	人為	-	
3688	I 13b1	-	円形	0.84×0.75	33	平皿	外傾	自然	-	
3689	I 126	-	円形	0.68×0.66	35	平皿	直立	自然	-	
3690	I 13c1	N-8°-E	楕円形	1.46×1.19	41	平皿	直立	自然	-	
3691	I 12g1	-	円形	0.75×0.72	38	有段	外傾	自然	-	
3692	I 11c9	N-36°-W	楕円形	1.14×1.01	52	有段	外傾	自然	縄文土器	
3693	I 12d1	N-70°-E	隅丸長方形	1.04×0.72	74	有段	直立	自然	-	
3694	I 11c0	N-16°-E	楕円形	1.36×0.99	52	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	SK3695→本跡
3695	I 11c0	N-16°-E	楕円形	1.081×0.86	42	皿状	外傾	自然	縄文土器、土師器	本跡→SK3694
3696	I 12c4	N-78°-W	楕円形	2.06×0.68	98	平皿	直立	人為	土師器	
3697	I 12d1	N-7°-E	楕円形	0.98×0.86	24	平皿	直立	自然	土師器	
3698	I 11f0	N-50°-E	楕円形	1.281×0.83	108	有段	外傾	人為	土師器	本跡→S1582
3699	H 11b0	N-76°-W	隅丸長方形	2.79×1.06	118	凹凸	直立	人為	縄文土器、土師器	本跡→P34
3700	G 11g	-	円形	1.30×1.21	42	凹凸	外傾	自然	縄文土器	
3701	I 12d6	-	楕円形	1.33×1.06	47	凹凸	外傾	自然	縄文土器	
3702	I 12b2	N-40°-W	隅丸長方形	1.40×1.10	89	凹凸	直立	人為	縄文土器、土師器、礎	S615→本跡
3703	I 127	-	円形	1.28×1.34	46	凹凸	外傾	自然	縄文土器、石器	SK3724→本跡
3704	H 1248	N-17°-E	楕円形	1.371×0.69	84	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	S808→本跡 →SK3630
3705	H 12c8	-	楕円形	0.901×(0.50)	28	凹凸	外傾	人為	-	S808→本跡
3707	H 1146	N-48°-W	楕円形	0.62×0.52	64	凹凸	外傾	自然	土師器	SD184→本跡
3708	H 1146	-	円形	0.71×0.70	85	有段	外傾	自然	土師器	SD184→本跡
3709	H 1146	N-58°-W	楕円形	0.62×0.42	82	凹凸	外傾	自然	縄文土器、土師器	SD184→本跡
3710	I 127	N-60°-E	楕円形	1.09×0.77	44	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	
3711	H 127	N-17°-W	楕円形	1.03×0.74	30	凹凸	外傾	自然	-	SK3712→本跡
3713	H 124	N-20°-W	楕円形	2.70×1.15	26	皿状	外傾	自然	土師器、土製品	S295→*B→P30-31
3714	I 12b1	N-69°-W	隅丸長方形	0.76×0.48	47	平皿	直立	自然	縄文土器	S815、SK3715→*B
3715	I 12b1	N-68°-E	不整形	1.03×0.92	52	平皿	外傾	自然	縄文土器	S815→*B→SK3715
3716	I 12g5	N-48°-E	不整形	2.30×1.24	40	凹凸	外傾	人為	鉄製品	
3717	H 12c5	N-77°-W	楕円形	1.54×1.26	56	凹凸	外傾	人為	縄文土器、土師器	SK3721→本跡
3718	H 133	-	楕円形	1.67×(1.43)	198	平皿	直立	自然	-	本跡→SK3666
3719	H 12d7	-	楕円形	1.12×0.86	75	平皿	直立	人為	-	SK3726→本跡
3720	I 126	N-83°-W	楕円形	1.22×0.80	52	凹凸	外傾	自然	-	
3722	H 1246	N-65°-W	楕円形	1.61×1.03	90	平皿	外傾	人為	-	*B→SK399、SK
3723	H 12c7	N-78°-W	楕円形	1.67×0.74	82	凹凸	外傾	人為	-	SK376→*B
3724	I 127	N-48°-E	楕円形	1.04×(0.70)	34	皿状	外傾	自然	-	*B→SK367、SK
3725	J 11a5	-	円形	0.891×0.82	26	凹凸	外傾	自然	-	*B→S252、P11
3726	H 1246	-	不整形	1.901×1.71	35	皿状	外傾	自然	-	*B→SK379、SK

番号	位置	長軸(団)方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3727	H 12b3	-	円形	0.79×0.74	20	平出	外傾	自然	陶文土器、土師器	本跡→SI594
3728	J 11b9	-	円形	1.25×1.15	36	凹凸	外傾	自然	-	SB619→本跡
3729	H 12b3	-	[楕円形]	(1.11)×0.67	32	凹凸	外傾	自然	-	本跡→SI594

(4) ビット群

2か所確認された。第3号ビット群は、H11c7～H11f0にかけての東西11m、南北12mの範囲からビット19か所、第4号ビット群は、H12g9～H13h1にかけての東西10m、南北9mの範囲からビット14か所が確認された。いずれも掘立柱建物跡や横列を想定できる規則的な配置は認められず、出土遺物もわずかなため、用途・時期などは不明である。ここでは、群ごとのビット群計測表及びビット群一覧表を掲載し、実測図は遺構全体図で紹介する。

第3号ビット群計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
3	46	37	45	11	54	54	17	21	48	45	41
4	48	44	21	12	30	28	31	22	60	52	42
5	36	32	32	13	34	32	51	23	50	40	28
6	38	36	18	14	36	34	40	25	39	28	36
8	42	39	26	15	58	48	42	26	41	41	13
9	36	18	19	16	40	32	47				
10	32	26	37	20	52	52	15				

第4号ビット群計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
42	28	24	23	59	29	28	20	65	58	49	40
43	46	31	32	60	27	24	39	105	42	40	25
51	33	32	39	61	28	22	26	106	33	32	23
52	42	34	17	63	49	46	44	107	62	30	64
56	45	38	30	64	30	26	42				

表8 時期不明ビット群一覧表

番号	位置	範囲(m)		ビット数	ビット平面形	規模(cm)			主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
		南北	東西			長径	短径	深さ		
3	H 11c7～H 11f0	12	11	19	円・楕円	30～60	18～52	13～51	-	
4	H 12b9～H 13h1	9	10	14	円・楕円	27～62	22～30	17～64	-	

(5) 不明遺構

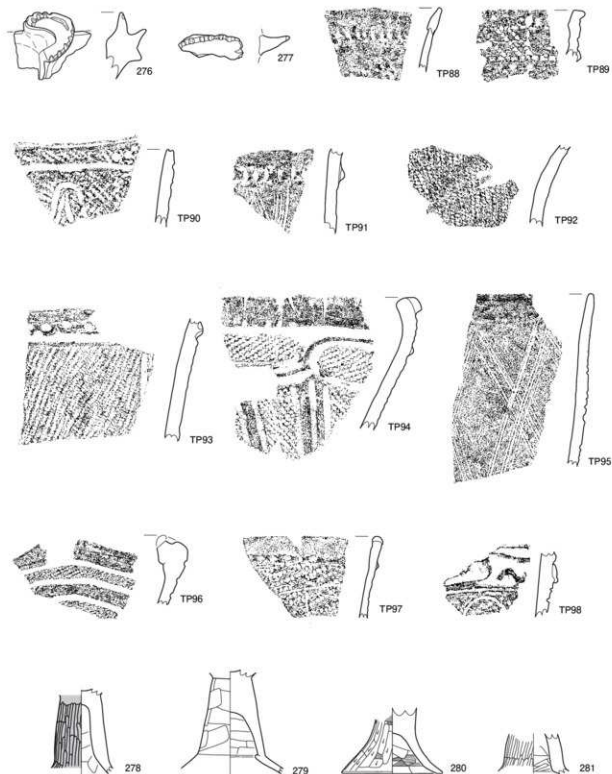
一覧表を掲載する。実測図は遺構全体図で紹介する。

表9 時期不明遺構一覧表

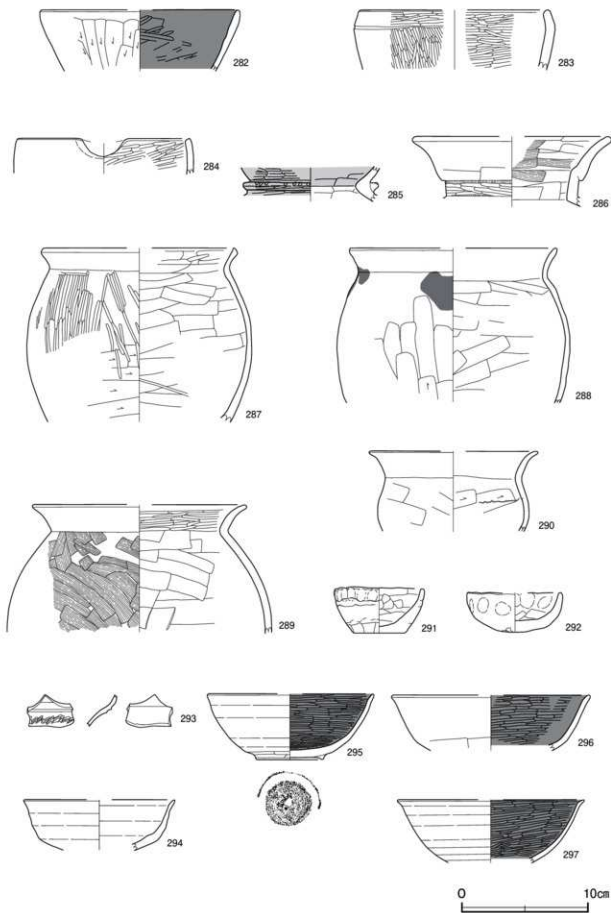
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3	H 12f5	-	不整楕円形	0.25×0.18	-	-	-	-	-	

(6) 遺構外出土遺物

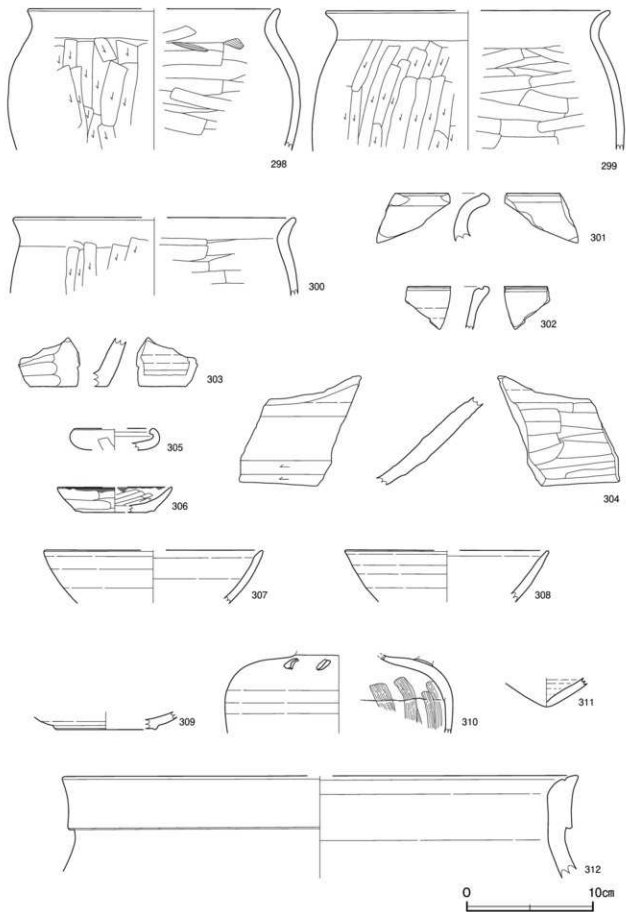
遺構に伴わない主な遺物について実測図及び観察表を掲載する。



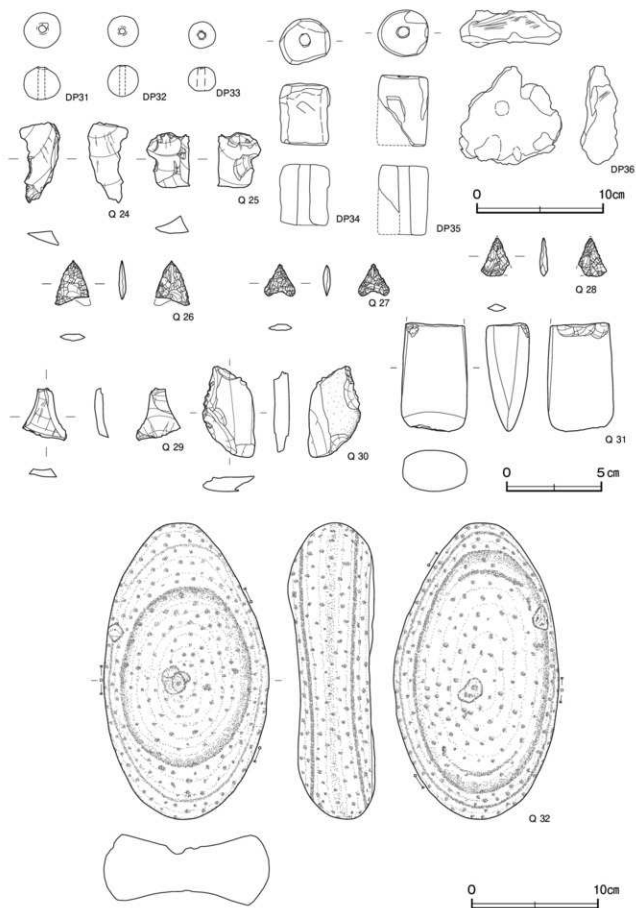
第119図 遺構外出土遺物実測図(1)



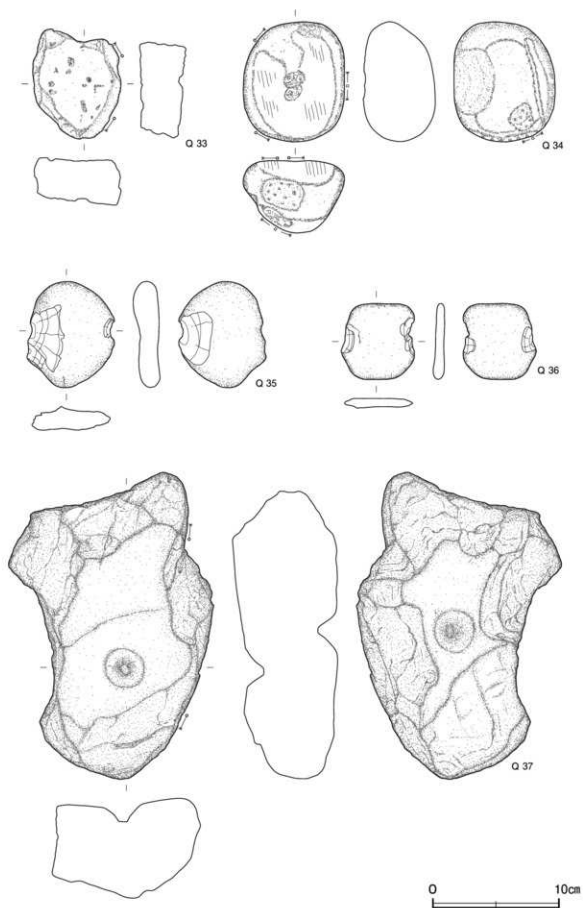
第120图 遗構外出土遺物実測図(2)



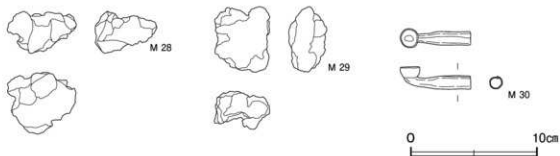
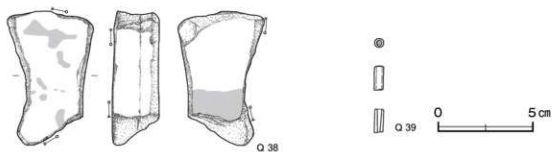
第121图 造桥外出土遺物実測図(3)



第122图 遗構外出土遺物実測図(4)



第123图 遺構外出土遺物実測図(5)



第 124 図 遺構外出土遺物実測図 (6)

遺構外出土遺物器観察表 (第 119 ~ 124 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
276	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	長石・石英・雲母	にふ・赤黒	普通	キザミを有する突起部	表土	5%未調査台式
277	縄文土器	深鉢	-	(1.5)	-	長石・石英・雲母	明赤黒	普通	キザミを有する隆帯	SE97	5%未調査台式
278	土師器	高坏	-	(6.7)	-	長石・石英	赤	普通	脚部外面へう磨き・赤彩 内面へうナデ	横孔	30%
279	土師器	高坏	-	(8.3)	-	長石・石英	にふ・黄黒	普通	脚部外・内面へうナデ	横孔	30%
280	土師器	高坏	-	(5.2)	[8.0]	長石・石英	にふ・黄黒	良好	脚部外面へう磨き・赤彩 内面へうナデ 内面へう目後・へうナデ	SD184	30%
281	土師器	高坏	-	(3.1)	-	長石・石英	橙	普通	脚部外面へう磨き 内面へうナデ	SE87	5%
282	土師器	鉢	[15.8]	(4.9)	-	長石・石英	にふ・黄黒	普通	体部外面へう磨き 内面へう磨き 赤彩 黒色処理	SB006	5%
283	土師器	鉢	[15.2]	(4.6)	-	長石・石英	橙	普通	体部外・内面へう磨き	SE91	5%
284	土師器	鉢	[13.6]	(2.8)	-	長石・石英	赤黒	普通	体部外面横ナデ 内面へう磨き	SB004	5%
285	土師器	甕	-	(2.7)	-	長石・石英	赤	普通	脚部外面へう磨き・赤彩 キザミを有する隆帯 貼付け 内面へうナデ 上半赤彩	SK3535	5%未調査
286	土師器	甕	[15.8]	(5.6)	-	長石・石英	にふ・黄黒	普通	口縁部外面横ナデ化・へうナデ 内面へう目後・へうナデ 脚部外面へう目後・へう磨き	SK3591	5%
287	土師器	甕	[15.6]	(13.8)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面へうナデ 体部外面上半へう磨き 下半へう磨き 内面へうナデ	SK3592	20%
288	土師器	甕	[16.4]	(12.2)	-	長石・石英・雲母	にふ・黄黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう磨き 横付着 二次焼成によるハシケ 内面へうナデ	SB011	30%
289	土師器	甕	[17.0]	(10.2)	-	長石・石英	にふ・黄黒	普通	口縁部外面横ナデ 内面横ナデ後・へう磨き 体部外面へう目後・横付着 内面へうナデ	表土	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
290	土師器	甕 [13.4]	(6.3)	-	-	長石・石美	明黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘナデ 裏縁 内面ヘナデ	SD806	10%
291	土師器	土師土器 高台付瓶 [7.2]	4.2	3.7	-	長石・石美	明赤褐色	良好	体部外面横ナデ 下ヘナデ 輪縁 内面ヘナデ	SK3592	70%
292	土師器	手取土器 [7.6]	3.1	[2.0]	-	長石・石美	橙	普通	体部外・内面面指縁・ヘナデ	SK3620	30%
293	須恵器	瓶 -	(2.6)	-	-	長石・石美	褐色	良好	胴部外面口コロナデ 底状文 内面口コロナデ	SD904	5%未満
294	土師器	坏 [12.0]	(4.0)	-	-	長石・石美・雲母	明黄褐色	普通	体部外・内面口コロナデ	SK3546	10%
295	土師器	高台付瓶 [13.2]	5.2	5.4	-	長石・石美・雲母	橙	普通	体部外面口コロナデ 下縁ヘナデ 内面ヘナデ 黒色処理	表土	40%
296	土師器	高台付瓶 [15.8]	(4.4)	-	-	長石・石美	にぶい黄褐色	普通	体部外面口コロナデ 下縁ヘナデ 内面ヘナデ 黒色処理	SK3625	10%
297	土師器	高台付瓶 [14.8]	(5.0)	-	-	長石・石美	橙	良好	体部外面口コロナデ 下縁面ヘナデ 内面ヘナデ 黒色処理	SK3546	20%
298	土師器	甕 [20.0]	(11.2)	-	-	長石・石美	明黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘナデ 内面ヘナデ・ハナヒ	SK3559	10%
299	土師器	甕 [22.6]	(11.1)	-	-	長石・石美	橙	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘナデ 内面ヘナデ	SD184	10%
300	土師器	甕 [22.4]	(6.2)	-	-	長石・石美	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘナデ 内面ヘナデ	SK3620	5%未満
301	須恵器	甕 -	(3.8)	-	-	長石・石美	暗灰	良好	口縁部外・内面横ナデ	SD184	5%未満
302	須恵器	甕 -	(3.4)	-	-	長石・石美	灰	良好	口縁部外・内面口コロナデ	表土	5%未満
303	須恵器	甕 -	(3.1)	-	-	長石・石美	灰	不良	体部外面ヘナデ 内面口コロナデ	SD184	5%未満
304	須恵器	甕 -	(7.0)	-	-	長石・石美	灰	良好	体部外面口コロナデ 下縁面ヘナデ 内面ヘナデ	P.105	5%未満
305	土師器	甕 [6.2]	(1.7)	-	-	長石・石美	橙	良好	体部外面横ナデ後、ナデ 内面ナデ	表土	30%
306	土師器	灯明瓶 [9.1]	(2.0)	[6.2]	-	長石・石美・雲母	黄褐色	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘナデ 底縁面横ナデ	SK3707	30%
307	陶器	碗 [17.4]	(4.2)	-	-	緻密	オリーブ	良好	縁輪 体部外・内面口コロナデ	SD184	10%
308	陶器	碗 [16.2]	(4.1)	-	-	密	灰白	普通	縁輪 体部外・内面口コロナデ	SK3635	5%
309	陶器	碗 -	(1.4)	[7.9]	-	密	灰白	良好	志野焼 体部外・内面口コロナデ	SK3633	5%未満
310	陶器	四耳壺 -	(6.2)	-	-	緻密	灰白	良好	胴付地 体部外面口コロナデ 内面ハナヒ 輪縁	表土	5% PL31
311	陶器	瓶カ -	(2.3)	-	-	緻密	にぶい黄褐色	普通	縁輪 体部外・内面口コロナデ	表土	5%
312	陶器	甕 [41.0]	(7.1)	-	-	密	灰褐色	普通	縁輪 体部外・内面口コロナデ	SD184	5%未満 汚損

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP88	縄文土器	深鉢	長石・石美・雲母	灰黄褐色	口縁部に刺突文を施文	表土	5%未満阿玉付式 PL22
TP89	縄文土器	深鉢	長石・石美・雲母	橙	隆帯による区画文 区画内は押引文を施文	覆孔	5%未満阿玉付式 PL22
TP90	縄文土器	深鉢	長石・石美・雲母	橙	底状口縁・口唇部に沈線を施文 単筋縄文LRを施文後、口縁部に刺突文 沈線で文様を描出	SE97	5%未満阿玉付式 PL22
TP91	縄文土器	深鉢	長石・石美	灰黄褐色	キヤミを有する隆帯を施文 沈線で文様を描出	表土	5%未満阿玉付式 PL22
TP92	縄文土器	深鉢	長石・石美	にぶい黄褐色	無筋縄文及捺糸(単軸1集)	表土	5%中期前集
TP93	縄文土器	深鉢	長石・石美	橙	単筋縄文LRを縦方向に施文後、沈線が沿う隆帯に交互刺突文	SK3550	10% 加曽利E1式
TP94	縄文土器	深鉢	長石・石美	赤褐色	沈線が沿う隆帯による区画文 区画内は単筋縄文LRを横方向に施文 体部は3条一組の沈線文による帯文を施文	覆孔	5%加曽利E1式 PL22
TP95	縄文土器	深鉢	長石・石美・雲母	明赤褐色	沈線で斜格子状の文様を描出	表土	5%縦之内式 PL22
TP96	縄文土器	深鉢	長石・石美・雲母	明黄褐色	底状口縁 沈線による区画文 単筋縄文LRを横方向に施文	表土	5%未開の内式
TP97	縄文土器	深鉢	長石・石美・雲母	橙	口縁に刺突文を有する 単筋縄文LRを縦文 キヤミを有する隆帯及び沈線付文	表土	5%縦之内式
TP98	縄文土器	深鉢	長石・石美・雲母	明赤褐色	隆帯及び無筋縄文及び文様を描出	SD906	縦之内1式

番号	器種	長さ	幅	口径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP31	土玉	2.6	2.8	0.6	20.9	長石・石美・雲母	ナデ 一方向からの穿孔	表土	
DP32	土玉	2.5	2.4	0.5	14.9	長石・石美	ナデ 一方向からの穿孔	SK3713	
DP33	土玉	1.9	2.1	0.5	8.5	長石・石美	ナデ 一方向からの穿孔	SK3713	
DP34	管状土玉	4.9	4.0	0.9	80.1	長石・石美	ナデ 一方向からの穿孔	覆孔	
DP35	管状土玉	5.5	4.0	0.9	81.1	長石・石美	ナデ 一方向からの穿孔	SD184	

番号	遺物名	計測値 (cm)		重量 (g)	結着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅						
DP96	伊泥 (製練型)	7.9	8.1	2.9	96.2	1	なし	表面が暗赤褐色で有筋縞が黄色クマシに浮出、断面は全周が破面下層は黄褐色となる。内面には木炭灰による黒点が生じている。胎土は砂質でスチの混入が認められる。	SD184

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 24	湖片	42	21	0.7	4.5	黒曜石	左側縁微細割線	SK610	
Q 25	湖片	29	22	0.9	4.9	黒曜石	側縁部二次加工	SK610	
Q 26	石皿	23	1.8	0.3	1.3	安山岩	凹基無茶線	表土	PL31
Q 27	石皿	17	1.7	0.4	0.8	チャート	凹基無茶線	SK605	PL31
Q 28	石皿 (20)	(15)	0.4	0.7	0.7	チャート	平基無茶線 先端部及び右側縁部欠損	SK592	PL31
Q 29	楔形石器	26	23	0.4	2.9	チャート	両縁割線痕	表土	
Q 30	不定形石器	72	4.1	1.1	43.6	安山岩	側縁部二次加工	表土	PL31
Q 31	磨製石斧	(8.6)	5.2	3.5	209.8	安山岩	基部欠損 両平刃	SD184	PL31
Q 32	石皿	23.4	13.1	6.4	2234.5	安山岩	使用面2面	表土	PL32
Q 33	石皿	(8.8)	(7.0)	3.7	318.3	安山岩	使用面1面	表土	
Q 34	磨石・磨石	95	8.0	5.8	617.6	安山岩	磨面1面 磨き面3面	表土	
Q 35	石鉢	84	6.9	1.7	131.7	凝灰岩	表裏側縁部打ち欠き	表土	PL31
Q 36	石鉢	60	5.8	0.8	45.0	凝灰岩	表裏側縁部打ち欠き	表土	
Q 37	凹石	24.8	16.2	8.2	3703.5	結晶片岩	磨り使用面1面 凹部2ヶ所	表土	PL32
Q 38	凝石	(10.6)	(6.8)	3.4	382.4	結晶片岩	使用面3面 赤色顔料付着	SK3620	
Q 39	碧玉	1.9	0.7	0.4	1.8	緑色凝灰岩	一方隅からの穿孔	表土	PL32

番号	遺物名	計測値 (cm)			重量 (g)	縮着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ						
M 24	鉄塊系遺物	-	-	-	3.0	3	H (○)	長さ2cm未満の不整形 厚さ0.2mmほどで、表面は平直である	SK3527	
M 25	含鉄鉄片	21	20	2.1	6.7	2	錆化 (△)	小ぶりの不整形三角 右側部が破面となる 表面は錆跡が発達している	SK3633	
M 26	鉄製品 (鍛造品)	3.9	4.2	0.2	128	2	なし	リング状 表面は酸化土砂に覆われ、上面には錆跡あり 両端部が破面となる 錆化して芯部が中空	SK3716	
M 27	含鉄鉄片	4.3	3.0	2.6	21.1	3	M (○)	不整形 表面は酸化土砂と錆跡に覆われており、明確な破面は認められない 含鉄部は上面下手	P 51	
M 28	砂内流動片	3.3	5.5	4.9	66.3	1	なし	不整形三角 上面は流動性がみられ、下面は気孔が目立つ	表土	
M 29	砂内片	5.2	4.4	3.0	88.1	3	M (○)	全体に酸化色が強く、不整形形 表面は流動性が無く、気孔が目立つ 下面は錆跡が発達している 破面は上面で左側部に木炭灰による埋みが生じている	擾乱	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M30	磨盤	5.6	1.5	1.0	7.9	青銅	磨盤・付け方部分	表土	PL32

第4節 ま と め

1 はじめに

当遺跡は平成4～8年度の調査で明らかにされているように、縄文時代前期から近世にかけての複合遺跡である。今回の調査は、遺跡南端部の南東に張り出す舌状台地の縁辺部、7,000㎡を対象に行い、縄文時代の堅穴住居跡5軒、土坑15基、古墳時代の堅穴住居跡14軒、平安時代の堅穴住居跡17軒、近世の墓坑1基などを確認した。

ここでは、今回得られた調査成果とこれまでの調査成果を基に、縄文時代中期後葉の加曾利E式期、後期前葉の堀之内式期、古墳時代前期、平安時代、近世の時代ごとに集落変遷や様相などを検討し、まとめとする¹⁾。

なお、土器については今回の調査で出土したものと『茨城県教育財団文化財調査報告』第87・127・146・147集で報告されているもののみを対象に検討した。また、その他の時期に関しては『茨城県教育財団文化財調査報告』第147集において詳細に記載されているのでそちらを参照されたい。

2 縄文時代

中期後葉加曾利E式期の竪穴住居跡2軒、土坑10基、後期前葉堀之内1式期の竪穴住居跡2軒、時期不明の竪穴住居跡1軒、土坑5基を確認した。このうち、中期後葉加曾利E式期の住居跡は土器の特徴から加曾利EⅢ式期のものと考えられる。

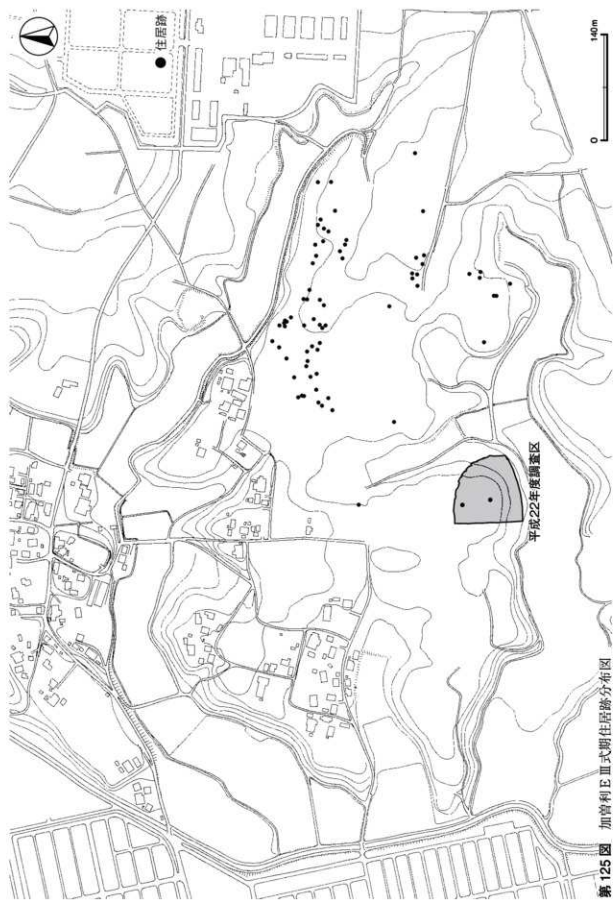
加曾利EⅢ式期の住居跡は、これまでの調査で70軒確認されている。分布状況は、遺跡中央部の台地平坦部に1軒、遺跡東部の台地平坦部に61軒、遺跡南部の小支谷東側の台地縁辺部に8軒である。今回の調査では2軒が確認され、当該期の集落の広がりが、遺跡南部の台地縁辺部まで及ぶことが明らかとなった(第125図)。以下、住居跡属性の一覧表を掲載し、その特徴と傾向を記述する。

住居跡の規模は、長径が2~4mのものが7軒、4~5mのものが10軒、5~6mのものが26軒、6~7mのものが17軒、7~8mのものが7軒、8m以上のものが1軒で、5~7mのものが主体を占める²⁾。形状は、円形のものが23軒、楕円形のものが38軒、隅丸長方形のものが2軒、不整形円形のものが3軒、不整形円形のものが1軒で、円形、楕円形のものが主体を占める。主柱は2本柱のものが2軒、3本柱のものが3軒、4本柱のものが13軒、5本柱のものが18軒、6本柱のものが12軒、7本柱のものが7軒、8本柱のものが4軒、9本柱のものが1軒、主柱穴が無いものが12軒で、4~6本柱のものが主体を占める。炉は63軒で72基確認されており、その内訳は地床炉47基、土器埋設炉10基、複式炉3基、土器片囲い炉4基、埋裏炉、土器片石囲い炉、土器片囲い土器埋設炉、石囲い炉がそれぞれ2基で、地床炉が主体を占める。

表10 加曾利EⅢ式期住居跡属性一覧表

遺構名	位置	平面形	主軸方向	規模		内部施設						覆土
				長径×短径(m)	[506]	主柱	副柱	出入口	ピット	炉		
SI 2A	B 5h0	楕円形	-	5.86	[506]	6	7	-	1	埋裏炉	人為	
SI 6	A 5j9	楕円形	-	6.86	[522]	5	-	-	2	地床炉×2	人為	
SI 7	B 5g8	楕円形	-	7.31	6.22	6	4	-	1	地床炉×2	人為	
SI11	A 5i5	楕円形	-	6.13	4.70	5	2	-	1	地床炉	自然	
SI12	B 5a4	楕円形	-	6.68	6.00	6	2	-	5	地床炉	人為	
SI17	B 5h5	円形	-	5.05	4.85	3	-	-	3	埋裏炉	-	
SI18	B 5i4	円形	-	5.15	4.86	6	5	-	-	-	自然	
SI20	B 4b0	円形	-	4.98	4.97	6	3	1	-	地床炉	人為	
SI22	B 4a1	楕円形	-	5.53	5.00	5	-	-	-	地床炉	人為	
SI28	A 4j9	円形	-	5.53	5.08	7	3	-	-	地床炉	人為	
SI30	B 4a7	楕円形	-	5.85	[500]	7	1	-	3	地床炉	-	
SI34	B 4e4	円形	-	5.05	5.02	5	1	-	1	地床炉	人為	
SI35 A	B 3j5	円形	-	5.66	5.27	8	-	-	-	地床炉	-	
SI36	B 3d5	楕円形	-	7.14	6.17	8	5	-	-	複式炉・ 土器埋設炉	人為	
SI48	E 2b5	円形	-	[562]	5.47	7	3	-	-	地床炉	人為	
SI53	B 17b8	[楕円形]	[N-18°-E]	[500]	[4.30]	5	-	-	11	地床炉	自然	
SI54	B 17g8	楕円形	N-66°-W	3.35	[275]	2	-	-	1	地床炉	自然	
SI59	B 17j9	[楕円形]	N-28°-E	6.80	[6.15]	3	-	-	7	地床炉	自然	
SI60	B 17h7	隅丸長方形	N-85°-W	3.05	2.90	-	-	-	3	地床炉	自然	
SI63	B 17d2	楕円形	N-46°-E	3.98	3.12	5	1	-	1	地床炉	自然	
SI67	B 16g0	楕円形	-	5.70	5.33	5	-	-	7	地床炉	自然	
SI88	C 18b6	楕円形	N-26°-E	5.38	4.80	6	1	-	1	-	自然	
SI89	C 18c6	[楕円形]	[N-63°-E]	2.91	[2.52]	-	-	-	-	地床炉	自然	
SI104	D 15c1	[円形]	-	7.68	[7.40]	4	-	-	3	地床炉	-	

遺構名	位置	平面形	主軸方向	規模		内部施設					覆土
				長軸×短軸 (m)	土柱穴	竪穴	出入口	ピット	礎		
SI137	C 16c7	楕円形	N-44°-E	6.38	5.53	5	6	-	12	楕円形・土器 土器・中	自然
SI138	B 170	楕円形	N-58°-W	4.29	3.94	4	-	-	5	地床中	自然
SI155	B 167	[楕円形]	[N-82°-E]	[6.04]	[5.12]	4	-	-	7	土器片・土 器・中	自然
SI165	D 19a8	円形	-	5.36	5.25	5	-	-	2	地床中	人為
SI168	C 15c6	楕円形	N-30°-W	5.16	3.48	-	-	-	2	-	自然
SI169	C 15c4	[楕円形]	[N-52°-W]	[7.50]	[6.04]	5	-	-	8	土器片・土 器・中	自然
SI178	C 15g2	[円形]	-	[6.58]	[6.40]	6	2	-	2	地床中	人為
SI179	D 15a1	[円形]	-	[7.85]	7.52	4	2	-	5	楕円形・ 石圍い・中	人為
SI186	C 16g1	[円形]	-	6.00	[5.30]	4	4	-	7	地床中	自然
SI195	C 16a1	[円形]	-	5.21	[5.07]	5	2	-	-	土器埋設中	-
SI196	C 15c5	[不整形円形]	-	[4.10]	[3.96]	-	-	-	5	土器埋設中	-
SI200	C 1609	[楕円形]	N-15°-E	7.52	[5.84]	(4)	-	-	10	土器片・石 圍い・中	人為
SI202	C 162	[楕円形]	[N-37°-W]	[8.60]	[7.05]	8	-	-	41	石圍い・中	人為
SI206	C 1644	[楕円形]	[N-12°-E]	[6.95]	[6.22]	6	7	-	5	土器片・中	-
SI212	C 1665	[楕円形]	[N-44°-W]	[6.24]	[5.68]	4	-	-	12	地床中	-
SI218	C 17g1	[楕円形]	[N-27°-E]	[5.61]	[4.76]	-	-	-	5	地床中	自然
SI221	H 193	不整形円形	-	[4.79]	4.6	4	-	-	10	土器片・土 器・中	人為
SI222	I 19c2	-	-	4.67	(3.32)	-	-	-	4	地床中	自然
SI223	I 19c4	隅丸長方形	N-33°-E	5.34	3.62	-	-	-	-	土器埋設中	自然
SI230 A	C 15b7	[楕円形]	[N-33°-E]	[7.52]	[5.00]	6	-	-	6	地床中	-
SI235 A	C 173g	円形	-	5.40	5.15	3	1	-	1	地床中	人為
SI237	C 160	[楕円形]	[N-35°-W]	[5.22]	[4.49]	5	-	-	5	土器埋設中	-
SI240	C 17a1	楕円形	N-18°-W	3.90	3.40	4	2	-	-	地床中	-
SI242	C 177	楕円形	N-48°-E	4.20	3.74	4	-	-	1	土器埋設中	人為
SI254	D 17c4	円形	-	6.49	6.20	5	1	-	1	土器埋設中	-
SI266	D 18c2	[円形]	-	[5.36]	[5.45]	9	2	-	2	地床中	-
SI285	C 185	[円形]	-	[5.65]	[5.12]	5	1	-	1	-	-
SI289	D 174	[楕円形]	[N-73°-W]	[5.90]	[5.00]	7	3	-	3	地床中	人為
SI293	D 17c0	[楕円形]	[N-10°-E]	[5.20]	[4.60]	5	2	-	3	土器埋設中	-
SI318	I 16g2	円形	-	4.66	4.46	5	1	-	1	土器埋設中	人為
SI325	I 187	[楕円形]	[N-27°-W]	[5.35]	[4.55]	-	-	-	5	-	人為
SI329	I 188	[不整形円形]	[N-58°-W]	[4.92]	[4.42]	4	1	-	3	土器埋設中	人為
SI335	J 19a2	[不整形円形]	[N-46°-W]	[6.37]	[5.88]	7	5	-	4	地床中	-
SI341	G 21c5	楕円形	N-15°-W	4.22	3.62	-	-	-	-	地床中	自然
SI347	G 20d5	楕円形	N-47°-W	6.70	5.74	4	8	3	-	楕円形・ 礎・中	自然
SI352	F 19g8	円形	N-83°-E	5.60	5.60	6	2	-	-	地床中	-
SI360	F 18b4	-	-	-	-	-	-	-	-	土器片・中	-
SI370	F 20b3	楕円形	N-27°-E	4.38	3.94	6	2	1	1	地床中・ 礎・中	自然
SI375	F 198	楕円形	N-40°-E	6.60	6.30	7	3	-	-	楕円形×3	自然
SI381	G 19a2	-	[N-18°-E]	-	-	6	7	-	-	土器埋設中	-
SI403	G 20c1	-	N-27°-E	-	-	7	1	-	-	土器片・中	-
SI409	F 19g5	-	-	-	-	8	-	-	-	-	-
SI424	D 149	[楕円形]	[N-44°-W]	[3.65]	[3.37]	2	-	-	-	-	自然
SI433	D 1440	[楕円形]	N-60°-W	[5.10]	-	4	-	-	9	地床中	人為
SI454	F 14e1	[円形]	N-67°-E	[3.82]	[3.82]	-	-	-	-	-	自然
SI508	E 11c8	[円形]	-	[6.00]	-	5	-	-	-	地床中	自然
SI613	H 11b9	[円形]	N-29°-W	6.53	(6.16)	-	-	-	-	-	自然
SI615	H 12a1	円形	N-20°-W	6.78	6.22	5	-	-	8	地床中	自然



第 125 図 加尊利Ⅲ式期住居跡分布区

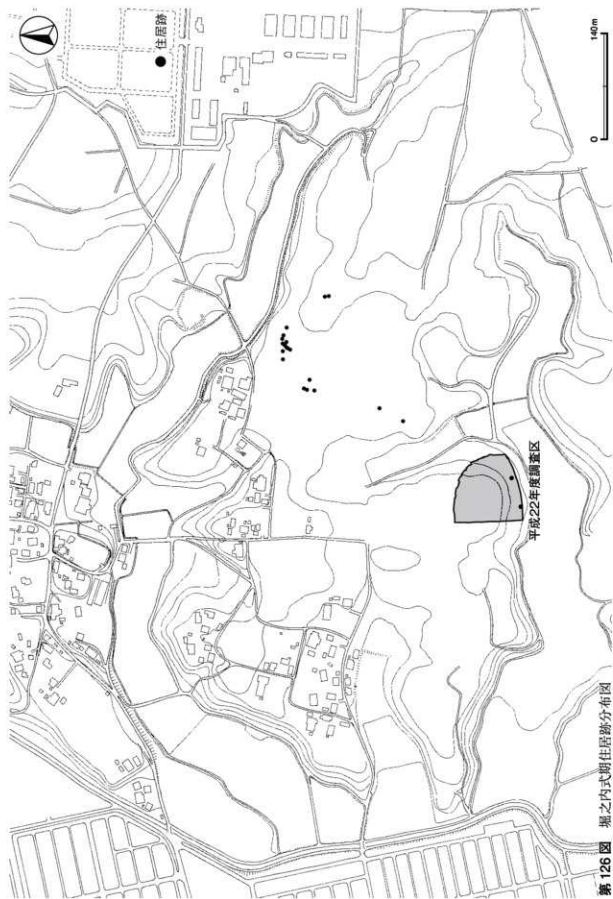
堀之内式期の住居跡はこれまでの調査で19軒確認されている。分布状況は、遺跡東部の台地平坦部に17軒、遺跡南部の小支谷東側の台地縁辺部に2軒である。今回の調査では2軒が確認され、当該期の集落の広がり、遺跡南部の台地縁辺部まで及ぶことが明らかとなった（第126図）。以下、住居跡属性の一覧表を掲載し、その特徴と傾向を記述する。

住居跡の規模は、長径が4～5mのものが7軒、5～6mのものが8軒、6～7mのものが2軒、7～8mのものが1軒で、4～6mのものが主体を占め、加曾利EⅢ式期に比べ、規模の縮小化が認められる³⁾。形状は、円形のものが3軒、楕円形のものが10軒、柄鏡形のものが3軒、不整形、不定形のものがそれぞれ1軒で、楕円形のものが主体を占める。なお、柄鏡形の場合は、当遺跡において当該期にのみ認められる形状で、他の遺跡では龍ヶ崎市廻り地A遺跡や南三島遺跡などで確認されている。主柱は3本柱のものが2軒、4本柱のものが3軒、5本柱のものが1軒、6本柱のものが2軒、7本柱のものが1軒、主柱穴が無いものは10軒で、加曾利EⅢ式期に比べ、主柱穴が無いものが増加する。このことは、住居跡の規模の縮小化とともに住居形態の変化が考えられる。炉は17軒で17基確認されており、その内訳は地床炉15基、土器埋設炉、埋差炉がそれぞれ1基で、地床炉が主体を占める。

表11 堀之内式期住居跡属性一覧表

遺構名	位置	平面形	主軸方向	規模		内部施設						覆土
				長径×短径 (m)	主柱穴	埋設炉	出入口	ピット	炉			
SI61	B 176	楕円形	N-28°-E	4.90	4.40	3	1	-	5	地床炉	自然	
SI62	B 17h4	柄鏡形	N-47°-E	5.91	5.67	4	4	-	33	地床炉	自然	
SI69	B 17g3	[円形]	-	[5.45]	[5.10]	5-8	-	-	7-10	地床炉	-	
SI70	B 17i	-	-	-	-	-	-	-	-	地床炉	-	
SI71	B 17h1	-	-	-	-	-	-	-	-	地床炉	-	
SI73	B 169	[円形]	-	5.68	2.98	3	-	-	3	-	-	
SI74 A	B 169	[楕円形]	N-67°-W	[4.32]	[3.90]	-	-	-	1	地床炉	自然	
SI74 B	B 169	柄鏡形	N-10°-W	[4.16]	[3.15]	4	1	8	3	地床炉	-	
SI75	B 17i	柄鏡形	N-29°-W	[5.05]	[4.82]	6-7	2	4	11-12	土器埋設炉	-	
SI98	C 15e6	[楕円形]	[N-0°-E]	[7.52]	6.93	-	-	-	2	地床炉	-	
SI116 A	C 15g0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
SI119	B 166e	不定形	N-23°-E	[6.25]	[4.10]	-	-	-	8	地床炉	自然	
SI148	B 166f	楕円形	N-48°-E	4.55	3.9	-	-	-	11	-	自然	
SI182	C 15e6	[楕円形]	[N-7°-E]	[5.21]	[4.40]	6	-	-	12	地床炉	自然	
SI230 B	C 15e6	[不整形]	-	[6.40]	[6.06]	6	-	-	6	-	-	
SI260	D 18b6	円形	-	4.5	4.47	7	6	-	8	地床炉	人為	
SI264	D 18c6	楕円形	N-19°-W	4.27	3.83	5	4	-	3	地床炉	自然	
SI457	F 14g5	[楕円形]	N-76°-E	[4.34]	[3.64]	-	-	-	1	地床炉	自然	
SI458	E 14f	[楕円形]	N-2°-E	[5.24]	[4.76]	4	-	-	6	地床炉	自然	
SI616	I 12b8	[楕円形]	N-42°-W	[5.55]	[4.2]	-	-	-	1	地床炉	自然	
SI619	J 11b9	[楕円形]	-	5.64	(4.36)	-	-	-	5	埋差炉	自然	

以上、各期の住居の規模・形態について述べてきた。集落は各期で遺跡東部の台地平坦部から南部の台地縁辺部にかけて形成されることから、時期による集落の移動は認められない。堀之内式期では、住居数が減少し、規模も縮小化する。炉の形態は、各期で地床炉が主体を占めるが、加曾利EⅢ式期では多様なものが存在し、堀之内式期では地床炉・土器埋設炉・埋差炉に限られることから、時期による形態差異があるものと考えられる。



第 126 図 黒之内式町住居跡分布区

3 古墳時代前期

これまでの調査では、遺跡中央部から南部の台地平坦部において堅穴住居跡 26 軒が確認されている。これらは、出土土器からⅠ期（4世紀中葉）とⅡ期（4世紀後葉）の2時期に細分しており、集落が4世紀中葉に遺跡中央部の台地平坦部に形成され、4世紀後葉には南部の台地平坦部に移動したことが明らかになっている。今回の調査で確認された堅穴住居跡 14 軒は、出土土器から全てⅡ期に属すると考えられ、Ⅱ期集落の広がりが遺跡南部の台地縁部まで及ぶことが明らかとなった（第127図）。ここでは、Ⅰ期・Ⅱ期ごとに出土土器と堅穴住居跡の特徴についてふれ、集落の様相を概観する。

(1) Ⅰ期の出土土器及び堅穴住居跡について（第128・129図）

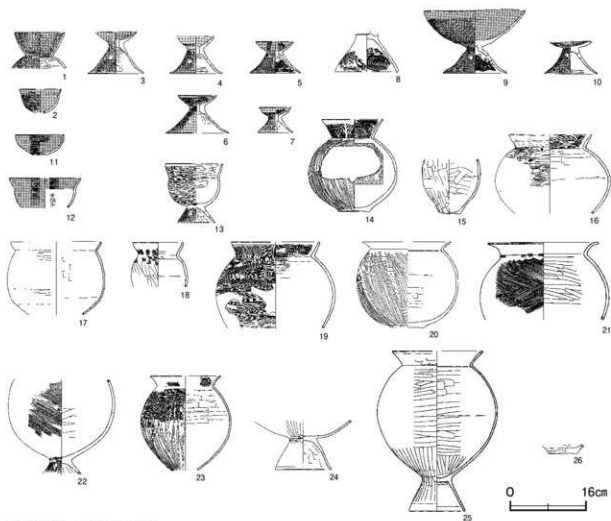
ア 出土土器

器種構成は埴、器台、高坏、鉢、壺、甕、甌、ミニチュア土器からなる。以下、器種ごとにそれぞれの特徴を記載する（第128図）。

- (ア)埴 大きさからA類（大型埴）とB類（小型丸底埴）に分類できる。A類は器形が把握できるものは出土していないが、口縁部が内彎して立ち上がるもの（1）で、B類は体部が球状を呈し、口縁部が体部に対して短いもの（2）がある。
- (イ)器台 脚部が高いもの（3）、脚部が低いもの（4～7）、粗製器台（8）があり、脚部が低いものは、受部端部の形状が内彎するもの（4）、面をもつもの（5）、丸く取られるもの（6）、屈曲するもの（7）がある。脚部が高いもの、低いものはいずれもヘラ磨き及び赤彩が施されている。
- (ウ)高坏 坏部下端に弱い稜を有するもので、脚部に膨らみをもつもの（9）ともたないもの（10）があり、いずれも元屋敷系の新しい様相を示している。
- (エ)鉢 坏状の器形で、口縁部が内彎して立ち上がるもの（11）、体部が内彎して立ち上がり、口縁部で外傾するもの（12）、低脚の脚部が付くもの（13）がある。
- (オ)壺 単口縁で、体部下半に最大径をもつ下膨れのもの（14）と、体部中位に最大径をもち、細長い形状をするもの（15）がある。前者はハケ目調整後、ヘラ磨き、後者はヘラ削りが施されている。
- (カ)甕 底部の形状からA類（平底）とB類（台付）の2種類に分類できる。A類はさらに、口縁部の成形法により、1類（輪積痕を残すもの）、2類（輪積痕を残さないもの）に細分類でき、2類が主体を占める。A 1類は口縁部が内彎気味に立ち上がり、体部中位に最大径をもっている（16）。体部にはハケ目調整後、ヘラナデが施されている。A 2類は口縁部が内彎気味に立ち上がるもの（17・18）、外傾して立ち上がるもの（19）、外反するもの（20・21）があり、いずれも体部中位に最大径をもっている。体部にはハケ目調整が施されたもの、ハケ目調整後、ヘラ磨きが施されたもの、ハケ目調整後、ヘラナデ・ヘラ磨きが施されたもの、ヘラ削り後、ヘラ磨きが施されたものがある。B類は口縁部が外傾して立ち上がり、体部中位に最大径をもっている。体部から脚台部にかけてハケ目調整が施されたもの（22）、ハケ目調整後、ヘラ磨きが施されたもの（23）、ヘラナデが施されたもの（24）、ヘラ削り後、ヘラナデが施されたもの（25）がある。
- (キ)甌 器形が把握できるものは出土していない。底部は単孔式で外面にヘラ削りが施されるもの（26）がある。周辺地域の編年との併行関係については、埴、器台、高坏の特徴が加藤修司氏の草刈編年Ⅱ段階後半⁵¹、比田井克仁氏の南関東Ⅱ段階⁵²、日本考古学協会新潟シンポジウム杉山晋作氏の「上総地域を中心とする型式変化模式図」のⅢ a 段階⁶¹の様相を示していることから、実年代は4世紀中葉と考えられる。



第 127 図 古墳時代前期住居跡分布図



第128図 I期出土土器

イ 竪穴住居跡について

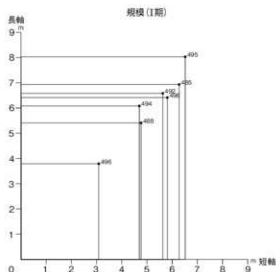
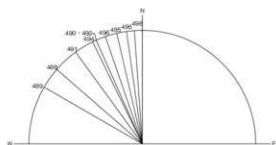
住居跡10軒を確認しており、主軸方向の違いからI a群(N-36°~60°-W)、I b群(N-19°~26°-W)、I c群(N-4°~13°-W)の3群に分類できる。これらの群は重複関係がなく、出土土器にも明確な時期差が認められないことから新旧関係は不明である。住居跡の形状は方形のものが1軒、長方形のものが9軒で、これらは、柱穴・壁溝の有無からA類(4か所の主柱穴及び壁溝を有するもの)、B類(主柱穴がなく、壁溝を有するもの)、C類(主柱穴及び壁溝がないもの)の3種類に分類でき、以下のように整理される。

A類・・・第485・491・495号住居跡

B類・・・第490・492・498号住居跡

C類・・・第488・489・494・496号住居跡

住居跡の規模・形態は第129図のようになり、A類は長軸が7m以上、B類は長軸が6~7m、C類は長軸が6m以下にまとまる傾向が認められ、規模により、住居形態が異なると考えられる⁷⁾。これらを各群で整理すると、A類はI a・I c群、B類はI b・I c群、C類はI a・I b群で認められる。なお、焼失家屋は3軒で、各群に認められる。また、掘方を有する住居跡は第488・492・495号住居跡の3軒で、各群に認められ、いずれも壁際を溝状に一段深く掘り込む点が共通する。



I 期

分類	模式図	I a 群	I b 群	I c 群
A 類		491		485・495
B 類			490・492	498
C 類		488・489	494・496	

※ゴシック体は焼失家屋

第 129 図 I 期住居跡主軸方向及び規模・形態一覧表

(2) II 期の出土土器及び竪穴住居跡について (第 130～135 図)

ア 出土土器

器種構成は埴、器台、高坏、鉢、壺、甕、甌、瓶、ミニチュア土器、手捏土器からなる。後述するが、これらが出土した住居跡は主軸方向の違いや重複関係から 3 群に分類できるため、ここでは各群ごとに器種の特徴を記載する。

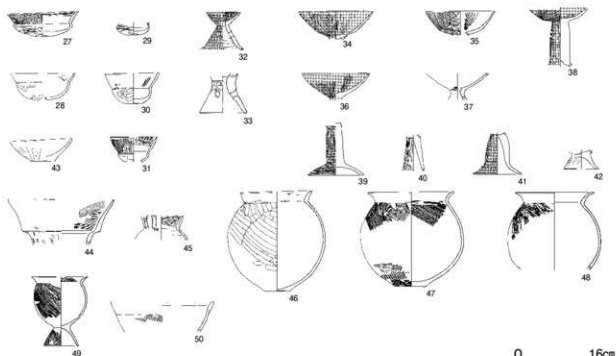
I a 群

器種構成は埴、器台、高坏、鉢、壺、甕、甌からなる (第 130 図)。

(ア)埴 小型丸底埴のみ出土しており、器形から A 類 (口縁部が短く、体部が扁平な球状のもの)、B 類 (口縁部が長く、体部が球状のもの) に分類できる。A 類は体部外面にヘラ磨きが施されているもの (27)。

ハケ目調整後、ヘラナダが施されているもの (28) があり、B類は体部外面にヘラ磨きが施されているもの (29)、ヘラナダが施されているもの (30・31) がある。いずれも外・内面に赤彩は施されていない。A類はⅡ a 群でのみ出土している。

- (イ) 器台 脚部が高いもの (32) と低いもの (33) があり、前者は外面にヘラ磨き及び赤彩が施され、後者はヘラナダが施されている
- (ウ) 高坏 器形が把握できるものは出土していない。坏部は下半に稜を有するもの (34・35) と無いもの (36・37) がある。脚部は中実柱状のもの (38・39)、屈折脚のもの (40)、脚部がエンタシス状の膨らみをもつもの (41)、脚部が低いもの (42) がある。
- (工) 鉢 坏状の器形で、体部から口縁部にかけて 内磨気味に立ち上がるもの (43) がある。体部外面にハケ目調整が施されている。
- (オ) 壺 器形が把握できるものは出土していない。口縁部の形状から有段口縁のもの (44)、単口縁のもの (45) があり、後者には棒状浮文が貼付されている。
- (カ) 甕 底部の形状からA類 (平底) とB類 (台付) の2種類に分類できる。A類は口縁部が外傾して立ち上がるもの (46) と外反するもの (47・48) があり、いずれも体部中位に最大径をもっている。体部にハケ目調整が施されているものとハケ目調整後、部分的にヘラ磨きが施されているものがあり、前者が主体を占める。B類は口縁部が外反するもの (49) で、体部から台部にかけてハケ目調整が施されている。
- (キ) 甕 全体の器形が把握できるものは出土していない。体部が内磨して立ち上がり、口縁部で外傾するもの (50) がある。



第130図 Ⅱ a 群出土土器

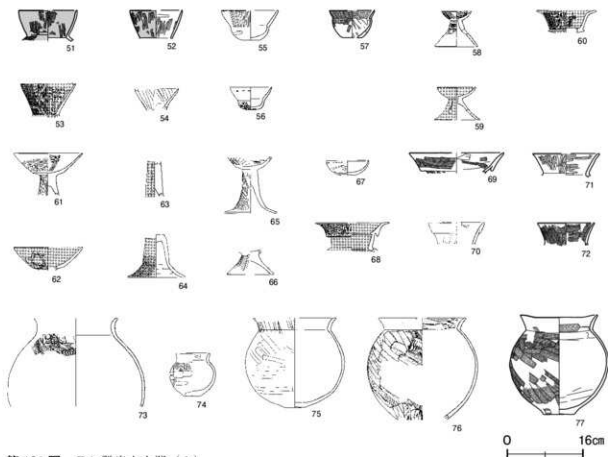
Ⅱ b 群

器種構成は甕、器台、高坏、鉢、壺、甕、甕、甕、ミニチュア土器、手捏土器からなる (第131・132図)。

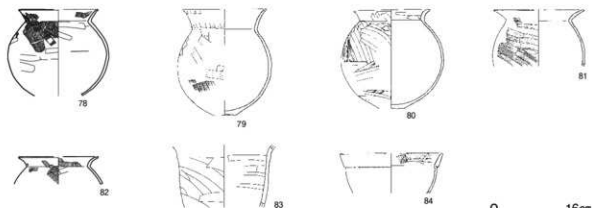
- (ア) 甕 大きさからA類 (大型甕) とB類 (小型丸底甕) に分類できる。A類は器形が把握できるものは出土していないが、口縁部が内磨して立ち上がるもの (51・52) と外傾して立ち上がるもの (53・54) がある。

B類は口縁部が長く、体部が球状のもの(55・56)と口縁部が短く、体部が球状のもの(57)があり、後者は調整の粗い粗製品である。

- (イ)器台 脚部が高いもの(58)、低いもの(59)、結合器台(60)があり、高いものは外面にヘラ磨きが施され、低いものはヘラナデ及び赤彩が施されている。60は外反する受部下端に鈎が付き、北陸系のものと考えられる。
- (ウ)高坏 器形が把握できるものは出土していない。坏部は下半に稜を有するもの(61・62)のみ出土している。脚部は中実柱状のもの(63)、屈折脚のもの(64・65)、脚部が低いもの(66)がある。
- (エ)鉢 環状の器形で、体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がるもの(67)がある。体部外面はハケ目調整後、ヘラ磨きが施されている。
- (オ)壺 器形が把握できるものは出土していない。複合口縁のもの(68・69)、折り返し口縁のもの(70)、単口縁のもの(71・72)がある。
- (カ)甕 平底甕のみ出土している。口縁部の屈曲が弱く、直立気味に立ち上がるもの(73・74)、外傾して立ち上がるもの(75～79)、外反するもの(80・81)、外反して立ち上がり、端部がつまみ上げられるもの(82)があり、いずれも体部中位に最大径をもっている。体部にハケ目調整が施されているものとハケ目調整後、ヘラ磨きやヘラナデが施されているものがある。前者が主体を占めるが、II a群に比べ後者の割合が増加する。
- (キ)甔 器形が把握できるものは出土していない。長胴のもの(83)と体部が内彎して立ち上がり、口縁部で外傾するもの(84)がある。



第131図 II b群出土土器(1)

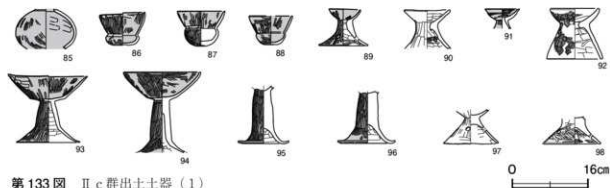


第132図 II b群出土土器(2)

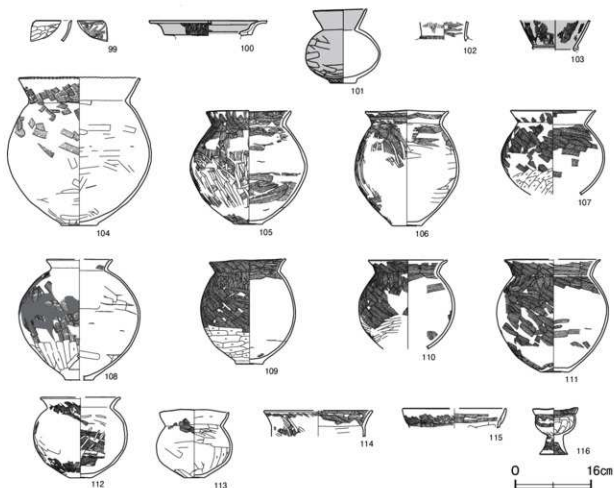
II c 群

器種構成は埴、器台、高坏、鉢、壺、甕からなる(第133・134図)。

- (ア)埴 大きさをA類(大型埴)、B類(小型丸底埴)に分類できる。A類は器形が把握できるものは出土していないが、体部中位に最大径をもつもの(85)がある。B類は口縁部が長く、体部が球状のもの(86~88)があり、全て外面にヘラ磨き及び赤彩が施されている。
- (イ)器台 脚部が高いもの(89~91)、炬器台(92)があり、前者は受部端部が内彎するもの(89)、外傾するもの(90)、屈曲するもの(91)がある。
- (ウ)高坏 坏部下端に稜を有し、脚部が屈折脚のもの(93・94)、脚部が中実柱状のもの(95・96)、脚部が低く、ハの字状に開くもの(97・98)がある。
- (エ)鉢 全体の器形が把握できるものは出土していない。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外傾するもの(99)がある。
- (オ)壺 有段口縁のもの(100)と単口縁のもの(101)の他、頸部に突帯をもつもの(102・103)がある。
- (カ)甕 底部の形状からA類(平底)とB類(台付)の2種類に分類できる。A類は口縁部の形状から1類(外傾して立ち上がり、口唇部にキザミを有するもの:104)、2類(外傾して立ち上がるもの:105~109)、3類(外反して立ち上がるもの:110~112)、4類(内彎して立ち上がるもの:113)、5類(屈曲が弱く、外傾するもの:114・115)に細分類できる。体部にハケ目調整が施されるものとハケ目調整後、ヘラ磨きやヘラ削りが施されているものがあり、後者が主体を占める。111・112は底部に凹みが認められ、上総系のものである。113は器形や調整方法から布留甕の流れをくむものと考えられる。B類は口縁部が外傾するもの(116)で、体部上半及び台部にハケ目調整、体部下半にヘラナデが施されている。



第133図 II c群出土土器(1)

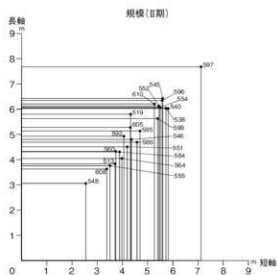
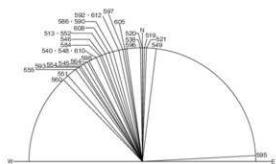


第134図 II c 群出土土器（2）

周辺地域の編年との併行関係については、いずれの群においても柱状高坏が伴うことや、小型丸底埴の特徴から加藤修司氏の草刈編年Ⅲ段階、比田井克仁氏の南関東Ⅲ段階、日本考古学協会新潟シンポジウム杉山晋作氏の「上総地域を中心とする型式変化模式図」のⅢ b 段階の様相を示しており、実年代は4世紀後葉に収まるものと考えられる。各群の新旧関係は、II a 群の甕の調整方法の主体がハケ目調整のものであるのに対し、II b 群ではハケ目調整後、ヘラ磨きやヘラナデが施されているものが増加することから、II a 群よりもII b 群のものが新しい様相を示している。また、II b 群に属する第598号住居跡がII c 群に属する第586号住居跡に掘り込まれていることから、II c 群がII b 群よりも新しいと考えられ、II a 群→II b 群→II c 群の順に変遷したものと考えられる。

イ 竪穴住居跡について

住居跡を30軒確認しており、主軸方向、出土土器、重複関係からII a 群（ $N-3^{\circ}-W \sim N-7^{\circ}-E$, $N-89^{\circ}-E$ ）、II b 群（ $N-19^{\circ} \sim 44^{\circ}-W$ ）、II c 群（ $N-8^{\circ} \sim 17^{\circ}-W$ ）に分類できる。前述したように、これらの群はいずれも4世紀後葉内の時期幅で、II a 群→II b 群→II c 群の順に変遷したものと考えられる。住居跡の形状は方形のものが10軒、長方形のものが13軒で、I期に比べ方形のものが増加が認められる。これらは柱穴・壁溝の有無からA類（4か所の柱穴及び壁溝を有するもの）、B類（柱穴がなく、壁溝を有するもの）、C類（柱穴及び壁溝がないもの）、D類（4か所の柱穴で、壁溝がないもの）、E類（不規則に配置され、壁溝がないもの）の5種類に分類でき、I期のものにD・E類の形態が加わる。各住居跡は以下

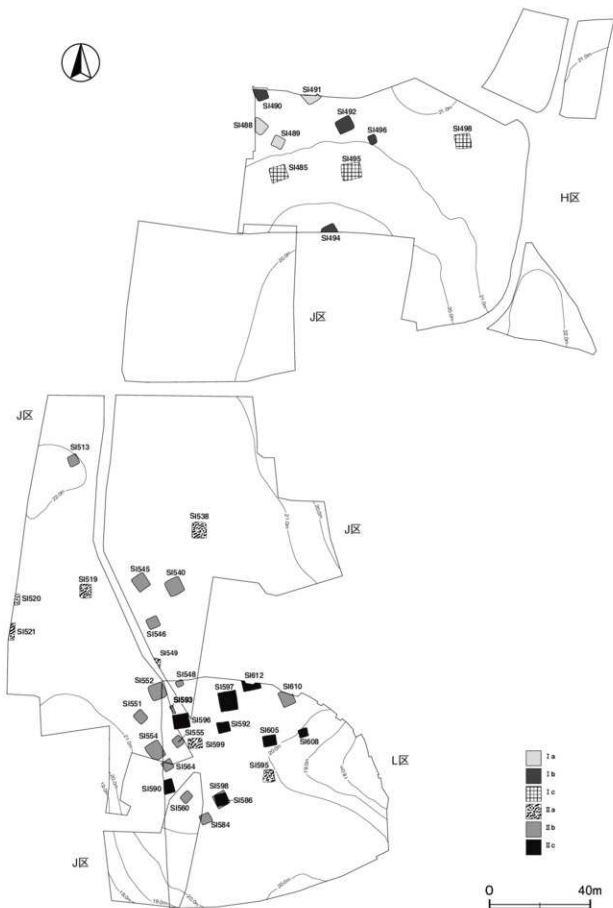


Ⅱ期

分類	模式図	Ⅱ a 群	Ⅱ b 群	Ⅱ c 群
A 類		519・520・521	545	596・597
B 類		595	513・546・564・ 584・598・610	586・605・608
C 類			540・548・551・ 555・560	
D 類		538	552・554	
E 類				592

※ゴシック体は焼失家屋

第 135 図 Ⅱ期住居跡主軸方向及び規模・形態一覧表



第136图 古墳時代前期集落変遷図

のように整理され、Ⅰ期に比べB類の増加が認められる。

A類・・・第519・520・521・545・596・597号住居跡

B類・・・第513・546・564・584・586・595・598・605・608・610号住居跡

C類・・・第540・548・551・555・560号住居跡

D類・・・第538・552・554号住居跡

E類・・・第592号住居跡

住居跡の規模は、A類では長軸が5.5～7.5 m、B類は長軸が3.5～6 m、C類は長軸が3～6 m、D類は長軸が6 m、E類は長軸が4.9 mになり、Ⅰ期で7 m以上のものにしか認められなかったA類が、Ⅱ期では5.5 mからみられるようになる⁸⁾。これらを各群で整理すると第135図のようになり、C類はⅡ b群、E類はⅡ c群でのみ認められる形態である。また、焼失家屋はⅡ a群で1軒、Ⅱ b群で7軒、Ⅱ c群で5軒確認されており、全体に占める割合はⅡ a群ではⅠ期と同様であるが、Ⅱ b・c群の時期に急激に増加する。掘方はⅡ a群で3軒、Ⅱ b群で6軒、Ⅱ c群で8軒確認されており、Ⅱ c群では全ての住居跡で認められる。掘方の形態はⅠ期でみられる隙間を溝状に一段深く掘り込むものが各群で1～2軒程度認められるが、全体を掘り込むものが主体を占めるようになる。その他、コーナー部を一段深く掘り込むもの(第584・586・597号住居跡)、1つの壁際を一段深く掘り込むもの(第598号住居跡)がある。

(3) 集落の様相

以上、各期の出土土器の様相、住居の規模・形態について述べてきた。集落は住居分布状況からⅠ期(4世紀中葉)に遺跡中央部の台地上に形成され、Ⅱ期(4世紀後葉)には南部の台地縁辺部に移動したと考えられる。出土土器は、両期で北陸地域、上総地域、東海地域などの影響を受けているものが認められることから、古墳時代前期を通じて各地域と交流があったものと想定される。住居の規模は、Ⅰ期で6 m以上のものが主体を占めるが、Ⅱ期では6 m以下のものが主体を占めるようになる。また、焼失家屋はⅠ期で3軒に1軒程度の割合で認められるが、Ⅱ期ではⅡ b・c群の時期に急激に増加し、半数以上で認められる。掘方を有する住居跡はⅠ期では少なく、形態も隙間を溝状に一段深く掘り込むもののみ認められるが、Ⅱ期では軒数が増加し、形態も全体を掘り込むもの、コーナー部を一段深く掘り込むものなどが出現する。以上のことから、住居規模・形態はⅠ期からⅡ期にかけて縮小・多様化し、焼失家屋の増加が認められる。

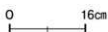
4 平安時代

これまでの調査で、遺跡南部の小支谷を囲む台地平坦部から斜面部にかけて竪穴住居跡30軒、遺跡南西部の舌状台地平坦部で竪穴住居跡2軒、遺跡東部の台地平坦部で土坑1基が確認されている。竪穴住居跡の時期は、出土土器から9世紀前葉、9世紀後葉から10世紀中葉にかけてのもので、集落が断続的に営まれていたことが明らかになっている。今回の調査では竪穴住居跡17軒、土坑1基を確認した。時期は、出土土器から9世紀後葉から10世紀中葉に比定できることから、当該期における集落の広がりが遺跡南部の台地縁辺部まで及ぶことが明らかとなった(第139図)。ここでは、出土土器、集落変遷、黒書土器・刺書土器・窰書土器、鉄関連遺物についてふれ、集落の様相について概観する。

(1) 出土土器(第137・138・140・141図)

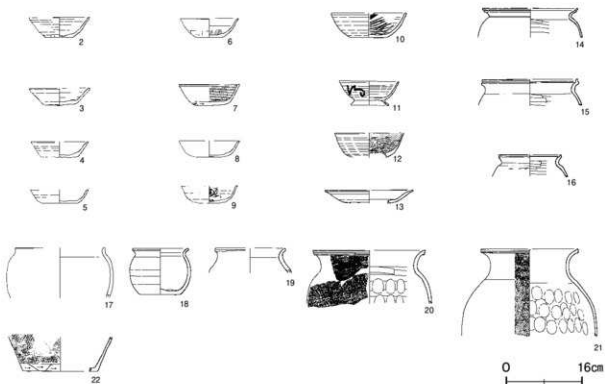
出土土器は器形などの特徴から9世紀前葉、9世紀後葉から10世紀中葉の時期に比定できる。ここでは、各時期の器種構成や器形、手法の特徴について述べる。

9世紀前葉 第473号住居跡の須恵器環が該当する。須恵器環は体部が直線的に立ち上がるもの(1)である。体部はロクロ成形で、底部は回転ヘラ切り後ナデが施されている。



第137図 9世紀前葉出土土器

9世紀後葉 第312・461・504・509・510号住居跡の土器群が該当する。器種は土師器環・高台付碗・高台付皿・甕、須恵器甕が出土している。供膳具類はロクロ成形の土師器環が主体を占める。土師器環は口径が12～13cmのものが主体をなし、体部が直線的に立ち上がるもの(2～5)と内彎して立ち上がるもの(6～9)があり、前者の器高が高いものは本期中で消滅する。それぞれで口縁端部が外反するもののみられ、体部内面は未調整のもの、ヘラ磨きが施されているもの、ヘラ磨き及び黒色処理が施されているものがあり、体部外面下端には手持ちヘラ削りが施されているものと回転ヘラ削りが施されているものがある。底部の切り離し方法はいずれも回転ヘラ切りである。高台付碗は体部が内彎して立ち上がり、口縁端部が直線的に立ち上がるもの(11)と外反するもの(12)がある。高台付皿はロクロ成形のもの(13)で、口縁端部が外反する。土師器甕は口縁端部を上方につまみ上げている常総型甕(14～16)、口縁部の屈曲が弱く、直立気味に立ち上がるもの(17)、口縁部が外傾して立ち上がるもの(18・19)がある。体部にはロクロ成形のものやヘラナデが施されているものがある。須恵器甕は口縁端部が上方と下方につまみ出された形状で、体部外面に縦位の格子状の叩きが施されているもの(20)、縦位の平行叩きが施されているもの(21・22)がある。

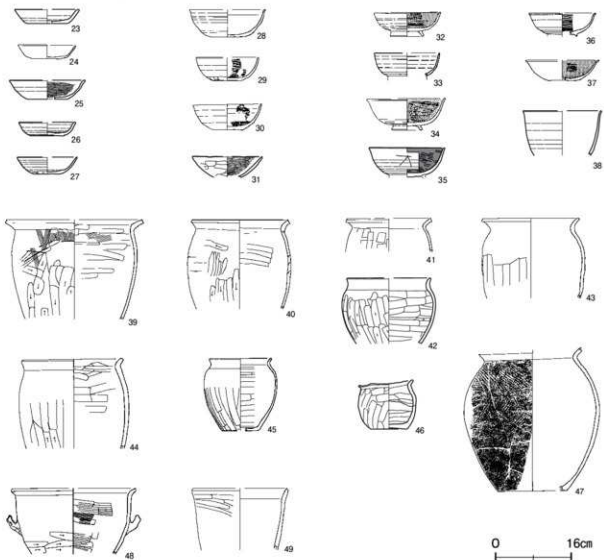


第138図 9世紀後葉出土土器

10世紀前葉 第459・462・516～518・543・562・572・573・582・601・604・607号住居跡の土器群が該当する。器種は土師器環・碗・高台付鉢・鉢・甕・甕、須恵器甕、緑釉陶器高台付碗が出土している。供膳具類

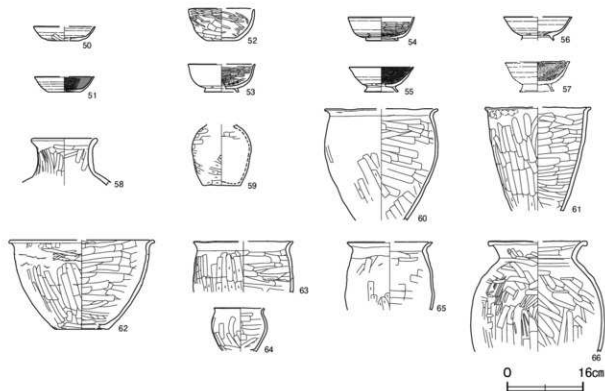


は土師器高台付碗の割合が増加する。土師器坏は口径が12～16cmで、9世紀後葉より大きいものがみられるようになる。器形は体部が直線的に立ち上がるもの(23・24)と内彎して立ち上がるもの(25～30)があり、前者は器高が3cm未満となり本期で消滅する。それぞれで口縁端部が外反するものがみられ、体部内面の調整は9世紀後葉と同様である。底部の切り離し方法は、回転ヘラ切りのもの他に、回転ヘラ切り後ヘラ削りのもの、回転糸切りのものが加わる。碗は体部から内彎気味に立ち上がるもの(31)があり、体部外面はヘラ削り、内面はヘラ磨きが施されている。高台付碗の器形や調整方法は9世紀後葉と同様の様相を示すが、口径が14～17cmで、量量が若干大型化する傾向がみられる。鉢はロクロ成形のもの(38)で、体部から内彎して立ち上がり、口縁端部が外傾する。土師器甕はロクロ成形のものが消滅し、常総型甕(39～41)、口縁部の屈曲が弱く、直立気味に立ち上がるもの(42)、口縁部が外傾して立ち上がるもの(43～46)がある。常総型甕の口縁端部のつまみ上げは退化し小さくなる。体部調整はヘラナデの他にヘラ削りが施されているものがある。須恵器甕は器形が把握できるものは出土していないが、体部に平行叩きを施したものの(47)が出土している。甕は器形が把握できるものは出土していないが、体部が内彎して立ち上がり、口縁部で外反するもの(48)と体部から直線的に立ち上がるもの(49)があり、前者の体部には把手が付いている。底部は5孔式のものが出土している。なお、常総型甕と須恵器は本期をもって消滅する。



第140図 10世紀前葉出土土器

10世紀中葉 第559・587・588・591・611・614号住居跡の土器群が該当する。器種は土師器・碗・高台付碗・壺・甕が出土している。供膳具類は土師器高台付碗が主体を占める。土師器碗は器高が低く、内甕して立ち上がるもの(50・51)がある。体部内面の調整は10世紀前葉と同様の様相を示すが、ヘラ磨き及び黒色処理が施されているものは減少する。体部外面下端にはヘラナデが施されているものがある。底部切り離し方法は回転ヘラ切りものがある。碗は体部から内甕して立ち上がるもの(52)があり、体部外面上半はヘラ磨き、下半はヘラ削り、内面はヘラ磨きが施されている。高台付碗の体部の器形や調整方法は、10世紀前葉と同様の様相を示すが、高台が10世紀前葉に比べ内寄りに付けられる傾向がみられる(53～56)。また、本期から足高高台付碗が出現する(57)。壺は器厚が厚く、体部外面に粗雑なヘラナデが施されているもの(58)と薄手で体部外面に丁寧なヘラナデ、ヘラ削りが施されているもの(59)があり、後者は須恵器長頸壺の模倣品と考えられる。甕は器形が多様化し、体部が内甕して立ち上がり、口縁部が外反するもの(60)、体部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反するもの(61)、口径に対して器高が低く、体部が内甕して立ち上がり、口縁部で外反するもの(62)、口縁部が外傾して立ち上がるもの(63～65)、体部中位に最大径を持ち、口縁部が外反するもの(66)がある。



第141図 10世紀中葉出土土器

(2) 集落の変遷及び住居形態(第142・143図)

前項の時期区分に従い、集落の変遷及び住居形態について述べる。なお、詳細な時期決定が行えなかったものに関しては検討対象から除外した⁹⁾。

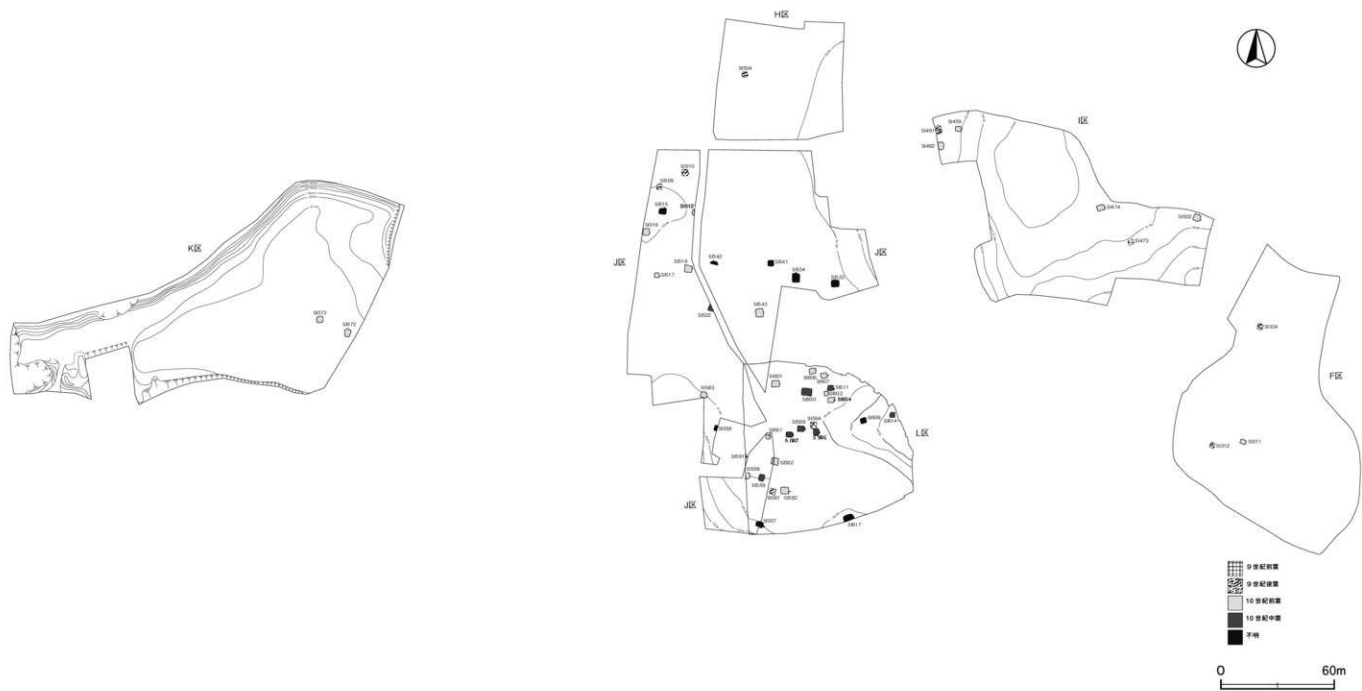
9世紀前葉 第473号住居跡が該当し、遺跡南東部の台地平坦部に位置する。規模・形状は1辺約3mの方形で、主軸方向はN-75°-Eである。柱穴及び壁溝がなく、地山を床面としている。竈は南東コーナー部に付設されており、袖部は白色粘土を用いて構築されている。煙道部は壁外に掘り込まれず、急に立ち上がる。遺物は須恵器片が1点出土している。該当遺構が住居跡1軒のため不明な点が多いが、周辺域で当該期の集落が営まれていたと考えられる。

9世紀後葉 第312・334・461・504・509・510・581・594号住居跡が該当し、遺跡南部の小支谷を囲む台地平坦部から縁辺部にかけて点在する。規模は長軸が約3m前後のものが主体で、形状は方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形がある。これらは主軸方向が $N-89^{\circ}\sim 120^{\circ}-E$ （竈が東壁に付設されている群）と $N-0^{\circ}\sim 19^{\circ}-E$ （竈が付設されないもの及び竈が北壁に付設されている群）の2群に分類できる。各群での規模・形態の差異は認められない。これらは、主柱が無く、地山を床面とするものが主体を占めるが、わずかに主柱（2か所）を有するもの、貼床を施したものの、壁溝が巡るものがみられる。竈はいずれも袖部が白色粘土を用いて構築され、煙道は壁外に掘り込まれるようになる。支脚は多くが土製であるが、土製支脚の上に小型甕を被せて用いたもの（第461号住居跡）、羽口を転用したもの（第594号住居跡）もみられる。

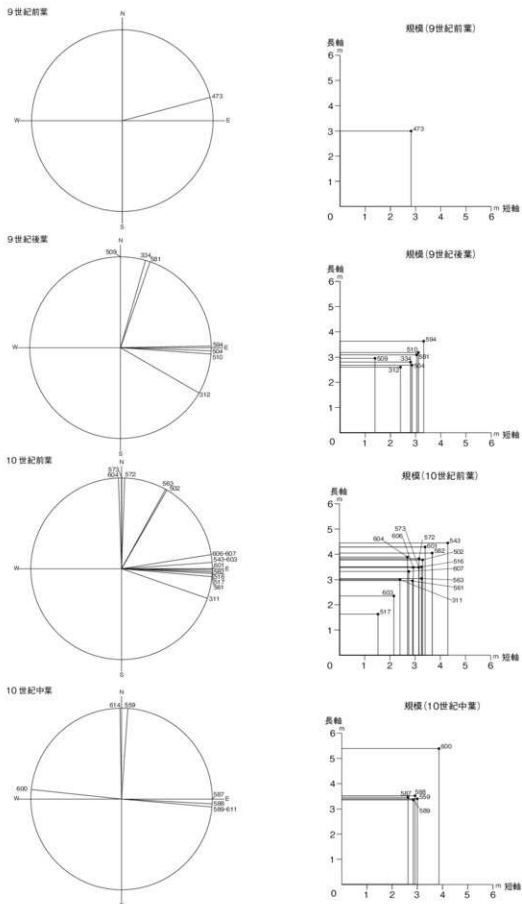
10世紀前葉 第311・459・462・474・502・512・516～518・543・556・561～563・572・573・582・601・603・604・606・607号住居跡が該当し、確認された住居跡数が最も多い時期である。9世紀後葉と同様、遺跡南部の小支谷を囲む台地平坦部から縁辺部にかけて分布する他、遺跡南西部の舌状台地平坦部でも2軒確認されている。遺跡南西部は未調査部分が多く残るため、周辺域に集落範囲が広がるものと想定される。規模は長軸が4m以上のものがみられるようになり、9世紀後葉より若干拡大する傾向にある。形状は長方形・隅丸長方形の割合が高くなる。これらは主軸方向が $N-81^{\circ}\sim 109^{\circ}-E$ （竈が東壁に付設されている群）、 $N-2^{\circ}-W\sim N-2^{\circ}-E$ （竈が付設されないもの及び竈が北壁に付設されている群）、 $N-2^{\circ}-W\sim N-30^{\circ}-E$ （竈が東壁と北壁に付設されている群）の3群に分類できる。各群での規模・形態の差異は認められない。なお、竈が東壁と北壁に付設されているものは当該期でのみみられ、北壁のものを廃棄後、東壁に作り替えたもの（第474・502号住居跡）、北壁のものと東壁のものを同時期に使用したと考えられるもの（第604号住居跡）がある。床面は地山のもの（13軒）と貼床を施したものの（8軒）がある。主柱は無いものが主体を占めるが、4か所のもの（第562号住居跡）、6か所のもの（第607号住居跡）がそれぞれ1軒ある。壁溝は全周するものではなく、一部分に巡らすものが3軒（第474・516・604号住居跡）ある。竈は袖部が白色粘土で構築されているもの、ロームを主体とする土で構築されているもの、地山を削り残して構築されているものがあり、ロームを主体とする土で構築されているものには補強材として土師器甕片を貼り付けたもの（第604号住居跡）がある。煙道はいずれも壁外に掘り込まれている。支脚は土製の他に、土製支脚の上に高台付椀を被せて用いたもの（第462号住居跡）、高台付椀、石皿、炉壁を積み重ねて用いたもの（第562号住居跡）、小型甕を転用したもの（第582号住居跡）もみられる。

10世紀中葉 第522・559・587～589・591・600・611・614号住居跡が該当し、遺跡南部の小支谷西側の台地縁辺部に集中する。規模は長軸が3～3.5mのものが主体を占め、5mを超えるものが1軒みられる。形状は長方形のみになる。主軸方向は $N-84^{\circ}-W\sim N-90^{\circ}-95^{\circ}-E$ （竈が付設されないもの及び竈が東壁に付設されている群）、 $N-1^{\circ}-W\sim N-4^{\circ}-E$ （竈が付設されないもの及び竈が北壁に付設されているもの）の2群に分類できる。床面は地山のもの（4軒）と貼床を施したものの（5軒）があり後者の割合が高くなる。主柱を有するものは皆無になり、壁溝は全周するものが5軒（第587～589・600・614号住居跡）、一部に巡らすものが2軒（第591・611号住居跡）ある。竈は袖部がローム主体の土で構築されているもののみになり、煙道は壁外に掘り込まれる。支脚は椀を転用したもの（第587住居跡）、小型甕を転用したもの（第614号住居跡）、羽口を転用したもの（第591・611号住居跡）があり、土製支脚はみられなくなる。

10世紀後葉以降 第1983号土坑が該当し、遺跡東部の台地平坦部に位置する。青銅鑄製の水草飛鳥鏡と短刀がそれぞれ1点出土しており、土坑墓と考えられる。時期は、出土遺物から11世紀末から12世紀初頭に比定できる。10世紀後葉以降の遺構は当遺構のみのため、集落様相は不明である。



第 142 圖 平安時代集落變遷圖

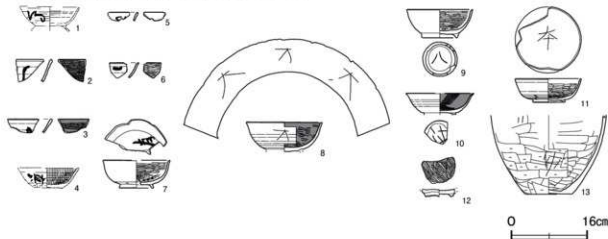


第 143 図 平安時代住居跡主軸及び規模一覧表

これらを概観すると、住居の形状は時期が下るにつれて長方形に統一されるようになる。床面は9世紀後葉では地山のもが主体を占めているが、10世紀以降は貼床を施したものの割合が高くなる。主柱穴は各期を通じて無いものが主体を占める。竈は各期で東壁に付設されているものと北壁に付設されているものがあるが、10世紀前葉のみ東壁と北壁に付設されているものが認められる。

(3) 墨書土器・刻書土器・窺書土器 (第144図)

墨書土器は7点出土しており、時期は9世紀後葉のものが4点(1~4)、10世紀前葉のものが1点(5)、10世紀中葉のものが2点(6・7)である。墨書箇所は、体部外面に記されたものが6点、底部内面に記されたものが1点で、判読可能なものは「得」、「真」、「一」と記されたもの(1・4・6)がある。刻書土器は6点出土しており、時期は10世紀前葉のものが4点(8~10)、10世紀中葉のものが3点(11・12)である¹⁰⁾。刻書箇所は、体部外面に記されたものが2点、底部内面に記されたものが2点、底部外面に記されたものが2点、底部外・内面に記されたものが1点で、判読可能なものは「大」、「八」、「本」、「十」と記されたもの(8・9・11)がある。特記遺物としては8が挙げられる。高台付椀の体部外面の3か所に「大」の文字が刻書されており、当遺跡では他に類例のない資料である。窺書土器は1点出土しており、時期は10世紀前葉のもの(13)で、体部外面の2か所に「仲」・「口」が記されている。



第144図 墨書土器・刻書土器・窺書土器

(4) 鉄関連遺物 (第145図)

当遺跡において製鉄・鍛冶遺構は確認されていないが、今回の調査区から鉄製品・製錬炉の炉壁・炉底塊・炉内滓・炉内流動滓・椀形鍛冶滓・鉄滓・鉄塊系遺物・鍛冶羽口が67点(総重量10,064g)出土している。これらの多くは、転用支脚として用いられたものや住居埋没過程で廃棄、または、混入したものであるが集落内で製鉄操業や鍛冶作業が行われていたことを示唆する貴重な資料といえる。

9世紀後葉では鉄製鋤先、鍛冶羽口が住居跡から出土している。上述したように鍛冶遺構は確認されていないが、鍛冶羽口が出土していることから集落内で小鍛冶作業が行われていたと想定される。10世紀前葉になると鉄鋸・刀子などの鉄製品、鍛冶関連遺物の鍛冶羽口の他に、製錬炉の炉壁・炉底塊など製鉄関連遺物が出土するようになる。製鉄関連遺物の出土は、当該期から集落内で製鉄操業が開始されたことを示唆しており、10世紀中葉でも同様の遺物が出土していることから、10世紀前葉から中葉を通して製鉄操業、鍛冶作業が行われていたと想定される。なお、製錬炉は炉壁片の形状から堅型炉と考えられる。ここでは、鉄関連遺物構成表を掲載する(第145図)¹¹⁾。

(5) 集落の様相

当該期の集落は遺跡南東部の台地平坦部に9世紀前葉から形成されるが、確認された遺構がわずかなため様相を知り得るまでには至っていない¹²⁾。本格的に様相を知り得るのは9世紀後葉からで、遺跡南部の小支谷を囲む台地平坦部から縁辺部にかけて点在するようになる。当該期では墨書土器や鍛冶関連遺物が出土していることから、集落構成員には識字階級者が存在し、集落内で鍛冶作業が行われていたと考えられる。10世紀前葉になると集落の規模が拡大し、小支谷を囲む台地平坦部から縁辺部の他に、遺跡南西部の舌状台地平坦部にも広がり、住居軒数も増加する。当該期では、墨書土器や鍛冶関連遺物に加えて、刻書土器、製錬炉の炉壁・炉底塊などの製鉄関連遺物が出土するようになる。製錬炉の炉壁片は遠方から搬入したとは考え難く、集落内あるいは近接した場所で製鉄操業から鍛冶作業までの一連の鉄生産が行われていたと想定される。10世紀中葉になると集落の規模は縮小し、小支谷西側の台地縁辺部に集中する。当該期においても、製鉄関連遺物、鍛冶関連遺物が出土していることから、10世紀前葉から継続して製鉄操業から鍛冶作業までの一連の鉄生産が行われていたと想定される¹³⁾。

茨城県内で、製鉄遺構及び製鉄関連遺物が確認されている平安時代の遺跡は、鹿の子C遺跡、尾崎前山遺跡、後谷津製鉄遺跡があり、これらは8世紀から9世紀にかけての官衙関連遺跡や製鉄遺跡で、10世紀の集落遺跡では確認されていない。当遺跡は9世紀前葉から10世紀中葉にかけての集落で、官衙に関連する遺構・遺物が確認されていないことから一般的な集落といえ、そのような集落において製鉄操業から鍛冶作業までの一連の鉄生産が行われていたことは、当該期の集落様相を知る上で貴重な資料といえる。

5 近世

近世の遺構は、遺跡東部と南部の台地平坦部で土坑22基が確認されており、このうち、20基は土坑墓と考えられ、陶器、磁器、銭貨、煙管などが出土している。当該期の居住域は確認されていないが、土坑墓が確認されていることから、周辺に当該期の集落が形成されていたものと想定される。

6 おわりに

当遺跡は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、中でも縄文時代中期から晩期にかけての拠点集落は県内屈指の好資料と言える。今回の調査成果では、当遺跡において不明な点が多かった古墳時代前期、平安時代の集落が確認され、当該期の様相がある程度明らかとなった。古墳時代前期の集落では、これまでの調査で出土事例が少ない前期末葉の土器がまとめて出土しており、前期の土器編年を検討する上で貴重な資料といえる。また、平安時代の集落は、出土遺物などから9世紀後葉から10世紀中葉にかけての一般集落と考えられ、9世紀後葉では鍛冶作業、10世紀以降は製鉄操業から鍛冶作業まで一連の鉄生産が集落内で行われていたと想定され、当該期の一般集落の様相を知る貴重な事例といえる。

当遺跡が所在するつくばみらい市周辺は、現時点では調査事例が少なく、歴史的様相が判然としにくい点が多いが、これまでの調査成果に加えて、今回の調査成果が当地域ならびに本県における歴史解明の一助となれば幸いである。

註

- 1) 報告されている遺構・遺物に関して再検討し、遺構の主軸方向や遺物の種別・器種などを変更したものがある。その責の一切は筆者にある。
- 2) 第360・381・403・409・433・508号住居跡は計測不能なため検討対象から除外した。
- 3) 第70・71・116 A号住居跡は計測不能なため検討対象から除外した。
- 4) 加藤修司「房総地方における前期古墳の展開－重要遺跡確認調査の成果と課題4－第1章 土器編年案」『千葉県文化財センター』21 2000年9月
- 5) 比田井克仁『関東における前期古墳出現期の変革』雄山閣 2001年7月
- 6) 杉山晋作『関東南部における古墳出現前後の様相』『東日本の古墳の出現』山川出版社 1994年11月
- 7) 第489～491号住居跡は計測不能なため検討対象から除外した。
- 8) 第520・521・549・590・593・599・612号住居跡は計測不能なため検討対象から除外した。
- 9) 第533・534・541・542・557・558・609・617号住居が該当する。
- 10) 第522号住居跡から出土した高台付埴輪10世紀中葉の刷書土器だが、刷書部分が未実測のため掲載できなかった。『茨城県教育財団文化財調査報告』第147集では遺物観察表にて底部内・外面に「十」の文字が刷書されている旨の報告がされている。
- 11) 資料の分類、抽出ならびに資料観察表の作成は、穴澤義功氏に依頼し、ご指導賜った。また、遺物実測図、観察表の作成は筆者が実施しており、誤りがあるとすれば、その責の一切は筆者にある。
- 12) 9世紀中葉の遺構・遺物も現時点で確認されていないが、未調査部分も広範囲に及ぶため、周辺域に形成されていた可能性がある。
- 13) なお、当遺跡で製鉄炉などの製鉄遺構は確認されていないが、本来、製鉄炉は平場や平坦面に作られることはなく、地下水位が低い尾根先や入り組んだ支谷まわりの斜面地に作られる。当該期の集落が形成されている小支谷を囲む台地斜面部は製鉄炉を作る好地形といえることから調査区域外の台地斜面部に作られていた可能性が高い。

参考文献

- ・赤塚次郎「湖間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990年3月
- ・金子拓男『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会 2005年7月
- ・品田高志他『新潟県柏崎市軽井川南遺跡群調査報告書 軽井川南遺跡群1』『柏崎市埋蔵文化財調査報告書』第59集 2010年3月
- ・深澤敦仁他『北関東自動車道（伊勢崎～泉城）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 成塚向山古墳群』『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業調査報告書』第426集 2008年3月
- ・浅井哲也『茨城県における古墳時代前期の土器』『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- ・小泉光正「一般県道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 神谷森遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第66集 1991年3月
- ・大森雅之『茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原口遺跡・北前遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第83集 1993年3月
- ・吉原作平「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 西ノ脇遺跡・前田村遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第87集 1994年3月
- ・横堀孝徳「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 前田村遺跡C・D・E区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第116集 1997年3月
- ・吉原作平他「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 高野台遺跡・前田村遺跡D・F区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第127集 1997年9月
- ・吹野富美夫他「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4 前田村遺跡G・H・I区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第146集 1999年3月

- ・小林孝他「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書5 前田村遺跡」・K区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第147集 1999年3月
- ・稲田義弘「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第190集 2002年3月
- ・駒澤悦朗「業師入遺跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第239集 2005年3月
- ・清水哲他「小作遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第346集 2011年3月
- ・寺内久永他「藤崎遺跡 阿見吉原東土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第347集 2011年3月
- ・「遺跡が語る茨城県の歴史-発掘調査二十年の成果-」財団法人茨城県教育財団 1997年1月
- ・「古代東国の産業-那須地方の産業と製鉄業-」栃木県教育委員会 1994年10月
- ・「鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告-鉄関連遺物の発掘・整理から分析調査・保存まで-」鉄関連遺物の分析評価研究グループ 2005年1月

付 章

前田村遺跡出土のウマ・ウシ・ブタ・ヒトについて

西本豊弘

はじめに

前田村遺跡の2010年度の発掘調査で、馬頭観音の石碑のそばからウマとウシの骨が出土した。また、それよりも離れた地点で埋葬人骨が発見された。それらについて内容を紹介する。なお、写真は西本研究室の総合研究大学院大学院生の金憲爽氏によるものである。また、金属製品について国立歴史民俗博物館の永嶋正春先生の助言をいただいたことに感謝いたします。

1 第3641号土坑出土のウマとブタ

この土坑から、ウマの成獣の後頭部2個・第1頸椎2個・第2頸椎2個・頸椎10個・胸椎16個・腰椎6個・仙椎2個・肋骨片多数・切歯3個・肩甲骨左右各1個・上腕骨左右各1個・桡尺骨左右各1個・寛骨片・基節骨1点がみられた。ただし、大腿骨や脛骨などの下肢の骨はみられなかった。その中で、全長を計測できた左側上腕骨の長さは317.2mmであり推定体高は約146cm、左側桡骨の長さは359.2mmで推定体高は約146cmであった。また、その桡骨よりも大きい右側桡骨の近位部の幅は90.3mmであり、推定体高は148cmであった。これらのデータからみると、この土坑のウマは成獣2個体分であり、推定体高が約146cmと148cm程度の個体と推測される。江戸時代の在来馬では体高140cm以上のウマはこれまで出土していないので、この2体のウマは恐らく明治時代以降に西洋種と在来種の混血によって生産されたものと推測される。したがって、このウマたちの埋葬時期は明治時代以降であろう。なお、これらのウマは頭蓋骨が後頭部しかないことや下肢の骨がみられないことから、解体処理されたものと思われる。

また、この土坑からはブタの骨も出土した。左側大腿骨と脛骨・左右寛骨・左側踵骨と距骨・中足骨?2個・頸椎?3個などである。大腿骨と脛骨の長さはいずれも12cm余であり、生後1カ月未満の新生児か幼獣であろう。骨の大きさと骨質の保存状況からみて明治時代以降の西洋種のブタであり、埋葬時期も数十年以内であろう。

2 第3653号土坑出土のウマ

この土坑からは、ウマの成獣の左右肩甲骨と左側桡骨尺骨・左側寛骨・右側中手骨などが出土した。左側桡骨の長さは345.5mmで推定体高は141cmであり、中手骨の長さ231mmからの推定体高は約140cmとなった。これらのデータから、このウマは体高約140cmから141cmであろう。このウマの大きさは明治時代以降の西洋種と在来種の混血により生まれたウマと推測され、ウマの埋葬時期も明治以降であろう。

3 第3656号土坑出土のウシ

ウシの若い個体の骨がほぼ1個体分出土した。頭蓋部は、上顎骨と歯は残っていたが、頭頂部と後頭部は失われていた。歯の萌出状態は、第3後臼歯が萌出直前であり、恐らく2歳前後であろう。四肢骨では上腕骨の遠位部部の骨端縁は癒合していたが近位部は癒合していない。大腿骨では近位部・遠位部ともに癒合していな

かった。

なお、この土坑ではウシの骨の他に緑青がみられる銅製品が1点採集されていた。この銅製品は1か所を金具で留めて輪に作ったものである。輪の幅は約7mmで外周の直径は約72mmのはほぼ円形であった。永嶋正春先生によると、重量が重いことから銅板を輪にしたものではないかという。この銅製品の表面には布のような繊維がみられ、さらにウシの毛が残っていた。これらの状況から、この銅製品はウシの鼻輪の可能性もある。また、ウシの毛の保存状態が良いことから、このウシは現在よりも10年前から数十年以内のごく新しい時期に埋葬されたものと思われる。

4 第3679号土坑出土の人骨

ヒトの頭蓋骨と左側上顎骨・第1頸椎・大腿骨・尺骨などごく少量の骨が残っていた。頭蓋骨は、頭頂部から後頭部近くの部分と下底部の左右の耳骨部分がみられた。成人のものであるが骨の厚さは薄い。左側の上顎骨と第1・2・3後臼歯をみると、第3後臼歯も少し摩耗していることから40歳前後以上の壮年と推測される。大腿骨の骨幹部はまっすぐであり、江戸時代から近代の人骨であろう。大腿骨構面の後後は少しみられるので、ある程度よく運動していた人であろう。大腿骨のみでは男女のいずれとも判断できないが、頭蓋骨が薄いことから女性の可能性が高い。年齢は壮年であろう。

まとめ

今回の馬頭観音の石碑の近くで出土した動物はウマとウシとブタであった。いずれもその保存状態と形質的特徴からみて明治時代以降の新しいもので、場合によってはすべて戦後のものかもしれない。それらとは離れた地点で出土した人骨については、江戸時代にさかのぼると思われるが、時代は分からない。



写真1 第3641号土坑出土のウマ

1・2：後頭部 3・4：第1頭椎 5・6：頭椎



写真2 第3641号土坑出土のウマ

1：上腕骨 2：橈尺骨 3：肩甲骨 4 尺骨 5：基節骨 6：胸骨 7：橈骨

(1～3は左側、4・7は右側同一個体)



写真3 第3653号土坑出土のウマ

1：尺骨 2：肩甲骨 3：橈骨 4：中手骨 5：寛骨 6～8：胸椎

(1・2・5・6は左側, 4は右側)



写真4 第3656号土坑出土のウシ

1：上顎骨 2：銅製品 3：左側下顎骨 4：右側下顎骨



写真5 第3656号土坑出土のウシ

1：上腕骨 2：肩甲骨 3：橈骨 4：尺骨 5：大腿骨 6：脛骨 7：寛骨 8：中足骨 9：中手骨 10：距骨
11：踵骨（5・9は左側，その他は右側）



写真6 第3679号土坑出土の人骨

1：頭蓋骨 2：左側上顎骨 3～5：頭蓋骨 6・7・9：尺骨または橈骨 8：第1頸椎 10：左側大腿骨

写 真 图 版



平安時代出土土器集合

調査区遠景
(北西から)



調査区全景



第602号住居跡
完掘状況



PL2



第613号住居跡
完掘状況



第615号住居跡
完掘状況



第619号住居跡
完掘状況



第3529号土坑遗物出土状况



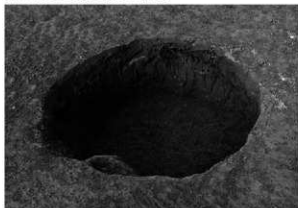
第3554号土坑遗物出土状况



第3588号土坑遗物出土状况



第3588号土坑完掘状况



第3594号土坑完掘状况



第3596号土坑完掘状况



第3612号土坑遗物出土状况

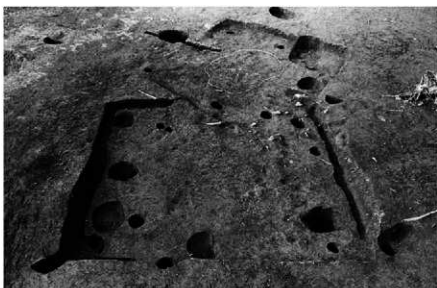


第3621号土坑完掘状况

PL4



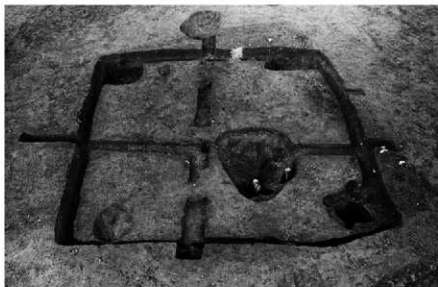
第564号住居跡
完掘状況



第584号住居跡
完掘状況



第586号住居跡
遺物出土状況



第586号住居跡
完掘状況



第590号住居跡
完掘状況



第592号住居跡
遺物出土状況

PL6



第592号住居跡
完掘状況



第593号住居跡
完掘状況



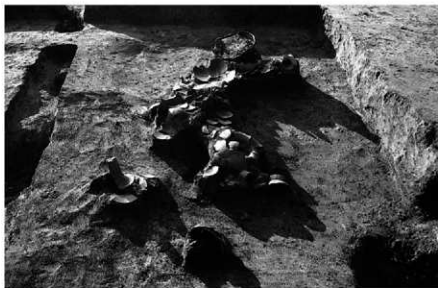
第595号住居跡
完掘状況



第596号住居跡
遺物出土状況



第596号住居跡
遺物出土状況



第596号住居跡
遺物出土状況



第596号住居跡
遺物出土状況



第596号住居跡
完掘状況



第597号住居跡
完掘状況

第598号住居跡
遺物出土状況



第598号住居跡
完掘状況



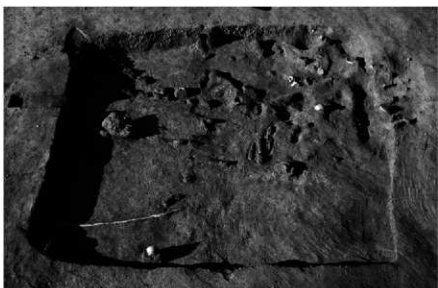
第599号住居跡
完掘状況



PL10



第605号住居跡
完掘状況



第608号住居跡
遺物出土状況



第608号住居跡
完掘状況

第610号住居跡
完掘状況



第612号住居跡
完掘状況



第557号住居跡
完掘状況





第562号住居跡
窟遺物出土状況



第562号住居跡
完掘状況



第581号住居跡
完掘状況



第582号住居跡
竈遺物出土状況



第582号住居跡
完掘状況



第587号住居跡
完掘状況

PL14



第588号住居跡
完掘状況



第588号住居跡
完掘状況



第589号住居跡
完掘状況



第591号住居跡
完掘状況



第594号住居跡
完掘状況



第600号住居跡
完掘状況

PL16



第601号住居跡
遺物出土状況



第601号住居跡
遺物出土状況



第601号住居跡
完掘状況

第603号住居跡
完掘状況



第604号住居跡
完掘状況



第606号住居跡
完掘状況

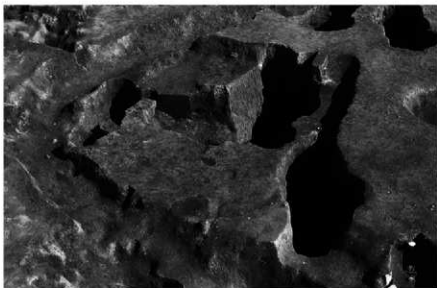




第607号住居跡
完掘状況

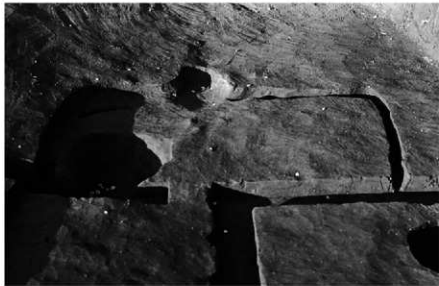


第609号住居跡
完掘状況



第611号住居跡
完掘状況

第614号住居跡
完掘状況



第617号住居跡
完掘状況



第618号住居跡
完掘状況



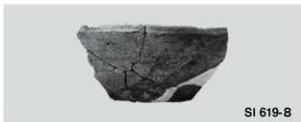
PL20



第602·613·615·616号住居跡出土土器



SI 619-7



SI 619-8



SI 619-TP29



SK 3548-TP32



SK 3588-10



SK 3588-TP42



SK 3588-TP43



SK 3588-TP45



SK 3588-TP46



SK 3588-TP47



SK 3588-TP49



SK 3588-TP50



SK 3588-11



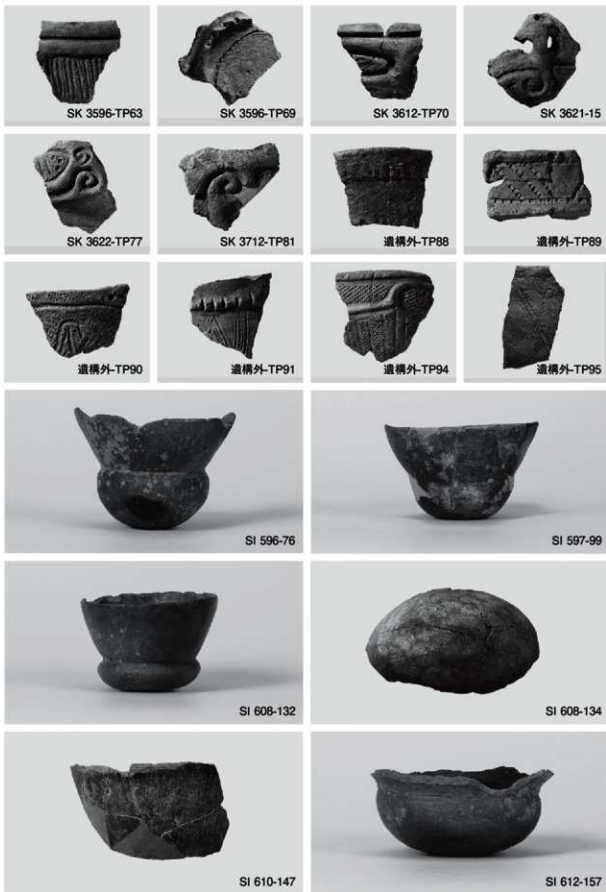
SK 3588-12



SK 3588-13

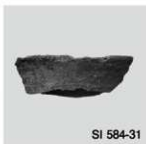


SK 3588-14





第584・596・597・605・608号住居跡出土土器

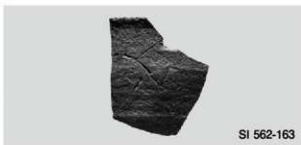












SI 562-163



SI 614-267



SI 588-186



SI 611-262



SI 582-177



SI 588-187



SI 588-188

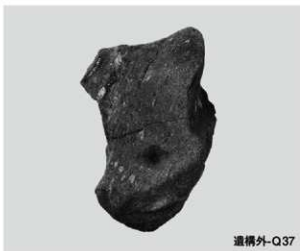




第586・588・596・597・598・605・610・613号住居跡，第3529・3679号土坑，遺構外出土土器・土製品・石器



遺構外-Q32



遺構外-Q37



遺構外-Q39



SK 3679-M22



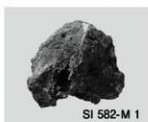
SK 3679-M23



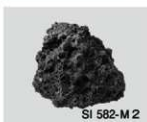
遺構外-M30



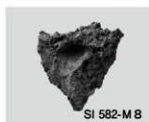
SI 582-M11



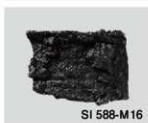
SI 582-M 1



SI 582-M 2



SI 582-M 8



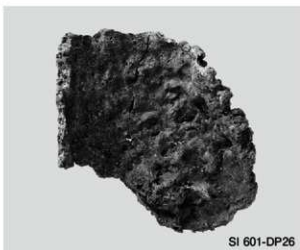
SI 588-M16



SI 603-M20



SI 601-DP25



SI 601-DP26

抄 録

ふりがな	ままだむらいせき							
書 名	前田村遺跡							
副 書 名	伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 6							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 361 集							
著 者 名	福井 流星							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310 - 0911 茨城県水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2 TEL 029 - 225 - 6587							
発行日	2012 (平成 24) 年 3 月 16 日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査積	調査原因
前田村遺跡	茨城県つくばみらい市田村字南端 765 番地ほか	08235 1 483019	36 度 00 分 16 秒	140 度 01 分 43 秒	16 ~ 21 m	20100701 ~ 20110131	7,000㎡	伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地区画整理事業に伴う事前調査
			(36 度 00 分 05 秒)	(140 度 01 分 55 秒)				
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
前田村遺跡	集落跡	縄 文	竪穴住居跡 土坑	5 軒 15 基	縄文土器、土製品 (土偶)、 石器 (剥片・石皿・磨石・凹石)			
		古 墳	竪穴住居跡	15 軒	土師器、土製品 (土玉・管状土鍾)、石器 (磨石・砥石)			
	平 安	竪穴住居跡 土坑	19 軒 1 基	土師器、須恵器、緑釉陶器、 土製品 (土玉)、石器 (石皿・ 磨石・砥石・台石)、金属製 品 (鎌・刀子)、鉄関連遺物 (炉 壁・炉内滓・炉底塊・鉄滓)				
		不 明	竪穴住居跡	1 軒	縄文土器			
	幕 近 世	墓 坑	1 基	陶器、銭貨、人骨				
	その他	不 明	土坑 溝跡 9 条 ピット群 2 か所 不明遺構	217 基 1 基	縄文土器、土師器、須恵器、 陶器、土製品 (土玉・管状 土鍾)、石器 (鎌・磨製石斧・ 石皿・石鍾)、石製品 (管玉・ 砥石)、金属製品 (煙管)、 鉄関連遺物 (炉壁・炉内滓・ 炉底塊・鉄滓)			
要 約	当遺跡は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。今回の調査では縄文時代、古墳時代前期、平安時代の集落跡、近世の墓坑を確認した。古墳時代前期の集落跡では、これまでの調査で出土事例が少ない古墳前期後葉の土器がまとまって出土しており、古墳時代前期の土器編年を検討する上で貴重な資料といえる。平安時代の集落跡は、9 世紀後葉から 10 世紀にかけてのもので、10 世紀以降の住居跡から炉壁などの鉄関連遺物が出土していることから、当該期には集落内で製鉄操業が行われていたと考えられる。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Professional Version2009.ServicePack 1
	編集	Adobe InDesign CS 4
	図版作成	Adobe Illustrator CS 2
	写真調整	Adobe Photoshop CS 4
	Scanning	6×7 film EPSON GT-X970 図面類 Context SD4430
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L、中ゴ、太ゴ、見出ゴ
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS 4 でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第361集

前田村遺跡

伊奈・谷和原丘陵部一体型特定土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書6

平成24（2012）年 3月14日 印刷

平成24（2012）年 3月16日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587
H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社仙台紙工印刷

〒983-0036 仙台市宮城野区若竹3丁目1-14
T E L 022-231-2245